
からんちゅ 魔術師の鐘 第一章 ~ 遥かなる想い ~

雛仲 まひる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

からんちゆ 魔術師の鐘 第一章 遙かなる想い

【Nコード】

N8921F

【作者名】

雞仲 まひる

【あらすじ】

少年と離れて一年が過ぎようとしていた。アウラはランディーの勧めで学園生活を送っていた。しかし、アウラの心には埋めようのない寂しさがぽっかり穴を空けている隙間は一時たりとも埋まる事はなかった。窓の外をぼんやり眺め溜息を吐く日々を送っていた。「傍にいる」と言った癖にあの少年は今何処に……。そんな日々を送っていたアウラの前にある日、少年が学園に入学して来た。初夏が近づく頃に開催される第二の故郷シユベルクを今年の主催地とし収穫祭恒例の催し物の過酷なレースに備えプラムの訓練と野宿を想

定した放牧に一人で出るアウラ。放牧先でアウラに盗賊の一味が襲い掛かる。「助けて……」アウラの声は少年に届くのか！

く 遙かなる想い く プロローグ（前書き）

からんちゆ 魔術師の鐘 く グランソルシエールの禁術書
くを御愛読くださった読者様、誠にありがとうございます。

からんちゆ 魔術師の鐘 く 遙かなる想い くは当初描く予定はありませんでした（笑）

様々な謎？ を残し完結した前作の続編で四部構成になっております。

お楽しみ頂けたら幸いです。

前回伏せていた山羊飼いの少年の名？ も登場します。

疎まれる山羊飼いが教会の教えが定着した街で暮らせる訳もなく離れ離れになったアウラと少年はその後…

遙かなる想い　プロローグ

第零話

炎の逃走

何で追われてるのかなあ？　俺　。
……と言っても追われているのだから逃げるしかない。

無数の馬鉄の音が地鳴りのように響いている。

山羊飼いなんで、遠い昔から辺境の土地まで幾度となく追いやられて逃げているのだから仕方ない。

今日まで、そんな歴史の中を逃げ延びながら今も旅を続けているのだから……。

と、言っても今回の奴らは、やたらにしつこい。

毎度毎度、飽きる事無くよくやるもんだ。

「そつちに逃げたぞ！　困め！　くれぐれも山に逃げ込ませるなよ」
俺の動きを良く理解している。

「奴はこちらの気配を正確に感じ取るぞ。馬を走らせ馬鉄の音で攪乱しながら追い詰める」

半年近くも追い掛けられりゃ、そろそろこつちの逃走パターンを解析してるかあ……。

よし！　もう少しで山肌に取り付ける。

ころころ小気味の良い鐘の音色を響かせ追随してくる旅の連れに眼をやった。

短い角を頭に生やし、面長の顔の顎先に立派な白い鬚を蓄え、つぶらな愛くるしい眼の中には黒く四角い瞳が主の背中を見詰めている。

岩が剥き出しになっている岩肌の段差に少年が駆け登った。
岩肌から突き出した岩を足場に軽快に上へ上へと駆け登って行く。
旅の連れたちも各々岩肌の足場を蹴り、次の足場へと飛ぶように
駆け登って行く。

追ってきた馬では、この斜面は登れない。

馬を下りて登るにしても重い装備が邪魔をする。

甲冑を脱ぎ装備を解いて登ったとしてもあの山羊飼いの少年には
届くまい。

「ええええ　い！　逃がしたか！　毎度毎度、あと少しといつと
ころでえ　」

「副官殿！」

「隊を立て直せ！　隊長の隊と合流する。我等は三隊に分かれ山羊
飼いを追う。一隊は斜面で山羊飼いの動向に眼を見張れ！　残る二
隊で左右の尾根から挟み込む。逃げ場を作るな！」

「アイサ　！　」
「散開！」

副官の号令と共に部下たちは下された作戦を迅速に行い、馬の手
綱を引いた。

山羊飼いの少年が、にんまりと微笑みを浮かべた。

小高い山の中腹にある道までは後僅か。

回り込まれる前に辿り着き、更に山を登って越える。

大きく裾野を回り込まれても何処の地点に下りるかなど、山羊飼
い次第である。

山羊飼いの手が切り立った山道の縁を掴んだ。

「ふう　。　今回は危なかったなあ　。　何とか上手く逃げる事が
……でき　」

「随分と遅かったじゃないか山羊飼い。待ちくたびれたぞ。グリン
ベルの悪魔」

山羊飼いの少年を金髪金眼の二十前半の若い騎士が見下ろしていた。

山頂から吹き下ろす風にマントがなびく度に、血のように赤い裏地が見え隠れしている。

旅の連れたちが続々と道の上へと駆け上がって行く。

「はあ、ランディー……お前て暇なのかあ？ 半年も俺を追い掛け回しやがって」

少年は碧眼を弓のように反らし微笑んだ。

「暇ではないのだがね。きみを捕まえる為に随分時間と労を費やしたよ」

「お陰で俺は、夢に近づく事を諦めて逃走を繰り返す羽目になったけどなあ」

「素直に捕まってくれたなら追わずに済んだのだがね」

「追われりや逃げる。人間の心理だ……で、何か用か？」

「まあ、そんなところだ」

ランディーが山羊飼いに手を差し伸べた。

少年がその手を取るとランディーは少年を山道へと引き上げた。

「そんなところでは何だからな」

「ありがと。用があるなら早くそう言えばいいのに」

「俺の顔を見るなり逃げたのは何処のどいつだ」

「知らないなあ……で、用ってなんだ」

「率直に言う。山羊飼い！ きみの力を貸してほしい」

「俺のじゃない。循環じゅんりんのдарう？」

ランディーは唇を吊り上げた。

「それが一番良いのだがね。封印を解けば、きみの身体にも俺の心身にも悪いんでね」

「はあはあ。ん。封印を解くにはアウラと『チュ』するからなあ」

「現段階でもう一人封印を解ける人物はいるのだがね」

「うん？ だれ？」

「ソルシエル殿下。封印を施した張本人であり、北の神殿では封印を戻した」

「……ばばあじゃん」

「見た目は二十代半ばから後半だぞ？ それに実にお美しい御方だ」

「……でも、六百歳は楽に越えている。もしかすると……何千年かも知れない……大おばあじゃないか 痛てえ」

山羊飼いの頭に衝撃が走った。

「誰が……ばばあだつて？ あん！ おばちゃんまでは許してやってたんだ。でも、これからは、お姉ええさんとお呼び！」

ソルシエルが唇の両端を吊り上げ、拳を震わせながら額に血管を浮き上がらせ見下ろしている。

「人には出来る事と出来ない事が 痛てえ」

「呼べるだろ？ クソガキ！」

「は、はい……お姉様……その代り悲しい事があつたり、寂しい時は、その豊かな胸の谷間で泣いてもいい？」

「やだねえ、この子つたら……狼妻だよ？ 私は旦那一筋なんだよこつ見えても……」

ソルシエルがほんのり顔を赤らめて頬を両手で押さえた。

「で、強力して貰えるのですかな？ お二人とも」

ランディーの言葉にソルシエルは後ろで乱暴に纏められた桜色の髪を掻いた。

「私は協力できないね。あんたらの後ろに教会がいる限り私たちは相容れぬ者なんだよ？ 私たち魔術師と教会の因縁は、そう簡単に無下にできるもんじゃないさね。何処の国でも魔女狩り、悪魔狩り、獣憑きと言つては、審問という名の処刑を行なつてきた教会が、今になって魔術師の力を『神の奇跡』にしようと言つのは、ちよつと調子が良過ぎる話じゃないかい？」

「それは御尤もですな。言い訳のしようもありません……ですが、今の状況を見過ごす訳にも行きますまい。あなたにとつても」

「ちつ！ まつたく……鼻の利く奴だよ。騎士殿は……」

「西のカリユドス帝国、南東のラナ・ラウル王国の動き活発化しております。何処まで本音が解り兼ねますが、カリユドスでは魔物対策にと遺跡を掘り起こし古の巨神を復活させる動きが、勿論、魔術など隣国を制圧する度、国土を広げ武力と魔術の使い手を集めていくとか、大国ラナ・ラウルでは、歴戦の騎士や傭兵を集め守護者ギルドを立ち上げ、そこには魔術師も……精霊と契約して行使する魔術を扱う者も多くいるとも聞いております」

「私には政などに興味はないさね。長い間生きてるとね。嫌という程同じ事を繰り返す馬鹿者どもを見てきたさね。戦争は政の一部さね。結論として協力は出来ない。悪いけど、そちらに就いた魔術師の事は私なりのやり方ではじめをつけるさね。それに極北の氷土に閉じ込めた魔物を解き放とうと画策している奴らもね」

ソルシエールが渋い顔をして頭を掻いた。

「では、羊飼い。きみはどうするね？」

「ちよつと待ちな！ あの子はドラゴンの循環を体内に宿しているんだ。下手に介入させると微妙な国同士の力関係がいつきに崩れるよ」

「あなたの場合もですよね？ ソルシエール殿」

「まあね。私や風狼も同じさね」

「彼は循環を使わなくても使えます。気配を読み取り感じる力、それに人並み外れているずば抜けた身体能力、空間把握能力、俊敏性、知性。私が一年、いや、半年で立派な戦士にしてみせますよ」

ランディーは不敵な笑みを浮かべ、山羊飼いの少年に向き直った。

「あなた……この子を」

「……」

ランディーが唇を更に吊り上げた。

その時、一人の部下が慌てた様子でランディーに近付き報告を告げた。

「隊長！ 山羊飼いに逃げられました」

「やれやれだな……お前たちは何をしておったのだね。直ぐに探せ！ 少年の山羊は、まだ近くに潜んでいるはずだ。探し出せ、何としても身柄を拘束するんだ」

「はっ！」

ランディーの命令で部下たちは一斉に散り山羊飼いの姿を探し始めた。

「あつはあはあ……してやられたねえ、騎士殿！ 隣国までその名を轟かせている高名な“名も無き赤の騎士団（ブラッディ・レッド）”を手玉に取るかい！ あのガキは」

ソルシエールは大声で笑った。

「これでお解りかな？ ソルシエール殿」

「まあね。私も組むならあのガキと組むさね……それともう一人……まだまだひよっただけど現役のソルシエールとね」

「独り占めですか？」

「まあ、そうするかも……だけの話さね。代わりと言っちゃ何だけど、かつて魔物と一線を隔した神々（モノたち）。

ウォルフス

ドラゴン

フェニックス

リヴァイアサン

風狼やグリンベルの悪魔だけじゃないよ。不死鳥・大蛇・ベヒモ

ス（ハバムート）など他にもいるさね。皆、人と何らかの繋がりを持っている者たちだ。それぞれがどんな相互関係にあるかは知らないけどね。それらを探すのも一つの手段さね。まあ、味方になつてくれるとは限らないし、遅かれ早かれ他の王国も嗅ぎ付けるだろうさね」

「貴重な情報痛み入ります……が、先ずはあの少年を手中に治めておきます」

ランディーが強張らせていた表情を不敵な笑みに変えた。

「山羊たちを見捨てて逃げるとは、ちよっと残念ですけどね」

「そうでもないさね」

山道から山の頂上までの中程にある岩場に少年が姿を現した。
少年は口に指を銜えると大きく息を吸い込んで、思いっきり吐き出した。

それを合図に山羊たちが一斉に岩肌を駆け上がり始める。

「じゃなあ。ランディー」

山羊飼いの少年は木霊を残し姿を眩ました。

T O B e C o n t i n u e d

く 遙かなる想い く プロローグ（後書き）

最後まで読んで下さいまして誠にありがとうございました。 > |

|) <

次回をお楽しみに！

く 鐘が鳴る く 第一部 第一話

第一話

鐘が鳴る

からん からん からん からん

「間にあつたのかなあ？」

白銀の髪にブルーマールの映える少年が教室の扉を開き、飛び込んで来るなり間の抜けた声で呟いた。

「では、本日はここまで次回の授業は、雄蕊おしへと雌蕊めしへによる自家受粉と他家受粉に関する豆知識とお 男と女のラブゲームの相互性、相対性について」

やや横長の四角い教室には、扇状に広がる階段状に据えられた机と椅子が並んでいる。

生徒達が物静かに教壇に立つ人物の言葉に耳を傾けていた。

教卓の後ろには黒い板が張り付けられていて、その板の一部がやや灰色掛り汚れている。

「鐘も鳴ったばかりだし……間に合ったかなあ？」

少年は、八面玲瓏はちめんれいろうの顔立ちに良く似合う碧眼が弓のように反れ微笑みを浮かべた。

「こほん！ 本日の授業は終了」

教卓の前に立ち指揮棒を持った、縁なし眼鏡の四十半ばの男性が少年に授業の終了を告げた。

「あれ？」

「確かに鐘は鳴ったがね……あれは終業の鐘だ」

四十半ばの男性教師が縁なし眼鏡を親指と人差し指の間に摘まみ、

ついつと持ち上げた。

教室は突然の乱入者に静まり帰っていた。

生徒たちの矢のような視線を弓のように反らした碧眼で返す少年の右眼には、包帯がぐるぐるすると乱暴に捲かれている。

一瞬の静まりが溶け教室がざわめき出した。

教室の入口から一番遠い窓際の一番後ろの席。

いわゆる特等席に少年の闖入に気付く風もなく物憂げに外をぼんやり眺めている少女がいた。

机に肘を立て小さな両の掌に桜色に染まる頬をのせ、細い桃色の髪を窓からやってくる風に泳がせ乱れる桃色髪を時折、手で押さえ替えている。

紫水晶の瞳は瑞々しく潤ませ、窓の外に向けられていた。

「ねえ、ねえ……アウラ！ ちょっと！ ちょっとてばあ」

金髪金眼の少女が振り向きアウラの顔を覗き込んだ。

「どうしたの？ ロザリア」

気の入らない声でアウラは答えた。

「新入生だって、あれ？ 編入生かな？ どっちだっていいか。この学園では珍しくもないし……、それより、ほら！」

ロザリアの顔は、にんまりと頬を吊り上げている。

「そうね。私もそうだったし……それがどうしたの？」

アウラはそういうと窓の外に視線を移し「はあ」と形の良い唇から溜息を漏らした。

「男の子よ！ 新入生」

「そお お？」

「駄目だこりゃ……、これじゃお兄様も脈なしね……、アウラの想い入ってそんなに素敵なのかな？ お兄様より……」

「……覗き魔」

アウラは、ぼそりと呟いた。

「はいっ！？ 今何て？」

「へえ？ 何でもないよ……私何か言った？」

「覗き魔って」

「べべべ、別に覗き魔が好きとかじゃなくて……」

「そんな事聞いてないよ。あんたにそんな痛い性癖があるんだっただら友達止めてるって」

「せ、性癖って……」

「で、アウラの想い人ってどんな人？ お兄様より強くてかっこいいの？」

「ラ、ランディー様は……その……好意はあるの……でも、その憧れていうか……」

「で、どんな人？」

「な、内緒……」

「何処で出会ったの？」

「……内緒」

「アウラ？ 顔真つ赤だよ」

アウラは慌てて両手で頬を隠した。

「ふうん。内緒ねえ。まあ、離れ離れになってもう一年だ

っけ？ 何の音沙汰もないのにアウラも一途だね」

「……」

「アウラに言い寄って来る奴なんて山ほどいるって言うのにさあ……

…その気になれば選り取り見取りだって言うのに……ずっと、その人を待ってる気なの？」

「……だ、だって、その人には夢があつて、それは叶えてほしいから……」

「どんな夢見てるんだい？ その罪な男はさあ」

「……お、大きな船を手に入れて世界を周るんだって言ってた」

「はあ？ あんた……そんなに待つ気なの？ その人の夢が叶う頃にはもういい歳になつてるって」

「うっ……、でも、二人の使命と夢は交わってるって……他の誰もが築けない絆があるって、だから逃げないって言ったもん。戻って

くるって……だから必ず迎えに来るもん」

アウラは頬に一杯の空気を孕ませ一瞬、ロザリアを睨んだ。

「はいはい、アウラが一途なのは良く分かったから」

ロザリアがやれやれと肩を竦めた。

「じゃあ、あの新入生にアプローチしてもいい？ 私の結構好みなの」

ロザリアが少年の方に振り返った。

「す、好きにすれば」

アウラは頬を膨らませたまま窓の外に視線を戻した。

「諸君！ 静かに！ これから新入生の紹介をする」

教師が縁なし眼鏡を親指と人差し指の間に摘まみ、ついつと持ち上げた。

ざわめいていた教室に静寂が戻り、生徒達の視線が新入生の少年に集まり出した。

「それでは自己紹介をしまえ」

教師の指が縁なし眼鏡を押し上げる。

アウラは、教師の声で窓に向けた視線を新入生へと移していた。

その視界に飛び込んで来たのは、決して忘れる事が出来ない顔。

陽の光を浴びると、ほのかにブルーが幻想的に浮かび上がる印象深い白銀にブルー・マールの映える髪と何時も碧眼を弓のように反らしたやわらかい微笑み。

「包帯がなんだけど……なかなかの美形ね。私、あの子にアプローチするわ」

ロザリアが長い金髪を掻き上げた。

「だめ！ 絶対だめっ！」

アウラの瞳に映った少年の姿。

間違いない。間違えるはずがない。

「ええっと。名前は」

「覗き魔さん！」

アウラは思わず立ち上がり少年の下に走り出した。

からん

アウラが机を押し退けた際、机にもたれ掛けられていた節くれた杖に括られた鐘の音色が軽い音を響かせた。

アウラは人眼も憚らず少年に飛び付き抱きついた。

「なに泣いてんだ？ アウラ」

アウラは、懐かしい少年の胸を何度も叩いては顔を埋めた。

「だって……すごく逢いたかったんですよ」

「静まっていた教室が再び俄かにざわめき始める。

「覗き魔なんだ……あいつ」

「そう言ったね。アウラ」

「アウラの着替えでも覗いたのか？ それとも風呂場とか……まさか！」

「やめろ！ やめるんだ！ それ以上の妄想は危険だ！」

「……でも、アウラの奴、いきなり飛び掛って行って組み合ったまま、新入生の胸を何度も殴ってあんなにも泣いてんだ？」

「そりゃ。よっぽど悔しい思いをしたんだろっさ」

「それ以上、我らのアウラたんで不浄の妄想を巡らすのは、やめろと言っただろうがああ」

「お前が一番あぶねえよ」

「なにおおお！ あいつは、あいつは……俺だけの妄想エンジェルをおおおお。直に拝んだんだぞ！ あのにやけた眼で邪視したのだぞお！ 例え神がお許しになっても、アウラたんが許していても、この俺がゆるさん！」

「誰が、お前だけの妄想エンジェルだ！ アウラたんは俺の妄想メイドだ！ 寝言は寝て言え、このやろっ」

「ばかやろっ。アウラたんは俺の妄想嫁だっの！ そりゃあ毎晩、毎晩、あんな事もこんな事も……だな。あの控え目な胸で 痛え

え、何しやがる」

教室は一部のアウラ崇拝者男子生徒の良からぬ妄想論が繰り広げられ修羅場と化していた。

妄想は暴走し留まる事を知らない。

こうなったら、怒り狂うドラゴンを素手で鎮めるのに等しい。

「諸君！ 落ち着きたまえ！ ここは教室だ。我々の恥ずかしい妄想を繰り広げる場ではない。こほん……全ての元凶は……あの男だ」

一人の生徒がそう言うのと狂気の視線が少年に向けられた。

「アウラ？ お前……なんだか馬鹿にされてるぞお？」

「な、何気に覗き魔さんも馬鹿にしてません？ 私の胸……」

アウラは、アウラ崇拝論者たちの怒声に脅え少年にしがみ付き震えていた。

「アウラを馬鹿にする奴は俺が許さない。例え世界を敵に回しても、それが神様だろうが魔王であつてもだ」

少年が懐かしい微笑みをアウラに向けた。

「の、覗き魔さん……そんな……ありがとっ」

アウラは顔を赤らめ俯いた。

弓のように反れていた碧眼の眼が岩をも突き刺す程の眼光炯炯をアウラ崇拝論者に放った。

平然とアウラの前に立ちはだかる少年の凜とした姿に、半ば呆れて傍観していた他の生徒たちの視線をも集め出した。

特に女子。

アウラの前に立ち、多勢を物ともせず亡者どもの視線からアウラを守るように立ちはだかり「アウラを馬鹿にする奴は俺が許さない。例え世界を敵に回しても、それが神様だろうが魔王であつてもだ」

なる、普段は耳がこそばゆくようになるようなむず痒い歯の浮くような台詞でも、実際に言われてみれば嬉しい台詞を惜しげもなく口にして、鋭い眼差しで亡者どもを見据える姿は女子の視線をとろけさせた。

「貴様！ 我らのアウラたんを……よ、よくも覗くという卑劣な行為をしてくれたものだ。羨ましい……いや、元へ、忌々しい」

「一つだけ言っておく」

少年は亡者どもを見据えたまま言った。

その眼光に亡者どもは無意識の内に後退りした。まるで見た事もない究極の魔物ドラゴンにでも睨まれているようだった。

「な、なな、何だよ……我々は、きみの脅しに屈服も従属も、え、選ばないぞ」

「脅しているつもりはない」

「……で、では、言ってみたまえ」

「アウラは着痩せする」

「「なっ！」」

白銀髪の少年に楯ついていた一人の少年が膝を折り床に着けた。

白銀髪の少年は、追いつちを掛けるように捲し立てた。

「巨乳崇拜？ 貧乳崇拜？ 笑わせるなあ。真のおっぱい聖人の俺にはそんな壁など無い！ 例え、アウラの胸が断崖絶壁であったとしても、抵抗に乏しい胸の起伏であるうと、真のおっぱい聖人は大きさを選びはしない！ 俺は宣言する。形こそ美！ 手触りこそ優！ 美乳崇拜である事を！ 俺は……ここに宣言する！」

少年は拳を硬く握りしめ、己自身に誓う様に一度胸にあてがってから天に向い衝き上げた。

「おおおおおおお！」

男子生徒から地鳴りのような歓声が湧き上がった。

「“乳” 在る故に我存在せり、我在るが故に“乳” 存在す」

少年が更に拳を突き上げた。

「ちち神だ！ ちち神が降臨し巨乳崇拜と貧乳崇拜の壁を取り除いたぞお」

少年はその日からアウラ以外の者に“チツチ”と呼ばれる事になる。

アウラは、わなわなと震えていた。

机に戻り節くれた杖を手に持ち少年の前に立っている。

「どうかしたのか？ アウラ。怖かったのか？ でももう大丈夫だ。

アウラの胸を馬鹿にする奴はもういないはず」

「ばかあ」

からん と小気味の良い鐘の音が少年の頭に落とした。

「痛ええ」

アウラの形の良い唇が奴の名前を発しようとしている事が少年には分った。

「待てえ、アウラ！ その名は」

一度、その名が呼ばれば……。

少年の身体に異変が起きる。

「プ、プラムううう」

奴が来る…… 獣そのままに荒い息遣いで奴が来る。

窓の外から主の声を聞きつけた白と黒の矢が急速に距離を詰める。

窓際にいた男子生徒がその存在に気付くと引き上げ式に開く窓を持ち上げ窓を開いた。

「間一髪！ 間に合った」

ガシャン！ という凄まじい音を残し少年へに飛び掛かった。

「……………」

少年の尻に毛並みの良い大きな尻尾が生えた事は言うまでもない。

からん からん からん からん からん

今、新たな物語が始まる始業の鐘が学園中に鳴り響いた。

く 鐘が鳴る く 第一部 第一話（後書き）

最後まで読んで下さいまして誠にありがとうございました。 > |

|) <

次回をお楽しみに！

鐘が鳴る 第一部 第二話

第二話

イリオン王立人材養成学園

イリオン王立人材養成学園。

名目上は。

イリオン王立人材養成学園は、緩やかな斜面を登り王都の街並みを全貌出来る場所に在り、遠くの山から切り出した重厚な石を積み上げて造られた塔が幾つも建ち並んでいる。

神学や一般学科を主に学ぶ校舎が学園の中央部に設けられ、一際大きい塔で全養成科の生徒たちが集まる学び舎である。

中央塔には、学院長室、図書館、教会、学生の食堂を兼ねる大広間、授業間の休みをくつろぐ茶室等が設けられ、生徒達は自分が受けたと思う講義を待つ間、のんびりとお茶を楽しむ。

焼き菓子やフルーツの盛り合わせ、甘いケーキなどのスイーツ類も用意されており、講義に出ずに日永一日をそこで過ごす輩も存在する訳である。

無論、出席日数や単位も存在する訳だが、この学院の生徒たちの一割程度は王国全土から集められた特異な能力や優れた頭脳を持つ生徒が、その輩たちの殆どを締めていた。

その他大半の生徒は由緒ある貴族から地方に領土を持つ田舎貴族、代々優秀な騎士を輩出している武家の御子息たちや商売に長け領地と爵位を金で買った成り上がり貴族、大商人の跡取りなどが四割程で残る五割程が一般から王国の為にと学問を学び、王国の技術発展の為に入学してきた者や王国を守る軍に志願し、この学園で英才教育を受ける者など様々であった。

一部を除いて、一般科と特殊な各科の生徒たちの自主性に任せ、

自由に好きな事を学べる学園である。

学園の模様というと中央塔を中心に、専門科目の実習場を持つ塔が建てられており、大まかな区分として北に牧畜士養成塔、西に兵士養成塔、東に技術者養成塔、南に商工人材養成塔が建てられていた。

それぞれ塔の近隣には、寮は勿論生徒が寝食や生活を送る為の環境が設けられていてそこには洋服店、飲食店をはじめ様々な店が並んでおり、ちょっとした街のようでもある。

アウラと山羊飼いの少年が学園で再会してから一ヶ月程が流れ、何時ものように一般教養の授業が始まっていた。

授業も半ばに差し掛かった頃。

「も、ももも、桃があっ！ 二つ……、あれ？」

机に突っ伏していた眉目秀麗な顔立ちと白銀の髪にブルーマールが美しく映える少年が目を覚ました。

左眼は痛々しく包帯に覆われていてその奥の様子を窺がい知る事は出来ないが、露わになっている右眼の青い宝石のような碧眼を宙に彷徨わせている。

「チツチ、今日はどんな夢を見てたんだい？」

前列に座っている金髪短髪に茶色の瞳をした少年が振り返り、にやけた笑みを向けた。

「チツチの事だから、何時もの夢だろ」

何処からか声上がり笑い声と話し声の交じるざわめきが起こった。

中には、顔を顰め寒い視線を向ける者もいた。

その殆どは…… 女子生徒。

チツチが入学して来た時に起こったあの一件は、一瞬女生徒を魅了しとろけさせた。

しかし、その直後に発せられたチツチの宣言に悪い夢でも見ていたかのように我に帰った女子生徒たちに冷やかな視線を浴びるようになっていたのである……一部の人間を除いて。

「ロツカ？ チツチの夢って何よ」

短髪の少年に艶やかな栗毛に琥珀色の瞳が美しい少女が尋ねた。

「そんなの決まってる。漢のロマンさ！ なあ、チツチ」

ロツカが、にやけた笑みを浮かべ答えた。

「あん？」

チツチは、寝ぼけた声を発し袖口で垂れた涎を拭った。

「男の夢ってなにさあ？ 教えてよお」

「ハーレム」

ロツカがにんまり顔で答えた。

「はーれむ？ なんだか楽しそうだよねえ？」

「違うわよ。エリシヤ。大きな船を手に入れて世界を周るんだって」

チツチの代わりにロザリアが答えた。

「そうなの？ ロザリア」

「そうよ。ちよつとロツカ！ チツチをあんたと一緒にしないでよね」

ロザリアがロツカを睨みつけた。

ぼかんと口を開けてエリシヤがロザリアを見ている。

「何でだよ！ エリシヤはチツチが入学してきた日の事知らないのか？」

「知らないよお。その日私は研究所に籠ってたもん」

「あつそ。でも何んでロザリアとエリシヤは何時も俺とチツチでこんなにも扱いが違うんだ」

「何でつて……そんなの決まってるよお！ チツチに興味があるからだよお？ 男前だし包帯ぐるぐるだけどお……面白いからだよお？ あはあ」

「チツチみたいな美男子は、そんな夢みないのよ」

「だから見た目で人を判断するな！ チツチの容姿は確かに男の俺が見ても良いし普通に友達やっても良い奴に違いないんだけど……、チツチてさあ何時も寝てるし、だらだらだし話しても何考えられているのか分からないというか、掴めない所があるんだよなあ。容姿以外女の子からもてる要素が見つからない」

「そこがまた良いんじゃない！ 見た目は言う事無いし何て言うか……チツチ見てると放っておけないのよねえ、母性本能てやつ？」

「母性本能ねえ。エリシヤも容姿で選ぶなら騎士養成科の連中にしといたら？」

「騎士養成科の奴らみたいに変に格好着けないしさあ。そういやあんな騎士養成科だったけ？」

「そうだよお！ 騎士科の人たちって、何時もツンケンして怖いだよお」

「まあ確かにそうだけど……そうか！ エリシヤ。チツチの事が好きなんだ」

「ちょ、ちょっといいなあとは思うけど……だって！ 興味あるんだもん」

ロツカ言葉にエリシヤが顔を赤らめ、誤魔化すように机に突っ伏しているチツチの方に振り向いた。

「ねえ！ チツチって好きな子とかいるのかなあ？」

「うん。それは内緒だ」

「うつん。静かに」

黒板を背に、こちらを向いている教卓の人物がチツチの声を掻き消した。

ざわめいていた声が、煮えた湯に冷たい水を差したように静まり返る。

「そこ！ 寝ている分には構わんが静かにするように。では、授業に戻るぞ」

教師が教科書を捲る音が小さく響いた。

「後で教えてね？」

エリシヤが小声で言い前を向いた。

授業が再開され、何時もの授業風景が流れ教師は、こんこんと黒板に文字を書き込む音が立っている。

時折、教師が教科書を読み上げる声に交ざり教室の外から、ころころ小気味良い軽い乾いた音色が響いた。

小気味良い軽い乾いた音色が近付いて来ている。

教室に入る扉の前まで来た時、厚みのある大きな両開きの扉が軋む音を立てて開き、少女がやや横に長い長方形の教室に飛び込んで来た。

身に羽織ったローブの乱れた合わせの間から赤茶色の上着に白いブラウスとインナーに水色サマーセーターのブイネックの首筋には黄色いリボンがあしらわれている。

赤茶色を基調に明るい赤とのチェックのプリッツスカートの丈は膝上程にある学園の制服を着ている。

「はあ、はあ、はあ、す、すみません、遅れました」

余程急いで走って来たのかやわらかい桃色の髪は湿り気を帯びていた。

八面玲瓏な顔立ちに大きな紫水晶を思わせる瞳が瑞々しく輝き、ころころ良く動く、整った細い眉の間から瞳を抜け通った鼻筋から形の良い鼻へ伸び、その下にある薄桃色の小さな唇から荒い息を出入りさせている。

「はあ、はあ、はあ、あの！遅れてすみません。家の事情で使いの者が迎えに来ていて帰郷していたもので……あの……今からでも授業参加してもいいですか？」

薄桃色の唇から息を切らし飛び込んで来るなり、小さな白い手に杖を握ったまま両手のこぶしを膝の前に揃え腰を折り深々と頭を下げた。

アウラが頭を勢い良く下げた際、ローブの肩口から下がっていた

フードがずり落ち頭をすっぽり覆った。

「構わんから空いている席に着きなさい」

アウラは、フードを深々と被った状態は足首まで覆い隠れたロ―ブを身に纏い身の丈より頭一つ分程は長いと思われる節くれた杖を両手で握った小ぶりな人物の姿は一見、挿絵で見る魔術師のように見える。

ややあつて、アウラはフードを上げながらやわらかい声を出し顔を上げた。

「は、はい。すみません」

「そこ空いてるから座りなさい」

教師が窓際が一番後ろの二人一組になっている机を指差した。

「あつ、はい」

アウラは、今朝方、シュベルクの屋敷から使いの者に送られ学園に帰って来た。

その使いの者と道中に話していた事が気になる余り不安からか、がちがちに身体を強張らせながら指差された空席まで来ると、そこには白銀の髪にブルーマールが美しいく映える少年が気持ち良さそうに寝息を立てている。

何時もやわらかい微笑みを向けてくれる山羊飼いの少年の姿がそこにあつた。

アウラは、ローブを脱ぎ椅子を少し引き背もたれに掛け持っている杖を机に立て掛け起こさぬように静かに椅子を引いて席に着いた。
「むふふう……、俺のピチパイ！ ピーチパイ……桃？ て、あつ！ アウラだ」

「ごめん、起こしちゃいましたか？ あれ、やだ……、涙が出て……覗き魔さん」

少年の顔を見て少し安堵したのか、少女の眼に熱いものが溢れ出した。

「なに泣いてんだあ？」

「……」

アウラは、ここが教室で人目がある事も忘れチツチに縋り付いて泣き出した。

「なんだ？ 何かあったのかあ？」

「実は……うん……なんでもない」

アウラは、そつ言い首を横に振った。

チツチは、アウラの様子と涙に何が起こっているのか理解出来ず、首を捻った。

T o B e C o n t i n u e d

〜 鐘が鳴る 〜 第一部 第二話（後書き）

最後まで読んで頂きまして誠にありがとうございました。 > |
| <

次回をお楽しみに

く 鐘が鳴る く 第一部 第三話

第三話

気づいて！ チツチ

静けさを取り戻していた教室の生徒たちは、またしても起こったアウラの大胆な行動に吹雪の魔術を唱えられた魔物のように動きを止めている。

教室内は、小さな湖で夏場に酸欠になった魚が水面で空気を求め吸う様よろしく、口をパクパクしている前席に座っている女子生徒や目を見開いたまま手に持っていた羽ペンを机の上に落とす女子生徒、授業を上ので受けていた男子生徒は、鼻と上唇の間に羽ペンを挟んで天井を眺めていたが、アウラとチツチの抱擁に視線を向けた際、不覚にも上唇の力を抜いてしまい滑り落ちていく羽ペンの先が辿った軌跡を鼻の下から頬にかけて間抜けにも残している。

「その二人、仲良き事は良い事だが今は授業中。なんだ……、その、静かに出来ないなら外に出なさい」

中央塔から各塔の間に広がる庭に二人の姿があった。

「ごめんなさい……、私のせいでチツチまで教室追い出されてしまいましたね」

アウラは、がっくりと肩を落とした。

「べつに構わない。寝てるだけだったし」

チツチが何時もの微笑みを浮かべて向けた。

「やっぱり、変わってないですね？ シュベルクの屋敷にいた時に覗き魔さんの寝ている姿をよく見ましたから」

アウラは、遠くに過ぎ去った時間を懐かしむように遠い眼をして言った。

「覗き魔さん……て、まだその呼び方なんだなあ、俺って」

「だって私……あなたの、覗き魔さんの名前知らないですもん」
「言わなかったけ？」

「聞いてません。肝心な事を言わないまま覗き魔さん、旅に出て行つたんですよ？ 酷いじゃないですか……」

「うん、でも、アウラは俺の秘密と夢を知ってるだろ？ それ
はアウラ以外の誰も知らない。あっ！ ロザリアも何故か知ってた
なあ」

「あっ！ それ私が言いました。ごめんなさい……。あの事は兎も
角、夢の話しもしちゃ不味かったですか？ 夢のために旅を続けて
いたのでしょ？ それとも旅を止めて思いのために学園に入ったの
？」

「何ていうのかなあ、シユベルクを出て直ぐにランディーに見つか
つて追い掛けられた。半年も……それで捕まって学園に放り込まれ
た」

「つ、捕まったて……また何処かでイケない事して、騎士団のラン
ディー様に追われる事になったんじゃ……」

「イケない事ってなにかなあ？」

「何処かの街で公衆浴場を覗いたとか……寝ぼけて誰かの……む、
むむ胸触っちゃったとかしてたんじゃ無いですよね」

アウラは、頬の筋肉がピクピク引き攣り始めている事を感じた。
「酷いなあ……アウラは、それじゃ俺が危ない人間に聞こえるぞ。

知らない人が話を聞いていればだけ……あの時も覗いてはないけ
どなあ」

「でも、見たじゃないですか！ 私の裸！」

「見たけど、覗いたんじゃないぞ！ 本当だぞ！ 見てしまったん
だ……綺麗だった。本当に……桃色に染まった肌も、小ぶりな桃二
つとさくらんぼが天ペ」

アウラは、少年の脳内映像を掻き乱すかのように言葉を重ねる。

「お、思い出さなくていいです！ そんなに鮮明に！ ……どうし

てランディー様に追い掛けられていたの？」

「も……なんでかなあ？ 山羊飼いだからか俺が？」

チツチが小首を傾げた。

「……トラシのちから 循環、ですか？」

アウラの紫水晶の瞳が不安の意を示し始めた。

「たぶん、なあ」

「そ、それで結局捕まって、この学園に来たのですか？ でも、あの時はびっくりしちやいました」

アウラは、一瞬不安顔を消し微笑んで見せると話をはぐらかす。

チツチもそれを察したのか、何時もの微笑みを浮かべた。

「夢の事は今日まで聞かれた事なかったから言わなかった」

「今日まで？」

「そう、今日アウラが来る少し前に聞かれるまで聞かれなかった。

聞かれないのにわざわざ自分から言う事でもないかなあって思っ

「そうですね。ああああ……それよりその眼、やっぱり時間が経つても戻らないのですか？」

力を貸してほしい。でも……やっぱり、言えない。

アウラは、少年の右眼を覆っている包帯を見て軽く笑っていた笑みを消し尋ねた。

「ああ、戻ってない」

「ごめんなさい。私のために……、私のせいです」

「アウラが謝る事はない。封印を解いてくれと言ったのは俺だ」

「でも、こんな……後遺症が出るなんて……ずっと残るなんて思ってもいなかった」

「何らかのリバウンドは来るかも知れないと思ってたけど、俺も知らなかった事だ」

「私がじゅんりん 循鱗の力を解放しなければ……」

「見えなくなつた訳じゃない気にするな、そのうち戻るかも知れな

い……それにアウラが治してくれるんだろ？ 魔術で……それに循環は母さんが俺に残してくれた力だ。俺はこのままでも構いやしないけどなあ」

「でも……もし、もしも！ 戻らなければ覗き魔さんは、これからこの先ずつと右眼を隠していかなければならないのですよ」

「そんなに悪い事ばかりでもない。今は右眼が見え過ぎて困るくらいだけど、封印を解く前より普段使える力は増したし使い易くなった。アウラが俺の力を必要とするならば何時でも使うさ」

「だめえ　！　そんなの……絶対にだめです。あの力を使つては駄目。もし、覗き魔さんが人でなくなつてしまつたら……、教会に追われ、殺されちゃう！ あっ……」

アウラは、自分でも気付かない内に取り乱していた。

自分の大事にもかかわらず飄々としてひょうひょういる少年を見ると、どうしても頼りたくなる

この少年なら何とかしてくれるかも知れない……それは私の甘えだ。

彼の傍にいと、つい忘れてしまいそうになるくらい心が跳ねる。

北の神殿からシュベルクの街に戻る前、この少年は、私が魔物を造り出したと言っていた。

その魔物がグリーンベルの街を焼き払つたのかも知れない。

少年が言うには、グリーンベルの街近くで魔物を感じ、“もう一つの循環”が暴走して魔物ごと街を焼いたかも知れないと話していたけれど、少年の記憶も曖昧でグリーンベルとハングラードの悲劇の真相は、今だ互いの心の闇に生きている。

この少年の言った事が全て本当なら……。

この少年は生まれ故郷のグリーンベルを焼いたかも知れないドラゴンの力を持つ少年で私の仇……そして私は……。

彼の母と街の仇かも知れない。私が組立描いた魔法陣から、造り

出された魔物たちが彼との母と街を襲った可能性が高いのだから……。

お互い討ちたいと心の何処かで思っている。

真相が明らかになった時……討つと約束し合った仲……それが二人の絆。

自分の大事に巻き込むような事を頼む訳にはいかない。

「あの時、循鱗を解放してなければ、二人とも生きてないだろさ。それに人間にとって恐れの対象でしかなかった母さんの力が破壊だけでなく誰かを守る力でもある。今、そう思える自分が……俺は母さんを誇れる気持ちがあるんだ」

少年のやわらかい微笑みが、今は苦しい。

その笑顔は清々しく厚い雲に追われた空の雲の間から差す陽の光のようだ。

「もし、覗き魔さんが追われるような事になったら、今度は私の力で覗き魔さんを守ってみせます！」

そう言うときアウラは、微笑みで返し堅く握った拳を上げチツチに見せた。

「ありがと。それよりいい加減覗き魔さんは止めてくれないかなあ？ それにアウラ何か変だぞお？俺に何か頼みでもあるんじゃないや」

「アウラは少年の声を掻き消すように声を上げた。

「……じゃあ、名前、教えてください」

「それが頼み事なのかあ？ 良し教えよう。俺の名は」

少年が名前を告げようとした時、チツチを呼ぶ声に掻き消された。

「おい。チツチ。飯食いに行こうぜ」

その声は、少年が座っている前の席に座っていた友人ものだった。「うふ。チツチかあ、かわいい名前ですね」

アウラは、にこやかな微笑みを浮かべてチツチを見た。

「あつ！ それ、あだ名だから……」

「じゃあ……チツチの本当の名前は？」

チツチは息が届く程、アウラの耳元に口を近づけ本当の名前を呟いた。

「あつ……ふあ、そんなに近づけたら……息が耳に……くすぐったいですてばあ……、で、でも素敵ですね」

「耳の刺激が？」

「ち、違います！ お名前です。貴族の方のような響きの素敵な名前です。そして、とてもお強そうです」

アウラが感想を述べ、くすつといたずらばい笑い声を漏らした。

「チツチ、早くしろ！ 置いてくぞ」

「うるさいなあ、分かった今行くから」

「チツチ、やっぱりお前はいいぞ。初めましてお美しいお嬢さん。

私の名は、ロツカ・フィンディアスと申します。宜しければお名前を教えては頂けませんか？ レディ」

チツチ達の傍まで来たロツカが、アウラを近くで見るなり名乗った。

「あつ！ はい。私の名はアウラ・ヴァージニティです。アウラとお呼びください。どうか仲良くしてくださいね。ロツカ・フィンディアスさん」

アウラの八面玲瓏な顔から女神の微笑みが作り出された。

「ロツカで結構です。美しいお嬢さん」

「はい。ロツカさん」

「アウラ。ロツカには気を付けた方がいい。そいつは女を手当たり次第に口説きまくる奴なんだぞお」

「黙れ！ 覗き魔。彼女は解っていないようだが、チツチ。お前のあだ名の由来を喋ってもいいんだぞ」

「アウラ……今のは聞かなかった事にしてくれ」

「どちらをですか？」

「両方だ」

アウラは、くすくすと笑っている。

「さあ、美しいお嬢さん。貴女を泣かせた上に教室を追い出され、あるう事が巻き添えを食らった貴女を口説くような下衆な野郎は放つて置いて宜しければ、この私とランチなど御一緒に頂けませんか？ 僭越ながら食堂までエスコート致します」

「はあ……それは私が……」

アウラの言葉にロツカが言葉を重ねた。

「ささ、急がねば人気の白パンと甘いデザートが無くなってしまいます」

「まあ、それはいけませんね。早く行きましょうか？ ねえ、チツチ」

アウラがロツカに手を引かれながら、そう呼んだ。

「ちよい待て！ アウラ、そいつは……」

チツチは手を引かれエスコートされるアウラを呼び止めた。

「ロツカさんが何か？」

「俺がどうかしたか？ チツチ」

「なんでもない。それより……、アウラ。お前も俺をあだ名で呼ぶのかなあ？」

なんとも嫌そうな顔をしてチツチは言った。

「駄目ですか？ うふふ、かわいいあだ名ですよ。チツチ」

チツチの表情を読み取ったアウラが言った。

チツチは覗き魔よりは幾分、ましになった呼び方に苦笑いを浮かべた。

「チツチ、置いて行きますよ」

気のせいかな、先程より何処となく嬉しそうな声がチツチに届いた。

アウラは思った屋敷のいざこざにチツチを巻き込まないようにしよう、と。

To Be Continued

く 鐘が鳴る く 第一部 第三話（後書き）

最後まで読んで下さいまして誠にありがとうございました。 >（

—） <

次回をお楽しみに！

く 鐘が鳴る く 第一部 第四話

第四話

ちよつとどつきり！ ちよつとウキウキ休日の朝

学園休校日の朝。

「ふみゆ……ふあ」

形の良い小ぶりな唇からかわいらしい息が漏れると細い白い腕を天井に向けいつぱいに伸ばした。

細い桃色の髪が無残に跳ね上がり、紫水晶の麗しい瞳をふにふにと擦り薄く開けてぼんやり一点を見つめている。

形の良い唇の上にあるかわいらしい整った鼻を手の甲で、ごしごし擦りもう一度大きな欠伸をした。

「ふあ」

アウラは、ふわふわの天街付きの広いベッドから降りると朝日を遮る厚い布のカーテンを左右に開き留め具に掛けた。

厚い布のカーテンの奥にレース状のカーテンを軽く開き、テラス付きの大窓に手を添え鍵をはずそうとした。

鍵を掛けたはずの大窓がゆっくりと開き出す。

「……あれ？ 鍵……寝る前に締めたはずんだけど……忘れてたのかなあ……気を付けないと駄目ね。へへえ」

心地良い風が部屋に流れ込んでレース状のカーテンとアウラの桃色の髪と薄い夜着を揺らす。

やさしい朝陽の差し込みがアウラの夜着を通り、華奢なアウラの肢体を浮かび上がらせた。

ここは北塔よりも中央塔寄りにある牧畜士養成科女子寮。

男子寮は北塔の近くに在り、かなりの距離がある。

他の科も同様で男子寮は学園の中央より外側に近い所に建てられていた。

牧畜士養成科の生徒や騎士科の男子生徒は中央塔まで共通授業を受けに来る際、乗馬を許されて馬で登校している者が多い。

技術者養成科、商人材養成科の生徒は技術者養成科の生徒が試作した乗り物を利用したりもするが、各塔には通学用に送り迎えの馬車が在り、そこから馬車が定期的に出ている。

休日も運行しており学園の生徒達は、それを利用して街に繰り出したり自前の馬で街に出たりとそれぞれ休日を満喫する。

女子寮と男子寮の間に多彩な店などが立ち並び、それはもうちょっとした街並みであった。

休日ともなれば出来上がったカップルが街で待ち合わせたり、わざわざ男子寮から女子寮まで自慢の愛馬を駆って迎えにくる男子生徒もいた。

アウラは、洗面場に向かおうと薄い夜着の上から室内用のローブを羽織ろうと手を伸ばした。

「ママ、マシユマロ大好き！ あれ？」

アウラの寝ていたベッドの方から聞き慣れた目覚めの声が聞こえた。

「チ、チツチ！ 何時の間に忍び込んだんですか！」

「さあ？ 寝ぼけてて、気がついてここで寝てた。あはあはあ」

「ちょ！ あはあはあじゃないです！ ここは女子寮ですよ！ 誰かに見つかったらどうするんですか！ と言っか……そんな問題じゃないような……人の部屋に勝手に入っては駄目じゃないですか！ それもレディの部屋に、よ、よよ夜這いなんて最低です」

「やっぱりアウラは綺麗だなあ」

アウラは、怒鳴ったところでチツチの視線が向けられている事に気付いた。

「きゃあ！ 何見てるんですかあああ！」

「何って、アウラに決まってる」

アウラは、慌ててローブを引つ掴み薄い夜着に透ける華奢な身体を覆い隠した。

「ちょ！ ちよっと……な、何してるんですか？ こんな朝早くから！ しかも私の部屋で」

「何って、昨日アウラが迎えに来いって言ってたから来た」

「そ、そうですけど……何時からこの部屋に？」

「今日になって直ぐ暗いうちから」

「……な、何も部屋まで忍び込まなくても……それも人が寝ている夜中に……」

アウラは顔を赤らめ、更にチツチに確認した。

「い、何時から……そ、そのベッドに？」

「アウラが寝付いて直ぐなんじゃないかなあ 真夜中だったから

……アウラ遅くまで勉強してたようだし、魔術の勉強かあ？」

「そ、そうですけど……か、鍵、どうやって開けたのです？ おかしいな？ 鍵はしつかり締めて戸締りしたのになあ？」

「まあ長い間、旅をしてたからなあ、いろんな人に会って様々な事を学んだかなあ」

「駄目ですう！ 学ぶ事は良い事ですけど、学ぶものは選んでください！」

アウラは捲くし立てるように言うと言葉を一度切った。

「あ、あの、着替えようと思うのですけど……えと、部屋から出て貰えませんか？」

「俺は、別に構わない。気にせず着替えればいいじゃないかあ？」

「わ、私が構うの！ 私が気にします。ちよっと部屋の外で待っててください」

「うん。分かった。部屋の外で待ってる」

チツチがそう言うのと部屋の扉に向い歩き出した。

「ちょ！ ちよっと、そっちはだめです！ 誰かに見つかったら」

「うん。なら外で待ってる」

チツチは大窓の方に向きを変えテラスへと出て手すりに手を掛け

た。

「ちょ、ちょっと！ チツチ危ないですよ」

「大丈夫。ここから入って来たんだし昇れたから降りられないはずがない」

チツチが手すりを一気に乗り越え、アウラの視界から姿を消した。

「チツチ。ここ五階！」

慌ててテラスに飛び出し手すりから身を乗り出したアウラは、下を覗き込んだ。

「チツチ。大丈夫？」

「五階は……ちょっと……きつかったかなあ」

チツチは暫くの間、その場に蹲っていた。

女子寮を出てチツチが乗って来た馬に跨り北塔に向かう途中に広がっている。

チツチは、ちょっとした街並みを前方に見ながら、北塔に向け馬を疾駆させた。

二人が乗馬する馬に並走する形でプラムが着いて来ている。

街には待ち合わせをしているのか、何時もの制服から余所行きの服で可愛く着飾った女子生徒や一息入れた後に、学園に向かうのか、制服を着ている女子生徒が噴水の前やカフェの外に置かれたテーブルに腰掛けたりしている姿が、あちらこちらで目立ち始めてきた。

アウラというとチツチの前に両足を揃えて横向きに座り、素足の目立つ脚を投げ出している。

埃除けのローブに付いたフードを深々と被っていて一見魔術師のようにも見えるが、纏ったローブの中には普段より着飾ったアウラの着衣が隠れている。

アウラの頑張りが、疾駆する馬の切る風に煽られ時折、捲れる口ローブの合わせ目から覗く素足の露出度が物語っていた。

捲れるローブを抑える手には、何時もの節くれた杖に括りつけられた鐘が小気味良い音色を響かせていた。

「今日は学園の外に放牧に出るんだろ？」

「う、うん……今年はシュベルクで一月後に行われる収穫祭で行なわれる催し物の家畜追いレースの開催会場になってるから、私も出場する事にしたんです。一月の間に出来るだけレースに向けて訓練して置きたいんです」

「近くの放牧地に行くにしても……何でスカート履いて来たんだ？」

「そ、それは……た、たまに、たまにですけど、スカートやワンピースも来て放牧に行きますよ……近くなら……」

そう言つてアウラは頬を膨らませた。

「それにしても綺麗な服だし、丈も短くないかあ？」

アウラは更に頬を膨らませ投げ出している両足を交互に振り始めた。

「だつて……」

アウラは俯き黙つてしまった。

街の入り口付近でチツチが馬の手綱を引き綱を緩めた。

「そんなに短いスカート履いてくるから、馬を跨げなかつたんだろ？」

「元から乗れないもん」

「短いスカートで横乗りしているとパンツ見えるぞお」

「ローブ羽織ってるから見えないもん。それに膝より少し短いだけだもん！ ちよつとだけ……」

「布地が、ずり上がつて腿が見えてる。たまに」

「纏ってるローブ押さえてるから見えないもん」

「放牧に出たら擦り傷や痣が出来るぞ」

「ローブしつかり纏うから大丈夫だもん」

「何を拗ねてるんだ？ アウラ」

「知らない……、ねえ……チツチはレース出ないの？」

「俺は山羊飼いだから」

「出れるよ。家畜を放牧しているなら誰でも出れるんだよ。馬でも牛でも豚でも鳥でも……家畜によって持ち点が変わるしやっぱり羊

がメインだけど……山羊なら羊と同じ持ち点だったと思うよ」「

「俺は生きる為に山羊たちと旅をした。山羊は粗食に強いからなあ、レースには興味ないなあ」

「そっかあ……」

「一緒に出てほしいのか？」

「そう言う訳じゃ……興味ないなら仕方ないよね」

アウラは微笑みを作ってチツチに向けた。

チツチは、街の中心部に入ると馬を歩かせている。

「あつ！ アウラにチツチ」

「ロザリア！」

「なあ に、これからデート？」

ロザリアが目を細め意味深な口調で聞いた。

「アウラはこれから放牧だ」

チツチが代わりに答えた。

「な んだ。アウラ何時もより小綺麗な格好してるからてつきり

……で、チツチも一緒に放牧に行くの？」

「俺は行かないかなあ 。何処かで昼寝でもしてる」

「だったら……私に付き合っしてほしいなあ……買い物。あつ！ 馬

で遠乗りでもいいのよ。アレシアン湖なんてどう？ いいでしょ？」

「う ん。べつにいいけど……アウラを北塔まで送らないと」

「その後でいいの。ここで待ってるから」

「ロザリア！」

「どうしたの？ アウラ怖い顔して」

「なんでもない……チツチも忙しいかなあ

て思っ……」

「昼寝するって言ってたよ？」

「そうだけ……」

「なら、いいでしょ？ チツチ借りるわね」

「……」

ロザリアは結局、チツチの馬に乗り北塔まで着いて来た。
チツチの腰に腕を回し背中にべったり身体を押しつけ、しがみ付
いている。

背中に何かを感じているのか、チツチの顔がにやけていたのが、
何だか無性に腹立たしかった。

北塔の家畜舎前でアウラは頬を膨らませ二人を見送った。

「……だめなのに……チツチのばか」
アウラは小さく呟いた。

T o B e C o n t i n u e d

〜 鐘が鳴る 〜 第一部 第四話（後書き）

最後まで読んで下さいまして誠にありがとうございました。 >（
―） <

次回をお楽しみに！

く 鐘が鳴る く 第一部 第五話

第五話

ジェラシーなんかじゃないもん！

アウラは、学園の分厚い石積みの外壁のアーチを抜けて二十頭程の羊を追って広がる広野の方へと群れを向けた。

牧草の良く茂る小高い山の麓までは昼前には着ける。

アウラは頬を時折、膨らませ足元の石ころを蹴飛ばしながら歩いていった。

ころころと小気味良い音色を細かい間合いで奏でながら羊たちは小走りに歩みを進める。

「ウオン」

群れの足が速まるとプラムが群れの前に躍り出て群れの動きを調整している。

羊の群れが足を落とすとプラムは、主人の下へと戻り、傍を歩き出す。

「クウウン？」

羊を追っていた時、プラムのいきり立っていた三角の耳がへこたれ、我が主を小首を傾げ心配そうに覗き込んでいる。

当の御主人様ときたら、何だか御機嫌斜めのように上の空だ。

アウラの足下に戻ったプラムが心配そうに見上げていた。

「ウオン……クウウン」

プラムの鳴き声でアウラは、はっと顔を上げた。

「どうしたの？ プラム」

「クウウン」

プラムの鳴き声でアウラは察した。

「ごめんね。心配してくれてるんだね」

「ウオン」

アウラは、気を取り直し節くれた杖に括りつけられた鐘をからんと響かせプラムに命令を下した。

「プラム！」

「ウオン」

プラムがその命、確かに受け取ったと一鳴きすると羊たちの群れに吠え掛り足を早めた。

山の麓に向かう街道沿いの川には、この辺りの領主が保有する水車小屋が見える。

もつすぐ小麦の収穫が始まるので、それに向けて水車小屋を念入りに点検をしている人影が見えた。

水車小屋の脇を通り掛かった時、点検をしていた十代半ばの少年が粉まみれのいでたちでアウラに声を掛けた。

「羊たちを山の裾野まで追って行くのか？」

「あつ、はい。あの辺りは良い草が生えてますから」

「確かにあの辺りには良い草が生えているけど、それは誰も近寄らないからだよ」

「それは、羊飼いたちが牧草を育て柵の中で牧羊をするようになったから、わざわざ小さな山裾の牧草が生える場所まで羊を追っていかなくても事足ります。でも、自然ばえの牧草はやっぱり栄養価が高いですから羊の毛並みも良くなります」

「それもあるけど、あの山裾の街道は王都に入る商隊もよく利用するから、それを狙う山賊や戦に焙れた傭兵たちがその商隊を襲うんだ」

「でも、この辺は王都に隣接してますし警備もしっかりしているんじゃないのですか？」

「それが最近、魔物が増えたせいで騎士不足って話でさ。魔物の討伐に手一杯でその他の警備に手が回らないそうだ」

少年が粉だらけの頭を搔きいた。

「でも、王都には王政府直属の騎士隊が常駐してますから山賊や傭兵の討伐に来たりしないのですか？」

「王政府直属の騎士たちは王様を守る事が第一の任務だから、無暗に王都を離れる事は出来ないんだよ。その他の有能な騎士隊は魔物対策に出ているし、その被害も半端じゃないとか聞いている。かと言って並の兵隊じゃ戦慣れした傭兵や地の利を上手く利用して巧みに戦う山賊にも敵わないんだ。人的被害が増えるだけに留まらず最新の武器も奪われお手上げ状態なわけさ」

少年がそう言い水車小屋に入ろうとして、アウラに言った。

「まあ、羊飼いは魔除けや妙な術を使うって言うからなあ……でも相手は人だよ？ 魔除け何んか役に立たないさ。仮に魔物を倒せるだけの破魔の法があったとしてもあんたに人が殺せるかい？ 悪い事は言わないから引き返したほうがいい」

アウラは一瞬躊躇ったが、今度のレースは何が何でも勝たなければならぬ事情がある。

アウラは気丈に振舞った。

「大丈夫です。殺すなんて事は私にはできません。仮にその力を持っていたとしても……でも、人除けの祈りの法もあります……おまじない程度ですが」

少年は肩を竦めると水車小屋の中に入って行った。

アウラは遠ざかった羊の群れを追い掛け山の麓へと向って走り出した。

アウラと羊たちが小高い山の裾野に、こじんまりと広がっている牧草地に着いたのは、まだ陽が正午に達する前だった。

アウラは羊たちが見渡せる程良い木陰を探し腰を降ろした。

肩掛けになった鞆の中からグランソルシエールの禁術書と銘打たれた一冊の禁術書を取り出した。

北の神殿で一番最初に見付け出した禁術書だ。

その後の調査で万にも達する魔術書がランディーたちの手で発見、回収されたという事だった。

アウラの持つ禁術書に記された幾つかの魔術と魔法陣を用いず魔術を行使する為の短縮手法が記されていたが、強力な魔術、特に破魔の魔術に関する記述については未解読のままだった。

チツチと戦った時、覚えたばかりの短縮手法を用い禁術書に記されていた一部の魔術を使ったアウラだが、それ程強力な魔術ではなかった。

チツチを討つ事に対して心の何処かに気の迷いが生じ無意識に力を押さえていたのかも知れない。

牧畜士養成科とは名ばかりで特別能力保持者を集め研究、実験を重ね魔物を討つ為に力を実戦レベルまで引き上げる特殊機関だ。

科目別授業の際、実際に魔術を使ってみるものの、アウラには大して強力な魔術を使う事が出来なかった。

まあ、以前よりは遥かに成長してはいるのだけど……。

魔術書や禁術書を解読したり、魔法陣を解析したりする事は、自分で言うのも何なのだが、かなりの域に達していると思う。

しかし、実際に魔術を行使するとなれば話は別。

魔術は自分の思うように威力を発揮してくれない。

ソルシエールの魔術が強力過ぎて自分が持て余しているのかも知れない。

他の生徒も同じではあるが、自分より遥かに上手く扱っているように思える。

短縮手法を使えるのは未だに自分だけなのだが、魔術とは奥が深いというか、一筋縄ではいかないものだと思うと同時に幾多の新しい魔術を作り上げたソルシエールの偉大さを改めて思い知る羽目になった。

アウラは、チツチと出会った時に彼が言っていた言葉を思い出した。

「俺には使えない。知っていてもそれを扱える術すべを持たってないか

らなあ』

もしかしたら、魔術師の才能と言っても多岐に渡っているのかも知れない。

大きく分けると、行使する魔術を最大限に引き出せる者、解読や解析は得意でも魔術の行使に制限が掛る者、或いは両方をそつなくこなせる者に分類されるのではないかとアウラは考えた。

チツチの魔術に関する知識や推測は学園に集められた者たちの誰も及ばない……と言ってもチツチは魔術に興味が無いようであるの前で魔術の事を口にはしない。

知っているのは自分だけだ。

あれ程の知識を持ちながらチツチ本人は全くと言っていい程、魔術を使えないのだから自分の推測もあながち間違いではないと思う。

何だかチツチの事を考えていると無性に腹が立って来た。

北塔で別れた時の光景が脳裏に浮かんで来る。

ロザリアを馬の背に乗せ走り出して行った光景が焼き付いて離れない。

チツチの腰にしっかりと両腕を巻き付け、遠慮なく成長したふくよかな果実を背に押し当て嬉しそうに微笑むロザリアと背中 of 感触を表したチツチのだらしく伸びた鼻の下を思い出す。

チツチが入学して来た時に何やら、“いけない、ちち宣言”をした時、腹立たしい気持ちと自分にも勝ち目は残っているのだという安堵の気持ちがちよっぴり湧き上がったが、よくよく考えてみれば、チツチにしてみれば『ちち』なら何でもいいのではないかと思えてきた。

あんな騒動がありながら、男女問わずチツチは何故かもてる。

「チツチのばかあ、覗き魔、変態、エッチ！」

何時の間にか陽は天に達している。

アウラは、鞆の中のパンを取り出し、親の仇に喰らいつくかのよう
うにパンに噛り付いた。

「はあ」

アウラはパンから小ぶりの口を離すとかわいらしい溜息を吐いた。
みんな、あんな奴の何処がいいのdarou? アウラは自分の事は
棚に上げてそう思った。

T o B e C o n t i n u e d

〜 鐘が鳴る 〜 第一部 第五話（後書き）

最後まで読んで下さいまして誠にありがとうございました。 >（
―） <

次回をお楽しみに！

く 鐘が鳴る く 第一部 第六話

第六話

油断！ 助けて！ チツチ

アウラは、気が気じゃない気持ちの中、手にしている禁術書のページを乱暴に捲った。

気持ちが悪く落ち着かない……そりゃ落ち着かないのである。

不安と苛々する気持ちを鎮めようと禁術書を開いたものの、内容は一向に頭の中に入ってこない。

頭に浮かぶ事と言えば、水車小屋で話をした少年の話もさる事ながら、そんな事より今頃チツチとロザリアは何をしているのだろうか？ という事ばかり頭の中に浮かんでくる。

逢引きスポットとして名高いアレシアン湖には、通常のボウトの他に二人乗り用のペダルを踏んで漕ぐ船首にユニコンの頭が付いた馬車と巨大蛙の形をした奇怪なボウトが、愛嬌たっぷりにまったりと肩を並べて浮かんでいる。

ペダルの位置は前方にあり、腰の位置よりやや高い場所にあるので漕ぎ出す際、女の子が短いスカートなど、履いていようものならそりゃもう際どい事になるのだが……。

そつえば……ロザリアは今日、自分が履いているスカート丈より随分短いタイトなスカートだった気がする。

自分も女の子なのだから、一応、流行りや友人のファッションはチェックしている。

嗚呼！ 苛々する……。

それとも今の時間帯なら、学園の街で今頃アフタヌーンティーで

も楽しんでいるのではないか？ それとも綺麗なテーブルクロス
敷かれたレストランで時間を掛けて豪華なランチを楽しんでるの
ではないか、と思う。

しかし、チツチにそんな甲斐性がない事に気付く。

良くてパンにベーコンや腸詰のソーセージに野菜を挟んで香辛料
を掛けマスタードを塗った持ち帰りが出来る軽食でも買い込んで近
場の綺麗に刈り揃えられた芝の上で噴水など見ながらパンに噛り付
いているのだろう。

お互いに違う新作メニューを頼み、半分食べて交換して食したり
している姿が脳裏に浮かぶ。

忌々しい……。

自分と言えば、人気のない小高い山の裾野に、小じんまりと広が
る牧草地で自分が連れてきた羊など眺めて味気ない昼食を摂ってい
るというのに……忌々しいたらありゃしない。

餌をねだりに来ているプラムが太腿の上に、ぶにつぶにの肉球を
載せている。

今日は何時よりも短めのスカートを履いて来ているせいで、露わ
になっている太腿にプラムのぶにつぶにの肉球がひんやりと直に伝
わってくる。

何故、何時とも違う服装で放牧に来ているのかと考え、顔が赤ら
んで来る事に気付く。

今の状況を考えると、放牧デートを期待していた自分が腹立たし
い。

昨夜から下拵えをしておいたお弁当は、二人分。

捨てるのは勿体ないと思い食べ切れない分をプラムに食べさせる
事にした。

何時もより多めの餌を貰って食べ尽くしたプラムは、眠気が差し
たのか大きな欠伸をすると膝の上に顎を乗せて瞼を閉じている。

プラムの重みを腿に感じていると、何時ぞやの膝枕の事を思い出
す。

確かあの時……。

思い出して顔から火が出そうな程、熱くなっている事が分かると
同時に今頃、お腹も膨れて睡魔に襲われたチツチがロザリアの太腿
の上に頭を乗せ情眠なんぞ貪っているのではないのだろうか。

むかむかが収まらない。

まさか！ その後……想像など出来るはずもない、したくもない
……と言つか、その手の知識に疎い自分には想像すら出来ない……。
でも、何故？ こんなに苛々したり、もやもやしたり、むかむか
するのだろうか……。

まだ小さくて自分でも良く分からない程の憧れとは違う好意。

淡い気持ちのはずなのに……どうして、こんなにも胸が苦しいの
だろう、とアウラは首を傾げた。

アウラが、ふと空を見上げると陽は大きく傾き始めていた。

「プラム」

アウラは、節くれた杖に括りつけられている鐘が、からん と
音色を響かせた。

何時もなら鐘の音に反応し主の命令を迅速に、こなすプラムが動
かない。

森の一点をじっと見詰めていたが、唸り声を上げ出し吠え出した。

「グルルルウ、ウオン、ウオンウオンウオン」

「どうしたの？ プラムう？」

アウラは、プラムの見詰めている森の方に眼を凝らした。

森の木々がわさわさと落ち着かない様子を見せていた。

アウラは風を探った。

風は微かに吹いているものの、強くはない。

森の木々をざわめかす程の風ではない。

アウラの脳裏に水車小屋で少年が言っていた言葉が過ぎった。

山賊、盗賊などは白昼堂々商隊などを襲う事は余りない。

腕に自信のある傭兵は何時襲ってくるか分からない。

街道沿いには、騎士や軍の兵たちが監視をする屯所が一定の距離に置かれているからだ。

見通しの良い昼間から襲えば、あつと言つ間に見つかり増援を呼ばれ囲まれてしまう。

陽が大きく傾いているとはいえ、まだ辺りは明るい。

魔物などは夜行性のものが殆どだ。

羊を狙う狼などの獣も殆どが同じ夜が狩りの時間だ。

森のざわめきは近付いて来ている事が、木の揺れ具合の様子から見て取れた。

水車小屋で会った少年の言葉が真実味を帯びてくる。

深刻な軍の人材不足。

「プラム」

アウラは、プラムに羊たちを纏め移動させるよう指示を出し節くれた杖を構えた。

森を方向を警戒しながら、アウラは動き出した羊の群れを追った。

アウラたちが動き出した気配を感じ慌てたのか、森の中から大人数の偉丈夫たちが群れを成し武器を掲げアウラの方へと向かって来る。

「プラム！」

アウラは、気丈にも偉丈夫たちに向き直り節くれた杖を構えた。

これでも魔術師の端くれだ。

その前に、一頭でも羊の頭数が足りなければ見つかるまで探す程、慈悲深いと言われる羊飼いだ。

羊飼いは、決して羊たちを見捨てたり、見放したりはしない。

魔法陣短縮の法は、まだ完璧に使いこなせる訳でもないが、何時

も羊を連れ放牧する場所には必ず魔除けの陣を敷いている。

魔法陣さえ敷いてあれば短縮の法と合わせて有効かつ、迅速に魔術を行使出来るはずだ。

アウラは節くれた杖を構え足を止めた。

逃げても追いつかれる事は分りきっている。

なら、少しでも自分に有利な場所で戦うのは定石だ。

男たちがアウラと一定の距離を置き足を止めた。

甲冑を着け、なかなかの得物を持っている。

傭兵だ。

「ほほお、今日の御馳走とお宝は羊とかわいい子羊か」

男が薄い笑みを浮かべた。

アウラは紫水晶の瞳を鋭く細め、節くれた杖を構えた。

余りのアウラの余裕に偉丈夫たちは一瞬、たじろいだ。

フード付きの長いローブに節くれ年季の入った杖を構えたアウラの姿は語り草としては余りにも有名な遠い昔、極北に魔物たちを閉じ込めた魔術師そのものだった。

アウラは、短縮の法を用いずに杖に括られた鐘を鳴らし予め描いて置いた魔法陣を発動させた。

からん

小気味良い鐘の音色に乗り描いた魔法陣から魔術が発動……するはずだった。

「あれ！ ……魔法陣、描くの忘れてた……」

「驚かしやがってえ。このあまあ」

男がアウラに掴み掛かった。

アウラの纏っていたローブを易とも簡単に破き剥ぎ取られ、地面に突き飛ばされた。

傭兵の男たちが、好色な笑みを浮かべ距離を詰めてくる。

「いやああ」

倒れた拍子にアウラの細く太腿が露わになっていた。

「おいおい、誘ってんのか？ お譲ちゃん」

男たちは薄い笑みを浮かべ、にやにやとアウラを舐め回すように見ている。

アウラは、慌ててスカートの裾を下して隠したが、何時もより短いスカートの裾が握った手から離れ伸ばした力の分だけ捲れ上がった。

「もったいぶるんじゃないよ。かわいがってやるからよお」

それを見ていた男たちは興奮を露にし、アウラの身体にじわりじわりと手を近付けた。

アウラの顔が恐怖に歪み、紫水晶の瞳が潤み出した。

アウラは、倒れた際に落としてしまった杖を必死に探した。

魔法陣もない。短縮手法を使う為にも鐘を括り付けた杖は必須だ。

「いやあつ、こないでえ」

いくら魔術の才能があると言われていても戦闘経験などないアウラは普通のか弱き女の子に過ぎない。

まして魔術を発動させる触媒となる杖を手放しているとなれば、極々普通の女の子だ。

男の手がアウラに延びた時。

獣の放つ荒い息ず使いで白と黒の矢が男の腕に噛み付いた。

「プラムううう」

アウラの安堵も束の間。

わらわらと男たちがアウラを取り囲んだ。

プラムも善戦しているが、多勢に無勢は分りきっている事だ。

「たすけて……チツチ……お願い……チツチ」

アウラは無意識に山羊飼いの名を呟いていた。

「チツチ！ たすけてえ」

アウラは、声が潰れそうになる程大きな声で少年の名前を呼んだ。

〜 鐘が鳴る 〜 第一部 第六話（後書き）

最後まで読んで下さいまして誠にありがとうございます。 > (—
—) <

次回をお楽しみに！

〜 鐘が鳴る 〜 第一部 第七話

第七話

白馬の王子様!?

学園内の街並みに荷物の山が微妙なバランスを保ち人ごみの中を動いている。

「ねえ！ チツチ。次はあの店に入りましょうよ」

「ロザリア、もう持てない……まだ買うのかなあ？」

チツチの両腕には買い物を済ませた荷物の山で、既にいっぱいと言葉をとつくに超えている。

「なに言ってるの？ まだまだこれからよ！」

「うん。でも、そろそろ北塔にアウラを迎えにいかないよ」

「なによ！ やっぱアウラの方がいいの？ 私が嫌い？」

「ロザリアは嫌いじゃないなあ」

「じゃあ。好き？」

「うん。好きかなあ、どちらかと言えば」

ロザリアは満面の笑みを浮かべた。

「チツチ？ もう少し付き合ってくれたら……いい事してあげる！
「いい事？ ってなに？」

ロザリアは、荷物でいっぱいになった腕に豊満な胸を惜しげもなく押し当てた。チツチの抱えている荷物が大きく揺れ今にも崩れそうになる。

「おっとと、なにかやわらかい感触を腕に感じるなあ」

チツチが絶妙なバランス感覚でその危機を乗り切った。

「はい！ 今はここまでね。後は買い物終わってえ 夕食の後でね！ きゃっ！」

チツチが妙技を駆使して持っていた荷物がバツバツサと音を立

て崩れ落ちた。

「そんなに急かさないでよね。……うん、もう、チツチたらあ……気が早いんだからあ……」

ロザリアは、チツチをに上目使いに視線を送った。

チツチは学園の外を碧眼の眼を鋭くしアウラが放牧に向かった方角をじつと見詰めている。

「チツチ……どうしたの？」

チツチとロザリアの周りには山程あった荷物が散乱していた。

ロザリアの声はチツチに届いてい様子だ。

「ねええ？ チツチどうしたの？ 具合でも悪いの？ それとも……待ち切らないのかなあ？ チツチのエツチ！」

ロザリアの腕を振り切りチツチは突然、街の馬駅に向い走り出していった。

「ちよつと！ チツチ！ 馬駅に何を！ まさか……きやつ！ 王都の三ツ星宿に行くのね。もうチツチたらあ、せつかちだぞお」
チツチの後を追って来たロザリアが隣で頬を挟み浮かれた声を上げた。

「アウラがあぶない」

チツチが学園の外を鋭い視線で睨んで呟いた。

「はあ？ チツチ？ 何言ってるんの突然……あの子は大丈夫よ。お兄様がアウラは魔術の天才だって言ってたから、魔物たちに襲われても平気でしょ？」

「分からない。魔物の気配じゃないけど……疼くんだ。循鱗が」

「循鱗？ なにそれ？」

「アウラと俺の絆だ。もしアウラを襲っているものが魔物じゃなくて傭兵や賊の類なら急がないとアウラの身があぶない」

「アウラの身が危ない？ それ本当なの？ 魔物より弱いでしょ傭兵や賊なんて」

「そうでもない。人は非力でも賢くて強い。アウラが魔術を使ったとしても逃げきれない。それにアウラには人を殺すなんて事出来な

い
」

馬は馬車で借りられるが、貸し馬をしている馬車の多くは街並みの外にある。

近くの店に生徒たちが馬で乗り込んだ際、馬を繋いでおく為の馬屋をチツチの碧眼が捉えた。

「見てくれよ。マドリヌ。僕の愛馬を、ペガサスより気高くユニコーンより猛々しい僕の白馬できみを楽園へとエスコートさせてくれないか？ さあ！ 今宵愛の楽園へ旅立とうじゃ」

「チツチ！ 馬」

ロザリアが手綱を握ると、するりと跨った。

短いスカートの布地は捲り上がり、その中身が露わになっている。

「ロザリア！」

「なによ！ こんな時に、急ぐんでしょ！」

「パンツ見えてる」

「だまれ変態！」

「そんなに大きな声で怒鳴らなくても……」

「アウラが危ないんでしょ？ よく分からないけど……アウラは私の親友なの！ チツチも急ぎなさい」

「はい……注意したただけなのになあ……へ、変態って……」

スカートを履いて馬に跨ったロザリアの姿が、あらねえもない状態になっていて、人眼を集めている事を教えたつもりだったチツチは、がっくりと肩を落とした。

兄のランディーからチツチの事をよく聞かされていた。

チツチの気配を感じ取る力は、並みの人間ではない、と。

その感覚は、野生の獣そのものだと聞いている。

何時も、ぼや　　っとしているチツチが、こんなにも顔引き締められている様子をロザリアは見た事がなかった。

何かが起きているに違いない。

「きみ！ それは僕の愛馬、ラブリン号だ！」

「はっ？ あんたねえ、愛馬ってんなら、もつとましな名前付けてあげなさいよ。急ぐからこれ借りるわね」

「ロザリア？ パンツ見え 痛っ」

ロザリアの爪先がチツチの脇腹に入った。

「まだ見てたの？ あんたは！ アウラが危ない事が分かってんなら、何時までも見てないであんたのローブ貸しなさいよ」

ロザリアはチツチのローブをむしり取って膝に掛けた。

「行くわよ！ 早く乗りなさい」

更にロザリアが捲くし立てる。

「ロザリアは残ってくれないかなあ」

「チツチ？ あんた何を……」

何時もと違うチツチの碧眼は、見詰める物全て貫いてしまつんじやないかと思う程に鋭い眼光を放っている。

何時もの笑みを浮かべているチツチの碧眼は何処にも無く、笑っていない。

「はあ、早く乗りなさいよ……アウラは私の親友。放っておけないわ。チツチの邪魔はしないから、私も連れて行って！ それが駄目なら今、私に出来る事は何？」

「俺を学園の外まで連れていってくれ。その後は大人しく待っていてくれるとうれしいかなあ」

「……分かったわ。もう！ 早く乗ってよね」

チツチが後ろに跨るとロザリアは馬の腹を蹴り、引き絞っていた手綱を緩めた。

「ああ！ 僕のラブリン号……」

ロザリアの馬捌きは見事な物で人が行き交う街中を巧みな手綱捌きで無人の野を疾駆させるかの如く馬を走らせた。

北塔を横目に矢のように走り向け外壁のアーチを潜って学園の敷地の外へと飛び出した。

チツチは『気配を探る』と言って馬を止めさせ飛び降りた。

「チツチ！ なにを！」

チツチは右眼に捲かれた包帯を取り外し、アウラが向かった方向を凝視し始める。

ロザリアがチツチの前に出ようとした時、怒鳴り声上がる。

「見るな！ そして戻れ……学園に」

チツチを覗き込もうとしたロザリアに口調を強めた。

「ごめん……チツチ、その右眼……」

ロザリアは見てしまった。

チツチの右眼を。

真紅の眼光の中で細める縦長の瞳にロザリアは戦慄を覚えた。

チツチはアウラの向った方向を念入りに見詰めた。

「見つけた」

「チツチ……馬を」

「必要無い。ソルシエールが母さんのから預かっていた角笛を渡してくれたから」

チツチは、腰に下げていた太く長い棒状の角笛を手を取った。

角笛に唇を付けるとゆっくり大きく息を吹き込んだ。

ロザリアの耳には角笛の音色は聞こえていないようだった。

チツチが角笛から唇を離すと一陣の風が流れて止んだ。

「久しぶりだなあ、スレイブニル神速馬。お前の力を借りたい」

「ふん！ 久しぶりに呼び出しておいていきなり力を貸せだと小僧」

ロザリアは眼を丸くしていた。

その馬の……馬と言つべきなのかは分からない。

前脚四本、後ろ脚四本、計八本の脚を持つ純白の巨大馬。

馬体は普通の軍馬の二倍程もあるかと思われた。

「お前の脚でないと間に合わないかも知れない。後で人參やるから俺の頼みを聞いてくれ」

「ふん！ 俺は乗り手を選ぶ……だが、人參……ドラゴンの角笛で呼ばれた以上、お前の母との義理を果たさなければならぬ。特別に載せてやろう。乗れ！ 小僧」

「ありがとなあ」

「小僧！ 言っておくが、決して人參の誘惑に負けたわけではない……人參」

「チツチ……？ どういう事？ その馬……ドラゴンて何？」

チツチは、左眼の碧眼を反らして微笑みを向け、右眼の炎のような赤い眼は瞼で薄くして微笑みの意を伝えた。

「この事は内緒だ。詳しい事が知りたいならランディーに聞いてくれ」

チツチはスレイプニルに飛び乗ると誇らしげに揺れる鬣たてがみを掴んだ。チツチは、これから向う方向をスレイプニルに伝えるとまるで風のように巨大馬は消え去った。

ロザリアは茫然とチツチを見送るしかなかった。

チツチは確か山羊飼い……ロザリアの脳裏に原典に記されている記述が浮かび上がる。

『山羊飼いは魔物を扱う』

「チツチ……貴方何者なの？」

ロゼリアは、チツチの向かった方向を見詰め呟いた。

アウラは、恐怖に震える身体を必死に動かし杖を捜した。

「こいつ震えてるぜ。怖がらなくてもいい。喰ったりはしないさ。頂く事には違いねえがな」

「ああああは」

傭兵たちが薄い笑みを浮かべながら近付いてくる。

「来ないでえ　！　いやああ　！　プラムううう　！　プラムううう」

傭兵たちがアウラの細い桃色の髪を鷲掴みに掴み引きずり起こした。

「いやああ　！　痛い、やだ、やだああ　、チツチ　」

紫水晶に瞳は、潤み今にも溢れそうな程涙を眦に蓄えた。

「はあ　なあ　してえ　え！　触らないでえ　、チツチ

！　たすけてええ　」

傭兵たちが必死に逃れようとするアウラに群がった。

「へへえへ。犯^ちつまってもいいんですかい？　お頭」

「ああ、構わんが羊の確保が済んでからだ。まずは食糧の確保が優先だ。女はその後、楽しめばいい」

「この犬はどうしやす？」

「犬の肉は旨い。赤犬だないのが残念だがな。そいつも捕まえる」

「しかし、この娘は別嬪だねえ　。まあ、ちと青いが楽しませてくれよ。お譲さん」

「い、いやあ、放してえ」

「それは出来ない相談だ。胸がかわいそうな娘だが、我慢するか」

ぐさっ！

「よく見りゃ肉付きも悪いな。俺りゃ　もつとぼつちやりとした方が好みなんだ。この際だ女ならいいか」

ぐさっ！　ぐさっ！

「贅沢を言つな。まだガキでしょんべん臭い小娘だが女にやちげえねえ。しかし、色気のねえ身体つきしてんなあ、好きな男に愛想つかされるぞ」「

ぐさっぐさっぐさっ！

「こいつはあ、若いし別嬪の上玉だ逃げねえように縛っておけよ。
お楽しみは後回しだ」

「へえ い」

(絶対……泣かないもん！ 涙はチツチにしか見せない宝物なんだ
もん！)

アウラは、眦から涙を拭くと一瞬の間を見せた。

男が掴んでいる手を噛むと震える足を地面から引き剥がすように
駆け出し転がっていた杖を掴んだ。

「痛てえ、何しやがんだあ このガキ！ 殺すぞ」

恐怖を振り払いアウラは集中した。

短縮法を用い魔術を行使する為に。

「俺は、お前以外の奴に討たれてやるつもりはない。だから、お
前が俺以外の誰かに討たれる事は許さない」

そして、チツチとの約束を守る為に……。

(解ってるよ。チツチ……だから、私はあなた以外の誰にも討たれ
ない)

からん

震える手で杖を振り鐘の音を鳴らした。

アウラの周囲にゆっくりと空気が流れ出し速度を増していく。

やがて、小さな竜巻がアウラの身体を纏った。

アウラが纏った竜巻に近くの傭兵が弾き飛ばされた。

「こいつ……本物の魔術師！」

「本物の魔術師は、初めて見るな。とつくの昔に滅んでいると聞いて
いたが生き残りがいたのか」

傭兵の頭らしき人物がアウラを鋭い目で見た。

「おもしろい。お遊びは終わりだ。絶対に捕まえる」

アウラが杖を振り鐘を鳴らす度に竜巻から鋭い風の刃が乱れ飛ん

だ。

しかし、相手は百戦錬磨の傭兵たち。

戦闘などした事もないアウラの攻撃は的を外れ、明後日の方向に飛んでいく。

当てずっぽうな攻撃を傭兵たちは、難無く読み切りあつという間にアウラの背後を取った。

アウラの杖を間合いの長い槍の柄で絡め捕り、天高くアウラの杖を弾き飛ばした。

杖を失くせばアウラは、ただの女の子に過ぎない。

あれよあれよと言う間に囚われ縛り上げられ地面に転がされた。

プラムは、何とか逃げ回っているようだったが、アウラに近づく事が出来ず傭兵に向かい低い唸り声を上げていた。

傭兵たちがアウラを再び囲み始めようとした。

その時。

一陣の風が数人の傭兵を薙ぎ倒し通り去った。

「なっ！　なんだ。こいつの魔術か」

過ぎ去った風が急速に方向を転換しアウラの方に向かって来た。

アウラは思わず眼を閉じた……が、弾き飛ばされると思った風はアウラの傍でピタリと止まった。

眼の前に悠然たる姿を現したのは八脚の巨大馬。

その巨大馬の馬上から、アウラを囲んでいた傭兵の一団にもの凄い勢いで白銀の鏃が付いた小汚い何かが発射された。

「痛え、急に止まるなよ。俺が間抜けみたいじゃないかあ」

「何人か、道ずれに出来たじゃないか。小僧」

巻き込んだ傭兵の一団から良く知る間の抜けた声が聞こえて来る。

「……チツチ」

「アウラ。待たせたなあ？　助けに来た」

チツチが強打した尻を撫でながらアウラに近付いた。

T
O
B
E
C
O
N
T
I
N
U
E
D

〜 鐘が鳴る 〜 第一部 第七話（後書き）

最後まで読んで下さいまして誠にありがとうございます。 > (—
—) <

次回をお楽しみに！

く 鐘が鳴る く 第一部 第八話

第八話

白馬の王子様は！？ 縄使いと双剣がお上手？

アウラの眦に溜まりに溜まった涙が溢れ出した。

「ふえん…… チツチ！ なぜ？ ここに」

「助けに来たつて言つたろ？」

チツチは、腰に帯びている山鉈でアウラを戒めている縄を切り自由にした。

「ふえ…… チツチ…… えぐ…… 怖かつたんですよ」

「泣いてる暇はないかなあ」

アウラたちを囲んでいた近くの傭兵は、スレイプニルに蹴飛ばされた者たちと運悪くチツチが放り出され際に巻き込まれた者は地面に倒れて蠢いている。

幸か不幸かアウラの近くにいた傭兵たちを、チツチが巻き込み吹き飛ばしたせいでアウラと傭兵たちとの距離は開いていた。

チツチたちも体制を立て直すには丁度いい。

傭兵の数は地面に倒れている人数を合わせて、ざっと一小隊、人数にして約三十人といったところだ。

傭兵たちも想定外の乱入者に戸惑っていたが、武器を取り体制を整え始めている。

首に複数下げられた短身のマスケット銃には既に弾と火薬が込められているはずだ。

チツチがアウラの傍まで来るとスレイプニルの背中へと押し上げた。

「うん！ 重いなあ。アウラ、自分でもよじ登って」

「お！ 重いですかあ……失礼です。レディに向って重いだなんて……例え、重くても言っちゃだめです……」

アウラが口を尖らせ頬を膨らませた。

「ごめん。言葉の文あやだ。だぶん」

「ちょ！ ちよつと！ チツチどこ触ってるんですか！ それに言葉の使い方が違います」

「触ってない。お尻を押して押し上げてるんだけど」

「あつ！ チツチ上見ないでえ！」

「縞々、ごぶつ……」

アウラの革ブーツの裏がチツチの顔面を捉えた。

「見るなって言っただでしょ！」

「痛いなあ、蹴らなくても……丈の短いスカート履いてくるから……」

……

「だって……チツチと放牧に来ると思つて……朝早くからお洒落して、お弁当だつて頑張つて作ったのに……」

アウラは鈴の音が消えゆくような小声で呟いた。

「何か言つたあ？」

「べ、べべ別に何も……ふん！」

「早く乗れ小娘。特別に我の鬘を掴む事を許す。小僧も早く乗れ」

「俺はいいや。それよりプラム……あのボンクラ犬を銜えて逃げてくれ、羊たちは俺が何とかするから」

「ウオン」

プラムは抗議の鳴き声を上げた。

「……犬ころを銜えるのは如何ともしがたいが、この際仕方ない」

「チツチ！ あなた……また囿あやになるて言っんじゃ」

「囿あやになるつもりはない」

「足止めにするつもり？ なの？ あなたのお母様がそうされたよ
うに」

「スレイプニルがいる限り、足止めになる必要もない。そいつはどんな奴より速く走る事が出来る神馬だから。追いつける者がいると

すれば風狼くらいのものさ」

チツチが何時ものようにやわらかい微笑みを向けていた。

チツチの微笑みがゆっくりと溶け、鋭い眼差しへと変わっていった。

既に解かれ右眼に巻かれていた包帯はなかった。

閉じられていた右眼が開かれていく。

ゆっくりと開かれた右眼に血を求めているかのように赤い爬虫類のような縦長の瞳が窄まった。

チツチが両腕を腰に回すと山鉈程もある刃物を抜いた。

短剣と言うには、余りにも刀身は分厚く滑稽で、ナイフと称するには余りにも大きく長い刃渡りを持っている山鉈と言うには切っ先は鋭く反れ上がっていて、肉厚のある刀身を鋭利に研ぎ澄まし刃が鈍い光を放っていた。

背には、ノコ刃のような細かい刃が付けれられ、刀身には重量を抑える為か、身離れを良くする為か長い楕円の穴が一筋空けられていた。

握り手には、指を守る為のガードがあり人差し指を通す空間だけ別になっている。

ガードの形状も波状になっていた。

アウラには刀身に使われた素材に見覚えがあった。

北の神殿でチツチの封印を解いた時、全身を覆っていたドラゴンの水晶群のような鱗。

封印を戻したソルシエルが、抜け落ちていた鱗をチツチに渡していた事を覚えている。

恐らくはドラゴンの循環鱗が生み出した鱗を削り出して拵えた物だと推測できた。

何時もは無用な戦いを避け、逃げる事を選ぶチツチが戦うつもりなのだ。

チツチたちが登場した時に吹き飛ばし戦闘不能になっている傭兵は全体の約三分の一。

それでも騎士でも軍の兵士でもないチツチが循鱗の封印も解かず戦うには多過ぎる人数だ。

何時ぞや、謎の組織に捉われ助け出された時の方が、敵の人数は多かったとはいえ、組織の殆どが非戦闘員で尚且つ循鱗の封印を解いてまで逃げる事を選んだチツチが怒っている。

それも本気で……。

「囿も足止めも必要無いなら、チツチも早く乗ってえ」

アウラは叫び、チツチを促した。

「それはできない。あいつらはアウラを縛り上げた！　これが許せるか？」

「？……チツチ」

「しかも俺より縄裁きが上手いじゃないか！　俺はアウラに縛られた事はあっても、まだアウラを縛っ　、……痛っ」

からん、からん、からん　と鐘の音色が三回響き渡った。

「ふ、ふざけた事言っていないでやるなら、さっさとやっつけなさい！　あんな三流傭兵なんて！」

「言われなくても倒すさ。アウラを縛っ……泣かした奴は許さない」

「じ、じゃあ……封印解放しなくちゃね……チツチ、こっちに来てください」

「必要無い。これだけで十分だ」

チツチがナイフを腰に一時納めると向き直り、碧眼の眼光と異形の赤い眼を傭兵たちに向けた。

銃や槍を持った傭兵が一步近付こうとした時、鋭い異形の眼光に気押され押し戻された。

「行ってくれ」

チツチがスレイプニルに声を掛け促した。

スレイプニルは、前の四脚を天高く上げると滑らかに空気を滑るように駆け出し瞬きをする間に天空へと駆け上がって行った。

「何をしている！」

頭の一括で百戦錬磨の傭兵たちは士気を戻し迅速に陣を立て直し

た。

首に下げられていた短身のマスケット銃の銃口から火花が迸り煙を噴き出した。

チツチは、銃口から飛び出した弾をまるで呼吸するに等しいと言うように弾道から容易に身を外す。

相手は百戦錬磨の傭兵。

素早く隊を入れ替え銃を構えた。

敵の気配を探る事はチツチの十八番^{オハコ}。

傭兵たちの動きを読み、あつという間に間合いを詰めた。

相手の懐に飛び込んでしまえば、同仕打ちを恐れ弓や銃は使えない。

陣に近付いたチツチに向い長い槍が突き出される。

チツチの異形の右眼は難なく切っ先を見切りその柄を掴み、そのまま囲みに来た後ろの傭兵にその刃を突き立てた。

槍を突き立てられた傭兵が倒れる際、突き立てた柄をチツチが掴み、引き抜くと槍の柄を叩き折り、最初に槍を突き立てた傭兵に矛先を突き立てる。

懐に潜り込まれた傭兵たちは、それぞれが得意とする得物を抜き、チツチに切り掛る。

チツチは、それぞれの切っ先を見切り舞うように姿勢を低くすると片足を軸に、くるりと水面蹴りをお見舞いしバランスを崩した傭兵は味方の持つ得物の刃にその身を裂かれた。

チツチの双剣は腰に収められたまま、一度も振られていないのに小隊の半分程の人数が戦闘不能に陥っている。

「なんだ……何者だ！ このガキは化け物めえええ」

チツチの両腕が腰へと回りガードの付いた双剣の握り手を掴んだ。

紫電一閃。

残りの傭兵たちの間を風が吹き抜けた。

風の後には切り倒された傭兵たちが、血しぶきを上げながら次々

地面に倒れ伏した。

地面には土の色が混じった赤い血が流れ広がった。あたかも野に用意されていた赤い絨毯の敷かれたダンスホールのように土色は一面、血の赤へと変わっていった。

上空ではスレイプニルの背に乗ったアウラが絶句していた。

「あの小僧。なかなかやるもんだ。流石はドラゴンの循鱗を宿し、人のまま生きているだけの事はある」

スレイプニルの言葉の後、アウラは失っていた声を絞り出した。

「お、降ろしてください。出来ればチツチの傍に……」

アウラの脳裏にグリンベルの悪魔を自称したチツチの言葉が蘇った。

「まだ動ける傭兵は残っているぞ」

「はい……分かってます」

アウラは短く答えた。

スレイプニルが地面に降り立つとアウラは暫くチツチに近づく事が出来なかった。

チツチはまだ残りの傭兵と対峙している。

止めたい。チツチを止めたい。こんなの嫌だ。

アウラは、小さな胸の膨らみの前に両手を組んで紫水晶の瞳を潤ませた。

無数の場鉄の音が近付いて来る音が聞こえて来る。

その音の主が、この場に着いた頃、傭兵たちは全滅していた。

「これは驚いたね。彼がこれ程までとは……循鱗の恩恵が大きいのかも知れないが、恐れ入る」

アウラの耳に、聞き覚えのある声が聞こえた。

「ランディー様……」

「アウラ！ 大丈夫？ ……これ……チツチがやったの？」
ランディーの背後から、戦いの後を眼にしたロザリアは自分の眼を疑った。

名も無き赤の騎士団隊長を務める高名な騎士の兄なら可能かも知れない、クラスメイトで山羊飼いの少年が、傭兵の小隊を全滅させられるなどは、露程も考えられなかった。

「……………」

アウラは、血溜まりを気にした風もなくチツチの方に向かった。

紫水晶に瞳は、返り血を浴び真っ赤に染まったチツチの姿を映し出している。

チツチが何時ものように微笑をアウラに向けた。

アウラは何も言わずチツチを抱き締めた。

紫水晶の瞳から溢れた涙は、頬を伝い途切れる事無く血溜まりへと落ちていった。

T o B e C o n t i n u e d

〜 鐘が鳴る 〜 第一部 第八話（後書き）

最後まで読んで下さいまして誠にありがとうございます。 > (—
—) <

次回をお楽しみに！

く 鐘が鳴る く 第一部 第九話

第九話

アウラの願い。アウラの不安

アウラは血溜まりの中、返り血を浴び真つ赤に染まったチツチを抱き締め、細い肩を小刻みに揺らした。

「何泣いたんだ？ アウラ？ よかつたな無事で」

チツチがアウラを抱き締めようとして、自分の腕が真つ赤な血で汚れている事に気付き、そのまま腕を下した。

「えっ……えぐっ……」

「アウラ……汚れるから……服」

チツチがそう言うのと縋りつき泣いているアウラをやさしく引き離し、ランディーたちのいる方へと歩き出した。

「これが本当の……チツチの姿なの？ これじゃ本当にグリンベルの悪魔みたいじゃないですか……お願いチツチ……グリンベルの悪魔に戻らないで……でないと私」

アウラはすれ違い様に問い掛けた。

「……分からない」

チツチは、そう言い残しスレイプニルに跨ると、その場を後にした。

アウラは、ただ血溜まりの野に立ち尽していた。

馬鉄が大地を掻く音をテンポ良く響かせるランディーたち騎士団の後ろに、ころころと小気味良い鐘の音を響かせ、日焼けと土で茶色く汚れた羊たちの群れが小走りに主が乗る馬を追い掛けている。

「どうしたのかね？ アウラ、元気がないようだね。……シユベルクの屋敷の事は聞いている。いや、屋敷だけでなくシユベルク領に

とつて大変な事と言えるのかな？」

「……」

「お兄様！ 今は」

ロザリアがアウラの顔色を窺がった後、兄を諫めた。

「……シユベルクの人たちの暮らしが今のままなら、変わるのには領主様だけの事です。しかし、シユベルクの街を離れる事になると義理父のお身体が心配です……」

アウラは俯いたまま弱々しい声で答えた。

「うむ……では、シユベルクの名を欲し爵位を手に入れる為に、シユベルクを買い取ろうとしている者がいると噂では聞いているが……本当だったのかね？」

「はい。或いは私を娶りシユベルク家の婿養子になるつもりかと……」

「しかし、きみはシユベルクの家名を名乗ってないはずでは？ それにきみのお父上は既に爵位を譲り隠居の身でもある……」

「はい。私は確かにシユベルクの名を名乗ってはいません。お父様がこうなる事を恐れて私を政略や権力争いから守る為にアウラ・ヴァージニティーのままを名乗るようにとおっしゃって……」

「……で、シユベルクの領地を、いか程で買収しようというのだね？」

「シユベルクは小さな領地です。イリオン金貨で三千万枚、一番信用の高い銀貨、ラナ・ラウル銀貨にして約二億二千八百万枚に当ります……でも、何故？ 北に位置する田舎の小さなシユベルク領を？」

「これは私の推論に過ぎないのだがね。そう遠くない先で起きうるだろう、極北の魔物たちを迎え討つ為の拠点に成りうる土地だからさ……或いは隣国との戦に備え、王都を移すかも知れない土地だからね。何れにせよシユベルク領は後に王国が言値で買い取る事になるだろうからな。値が跳ね上がるのさ」

ランディーは言葉を続けた。

「きみも知るようにあの辺りの地形は近くに山脈を背負っている。

極北の魔物は北の山脈を越えてこなければならぬ。群れが延びる山間で迎え討つ事が出来るし畏も仕掛け易く覚られ難い。隣国に攻め込まれても山脈を背負って戦うのは、こちらにとって有利に働く敵を背負って戦わなくても済むのだからね」

「そんな……でも、南の隣国ラナ・ラウルは同盟国じゃ……」

「同盟など結ぶに難く、破るに容易い。何処の国も野の魔物の活発化と異形の魔物による被害が増えてきている。この期に乗じて国力のバランスが崩れれば、虎視眈々と国土を広げる算段をしている者もいるものさ」

「……こんな時だからこそその同盟じゃないのですか！ 私が描いた魔法陣が生み出している魔物は私がかします……してみせます。シユベルクは私の第二の故郷です。そんな事の為に利用させません。絶対に……二度も故郷を失いたくないです」

アウラは下を向くと強く握った拳を見詰めた。

「それできみは過酷な羊追いのレースに出ようとしているのかね？」
ランディーが、ふと何かに気付いてアウラに言葉をぶつけた。

「はい……優勝者には、かなりの額の賞金と連れ戻った羊の毛や家畜の肉を高値で引き取って貰えます。それにその飼い主の家畜は一年を通じて高値で取引して貰えますから」

「賞金と言っても優勝者で金貨三百枚程度、その後の取引が高値で取引されても多寡が知れている。きみは、まだ学生で沢山の家畜を飼う事が出来ない」

「優勝賞金で牧場を開きます。もちろん私には使命がありますから、それを優先にして人を雇います」

「それでも全然足りない。一年で金貨四百から五百枚稼げたとして、賞金だけでは十万倍、一年後良く稼げたとしても六万倍……金を揃えるには時間が掛り過ぎる。その間に買い取られるし、恐らく戦は始まるかもしれない」

「わ、分ってはいます……でも、ただ何もせず見ている事なんてで

きません」

アウラは小さな拳を硬く握り、薄い唇を噛みしめた。薄っすら血が滲む程に……。

「それにしても山羊飼いの彼は凄まじいね。ただか半年だ。半年私が稽古をつけただけであれ程の戦闘能力を発揮するとは正直思わなかったよ。あれも循環鱗の恩恵か……味方に付けて正解だったよ」

「ラ、ランディー様が……チツチを……」

アウラは呆けた顔でランディーの顔を見上げた。

「ああ、私が鍛えた。元々辺境を旅してきた彼だからね。ある程度、戦い方は知っていたが、所詮は素人だったがね。私も彼の本気を初めて見たよ。何と言ってもあの性格だから、本気を見せた事など一度もなかったんだがね」

「……」

「これもきみが描いた魔法陣に近づく為だよ。アウラ、グリンベルの街があつた地域は今、生み出される異形の魔物の巢になっていてね、まともに近づく事など出来ないんだよ。正面から向かうなんて言うのは自殺行為さ。誰も成し得なかつた魔法陣を組上げられた陣は、それを描いたきみにしかその魔法陣を解除する事は出来ないだろう。陣を解除する間、魔物たちからきみを守る為さ」

「でも！ チツチは……あんなじゃなかつた……」

血溜まりで微笑むチツチがアウラの脳裏に蘇った。

「アウラ？ これはね、彼を守る為でもあるんだよ。彼の体内の循環鱗は彼の身体を蝕む……違うかね？」

「そ、それは……」

アウラは顔を、くにやりと崩し複雑な表情をした。

「隠さなくてもいい。彼の封印を解いたせいで彼の右眼はあのようになつてしまった。あれはグリンベルを焼いたドラゴンに蝕まれた証拠だろ？ 彼は力が馴染んで来ていると言っているがね」

「……………」

「彼自身を強くする事で、循鱗の封印を解かず敵と戦える戦闘技術と循鱗を自分の意志で封じ込め、使いこなせるだけの精神的な強さを彼に持って貰う為なんだよ」

「でも、チツチは何時も戦う事を避けて来たのです。それなのに…いくらチツチの身を安じての事だとしても、戦の駒にするなんて酷い……………」

アウラは精一杯の抗議の言葉を述べた。

「そうかも知れないが、魔法陣を解除する際、彼にはきみを守って貰わねばならん。無論、私も守るがね」

「私を守る？」

「そうだ。今のきみでは暴走しグリンベルの悪魔と化した彼には勝てない。禁術書の解読もまだ半ば、きみもグリンベルの悪魔を討てるだけの魔術を習得していない。違うかね」

「ち、違います……………」

アウラは小さな拳を握り締め俯いた。

「きみがグリンベルの悪魔を討てる魔術を習得するまでか、或は他の誰かでもいい。その時まで彼と循鱗に暴走されては困るのだよ。こちらとしてはね」

「そして、禁術書の全てが解き明かされた暁にはきみが、それを出来る者に彼を討って貰う事になる」

「えっ……………」

アウラはランディーの言葉に言葉を失った。

「彼のように強力な力を持つ人間がいては人の世が困るんでね」

ランディーは薄い笑みをアウラに向けた。

「ウオン」

羊たちを追い前を歩いていたプラムの吠える声を聞いたアウラの瞳に学園の塔が映り込んだ。

チツチは学園に戻っているのだろうか、とアウラの胸に不安が過った。

T
O
B
E
C
O
N
T
I
N
U
E
D

〜 鐘が鳴る 〜 第一部 第九話（後書き）

最後まで読んで下さいまして誠にありがとうございます。 > (—
—) <

次回をお楽しみに！

く 鐘が鳴る く 第一部 第十話

第十話 く 鐘が鳴る く 終幕。

何時ものように

中央校舎の天辺に赤い屋根を四本の石の柱が支えている。

四本の柱の間からは鐘の音が抜け良く響き渡る。

大きな鐘が全部で七つあるのだが、その内で動いているのは何故か四つ。

四つの鐘が、時を知らせる音を響かせると生徒たちは身を正し授業の始まりを待っていた。

アウラは何時もの特等席に座っている。

ただ窓側の席を一つ空けて……。

一般科目ではないこの授業に、チツチが来るとは限らない。

受ける授業は、生徒の自由で自主性に任せる校風がある。

自分の目的や夢などの目標に合わせ効率的に授業を受けられるように考えられている。

アウラの隣に空けられている席には誰も座っていない。

ロッカが来てアウラの隣の座ろうとしたが、アウラはやんわり断った。

アウラが誰も座らせなかったのだ

「ねえ、アウラ？ 元気がないね……昨日の事気になってるの？」

アウラの前に座っていたロザリアが振り向き声を掛けた

「……」

「まあ、あんな事があったのだから、気にはなるわよね……チツチ、今日は授業に来ないと思うわよ。今朝早くにお兄様と騎士隊がチツ

チを連れて王宮に向かったらしいから……」

「えっ！ それほんと…… チツチ大丈夫かなあ……」

アウラは一瞬驚いたが、顔を伏せたままぴくりとも動かず、僅かに唇を震わせ小声で呟いた。

「まあ、チツチはただの学生だし軍人でも軍属でも、ましてや騎士でもないんだから、あれはやり過ぎたわね。荒くれ者の盗賊まがいの傭兵と言っても戦時になれば一応、王国の準戦闘員なんだし、全滅させたのは不味かったわね。しかも皆殺しだった事が、なお悪い…… 後はお兄様がどう計らってお偉いさんを丸め込むかだわ…… 頑張れお兄様！」

アウラは机に突っ伏したまま視線を窓の外に向け、ぼんやりと外に見える王宮に繋がる街道を眺めていた。

昼食も終わり午後の専門科目を受ける為、アウラは北塔に向かって歩いていく。

遠くから良く知った名前を呼びながら、女子生徒たちの黄色い声が近付いて来る。

「きやあ　！　チツチ！　きやあ　、きやあ　」

アウラは、その名前を聞いて俯いていた顔を上げ声のする方向に眼をやった。

「チツチ！」

「あつ！　アウラ…… 羊追いの訓練か？」

「ええ、これから専攻科目の授業です…… そんな事より大丈夫だったのですか？」

アウラは不安を浮かべた顔をして俯いた。

「何が？」

「王宮…… 呼び出されたって聞いて……、やっぱり昨日の事で…… 何か刑罰でも受けたんじゃない……」

両手の指を組み胸の辺りで硬く握ってチツチを見詰めた紫水晶の瞳を何時もより潤ませる。

「うん。別に何も無かったけど……こんなのを貰った……どうしたんだ？ アウラ」

アウラは、チツチが差し出した物には眼もくれず、そのまま俯き消え入るような声で言った。

「……昨日はごめんね……、傷つけちゃったかなあ……私……」

「何の事だ？ 分らないなあ」

そう言うのとチツチは、何時ものように左眼の碧眼を弓のように反らし微笑みを浮かべた。

「わ、私……怖かったです。血で真っ赤に染まっているチツチを見て……血溜まりの中で微笑んでいるチツチを見て怖くて、悲しくて苦しくて胸が張り裂けそうになって……切なくて……チツチが本当にグリンベルの悪魔なんじゃないかって思えて……私、私……」

アウラの眦から熱い液体が頬を流れた。

「アウラは泣き虫だなあ、何時も泣いてる」

「……それはチツチが悪いんですよ。私他の人の前では涙見せないです。グリンベルの街を焼かれたあの日に涙は枯れてしまったのだと思う程、泣いた事ないんですから……あの日、チツチと出逢うまで」

アウラは、そう言って両手の平で涙を拭い取るり、やわらかく微笑んで見せた。

その時、チツチが持っている勲章に気付く、先程チツチが差し出した物だった。

「それ……騎士勲章じゃ……」

「そうなの？ こんな物貰っても、食べれないから腹の足しにならないのになあ」

アウラはこの時、まだこの騎士勲章が他の物とは違い特別な意味を持つ事を知らなかった……。

勿論チツチもこの時、何も理解はしていなかったが、自分がこれから、ある世界での名前と呼ばれる事になる事を知る由もなかつ

た。

「俺が近付くとなんで女の子たちは、みんな逃げちゃうのかなあ？ やつぱり山羊飼いはやつかまれ疎ませるのかなあ？」

「そ、そんな事無いですよ？ チツチ、モテモテだし……でもね？ 女の子が逃げるのはね」

アウラは微笑みを鬼の形相へとゆっくり変えていった。

「チツチがいやらしい事ばかりしているからです！ それに何時も何時も忌々しい……元へ、如何わしい夢を見てるみたいない目覚め方をするからです！」

アウラは、小さな両手を腰にかわいく当て頬がはち切れる程膨らませチツチをジトつとした眼で睨んだ。

「何時ものアウラだ」

チツチが何時もの微笑みを浮かべた。

「……ごめんね……怖がったりして……本当にごめんなさい」
チツチがアウラの頭に手を置きやさしく撫でた。

「気にしなくていい。……だけど、あれも俺だ……たぶん」

「うん、チツチの全てを分かって上げられないかも知れないけど……でも、チツチはチツチだよ」

「ああ、俺は俺以外の何者にもならない。俺自身に巣くうグリーンベルの悪魔にも負けない」

「ありがとう……チツチ」

アウラは小声で呟いた後、やわらかな微笑みをチツチに向けて精一杯の声を出して言った。

「さあ！ 今日授業を抜けて軽く学園の外まで羊を追ってレースに向けて足腰の鍛錬に行きますか、レースは長距離を歩きますからね」

「そう、がんばれ、アウラ」

「なに言ってるんですかあ、チツチも……一緒に行くのですよ？」

アウラはチツチの碧眼を覗き込んだ。

紫の閃光が真っ直ぐチツチの碧眼を直視している。

「昨日、みたいな事が起こると大変ですからね……誰かさんのかわい兔が他の野獣に狩られちゃいますよ?」

アウラは、爪先立ちでチツチの耳元に小ぶりの唇を近付けおどけた口調で耳元で囁いた。

「俺は……朝早くからランディーの奴に起こされて寝むいんだけど……出来たら昼寝」

「だめです! 何時も寝てばかりじゃないですか! 何時起きているのです? チツチは」

「今 痛い……」

チツチの言葉を遮り、からん と鐘の音色がチツチの頭上で響いた。

「酷いなあ、まだ何も言っていないのに……」

「じゃあ、続きを言ってみてください」

アウラは杖を天に向け高く掲げた。

「眠ってない時は起きている」

からん、からん と小気味良い鐘の音が二重に響き音の共鳴が響いた。

無論、チツチの頭上で。

「早く行きますよ。ナイト様……ふむ? 私の生まれたグリーンベルの辺りではナイトの事をシュヴァリエって言っていました。古い王国の領土だった時の呼び名。遠い昔、領土を奪い合い戦の末にイリオン王国と統合し領土となりましたが、今でも地方では当時の言葉を話すから、私はシュヴァリエって呼んであげる」

「どっちも、騎士には違いない。呼び方変えても一緒じゃないのかなあ」

「違うの! ……私の気分が」

「そっなの?」

チツチは幼少の時から様々な場所を旅して来ている。

旅の道中で知ったのか、シュヴァリエと言う騎士の呼称を知っているようだ。

イリオン王国で騎士はナイトと呼ばれている。では、と思いアウラは考えシュヴァリエと呼んでみた。それは、ただ女の子である自分の持つ独占欲の一部なのかも知れない。

自分だけの特別な呼び名。

きっと、イリオン王国では他の女の子が舞踏会で男の子を誘う時、こう言うだろう。

もう少し大人になってレディと呼ばれるに相應しい年頃の女性や淑女ともなれば、『私と一曲踊って頂けませんこと、ジエントルマ』
ン

でも、学園のうら若き女子生徒たちの殆どが騎士に憧れている。自分も騎士のランディーは憧れの異性に違いない。

男子生徒も、また騎士に憧れる者が多くいる。

だから、学園で執り行われる舞踏会では、憧れを含み皆こう言うだろう。

『私と一曲踊って頂けませんか、私の騎士様』と……。
チツチは私だけの騎士……。

だから、この辺りでは使われないシュヴァリエと呼ぼう、とアウラは思い微笑んだ。

「アウラには頼もしいナイトがいるじゃないかあ」

「……プラムのこと？」

「あっ！」

奴が来る。獲物を逃がさない鋭い眼光を放ち奴が来る。

「ウォン」

「プラム？」

プラムがアウラの横を風のように通り過ぎチツチに向った。

「やっぱり……こうなるのかぁ」

チツチの尻に長い毛並みの尻尾が生えた。

「お前、そろそろ俺の尻から卒業した方がいいと思うぞぉ」

チツチがプラムの首根っこを掴み上げた。

「さあ、行きますよ。私のシュヴァリエ」

アウラはそう言うと、プラムと戯れるチツチを見て、くすくす笑いながら飼育舎に向い歩き出した。

からんちゅ 魔術師の鐘 第一章 第一部 End。

第二部 へ 英雄に誓いを へ 続く。

く 鐘が鳴る く 第一部 第十話（後書き）

最後まで読んで下さいまして誠にありがとうございます。 > |
| <

からんちゆ 魔術師の鐘 く 遥かなる想い く 第一部 く
鐘が鳴る く 終幕。

次回より 第二部 く 英雄に誓を く が始まります。

お楽しみに！

く 英雄に誓を く 第二部 第一話 (前書き)

第一章 第二部 く 英雄に誓を く 始まるよく！

放牧レースを前に訓練に励むアウラと相棒プラム。

ある日、訓練にチツチを誘うアウラ、だがチツチに断られてしまう。
牧羊犬プラムと訓練に出掛けるアウラに……。

く 英雄に誓を く 第二部 第一話

第一章 第二部 く 英雄に誓いを く

遠い昔から、続けられている放牧レースがある。
どれだけ失わず、どれだけ多く、如何に早く回れるか……。
過酷なレースはシンプルである。

第一話

アウラの不安。アウラの憂鬱

初夏に入り、いよいよ今回シユベルクが開催地で盛大に行われる
収穫祭がまじかに迫って来ていた。

収穫祭で一番の模様し物である放牧レースは、何時も熱狂的な程
の盛り上がりを見せる。

羊毛刈り、麦の収穫前に感謝と豊作を願い祭りが行なわれる。

収穫祭が始まると様々な模様し物が始まるが、中でも放牧レース
は人気が高い。

放牧レースと言っても幾つかの競技に分かれていて、その中でも
決められた拠点の街を周る放牧レースは過酷だ。

妨害黙認という事がレースの過酷さを更に増させる事になる。

放牧レースが始まるまで、他にも競技が行われる。

決められた何種類かの木の棒が同じ規格で揃えられ、木の棒を投
げて自分の牧畜犬に拾わせてくるという競技があるが、投げ方や距
離、キャッチした時の高さなどで得点を稼ぐ競技や決められたコー
スで家畜を追い柵の中まで誘導する早さを競うものなどがある。

アウラが出場するレースはシユベルクをの街を出て広野を巡り、
予め決められたポイントとなる街や村を周り、通過証明書に判を貰

いながら次々と家畜を追いながら周る証明書を集める放牧レースだ。周る街の順番は出場者の自由。

連れて行く家畜別の優勝者と総合優勝者が決められる。賞金や副賞も出るのである。

連れて行く家畜によって一頭当たりの持つ得点が違い、数は定められた数頭を連れて放牧をす事になる。

期間は五日間、周る場所は十カ所。

どれだけ早く、どれだけ多く、どれだけ失わずに周れるかを競う。初日の朝日が見えた時がスタートの合図。

アウラは勿論、羊、山羊飼いなど中型家畜部門に出場するのだが、頭数制限は二十頭或いは、五十頭どちらか選べ一頭当たりどちらも無事にゴールした家畜に対して加点は二点。

レース中、連れていく家畜を一割失うと失格となる失った数の減点は二十頭の場合一頭につき五点、五十頭の場合二十点となっている。

最初から多く連れてレースに出て連れ帰れば有利だが、一頭に対する減点も多くレース展開次第では、逆に大きいなリスクとなってしまう、それでも五十頭連れて行く方が絶対的に有利なのは違くない。

一カ所回る毎に二十点の加点があり、また早く戻った加点として五日目は加点無、四日目二十点、三日目四十点、二日目六十点、一日目八十点の加点となるが、また全てを回り切った場合に置いてのみ二百点の加点が加算される。

尚、今まで十カ所全てを回り切った者長いレースの歴史でも、未だおらずこれまで最高で二十頭で七カ所、五十頭で五ヶ所が最高の記録として残っている。

それだけ過酷なサバイバルレースという事だ。

それぞれの家畜の群れを統制する技量とレースにおける作戦、そして、ライバルたちの行動、攻略方法の把握と読みが勝負の大きく関わってくるレースになる。

アウラは、レースに備え十日程前にシュベルクの街に帰郷していた。

レースが始まるまで、あと十日程、準備期間には十分な程時間はある。

学園にいる時も時間ができれば長距離を歩く為の体力、自給力や足腰の鍛錬。羊たちを追う為の訓練と愛犬プラムと息を合わせ、十分な程こなしてきた。

この一週間は身体に蓄積された疲労を取りながら、体力維持程度の軽い運動と最も重要なレース展開の作戦とレース当日に配布されるコース図に対処する為の予想とイメージトレーニングをしておく事と、どんなコースを選び作戦によって変わる野宿の旅具と食糧、水がどれだけ必要で無駄なく持って移動し何処で補給するのかを想定できる限り考える事に重点を置く事にした。

シュベルク辺りの地形は、アウラの頭の中に入っている。

しかし、アウラには妨害工作の予想に関しては見当の付けようがない。

この手の事は、あの少年に聞こう、とアウラは学園を出る前、少年の姿を探したが見当たらなかった。

ロザリアやロツカ、エリシャなど幾人かにチツチはどうしたのかと尋ねても一同は皆口を揃えて『知らない、最近見てない、何処かで昼寝でもしてるんじゃないか』と返ってくるばかりだった。

人が少し旅に……旅じゃないけど、暫く出掛けるというのに見送りにもこないのか、と腹を立った。

出発の日は言っておいたはずなのに……。何よ！　と思い俯いた時、何故だか嫌な不安が胸を過ぎた。

チツチが持っていた騎士勲章。

あれは賊と化し村や商隊などを襲うようにまで成り下がった傭兵

の一団を討伐した、と解釈され叙勲されたものなのか、それともランディーが上手く事の成り行きを説明し、それが国王を納得させ勲までさせたのか、私も一応小さな街だけど、それに家名も名乗ってはいないけど、これでも一応れっきとした貴族の養女であるからして、まがいなりにも領地のお姫様なのだから、その危機を救ったとなれば名誉を授けられてもおかしくはない……しかし、地位も低く一代限りとはいえ騎士勲章を叙勲されたという事は貴族の称号を得たという事になる。

いくら何でも地方領主の養女を賊から守り盜賊に成り下がった傭兵の一団を退治たからと言っくらいで叙勲される程、騎士勲章は簡単に叙勲されるものではない。

戦時に、その功績著しく平時にも王国の為に危険な任務をこなし勇ましい功績を積み重ね初めて叙勲されるものだ。

今回の件に関して何らかの功を認められたとしても名誉勲章を頂ける程度だろう。

アウラはチツチの差し出していた騎士勲章をよく思い出してみる。ランディーの幾つもの輝かしい功績を称えられた勲章と名も無き赤の騎士団の騎士勲章が胸の辺りに縫い付けられていてマントの表地がビロードの肩口には銀の刺繍糸で騎士を表す紋様が縫われている。

他の騎士勲章とは明らかに違う、名も無き赤の騎士団の騎士勲章。チツチが見せてくれた騎士勲章も、他の騎士たちが付けている物とは明らかに違っていた事に今更ながら気付き、はっとする。

ランディー率いる騎士団の任務が頭を過る。

アウラの不安は頂点へと昇り詰めていった。

翌朝。

まだ窓の外は薄らと暗く陽が昇る前だ。

「ふゆ　　、むにゆむにゆ……」

アウラの紫水晶の瞳の周りには黒い隈が出来ている。

レースに向けての準備や作戦を考え、ましてやチツチの事が気に掛り余り眠る事が出来なかった。

アウラは部屋着のローブを肩に掛けると洗面場に向かった。部屋に帰り着替えを済ませたアウラが、部屋の扉を開けると二人の人物が立っていた。

一人は黒いモーニングに身を包んだ男性。

一人はフリルエプロンの付いた黒いメイド服を着ている。

「おはようございます。お譲様」

年の頃が七十にも届きそうな白髪交じりの男性と二十代半ばの女性が廊下の壁際に立ち深々と腰を折りアウラに一礼した。

「あつ！ おはようございます。ベルモンドさん、トリシャさん」

「御食事の御用意は準備出来ております」

フランクの執事のベルモンドが大きな食堂の扉を開いた。

「……おはようございます。お譲様」

扉が開くなり紺色のメイド服に身を包んだメイドたちが一斉に声を上げた。

「あ……あのう……その呼び方はよして貰えませんか？」

アウラは俯き小さな声でそう言い言葉を続けた。

「私はフランク様との良縁で運良く養女にして頂いた田舎の街娘でえ、シユベルクの家名も名乗っていませんし……そ、そのお譲様と呼ぶのはお止め下さいませんか？」

「滅相もございません。そのような事、当のフランク様がお聞きになられたら、さぞ、悲しむでしょう。アウラお譲様が例え、本当のお譲様で在られても御養女で在られても、フランク様の娘様という事に何の違いありません。それに我々も皆、アウラお譲様をお慕い申し上げます」

ベルモンドの言葉に皆が頷くと長テーブルの傍に控えていた一人のメイドがアウラを席へとエスコートした。

学園の料理もなかなかの物ではあるが貴族の食卓は別物だ。

長テーブルには朝から豪華な料理が大きなテーブルに所狭しと並んでいる。

アウラは、もうすっかり慣れてはいるが、初めて見た時は何かとんでもない祭り事が始まるのではないかと腰を抜かした。

フランクが遅れて食堂に入ると食事が始まった。

長いテーブルで食事をするのは、フランクとアウラの二人だけで部屋の各所に従者が控えている。

他の者は食事の進み具合を壁際で見ながら控え、様子を窺いながら料理を切り分けたり皿を取り換えたりしている。

「アウラ。今日も羊を追いに出るのかね」

普段の行いから好好爺が滲み出ているフランクが、アウラの服装を見て尋ねた。

「はい、お、お父様」

アウラはこの呼び方に余り慣れないでいた。もう、実の父と同じくらいの年月を過ごしているのにそう呼ぶ事に違和感と恥ずかしさがあった。

「アウラ……無理をする事はない。シュベルクを買い取ろうと画策する者たちから、この屋敷を守ろうと過酷で危険なレースに出ようとしているのではないのかね？」

「……」

アウラは食事の手を止め下を向いた。

「確かに優勝者には多額の賞金が出る、それでも何とかなるものでもない。それに奴らは己の名誉を金で買ったのではないと世間に思わせる為、アウラを嫁にと言って来ておる」

好好爺の老伯爵の顔に珍しく怒りの表情が浮かび上がっていた。

老伯爵が表情を戻すとアウラに問い掛けた。

「アウラには、このような事もあるうかと思いい私は今までお前にシュベルクの家名を名乗らせなかった。政略、権力争いに巻き込ませたくなかったのだ。許しておくれ、アウラや」

「そ、そんな！ お父様！ 私の方こそ頼る所もない天涯孤独にな

ってしまった私を引き取ってくださり立派に育てて頂いた事に感謝しております。何を持ってしてもこの御恩に報いる方法はございません」

「それでレースかね？ 私はお前の身が心配でならん」

「大丈夫です。元より羊飼いの家系に生まれ幼い頃から羊たちと伴に育ちました。この屋敷に来てからも羊の世話をさせて頂いてますから、必ず勝ってみせます」

アウラは紫水晶の瞳を輝かせ拳を硬く握った。

「孤児の私に良くしてくださった、この屋敷の皆さんへのせめてもの恩返しです……確かに焼け石に水かもしれない……その時は……私、その者たちの策略だとしても……その者の嫁となっても、この屋敷とシュベルクの名は必ず守ってみせます」

「アウラや無理はせんでもいい。お前も年頃の娘だ想い人くらいいるだろう。屋敷の事は良いからその者と駆け落ちでも好きなようにするが良い」

フランクが豪快に笑うと周りにいた者たちも頷き、くすくすと笑い出した。

「そ、そんな……す、好き……想い人いません……」

アウラは熟した林檍のように頬を染め俯いた。

「それは残念な事だ。うん？ 喜ばしい事かな？ レースの訓練も良いが気を付けて行くのだぞ。私は、これから収穫祭に参加する街と村を回らねばならん。収穫祭の初日には帰る」

「はい。お気を付けて行ってらっしゃいませ。お義理父様」

アウラは老侯爵に近付くと頬の辺りに口付けをした。

T o B e C o n t i n u e d

く 英雄に誓を く 第二部 第一話 (後書き)

最後まで読んで下さいますと誠にありがとうございます。 > (

—) <

次の更新もお楽しみに！

く 英雄に誓を く 第二部 第二話

第二話

フランム
英雄

雲一つない抜けるような青空が広がっている。

アウラは、レースを想定し二十頭の羊をフラングが所有する畜舎から追い出し街の外に出ようとした時、畜舎の管理を任されている使用人に声を掛けられた。

「お譲様！ これから放牧ですかい？」

唇を吊り上げ、にんまりと笑みを浮かべた二十代後半の男は唇を薄ら開いていている。

その間から白い歯が見え、並んだ歯の間に一か所歯が抜け落ちて黒く見えた。

思わずアウラは、くすくす笑ってしまった。

「お譲様は、この辺りの羊飼いと違い柵の外にも羊を追って放牧をなされますから、普段柵の中で羊を追っている者たちが、大自然を相手にしておられるお譲様に敵うとは思いやせん。このレースお譲様の優勝で間違いねえですよ。はあはあはあ」

歯抜かの男が大口を開けた笑うたびに白い歯が抜けて無くなっている所がよく見える。

「うふふ……そ、そんな事……ありませんよ。くっくっく……他の地域からも腕に覚えがある放牧者たちがレースに参加してきますし、柵や飼料になる牧草を撒く土地を確保出来ない山間の街や小さな村などは、まだ牧草地のある所まで放牧に出ていますよ」

「それでも、レースの賭け率はお譲様が上位に入っているらしいですよ。若い娘がレースに挑むつても話題になっていましたから。ああ！ 勿論、私はお譲様に投資しやすよ。実力も良く存じ

ておりますから、はい」

二十代後半の男がうれしそうに笑った。

アウラは自分が女だから馬鹿にされているのか、と一瞬思ったが必死にレースに挑む者たちの裏では、やはり巨額の金が動くのかと思うと知ってはいたものの、少し悲しい気持ちになり薄く唇を噛んだ。

たかだか、収穫祭の催し物でこんなにも賑わうのはこの為である。わざわざ遠方から、この辺りの収穫祭を見に来る客の多くは、それを楽しみにやって来るのだ。

街としては、賭けレース目当ての金持ちや一般の見物客が増えれば物は自然に売れ、特産物の羊毛や織物は土産物として飛ぶように売れるのである。

「プラム！」

アウラはプラムを呼ぶと、節くれた杖に括られた鐘を小気味良く響かせた。

「ウォン」

プラムが主の意思を汲み取り、羊の群れを追い立てた。

ころころ小気味の良い音を響かせながら、刈り取りを待つもこもこの埃を吸い込んで茶色く染まっている羊の群れが動き出した。

「お譲様！ レースはもう始まっているも同じです。十二分にお気を付けて行ってらっしゃいませ」

「ありがとう」

アウラが笑みで答えると齒の抜けた男は、にんまりと笑みを浮かべると急ぎ家畜舎の裏へと走っていった。

屋敷内の家畜舎を出て街の裏通りから、羊の群れを郊外まで誘導して行くと表通りとは随分違う街並みが、アウラの瞳に映し出されている。

人通りの多い街の本通りを羊の群れを連れて通る訳にはいかない。アウラには見慣れた風景。

本通りのたたずまいとは違う光景が広がる裏通りに並ぶ、石造りの家は何階にも増築され壁の色もまちまちで建てられている家の間隔も狭く入り組んでいる。

裏通りは荷馬車が、やっと通れる程の幅はあるが、通りを外れると入り組んだ細い路地が蜘蛛の巣のように無数に入り組んでいてシユベルクに住む者でも全ての路地を把握しきっている者は少ない。

アウラも、また裏通りから外れ路地に入った事など無い。裏通りに入れば、悲惨な事が沢山起きる。

上の階から水や物が落ちてくるなんて事は日常茶飯事、酷い時には壺に溜められた汚物などが頭上から降ってくる事もある。

運悪く通り合わせれば、全身糞尿塗れになってしまう。

風向きによつては、表街道まで酷い臭いが漂ってくる。

アウラは何事もなく無事、裏街道を抜け街の外へとでた。

アウラはポケットから小瓶を取り出し、小瓶の中に詰められた液体を一滴手首に落とすともう片方の手首で摩るように伸ばし首筋、耳の後ろに馴染ませた。

やわらかな甘い香りが、ふんわりと広がりアウラの全身を香水の香りが包み込んだ。

ただでさえ羊を追っていると獣臭さが着衣に移ってしまう。

アウラも年頃の女の子なのだから、臭いは当然気になるのである。何時ぞやの沐浴も全身に臭いが染み付く前に少しでも落としておきたかったからであった。

お年頃の女の子でもあるアウラは、嗜みを終えると郊外の街道沿いを羊の群れを追って歩いた。

今日は広野の所々に生える自然栄えの牧草を羊たちに食^はませて帰るだけの予定だ。

二時間弱の距離を歩き、レースに備える事にしていた。

牧草の生える場所に向うには、街の街道に出て直ぐに大きな通りを横切らなければならず、旅商人たちが行き交う荷馬車が少なくなつた時を見計らい馬車を止めて貰って羊の群れが渡り切るまで待つ

て貰うのだ。

この日もアウラは、荷馬車の往来が少なくなったのを見計らい節くれた杖を天に掲げ、『渡してください』と向かってくる荷馬車に意思を示した。

両側から来ていた馬車の御者が手綱を引き、馬の脚を落として速度を緩めてくれた。

もう一方から来ている馬車も馬の脚を落としに掛っていた。

アウラはそれを確認すると、ぺこりと小さい頭を下げお礼の意を示し街道を渡ろうとした。

羊たちがゆつくりと動き始め街道を渡り始め、プラムが群れを整えながら羊たちを急かすように吠えた。

アウラが連れて来ている羊は二十頭、それ程街道を渡り切るのに時間は掛らなかった。

アウラは、馬車を止めてくれた御者に礼の言葉を述べようと馬車の方に向かって歩き出し馬車に近付いた。

その時。

荷馬車の列の後方から二頭立ての荷馬を引いたまま荒れ狂った馬が、止まっている荷馬にぶつかりながらアウラの方に向かってきた。
「あぶない！」

誰かの声が聞こえる。

馬車を止めてくれていた御者の誰かの声だろうとアウラが思った時、視界に荒れ狂い向かってくる馬が視界に飛び込んだ。

アウラの脳裏に『逃げられない、跳ね飛ばされる』と言う言葉が脳裏を過ぎった。

そう思った次の瞬間、背中に肉の塊のような物が激しく当たった。弾き飛ばされたアウラを荒れ狂った馬体がアウラを身体をかすめ、

更にアウラの華奢を馬体が弾き飛ばした。
意識が朦朧としている。

あれ？ 私……何が起こったの？

周りが慌ただしい。

「だいじょうぶか！」

「息はしてる。大丈夫そうだ」

「酷い外傷は無いようだが、医者まで運んだ方がいい」

「ゆつくりだ、ゆつくり！ 頭を強く打ちつけているかも知れない」

「ああ、慎重に動かそう。誰か！ 良い板バネを着けている馬車を引いていないか」

「俺の馬車を使ってくれ、新調したばかりの荷馬だ。姫様だって乗せられる」

「ばか！ 冗談は後にして早く牽いて来い。皆は道を開ける！」

あれ？ 身体が動かない…… プラム…… は？ プラム何処？

意識が混沌としてよく状況が呑み込めないが、嫌な予感が広がっていく。

「犬の方はどうだ」

「息はあるが……主人を庇って……」

よく聞こえないよ……。

アウラの意識は、そこで途切れた。

アウラは大きな窓に引かれたレースのカーテンを通り抜けた、やわらかい日差しで眼を覚ました。

「くうっ！」

朦朧とする意識の中で身体を起こそうとして、全身に鋭い痛みが走り身を動かす事も出来なかった。

「お讓様が眼を覚まされた。良かった……本当によかった」

「お讓様……お讓様」

白髪交じりのベルモンドの声とトリシヤが涙声出して見ていた。

「わ……わたしは？」

アウラは弱々しい声を絞り出した。

「屋敷に知らせてくれた者の話では、お讓様は暴走した荷馬に撥ねられて全身を強打されたと聞いております。医者の話では軽い全身の打撲と擦り傷が数か所。幸い骨には異常がないとおっしゃっていました」

アウラの声聞いたベルモンドが、ほっと胸を撫で下ろしている。

「大変な目に遭われましたね、お讓様。しかし、お美しいお顔に怪我一つ打撲一つ無かった事は不幸中の幸いでした。女にとって顔の傷はどんな怪我より気になる傷になりますものね」

トリシヤが真っ赤に眼を腫れ上がらせ、布団の中のアウラの手をやさしく握り締めた。

「プラ……ムは？」

無言のままトリシヤとベルモンドが、眼を伏せ静かに首を振った。身体を動かす事が出来ないアウラは、虚ろな紫水晶の瞳を彷徨わせ見渡せるだけの範囲を見渡しプラムの姿を探した。

「プラム！」

何時もなら名前を呼ぶだけで膝元に来てやわらかい肉球をぶにぶに押し付け顔中を舐め回すプラムが現れない。

「プ……ラム？ プラ ムううう……」

弱々しい声で繰り返しプラムを呼ぶが、一向に姿を見せない鳴き声も聞こえて来ない。

アウラは声が小さ過ぎてプラムに聞こえてないのだと思い、傷む胸に一杯の息を吸い込み、プラムを呼んだ。

「プラムううう」

痛みを堪え絞り出した声にならない声で、アウラはプラムを呼び続けた。

トリシャがアウラの手を強く握り締め眼を伏せるベルモンドも瞼を落とし俯きアウラに告げた。

「お譲様…… プラムは最愛の主人であらせられる、お譲様をその命に代えて守ったのです」

「プラムは？」

ベルモンドの言葉が信じられないのか、信じたくないのかアウラは暫くの間、プラムの名前を呼び続けた。

「お譲様、プラムはお譲様と共に屋敷に運ばれ、お譲様が手当てを受けている間、生きておりました。お譲様の手当てが終わり、お譲様の無事を悟ったのかその後、直ぐに息を引き取ったのです……」

「プ、ラム……」

ベルモンドの言葉を聞きながら、アウラの紫水晶の瞳が潤み出し涙が今にも零れそうに浮かび上がった。

アウラの事をよく知る二人が静かに部屋を後にした。

二人が部屋の扉と締める際、一礼をして扉を閉めると割れんばかりの叫び声と咽び泣く声が扉の外まで響き渡った。

T o B e C o n t i n u e d

く 英雄に誓を く 第二部 第二話 (後書き)

最後まで読んで下さいますと誠にありがとうございました。 > (

—) <

次の更新もお楽しみに！

く 英雄に誓を く 第二部 第三話

第三話

悪友よ しんゆう

幾晩か時間は流れ過ぎ、また夜が明ける頃、泣き疲れやっと眠りに入ったのか、アウラの部屋は静まり返っていた。

静かになった部屋の扉を薄く開いて、トリシャがアウラの様子を窺がった。

「泣き疲れて寝付かれたようです」

一晩中、部屋の外でベルモンドとトリシャを中心に他の者たちと交代で時間を置きながら、静かに薄く扉を開きアウラの様子を窺がい見守っていた。

「少し落ち着かれたようですな」

ベルモンドが、そう言うのと傍にいた者たち全員が胸を撫で下ろした。

従者たちは皆、ほっと一息吐き一安心といったところに、屋敷に一人庭師が飛び込んで来た。

「……しい！」「……」

その場の全員が人差し指を口元に立て息を吐く。

「どうした？ そんなに慌てて旦那様がお帰りになられたのか？」

ベルモンドが声を潜めて庭師に尋ねた。

「いえ、旦那様の下には直ぐに早馬を向かわせましたが、何分旦那様の御乗車なされている馬車では急いでも御到着は陽が落ちる頃になるかと思われませんが……」

庭師がベルモンドの問いに答え終わっても、その場から立ち去る様子が見られなかった。

立ち去る様子のない庭師にベルモンドが問うた。

「何だ。まだ何あるのか？ お譲様は今し方、憔悴なされて眠られたばかりだ。静かにな」

「……それがアウラ様の知り合いだと名乗る者が現われまして……アウラ様もあのような御様子ですし、お伺いを立てに参ったのですが、やはり追い返しませうか？」

ベルモンドが小窓から外の様子を窺がった。

小窓から見える屋敷の門に白銀にブルーマールが朝日を浴び、ほのかに青を浮かび上げらせ、右眼に包帯を乱暴に捲いた見覚えのある少年の姿があった。

「客間にお通ししなさい。彼はお譲様を何度か救って下さった方だそう。騎士ランディー様の御知人でもある。くれぐれも無礼の無いようにな」

ベルモンドの言葉を受けた庭師は屋敷の外へ出ていった。

その後引き続き、二人の従者が後を追って玄関前へと向かった。

庭師に代わり別の使いの者がチツチを出迎えに門まで向った。

「生憎、屋敷の主フランクは留守にしておりますが、代わりに留守を預かっているベルモンドからお通しするようにと託って参りました。客室まで御案内いたします。どうぞ屋敷の方へ」

三十半ばの従者がチツチを客室に案内しようと半身になり軽く腰を折ると片腕を屋敷の方へ差し出した。

「家畜舎でいい。プラムに会わせてくれないかなあ」

チツチは、左眼の碧眼を弓のように反らし従者に微笑みを向ける。

「はあ……今、何と仰られました？」

三十半ばの従者は白銀の少年を驚いた様子で見ている。

「プラムに別れを言いたい。プラムの所まで案内してくれ」

「いえ、客室に案内するように承っておりますので……」

「俺は英雄あいくゆうに別れを言いに来た。うん。アウラは疲れてるだろうから、起きたら合わせてくれればいい。だからプラムの眠る場所を教えてくださいかなあ」

「はあ……あちらで……」

「もう、言わなくていい。プラムの居場所は分かったから、俺一人で行って来るから案内はいいや。じゃあ！」

チツチは、微笑みを浮かべたまま従者がプラムの亡骸を安置した場所を教えようとすると一足先に嗅ぎつけ、さっさと家畜舎の方へ歩き出した。

従者は呼び止めようとして言葉をのみ込み、首を捻りながら客室で待っているベルモンドの所に向かった。

家畜舎の前。

プラムは、アウラが編んで作ったと思われる大きな編み籠に干し草をふかふかに敷いたプラムの寝床に静かに寝かされていた。

初夏という事もあり遺体は痛み易い。屋敷の誰かが頼んだのか獣医者か、或いは屋敷の家畜舎の者かが、腐り易い血と内臓を綺麗に取り出し中を洗浄した後、へこんだ腹に綿を詰めたようで生前のプラムを思わせる姿のまま、静かに横たわっていた。

生前の姿と言ってもアウラを守った時に負った勲章の数々が痛々しかった。

チツチはプラムが安置されている編み籠の傍に座り込んだ。

「おまえさあ……何時も何時もよく俺の尻を噛んでくれたなあ」

チツチはプラムの身体に手を触れた。

冷たい……。

プラムからの返事はない。

「俺は、まだお前を噛んだ事がないのに……何時か仕返しに尻尾噛んでやるうと思ってたんだぞお？」

返事がない。ただの屍ねのようだ。

「プラム……何時ものように尻に喰いついてこいよ……なあ？ プラム」

チツチは、アウラが何時もそうするようにプラムの咽喉元を撫でた。

「お前は、アウラのナイトなんだろ？ お前の他に誰がアウラと羊の群れを守るんだ？ 誰が孤独な放牧の伴をするんだ？」

チツチは冷たく固くなったプラムの身体を、そっと持ち上げ抱き締めた。

「プラム？ 軽いな……俺の尻にぶら下がってた時は、尻がもげるかと思う程、重かったのに……なあ？ プラム？ 俺はアウラの仇かも知れないんだ……そんな俺に……アウラを守る資格があるのかなあ。答えてくれよ……なあ、プラム」

返事が返って来る事はない。

チツチの左眼の碧眼が、その色に相応しい湖の水面のように熱い液体を蓄えていた。

「いくら話し掛けてもその犬は鳴きませんよ」

チツチの背後から青年の声が聞こえた。

「アウラお譲様も怪我をされておられます。お譲様の御様子は、もう窺がわれたのですか？」

チツチは無言のまま首を振った。

「この様子ではレースを諦めるしかありませんね。お譲様もあの御身体では一週間後のレースまでには歩く事がやっと、と言ったところでしょう。それに羊飼いにとって家族であり友であり掛け替えのないパートナーである牧羊犬を亡くされたとあっては、もうレースどころではないでしょう。精神的にも」

「誰だか知らないけどさあ。アウラがレースに出場するのが相当、邪魔なように聞こえるんだがだなあ」

「いやいや、困っているのですよ。シュベルクの街を買い取ろうと

する輩がいましたね。その阻止にお譲様は過酷なレースに出場するお覚悟を決められたのです。私もフランク様の所にお世話になっております使用人ですから、シユベルクが誰に買われようと関係ないとは言いい切れない人間なのですよ。お譲様は、あのお若さでシユベルクでも一・二を争う程の羊飼いですからね。大きな痛手ですよ」

チツチは、そつとプラムの亡骸を編み籠に戻し咽喉元をやさしく撫でた。

「レースに出て買収は阻止できるのか？」

「それは無理だと思います。総合優勝の賞金と言つてもたかだかイリオン金貨で三百枚、買収額は三千万枚。どう考えても焼け石に水にですよ」

チツチは眉間に皺を寄せ難しい顔をした。

「そうだなあ。それじゃ無理だよなあ」

「さあ、ベルモンド様が客室でお待ちです。こちらにどうぞ」

後でちゃんと弔つてやるからなあ。

「じゃあなあ……英雄とせよ」

チツチはプラムの亡骸を、ちらつと横目で見ると青年の背中を追った。

青年に誘導されたチツチが、正面玄関の所まで来ると大きく分厚い表玄関の扉が平開かれた。

「さあ、どうぞ、お入りください」

青年がチツチを促した。

「お待ちしておりました。随分と遅おございましたな」

ベルモンドが、そう言つと手元の呼び鈴を振った。

金銀の装飾が施され細かい細工の彫り物の施された光沢のある大きく厚い扉が開くと、給仕の者がワゴンにお茶と茶菓子を乗せて静かに入つて来る。

「お久しぶりでございます。で、この度はどのような御用件で参られたのですかな？」

「うん。ちょっと頼まれた用があつてシユベルクの近くに来てたから、アウラとプラムに会いに来た……それと、まあいろいろラウンディーの奴から聞いていて様子を見に寄つただけ……アウラの様子は？」

「お嬢様は、お疲れの御様子で御自分の部屋でお休みになっておられますが、良く眠れないのか毛布に包り時折、眼を覚まされては泣いておられます」

「そりやそうだろ。プラムはあいつにとって家族も同然だからなあ」
チツチは、出された茶と菓子を一気に頬張ると立派な革製のソファから腰を上げた。

「どちらへ？」

「アウラに会いに行くに決まっている」

「お嬢様は、酷く憔悴され御休みになつておられます。誰一人部屋には入れず、食事も咽喉を通してません。今はそつとしておいて差し上げる方がよろしいかと」

チツチはベルモンドの言葉を気にした風もなく歩き出し扉の前で立ち止まった。

「不運な事故だと思ふかい？ ベルモンドさんは」

「ええ、話を聞いている限りでは不幸な事故としか……」

「俺はそう思わない。気になる事もあるから……それと風呂借りていい？」

「は、はあ……どうぞ、ご自由に」

「最近、ゆっくり水浴びも出来なかつたからなあ。血の匂いが染み付いているとアウラが悲しむからなあ」

そう言つてチツチは、やわらかい微笑みを浮かべ客室を後にした。

く 英雄に誓を く 第二部 第三話 (後書き)

最後まで読んで下さいますと誠にありがとうございました。 > (

—) <

次の更新もお楽しみに！

く 英雄に誓を く 第二部 第四話

第四話

またね。 プラム

天蓋付きの白いシートが敷かれたふかふかのベッドの上で毛布に包り声を殺して噤り泣いているアウラの耳に部屋のノッカーを叩く音が聞こえた。

アウラは、涙で泣き腫らした眼とくちやくちやになっている顔を手の平と甲で擦り程々に体を整え返事を返した。

「ごめんなさい……食事、喉に通らなくて……折角作ってくれたのに……本当にごめんなさい……今は一人でいたいのに」

アウラの弱々しい鈴の音の消えいるような声が聞こえなかったのか、再び扉が叩かれた。

「……ごめんなさい。そつとしておいてほしいの……もう少しだけアウラは、そう言って毛布の中に潜り込み、痛む身体を丸めた。

「じゃあ、ここに置いてあるパン粥、食ってもいいかあ」

聞き覚えのある間の抜けた声が扉の向こう側からアウラの耳に届いた。

チツチ?

「うん。さっき茶菓子をたらふく食べたから、これはプラムに持っていてやるわ」

「プラム! プラムは無事なの? よかった……」

プラムは、死んだと聞いていた。

しかし、アウラは心の何処かで認めていなかったプラムが自分を置いて逝く訳はないと……。

アウラは、全身に走る重たい焼けるような痛みを堪え、ベッドから這い出るとベッドの脇に立て掛けられていた何時も持っている節くれた杖で身体を支えながら、痛む身体を引きずるように扉へと歩き出した。

動く度に全身に襲い掛る痛みには耐えながら、ゆっくりと進んだ。

からん からん 、軽い音色を響かせた鐘の音とアウラが床に倒れる音と積み上げた物が崩れたような音が部屋の外まで響いた。

アウラが床に倒れた時、バキツとほぼ同時に扉はバキツと破壊音を立てに開いた。

「チツチ……」

アウラは突然の事に紫水晶の瞳を点にした。

「あつ！ 今回は鍵をこつそり開錠してないぞ」

碧眼の瞳が弓のよう反らし微笑みを浮かべている。

「……鍵ごと……壊したの？」

チツチが顎に右手をあてがい首を傾け何かを考えている仕草を取っている。

「う ん。なんて言うかなあ、鍵、壊れてたみたいだなあ」

チツチの言葉にアウラは暫し茫然とした。

「そんなはずないじゃないですか！」

「なんだ。思ってたより元気そうじゃないか。アウラ」

アウラの隣部屋に控えていた侍女が、アウラの部屋から聞こえた破壊音を聞き付け駆け着けた。

「扉が……、誰かあ お讓様が」

チツチが茫然と立ち尽くしている。

侍女の声を聞き付けた他の者たちが続々と集まり始めた。

「お讓様！ 御無事で。こいつを取り押さえる！」

男の使用人がそう叫ぶと、箒を持っていた侍女はそれを構え、ある者は敷石を磨くモップを構え、またある者は木製のバケツを構え

てチツチを取り囲んだ。

長槍や剣を腕一杯に抱えて別の使用人が他の者たちに持って来た得物を手渡した。

「くそ！ 一度ならず二度までもお譲様を狙うとは許せん。それ程、お譲様がレースに出場する事が困るのか！」

集まった内の誰かが、そう言つて周りの使用人を煽りけし掛けた。

声色を変えてはいるが、聞き覚えのある声。

チツチは変わらず笑みを浮かべていたが、僅かに唇の両端を吊り上げた。

「待つてください。皆さん。チツチは……その方は私の学園のお友達ですわ。どうか、そのように……」

「お譲様。本当ですか？ このような弊衣破帽へいはいはつの輩、到底お嬢様のお知り合いとは思えません」

「本当です。その方は学園の友人です。ですから、そのように……」
アウラは、傍に駆け寄つてきた侍女に身体を支えられながら、苦しそうに絞り出した声でそう伝えた。

「しかし……扉が」

使用人たちは頑丈な蝶番が擦じ切れ、何かで抉じ開けられたように歪む錠前の部分を眼を丸くしながら、白銀の髪をした少年と見ていた。

少年の手には、壊れた扉の取っ手がしっかりと握られていた。

家畜塔の前に桜色の髪を麻布で乱暴に括つ纏めた女性が立っている。

年の頃は、二十代後半から三十代前半に見える……その実、ゆうに御歳六百歳を超えている。

「やれやれ、あのガキ突然、呼び出しやがったから何事かと思えば……魔法陣を張れだあ、まったく……こんな小用でわたしを呼び出

しすんじゃないさね。角笛を渡したのは失敗だったねえ」

「まあ、その言うな。ソル、小僧なりに人の感情というものが生まれて来ているのだろう。さっさと片付けて去るぞ。屋敷の者に見つかる厄介な事になる」

鋭い犬歯を避けた頬から覗かせ、くぐもった声で風狼ウォルフスが言った。

「ま、まあ、あんたがそう言うなら…… やってもいいけどねえ」

ソルシエールは顔を赤らめ、そう言うつとプラムの亡骸が横たえられた編み籠の側面に魔法陣を描き始めた。

「まあ、簡単な結界だけど、外側から接触する空気や雑菌を防ぐから、これで少しは腐食の速度も抑えられるだろうさね」

「それでは我らは消えるでしょう。小僧がこっちに向かっている」
風狼ウォルフスがよく利く鼻を、ひくつかせた。

「ああ、そうするとしようかねえ」

ソルシエールと風狼は旋毛風を残し姿を消した。

チツチが無理やり開いた扉の修復に慌ただしく、小間使いと侍女は動き回っていた。

まだ打撲の痛みで身体を上手く動かせないでいるアウラにチツチが手を差し伸べた。

アウラはその手を掴んで、よろよろと立ち上がりチツチに寄り掛った。

「ねえ、チツチ…… プラムは生きてるの？」

チツチが静かに首を振った。

「でも！ さつき粥をプラムに持って行くつて」

チツチが静かに口を開いた。

「アウラ。お前何時までプラムを一人ぼっちにしておくつもりなんだ？」

「私だつてプラムの傍に行きたいよ…… ふえ……」

紫水晶の瞳が、うるつると湿り出し形の良い小ぶりの唇からすすり泣く声が漏れ出した。

「じゃあ、行かなくちゃなあ」

「でも、ひくつ……私、満足に歩く事も出来ないんだもん」

アウラは捨てられた仔猫のような瞳でチツチを見つめた。

「車椅子でも御用意致しましょうか？」

アウラを傍で支えていた侍女が二人に尋ねた。

チツチが無言で手の平を侍女の前に突き出し拒否の意を表した。

「自分の脚で歩いて行け、アウラ。プラムが守ったお前の身体を使
って行ってやれ、プラムはお前を待っている。肩は貸してやる自分
の脚で英雄の所まで行くんだ」

チツチの碧眼は何時ものように笑っていない。

あの傭兵との一戦の時のように……。

アウラは、こくりと頷くとかわいらしい顔を苦痛で歪め痛みが奔
る身体を引きずるように前に進めた。

チツチが肩で支えてはいるが、支える腕に殆ど力を入れているよ
うには感じなかった。

何時もなら扉を開けて部屋を出ると直ぐに階段まで辿り着けると
いうのに、その距離が途方もなく遠くに感じた。

息を切らしながら、やっとの思いで階段半ばの踊り場まで辿り着
いた時、アウラは遂に床に膝を着いた。

何度も立ち上がるうとして尻もちを着いては、起き上がるうとし
てまた尻もちを着く。

アウラはチツチを潤んだ瞳で見上げた先程の捨てられた仔猫のよ
うな瞳をして。

チツチは腰を落としアウラの肩に自分の肩を掛け直しアウラを立
たせたが、アウラの瞳は変わる事無くチツチの碧眼を直視していた。
やはり、階段を降りるのはきつい。

チツチも限界だろうと当りを付け、アウラに背中を向け差し出し
た。

アウラは、周りを見渡し人影がない事を確認するとチツチの背中

を細い指で突いた。

「うん？ どうしたんだ早く乗れ、おぶってやるから」
チツチがアウラの紫水晶の瞳を見た。

アウラは軽く俯き恥ずかしそうにチツチに言った。

「抱っこ」

「まあ、いいか。そんなに違いはない……はっ！」

チツチが重要な事に気付き声を上げた。

「どうかしたの？」

「やっぱり、おぶっていく事にする」

「抱っこ」

「桃……桃二つ……背中を感じる感触……が……」

チツチが蚊の鳴く程の声で呟いた。

「何か言った？ 早く！ 抱っこ……いやあ？ なの？」

甘えた声でアウラが尋ねる。

「嫌なの？ それとも何かあるの？」

「あるけど……な、なんでもない」

そう言ってチツチはアウラを抱え上げた。

アウラは、細い腕がチツチの首にしっかりと回し肩口に小さな頭を乗せた。

チツチの腕がアウラの背中から脇へと回り、膝裏を通してアウラの身体を持ち上げた。

アウラは頬を遠慮がちに赤く染めた。

家畜舎のプラムが眠っている編み籠が置かれた場所に着くと、もう二度と動く事のないプラムの変わり果てた姿を見てアウラはチツチの胸の中で泣きじゃくった。チツチに抱かれたまま、首にしっかりと細い腕を回して縋りつくように泣きじゃくった。

「プラムう、プラムう、プラムううう」

何度も何度もプラムの名前を繰り返し繰り返し呼んでアウラは泣きじゃくった。

決してプラムの鳴き声を聞く事は出来ない事を知りながら、それでもアウラはプラムの名前を呼び続けた。

アウラが少し落ち着きを取り戻しつつある事を察して、チツチはアウラの身体を右腕一本に乗せ、プラムの眠っている編み籠を片手に持ち屋敷の裏にある陽の良く当たる小高い見晴らしの良い場所を捜し出し地面に穴を掘り始めた。

アウラは冷たくなったプラムの身体をやさしく撫でていて気付いた。

編み籠に魔法陣が描かれ弱い結界が張られている事を知った。

「魔法陣……いったい誰が？」

「ソルシエールだ。アウラがプラムの姿を見れるように俺が頼んだ。もう初夏だ。お前が回復する頃にはプラムの姿を見る事が出来ないだろ？」

「それで腐敗を防ぐために、わざわざソルシエールさんと呼んで結界魔術を……ありがと……チツチ」

アウラは紫水晶の瞳を静かに伏せた。

閉じられた瞼の間から熱い液体が止めどもなく零れ落ちた。

「本当に泣き虫だなあ、アウラは」

適度な穴を掘り終わるとチツチは掘った穴にプラムの寝床ごと掘った穴の中に沈め掘り返した土の山を穴へと戻していった。

アウラは土の中に埋もれていくプラムを名残惜しそうに見詰めていた。

チツチが掘った穴に土を被せ終わると周囲から土を集め、近くから手頃な石を据えると腰のナイフを抜いた。

『ティワズ Teiwaz・ラグズ Laguz・ライソ Raido・ベルカナ Berkana』

(英雄は眠る。魂の新たな命の旅立ちを)

盛り土にのせた石に深々とアウラから学んだ古語の文字を刻み込んだ。

二人は胸の前に拳を組み、プラムの墓に長い黙禱を捧げた。

祈りを終え屋敷に戻る際、アウラはプラムの墓に振り返った。

「またね。プラム」

アウラはチツチの腕に抱えられそう呟いた。

T o B e C o n t i n u e d

く 英雄に誓を く 第二部 第四話 (後書き)

最後まで読んで下さいますと誠にありがとうございました。 > (

—) <

次の更新もお楽しみに！

第五話

コインの裏側

磨きに磨かれた大理石の壁と床に幾何学模様の絨毯が引かれた大きな食堂の中、長テーブルが置かれている敷かれた赤いクロスの上には銀の器に盛られた豪華な料理が所狭しと並べられ、等間隔に燭台が置かれ蝋燭の淡い灯りが揺らめいている。

天井からは何本もの蝋燭が立てられた、豪華なシャンデリアが室内を昼間の室外とは違う明るさで辺りを照らし出していた。

「きみの話から察するに今度、アウラが遭った事故は何者かに狙われたと言うのかね？」

フランクは、自慢の長い顎鬚を撫でながらチツチに眼をやった。

「うん。出来れば人払いをして貰えるといいんだけど……それとアウラの部屋の前に護衛の衛士を人払いしている間だけでも付けておいてくれないかなあ」

チツチがそう言うのとフランクは、傍に控えていたベルモンドに伝えると彼は主に一礼し何やら合図を送った。

するとベルモンドを先頭に食堂にいた従者やメイドたちが速やかに退室していった。

「お前はいるんだなあ、ランディー」

「勿論だ。アウラの護衛は我々名も無き赤の騎士団が責任を持って行なっている。屋敷の周りもだ。蟻一匹たりとも入れさせはしないさ。安心したまえ」

ランディーが珍しく、やわらかな微笑みをチツチに向けた。

「というか……なんでシュベルクいるんだ？ランディー」

「フランク様と共にシュベルクに起こしになられる国王の護衛とそ

れに先だつて街の警備に駆り出されたのでね。フランク様とは、ここに来る途中偶然お会いしたのだがね。フランク様からアウラの事故の話を書いて駆けつけて来たのだよ」

「で、何故、きみはアウラが狙われたと思うのかね？」

ランデイーの笑顔は消え、眉を潜め鋭い眼差しをチツチに向けた。「まあ、ちよつと気になる事があつたから事故の事について調べてみた。じいちゃん、最近この屋敷に新しい人が入つてるようだけど、フランクが首を捻つた。

「いや、雇つていないが……きみが以前、この屋敷に滞在していたのは三日間程、全ての使用人たちの顔を覚えてはしまい。何かの勘違いじゃないかね？」

「今日、プラムに別れを告げに行った時、俺の知らない顔の青年が家畜舎にいて俺に話し掛けて来た者がいた。前に俺の山羊を預かつて貰つてたから家畜舎の人たちの顔は覚えてる。人数もそんなに多くいなくなつたし忘れてないと思うけどなあ」

「その人物の特徴は？」

「前歯が一本抜けていたかなあ」

チツチが顎に手を当てると少し俯いて答えた。

「ああ、彼は、トマだ。彼の兄が家畜舎で家畜の世話をしてくれている良く働く高青年だ。トマはシュベルクでも一・二を争う、羊毛を主に扱うバルシオ商会に雇われて屋敷の羊たちの様子をよく見に来ている。それに休みになると兄のジーンによく会いに来て屋敷の者たちは、皆彼の事をよく知っているが」

「そいつが、ちよつと引つ掛る事を言つてたんだ。シュベルクの買収の噂とアウラが放牧レースに出場する事が困るような感じに見えた」

「どついう事だね？ それは……」

普段は好好爺のフランクが珍しく声を荒げて腰掛けていた椅子を倒さんばかりの勢いで立ち上がった。

「そんなに、興奮しなくても……歳なんだから心臓に悪い。ただの

思い過ぎなら良いけど、もしかすると内通者かも知れないと思っただけだ。それにアウラに向かって来たという二頭立ての荷馬車も気になる」

「それで人払いを？」

腕組みをしたまま、静かに話を聞いていたランディーが口を開いた。

「まあ、推測だから間違っていたら、他の使用人たちにどんな誤解を招き騒ぎになるか分からない。こちらの調査にも影響が出るしなあ、壊れた荷場車見たけど、二頭立てで引くような大きさじゃなかったし荷物も思ってたより散乱した痕跡はなかった」

チッチはガラスコップの水を飲み干すと言葉を続けた。

「シユベルクの買収に噂されている額。イリオン金貨で三千万枚……個人が集められる額だと思うか？ ランディー」

「俺は安い年金を貰ってるしがない騎士さ。そんな大金想像もつかないね」

ランディーが、お手上げというように肩を竦める。

フランクが難しい顔をして暫く考えに耽っていた顔を上げた。

「集まるかも知れない……いや、それでも足りない……収穫祭の際、王国中から人が集まる。各地の大貴族に富豪、如いては隣国からもメインの放牧レースを毎年見に訪れる。お陰でシユベルクの経済は小さな街ながら裕福だが、それだけこぞって人が集まるのには訳がある……」

「成る程ね」

ランディーが頷いた。

「他の競技も叱りだが、メインの放牧レースは妨害容認の過酷なレースだ。早馬が戻り状況が伝わるだけで熱狂的に盛り上がる。その裏には」

チッチがフランクの言葉を遮った。

「賭けレース」

「その通り、危険で熱狂的な放牧レース。そのレートは破格、オッ

ズも賭け金も普通じゃない」

フランクが自慢の顎鬚を撫でた。

「で、今回シュベルクでレースの元締めをしている者は誰なんです？」

ランディーがフランクに尋ねた。

「バルシオ商会だと聞いているが」

「では、シュベルク買収を企んでいるのはバルシオ商会……だと？」

「なんとなく見えて来たなあ……何時も一番儲けるのは元締めだろ？ アウラはシュベルクでも優秀な羊飼いだ。アウラは地元に人気があるしレースに出れば、人気割れる」

「バルシオが用意した放牧者が一番人気を取りオッズが下がれば払い戻しの数は多くなるが、額は少なくて済む。万が一、道楽で富豪が大金を掛け大穴狙いの高額配当が出れば大損だからな。普通ならそれでも元締めが有利だが、動く賭け金が大き過ぎて、このレースは何が起こるか分からない。バルシオの息が掛った放牧者が何人出るかも分からない……それもピンからキリまで様々な放牧者が出場するなら、妨害容認のこのレース。好きなように展開を操れる」

ランディーがチツチの推測を引き取り言った。

「出来レースだなあ」

「それでアウラを……この老いばれが隠居する小さな街を守る為に……酷い目に……」

フランクが唇を強く噛みしめた。

「で、どうするつもりかね？ きみは……アウラがああ様子では出場出来るかどうか分からないぞ」

「アウラはレースに出るさ」

「信頼できるパートナーの牧羊犬を失ったんだ。出場しても勝てる見込みは無に等しい」

「出るさ。アウラは……プラムの代わりは俺がする……というかアウラにプラムの代わりをして貰う！ 獣の耳が付いたかチューシャと衣装着て貰うんだ！ このレース……断然萌えて来たあ」

チツチは拳を握り締め、腰の辺りで軽く振り意気込みを表した。

「意味が違ってるぞ。山羊飼い。お前がアウラに付くのは心強いが、状況は何も変わらん」

「変わるさ。縁起が悪いと忌み嫌われる俺は山羊飼いだ」

「……なるほどね。これで俺たちのする事が決まったな」
ランディーが唇の両端を吊り上げた。

屋敷の周りとアウラの部屋の前、テラス下の庭には、屋敷の衛士たちと共に隣国名でその有を轟かせる名も無き赤の騎士団が厳重な警備をしていた。

夕食前、フランクが使いの者を走らせ正式にチツチとアウラの組み合わせでレースにエントリーする手続きを済ませた。

アウラと屋敷を護衛するのは名も無き赤の騎士団。

レース前の妨害を防ぐには、これ以上ない心強い護衛隊だ。

何事もなく夜は更けて行き、朝日が空を白ませ始めた。

明け方の静けさに包まれた空気を揺らす小鳥たちが囀る歌声がベランダの大きな窓の外からやわらかい日差しと共に部屋の中に入ってくる。

アウラはやさしい日差しと小鳥たちの歌声に眼を覚ました。

昨日より幾分か身体が動く。

アウラはゆっくりと身体を起こすが、痛みは容赦なくアウラの華奢な身体を走り抜けた。

「痛っ……」

アウラは痛みに己の身体を両腕で抱え込み気付いた。

はだか？ 確かに夜着は着ていたはずなのに……。

アウラは下半身に掛っている毛布を恐る恐るゆっくり捲り上げてみた。

「はぁ」

夜着は身に着けていないものの、かろうじて下着は履いていた。アウラの世話をしてくれてくれている。トリシヤか、他の侍女が汗を拭いてくれたのかと思うが、夜着を脱がしたままにしておくはずはない。

アウラの中に疑問が湧きあがったが、痛みを耐え兼ね再び横になるとベッドの弾力に違和感を感じた。

人らしき感覚をアウラの腕が感じ取った。

女の人に触れた時とは違う硬くて、ごつごつとした感触をアウラの細くやわらかい腕に感じた。

毛布を引き剥がすと広いベッドの端にチツチが薄い寝息をた立て気持ちよさげに眠り込んでいた。

良く見るとチツチは何も着衣を身に纏っていない。

アウラは慌てて毛布を戻した。

なに？ 今のはきつと何かの見間違えよね？

アウラはもう一度毛布を捲り上げ確認してみる。

「アウラ……おはよう」

毛布の中で眠り眼を擦りながら、くぐもった声で朝の挨拶を述べるチツチが身体を起こした。

To Be Continued

く 英雄に誓を く 第二部 第五話 (後書き)

最後まで読んで下さいますと誠にありがとうございました。 > (

—) <

次の更新もお楽しみに！

く 英雄に誓を く 第二部 第六話

第六話

チツチの介抱

窓から差し込むやわらかな日差しが、幾分か部屋の空気を暖める。初夏と言っても山脈に近く標高も高めの場所にあるシュベルクの街は学園がある王都より涼しく過ごし易い。

何時の間にかベッドに潜り込んでいたチツチが、おもむろにベッドから出ると薄いレースのカーテンが遮っている大窓の方へと歩き出した。

「ちょ！……痛あ、何を！ それにチツチ……裸！ 何か着るかせめて腰に何か捲いてください！」

「俺……小さい頃から……寝る時……裸だから気にしなくていい」「わ、わわ、私が気にします」

寝ぼけながら、ふらふら歩くチツチの姿に視線をやった。アウラは熟れた林檎のように赤らんだ顔を両手で覆った。

「何処行くの？ きゃっ！ チツチ振り向かないでください……」
両手の平の隙間からチツチを覗いては指を閉じ、またちらっと覗いては顔を赤らめる。

以前、北の神殿に向かう途中の宿で雷鳴轟く雷光の中でチツチの裸を見てしまったが、あの日から約一年強の時が経ち、一目で分かる程、チツチの身体は無駄のない筋肉が盛り上がり、まだ線の細かった身体は一回り大きくなっていた。

アウラは、片手を顔から離し身体を覆っている毛布を、ちよつとだけ摘んで隠れた部分をそっと覗いて直ぐに戻した。

自分は……然程、成長が見られないような気がして首を横に振り思い直す。

私だつて成長している……はず！……だもん！きつと、と思
い込んでいるとチツチの聲が飛び込んできた。

「窓を開けて部屋に風を入れる……」

「暑いのか？」

「うん……寝苦しいから、ぐっすり眠れない」

相変わらず寝ぼけた声でチツチが答えた。

「もう朝だよ？ チツチ……？ それより何時どうやって部屋に忍
び込んだの？ 屋敷にはランディー様の騎士団さんたちが警備にあ
たつて下さっている中を……」

アウラは時折、指の間からチツチを覗き見ながら聞いてみた。

チツチが大窓を適度に開き固定するとアウラの方に振り返り答え
た。

「俺、あいつらから半年以上逃げ回ったんだぞお？ 警備の隙が出
来易い頃合いを見計らつてこつそり、ひっそり忍び込むなんて事、
俺にしてみれば容易い事かなあ」

チツチが碧眼の左眼を一杯に反らしながら、腰に両手を置き胸を
反らして、アウラに微笑み掛けた。

無論、全裸。即ち生まれたままの時より立派に成長した姿で。

アウラはチツチの姿を見て慌てて毛布を頭から被った。

「きゃっ！ 急に振り向かないで、て言ってるのにチツチのばかあ

「！」

「お嬢様の部屋から悲鳴が聞こえたぞ！ 何者かに侵入されたのか」
アウラの悲鳴を聞いて部屋の外が俄かにざわめき出した。そのざ
わめきを瞬時に聞き付けた優秀な名も無き赤の騎士団たちが得物を
構え部屋の周囲へと集まり出した。

扉の両脇で警備していた騎士が声を上げると悲鳴を聞いた騎士に
よつて直ぐに数回部屋の扉が叩かれた。

アウラは直ぐに返事を返さなかった。
全裸のチツチが部屋の中にいるからだ。

アウラは、毛布の中からチツチに向けて手招きをする。チツチはそれを見てベッドの方に歩み寄った。

「どうしたのかなあ？　なんか外が騒がしいみたいだ」

呑気な事を飄々と口走っているチツチにアウラは言った。

「私が悲鳴を上げちゃったから警備の人たちが騒いでいます」

「そうなの？」

チツチがと寝ぼけた事を言っていると、再び扉が叩かれ騎士が集まった使用人たちが、いつそうざわめき、慌しく部屋のノッカーを叩き出した。

「お譲様！　どうなされたのですか？」

次に扉の取っ手を乱暴に回す音が聞こえ、トリシヤの慌てた声が聞こえてくる。

「私、お部屋の予備の鍵を取って来ます」

その声を追うようにテラスの下からも騎士たちの声が聞こえた。

「窓が開いてるぞ！　誰か縄梯子を持って来い」

そうこうしている内に鍵を持って来たのか、鍵穴に鍵を入れ回している金属が擦れ合うような音を扉が立て出した。

「チツチ！　こっちに！　早く」

アウラはチツチの手を掴むとベッドに引き込み、毛布を被せた。

「じっとしてて」

紙一重の差で扉が開き、トリシヤを始め騎士と他の使用人が部屋の中に飛び込んだ。

ややあって、テラスにも騎士が登りつき部屋の様子を慎重に窺がっている。

アウラは胸の辺りを毛布で隠し上体を起こして微笑んで見せた。

「すいません……怖い夢を見て……自分の悲鳴で眼を覚ましたら外が大騒ぎになってしまいましたので、驚いてしまい悲鳴を上げて、おろおろしてしまっただのです」

アウラがそう言つたとその場の全員が、ほっと溜息を吐き胸を撫で下ろした。

「しかし、窓が開いておりますが」

目敏い騎士が抱いている違和感を尋ねた。

「眼を覚ましましたら、少し寝苦しかったものですから空気の入れ替えを……」

アウラは俯いて恥ずかしそうに言葉を続けた。

「寝汗を掻きましたので夜着を着替えようとしたら……騒ぎになつてしまつて……その……えっと……」

恥ずかしがるアウラの姿にトリシヤが気づき周りの男たちを睨みつけた。

「うん！ 幸い何もないようだし……男どもはさっさと出てく！ さあさあ、出てつた出てつた」

部屋に飛び込んで来た騎士、テラスに登りついた騎士、それと男の使用人はトリシヤに捲し立てられ、そそくさと部屋から出ていった。

「お譲様。御召し替えをなさるなら呼び鈴を鳴らしてき出されば、直ぐに参じて手伝いますものを……理由はともあれ、お譲様は貴族のお方です。下僕を従える貴族の方は、皆自分で御召し替えをなさいません。お譲様はそれを嫌がり、嫌いますのでそこまでは言いませんが、お身体の事もありますから、このような時くらいは手伝わせてくださいませ」

トリシヤが心配そうにアウラを見詰めた。

「ごめんなさい……トリシヤ。ありがとう、でも随分痛みもやわらいで来ていますから、着替えくらいは一人で大丈夫ですよ。本当にありがとう」

アウラは微笑みでトリシヤに感謝の意を伝えた。

トリシヤはアウラに一礼をして部屋を出て行き扉を静かに閉めた。

静けさの戻つた部屋にチツチが開けた大窓から心地良い風が吹き

込んで来る。

「はあ、……もう出て来てもいいですよ」

アウラは、かわいらしい溜息を形の良い薄い小ぶりの唇から漏らした。

「痛あ」

次いでかわいらしい顔を歪めると無理をしていた身体に痛みが走り、そのままベッドに倒れ込むと細い両腕で華奢な身体を抱き締め、痛みに耐えた。

「傷、痛むのか？」

チツチが毛布の中から、心配そうに顔を覗かせアウラに尋ねた。

「少しだけ……。チツチ、ありがと、心配してくれているのですね」

「じゃあ、俺が治してやる。アウラを傷付いて苦しむ姿は見たくない。早く元気なアウラに戻って欲しいんだ」

「チツチが？……でもどうやって？ チツチは医者でもないし、治癒の魔術も使えないのですよ？」

アウラは苦笑を浮かべチツチに返したが、痛みからか嫌な汗が噴き出させて痛みに耐えていると身体に、ぞくつとする感覚を覚えた。

「ひゃう！ くすぐりたい！ くすぐりたいですってばあ……チツチ？ 聞いている？」

苦痛に歪めたアウラの顔が驚きの顔に変わった。

チツチがアウラの身体に浮かんだ打撲の鬱血で黒ずんでいる患部をペロペロ舐めている。

「ちよ！ チツチ何を……あつ、やん……そんな事……こ、これって介抱なの？」

チツチが毛布の中に潜り込み打撲で鬱血の跡が残っている所に舌を這わせた。

「あつ、ん……チツ……チ、やあだ、くすぐつ……た、あつ……くすぐつたいてえばあ や、めて？ ね……あつ！ だめっ、そこ、ちがう……だめですってばあ……」

アウラは左手でチツチの頭を押さえると右手を唇の辺りに持って

いき、薄い唇に細い指を宛がい、薄く開いた唇から漏れ出す声を必至で押し殺した。

「昔、俺が怪我や病気で熱にうなされた時、必ず母さんがこうして介抱してくれたんだ。早ければ一日で治った事もあるんだぞお」

毛布の中から、くぐもつたチツチの声が聞こえる。

「でもそれは……あん、チツチの回復力が、早いだけですつてばあ……チツチは人間ですけど……純鱗の恩恵なのですよ……それにチツチは人間なので……あん、やつつ！ 他の動物の介抱じゃなくて……も、くすぐりたいばあ……チツチ？ お願ひ止めて……あつ！ でないと私……もう……、らめえ……ああつ！ くすぐりたいよおチツチ……、らめえ！ きゃあつ！ ……こ、これ以上されたら……私……私、ヘンになつちやうよお、チツチい」

アウラは、必死に唇から漏れだす甘い吐息を声を抑えた。

部屋の外で控えているだろう、騎士や侍女たちに聞こえれば、今度こそ大騒ぎになるに違いない。

チツチが毛布から出るとアウラに微笑み掛けた。

「何が？ どう少しは楽になった？ アウラ」

「はあはあはあ……チ……ツチの……はあはあ、ばかあ」

「うん？ アウラ顔、真つ赤だぞ？ 熱でもあるのか？」

「ちがう……チツチのせいだよ？」

「おかしいなあ？ 母さんによくやって貰つてたけど良く効いたのになあ？ ……じゃあ、もう一回やり直すかあ？」

「だ、だめえ！」

アウラは必死に声を抑えながらチツチを制止した。

チツチは人間に育てられたのではない。彼の育ての親はドラゴンだ。

プラムも怪我をすると傷口を舐めていたし他の動物も生まれたばかりの子供を舐めている事をアウラは思い出した。

「もう！ チツチは人間なだからね！」

アウラは、赤く上気した頬を膨らませチツチを睨んだ。

「嫌だったか？ 俺はこの方法しか介抱の仕方を良く知らないから

……」

「そ……その、別に、嫌とかそう言う訳じゃないですけど……」

「じゃあ！ 今夜もしてやる。絶対早く治るから、絶対！」

「だからね？ チツチ？ そうじゃなくてね？ 分かるよね？」

「やっぱり、嫌なんだ。俺は傷付いたアウラを見ていられない。アウラの怪我を早く治してやりたくて、母さんが俺にしてくれたように介抱を……」

しょんぼり俯き肩を落としているチツチを見てアウラは思わず抱き締めた。

「ありがとね。チツチ……うれしいですよ」

アウラは暫くチツチを抱き締めていた。

To Be Continued

く 英雄に誓を く 第二部 第六話 (後書き)

最後まで読んで下さいますと誠にありがとうございました。 > (

—) <

次回の更新もお楽しみに！

く 英雄に誓を く 第二部 第七話

第七話

チツチ、レース出場表明

アウラの一件以来、何事もなく時は流れ収穫祭を目前にして、シユベルクの宿は何処も祭りを見物に来た人でいっぱいになっている。近隣の街や小さな村の旅籠も人で埋まり、教会も収穫祭に訪れた人々を受け入れ聖堂や孤児院など屋根のある所は勿論の事、広場も提供し簡易天幕が到る所に張られていた。

街の街道沿いや何も無い広野にも天幕が張られ、いよいよ始まる収穫祭の熱気に帯び出した街は一気に活気を上げていた。

今日は収穫祭の前々日、いよいよ明日からは前夜祭が始まる。

二日程、しつとりと雨が降ったり止んだり、ぐずついた天気が続いたが、本日は抜けるような青空が広がる青天に恵まれた。

「アウラ？ 大丈夫なのかあ」

陽の光を浴び白銀にブルーマールの映える少年が節くれた何時もの杖を支えに歩いてくる桃色髪の少女に声を掛けた。

「うん。大分いいですよ。痛みもそんなにないですし、もしかしたらチツチの看病が効いたのかも知れませんか」

「怪我したら、またしてやるからなあ」

「遠慮しときます」

アウラは、顔を赤らめながらも微笑みを浮かべて、やんわりと断った。

ゆるりと流れる風が広野の牧草を揺らした。

その風の中を桃色の髪を時折、大きく持ち上げ遊んでいる。

アウラは乱れそうになる髪を時折、手で押さえ落ち着かせた。

チツチは屋敷の裏にある小高い陽の良く当たる場所にある盛り土の上に置かれた石の傍に寝そべると空を見上げている。

アウラは、その石の前にしゃがむと静かに瑞々しい紫水晶の瞳を瞼の奥に納めると胸の辺りで両手の平を組んだ。

「おはよ。プラム。ごめんね、なかなか来れなくて」

アウラはその後、祈りの言葉をプラムに捧げた。

「kano・of・raido。eihwaz・and・algi
z・to・raido・teiwaz。raido・of・wun
jo・gebo」

(旅の始めに守護と星の導きを。旅人に喜び満ちる旅の贈り物を) 暫くの黙祷の後、チツチの傍にアウラは一方向に脚を揃えて座った。

「レース出れるか?」

チツチが短な言葉でアウラに尋ねた。

「うん! 出るよ」

アウラは短く答えると言葉を続けた。

「今回のレースは私にとって、出れるか出れないかじゃないの。勝つか負けるかなの」

強い意志の籠った声でアウラは言った。

「そうか」

「……任せて! プラムの分も頑張って優勝して見せるから、それも総合優勝しちゃうんだから…… プラムの為にも」

そう言つとアウラは瞼に手をやり涙を拭い微笑んで見せた。

「チツチ…… 応援してくださいね」

「アウラ。…… 俺も出るから」

「えっ!? 今なんて言ったの?」

突然のチツチの言葉にアウラが声を上げた。

「レース、俺も出場する。エントリーも済ませてある」

「…… 全くレースに興味なさそうだったのに急にどうしたのです? もしかして…… プラムの事があったから?」

「それもあるけど、違うかなあ？ ある画策を妨害するのが面白そうだからかなあ」
「ある画策？ シュベルクの事情を知って？」
「まあ、そう言うところかなあ」
「じゃあ……チツチは味方？ それとも……ライバルになるのかな？ 別々にエントリーしたのなら」
「俺は何時もアウラの味方だ！ 例の件は別としてだけど」
チツチの言葉に喜びと切なさ、寂しさを感じアウラの胸中に複雑な思いが巡った。

例の件。

それは互いが仇同士であるかも知れないと言う事。

もしかしたら、何れ命の遣り取りをするかも知れない運命の悪戯。

アウラは俯きチツチに尋ねた。

「でも、このレースでは味方なんだよね？ チツチがプラムの代わりをしてくれるの？」

「だから……俺は何時もアウラの味方だと言っただけ。それに俺はプラムの代わりに出るんじゃない。俺自身がレースの参加者だ」

チツチは何時もと変わらない様子で空を見上げている。

「レース……勝てるのかなあ……、私一人で……プラムがないのに……」

アウラは、拭ったばかりの涙が再び潤み出しているの事を感じた。

「二人で勝つんだ」

「それって、どっちが勝つてもシュベルクの件には余り影響ないって事？ それくらい……私にだって分かりますよ……分かるけど……」

がっくりと肩を落としてアウラは下を向いた。

「エントリー……、アウラの名前を取り下げ、俺の名前で出して来て貰った。山羊飼いとしてレースに出る」

「えっ！ 私のエントリー外しちゃったの？ それじゃ私、レース出れないじゃないですか！」

「言ったる？ 二人で勝つんだって」

「それどう言う……！ 分かった私を牧畜犬や馬の代わりに私を補助として登録したのね」

「そう言う事だ。はい！ これ、プレゼント」

碧眼の瞳をこれでもかと言う程、反らしたチツチが麦袋の半分くらいの大きさの茶色い布袋をアウラに手渡した。

「……？ 何、この布袋……お見舞いの代わりにプレゼントくれるの？」

突然のプレゼントに戸惑いながらもアウラは嬉しいと思った。

チツチからの初めての贈り物だ。

アウラは布袋を大事そうに胸元に抱え込んだ。

「ありがと……チツチ」

やわらかい感触と硬い感触を布袋の中に感じ取れる。洋服か何かだろうとアウラは思った。

「開けていい？」

満面の笑みを浮かべてアウラが尋ねた。

やわらかい感触と硬い感触から肩の部分の布地を型で整えた見栄えのするドレスか何かかと予想した。

「恥ずかしいから、部屋で一人で開けてくれ、開ければ分かる」

「うれしい……大切にするね」

アウラは幼い頃に初めて、母に買って貰った人形のように大事そうに茶色の布袋を抱き締めた。

「よし！ 頑張るぞ！ レース絶対勝とうね。チツチ」

アウラは立ち上がり、チツチがずっと見ている空を見上げた。

「ねえ、チツチ？ 風を読んでのの？」

チツチが軽く頷いた。

「天気……いいね」

雲一つ無い、遠い青い空を見上げてアウラが言った。

「いい眺めだなあ」

「いい眺めですね」

アウラは相槌を打った。

「莓」

「イチゴ？」

不思議そうな顔をしてアウラはチツチを見下ろした。

チツチを見下ろして、はたと気付く。

やわらかい風に淡い桃色のワンピースの裾が時折、風邪に煽られ大きく持ち上げられている。

アウラの顔は急激に赤みを帯びた。

「チ、チツチ！ 見ましたね！」

「見たんじゃない。見えたんだぞあ」

「プラム！」

アウラは怒りながら、無意識にプラムの名を呼んだ。

もう、その名を呼んでもチツチの尻に尻尾は生えなかった。

急激に悲しみがアウラの胸を襲い苦しくて切なくて寂しかった。

チツチも尻の痛み代わりに胸の痛みと寂しさを感じていた。

「このレース絶対勝ってシュベルクの買収を阻止する……ここには英雄が眠っているからなあ」

チツチが強い口調で決意を述べた。

「……正直、シュベルクの買収までは阻止できないと思う……」

アウラはプラムの墓の方を見て呟いた。

「ごめんね……でも絶対勝つからね」

アウラも強い口調で意志を表した。

「あっ！ 莓」

「もう！ チツチ！」

「大丈夫だ。レースもシュベルクの街も……プラムの墓もみんな守る。そして、アウラもだ」

強く鋭い視線を放っている時のチツチの姿は、かつこいい。

アウラの控え目な胸が、ばくんと心臓が飛び出すかと思う程、大きく跳ねた。

一瞬、強い風が小高い丘を駆け抜けた。

「きゃっ！」

不意を衝いて吹いた突風が、いつそう大きくスカートの裾が捲つて去っていった。

アウラは慌てて暴れる裾を抑え込んだ。

「苺パ 痛い、痛い」

からん からん からん

数回の鐘の音がチツチの顔を襲った。

「痛いって！」

「こら！ チツチ！」

こんなに何度も見られる事になるなら、もうちょっと大人っぽい下着を着けてくれば良かった、とアウラは思った。

To Be Continued

く 英雄に誓を く 第二部 第七話 (後書き)

最後まで読んで下さいますと誠にありがとうございました。 > (

—) <

次回の更新もお楽しみに！

く 英雄に誓を く 第二部 第八話

第八話

チツチの贈り物

夜中だと言うのに何やら外の様子が騒がしい。外で起こっている騒ぎでアウラは眼を覚ました。と言っても前夜祭で賑わう外の様子が無く、直ぐその扉の向こうから聞こえてくる騒がしいトリシヤと騎士の声だ。

「今日という今日は、絶対にアウラお譲様の寝室には忍び込ませません！」

石造りの屋敷に反響するトリシヤの怒鳴り声が聞こえてくる。

「まったく、毎日変更している警備の交代時間を何処からか嗅ぎ付けやがって！ いったい何処から情報仕入れているんだ。いくらなんでも毎夜、毎夜侵入を許すと思うか！ 赤の騎士団をなめるなよ！」

騎士の怒鳴り声の後、チツチの悪態が聞こえて来る。

「何時も侵入されてたくせに」

「何おおお！ 小僧が生意気な……、今直ぐその首刎ねてやるううう！」

「やれるもんならやればいい。できればの話だけどなあ」

「今なら雑作もないのだぞ？ 小僧自分の姿を状況を良く確かめてみるんだな」

縄に縛られた自分の姿を見てチツチが愕然と首をうな垂れた。

「ううう……、ごめん。悪かったから…… 縄解いてくれないかなあ」

へこたれた様子でチツチが悲願の訴えをしている。

「もっお！ チツチさん？ あなたは確かにお譲様の御学友かも知

れません。しかしですよ？　ここ数日毎晩のようにお譲様の寝室に忍び込んで、いったいどう言うおつもりですか？　レディの寝室に忍び込むだけでも無礼極まり無いと言うのに！　お譲様は貴族でしかも、嫁入り前の綺麗なお身体なのですよ。そのお譲様のお部屋に――

怒りが頂点に達したのか、その後、パシッという乾いた音が石造りの廊下に響き渡った。

トリシヤが平手打ちでも喰らわした事がアウラにも容易に想像出来、思わず両頬を覆った。

「痛いなあ　、俺は、ただアウラの介抱をしようと思ってるだけなんだけどなあ」

「それは御苦勞様です事……、しかし毎夜、毎夜お譲様が痛みを堪え、私たちに心配させないようにと声を殺して唸っていらっしやると言う事は私たちも存じております。あなたがお部屋に忍び込んでいては折角のお譲様のお心遣いが無駄になると言うもの！　私たちもそれを察して、なるだけ呼び鈴が鳴るのを待っているのですよ。まったく」

トリシヤの捲くし立てるようにチツチに言葉を浴びせている様子が窺がえる。

その会話を聞いたアウラは聞き耳を立てられていたかも知れないと気付き、急に頬が熱を帯びていく事を感じた。

チツチは毎晩のように部屋に忍び込んで介抱してくれる。ただし、チツチの介抱と言えば……。

あれ、なのである。

アウラは思い出し頬を染めてベッドに潜り込んだ。

ややあって、上布団のを少しだけ持ち上げ外の様子を窺がっていると、視線の先にはチツチのくれた布袋がベッド脇の細かい細工が施された立派な机の上に置かれているが『贈り物』と言う割には飾

り気の無い、ただの布袋だとアウラは思った。

それでもチツチがくれた物だし、同じ年頃の男の子からプレゼントトされるのは初めての事だった。

アウラは胸の鼓動が徐々に速まって行くのを感じた。

チツチが「今夜も介抱に行くからその時まであわせに開けて見ておいてくれ」と言っていたので封を開けずそのままの状態あわせで置いてある。

何度か中身を見たい衝動に駆られたが、アウラは我慢した。

チツチの言う通りに開けてしまうと、今夜もチツチが忍び込んで来る事を期待しているように思え、だから我慢しては首を何度も大きく振ってそう思う自分を否定していた。

医者が処方していった薬草を磨り潰し少量の水で練り上げた打ち身に良く効く塗り薬のせいか、はたまたチツチのあの介抱のせいかは分からないが随分、痛みは引いていた。

それも驚く程の早さで回復していく正直アウラは驚いていた。

言い伝えでしか聞いた事はない、ドラゴンの生き血を舐めれば万病が治り、その心臓を食せば不死に近付くと聞いた事がある。

だとすればドラゴンの循環を体内に秘めるチツチの唾液には、傷や打ち身に効力を発揮する何かの成分を含んでいるのかも知れない、
と思い『循環』とは、いったい何なのかを考えてみた。

読んで字の如し！ 失った鱗を次々に再生し復元していく鱗の核なのではないかと、アウラは考えた。

植物に例えるなら一番代謝の活発な無菌の領域である成長点に当たる部分。

ドラゴンに纏わる言い伝え聞く、能力は循環の力だけでは説明が付かない。

しかし、ドラゴンにとっての最重要部分である事には間違いないのだろう。

打撲程度なら治してしまう可能性は十二分にあると考えられる。

そんな風に思考を巡らせていると外での口論が飛び込んで来た。

チツチとトリシャが大分興奮している様子で激しく言い争っている

る。

「だから、縄を解いて欲しいと言ってるんだけどなあ」

「駄目です！！今夜はそのままにしておきます。縄を解けばお譲様のお部屋に、また忍び込むのでしょ？そんな事は私が許しません！」

「今夜はアウラと、とっても大事な約束があるんだけどなあ」

「駄目と言ったら絶対に駄目です！先程も言いましたが、お譲様は嫁入り前の綺麗なお身体に万が一にも何かあつたなら、旦那様に申し開きのしようがございません」

「なら、トリシヤの部屋ならいいのかなあ？結婚はまだみたいだけど、もういい歳だし、それなりに」

「な、なな、何をおっしゃってるのですか！そりやまあ……ですけど……、人を行き遅れみたいに言わないでください！私はまだ二十四です」

「歳なんてどうでもいいから、縄解いてほしいんだけど、まあ縄の扱いはアウラよりずっと上手いけど、俺にはこっちの趣味はないんだけどなあ。どっちかと言うと」

「メキッ、バキッ、ゴキユと何とも無残な音が聞こえた後、扉の外に静けさが戻った。」

「どうやら、チツチが気を失ったように思えた。」

その後、石の廊下を革の編み上げブーツの踵が小刻みに音を響かせ部屋の前から遠ざかって行くのが分かった。

暫くしてアウラはベッドから降りると扉の方へと足音を殺しながら向った。

扉の前には恐らく騎士が見張りをしているだろう。

暫しアウラは考えたと扉を開いた。

「どうかなされましたか？」

騎士の問い掛けにアウラは答えた。

「先程、廊下が騒がしかったようですので……少し様子を窺おうと思ひまして」

「小僧がお譲様の寢室に性懲りもなくしかも、今回は扉から堂々と入ろうとしましたので取り押さえ縛り上げ連れて行った所です」

「はあ……、それは御苦労様でしたね」

アウラは、そう言いながらチツチの姿を探したが、当然見当たはずもなく、何処かの部屋に縛られたまま幽閉されているだろうと思つた。

「お譲様の貞操は必ずや我が名も無き赤の騎士団がお守りしてみせますが故、レースもいよいよですし今夜はごゆっくりお休み下さい……もしか、本当に今夜は小僧とお会いになる御予定でしたか？」

騎士が意味ありげにやけて言つた。アウラの感に少し触れた。

アウラは引き攣つた笑みを浮かべて言つた。

「ええ、レースもいよいよですし、その作戦と細かい打ち合わせをしようかと呼んでおいたのですよ」

「そうでしたか……では、直ぐに連れて参ります」

騎士が振り向こうとした時、アウラはそれを制止した。

「夜も大分更けましたので、今夜は止めておきます」

確かにチツチは「今夜来る」と言つてはいたが、会う約束をしたと言つのは、当然ながら嘘なので止めたのである。

チツチと会えるのはちよっぴり嬉しい……、でもあれは恥ずかしい……故にアウラは止めた。

「そうですね？　なら良い夢の旅路に」

騎士がそう言い一礼した後、背筋を伸ばした。

アウラは部屋の扉を閉めるとか「はあ」とかわいらしい溜息を吐き胸を撫で下した。

ほつとした安心感に満ちたが、同時に寂しさが湧き上がつて来る。アウラはベッドに潜り込み毛布を被ろうとした時、テラスに蠢く影が写り込んだ。

確かめると怖くなるので気のせいだと思い込み、毛布を被り直し布団に潜り込んだ。

暫く気になつて眠れずにいると軽く大窓を叩く音が聞こえて来る。窓は何度も軽くガラスを振動させている。

誰かいる。

一瞬、チツチが来たのだと思つたが、彼は今、簀巻きにせれて何処かの部屋に閉じ込められているはず……そう思うと怖くて窓の方を余計に見れないアウラは毛布を小さな拳で握り締め、ベッドの横に立て掛けてある節くれた杖にそつと手を伸ばした。

そつしている内に小さな声が聞こえて来た。

「俺だけど、約束したから今夜来るつて」

聞き覚えのある声。チツチだ。

アウラはベッドから跳ね起きると大窓に向い、薄いレースのカーテンを引いた。

「チツチ」

「やあ」

そつ、チツチが約束を破るなんて事なんて、これまで一度もなかった。

アウラは、大窓をそつと開くとチツチを部屋の中へと引きずり込んだ。

チツチは縛られたまま、どうやってテラスまで辿り着いたのか疑問だが、循環の力の一部を使えば容易な事なのかも知れないと思ひアウラは深く考えなかった。

「痛っ！」

チツチを部屋まで引きず込むのは、華奢なアウラには一苦労だ、それに力を入れると、まだ痛みが残っている。

やつこの事で部屋にチツチを引きずり込むと縄を解かずにチツチから貰った贈り物の方へと急いで向つた。

「お　い！　縄！」

チツチの呼び掛けも無視して大事そうに布袋を抱えるとチツチの方に振り向いた。

縄を解けばチツチは介抱と言つて、あれをするだろう。

チツチに悪気や、やましい気持ちがあるとは思つてないが、やっぱり恥ずかしいし何よりチツチから貰つた布袋の中身を早く見たかった。

「開けていい？」

アウラは、かわいらしい微笑みを浮かべ尋ねた。

「な……縄解いてくれてから……」

チツチがアウラの微笑みから視線を外した。

「だあ　めえ」

そう言つと微笑みを湛えたまま布袋の紐を解き封を一杯に開けた。

「……」

「……、良く似合つと思うけどなあ」

アウラの天使の微笑みは、そのままの状態で固まっていた。

To Be Continued

く 英雄に誓を く 第二部 第八話 (後書き)

最後まで読んで下さいますと誠にありがとうございました。 > (

—) <

次回の更新もお楽しみに！

く 英雄に誓を く 第二部 第九話

第九話

前夜祭！ 勝利のおまじない

収穫祭で賑わう街の騒ぎが屋敷まで届いて来ている。

太鼓の音と鐘の鳴り響く音色がアウラの部屋の窓から流れ込んで来る。

時は、もう昼を大分過ぎ、随分陽は長くなって来ても、もう直ぐ大きく傾き始める時間だ。

夕食には幾分か間がある頃、部屋の扉が叩かれた。

夜でない事もあり、警備は屋敷の周辺と屋敷の外堀が中心になっている。

「どうぞ。開いています」

アウラは何気なく返事を返した。

扉がゆっくりと開かれその隙間からチツチが顔を覗かせていた。

「アウラ？ 昨夜の事、まだ怒っているのか？」

「……別に」

アウラはそっけなく答えを返した。

期待に控えめな胸を踊らせ、布袋から出て来た衣装を見て驚いた。そりゃ、もう驚いた。

贈り物にしては、リボン一つない布袋だとは思っていたものの、チツチがくれたものだったから、どんな物でもうれしに決まっていると思っていた……が、流石に驚きで声にもならなかった。

布袋の中から出てきた衣装という……。

昨晚。

「チツチ？ これなあに？」

「衣装です。お嬢様」

何時になく、しつかりとした口調でチツチが答える。

「何の衣装なのですか？ まさかレースの衣装なんて言わないですよね？ パーティー用にも見えないですけど？ 踊り子の衣装ですか？ 透ける布の腰巻も一応ありますが……」

「それは、レース用に仕立てたのでございます。機動性を重視して特別にあつらえた一品物の衣装でございます。お嬢様」

「布地が極端に少ないですね？ それに私のサイズよりやや……、ややですけど小ぶりに見えるのは私の気のせいですかね？」

「いえ、お嬢様の御身体にぴったりのサイズでございます。不詳ながら申し上げますが、わたくしは一目見るだけで、そのサイズが分かります。絶対の自信があります！ 空間把握能力と言うものがございまして、その能力に秀でたわたくしめは、壁と洋筆筒の空間の隙間などを正確に測りぴったりその隙間に入るの物を選ぶなどという特技もございます。わたくしの眼に狂いはございません」

からん からん からん

チツチの頭上に三度の鐘が鳴り響いた。

「痛い、痛い」

「それに、このカチューシャ何か付いてますね？ 獣の耳に見えるのは私だけですか？」

アウラは、縄に縛られたままのチツチを見下ろした。

「それに……これ！」

チツチの前に差し出されたふさふさの手触りの良い短い毛並みの小さな布きれが両手に持たれていた。

「それは胸当てと紐パン」

からん からん からん

チツチの頭上に再び三度の鐘が鳴り響いた。

「痛い……そこ瘤……」

「それにしても随分、際どい形の胸当てと、こ、ここ、この腰履き……腰履きの切り込みの角度……両脇が紐になってますね……それにお尻の所に小さな穴が空いているのは仕立て屋が型紙を見間違えたのですよね？」

アウラは、ふさふさした尻尾と思われる箒のような物の持ち手を持ってくるくると振り回した。

その持ち手は滑り止めか、或るいは握り易く工夫されたようにも思える、串団子のような形をしていたが、幾分細身に感じた。

「それはプラムの立派な尻尾を忘れないようにと考え仕立てたものです」

「プラムを引き合いに出してどう言うおつもりですか？」

アウラの紫水晶の瞳が窄まり、今度は獣の足のような形を短くしたい

「きつと、アウラが身に付ければ、すぐかわいいと思ったんだけどなあ」

「おだまり！ 外道」

チツチが首を竦め、しょんぼりへこたれた。

アウラは、怒声を上げるとチツチをテラスまで引きずって行き放り出すと部屋に戻り大窓をしめベッドの中に潜り込んだ。

アウラは扉の隙間から様子を窺がうチツチを見て小さく溜息を吐いた。

「入っていいですよ。もう怒ってませんから」

アウラは、そう言うのとチツチが恐る恐る部屋に足を踏み入れた。

チツチが入って来た事を知りながら、アウラは大窓から流れ込む祭囃子を聞きながら外ばかり見ていた。

「外に出たいのか？ アウラ」

チツチが静かに問い掛けた。

アウラは小さく頷く。

「うん。難しいかも知れないけど……行ってみるか、この所、部屋に籠りつきりで息苦しいだろ？」

アウラはチツチの方を振り向き大きく頷いた。

「だけど、護衛の騎士を連れて行く、アウラが浚われたら大変だからなあ、浚われるのが俺一人ならなんとかするけど」

アウラの喜びの顔が一転して曇り出した。

警備などと一緒に行ったら思うようにはしゃげない。

フランクの養女でシュベルクの名こそ名乗ってはいないものの、シュベルクでは一応、公に出る事が万が一にもあれば、アウラは一応地方のお姫様なのだから、普段のアウラが平民風情に近い出で立ちで外に出るのは、そう見られる事を好んでいないからだ。

元、田舎の山奥に生まれ育ったアウラは、フランクの意図もあり公の場には出ない。

貴族連中の集う舞踏会にも貴族の会食にも顔を出さず、シュベルクの多くの者はアウラの事をフランクが雇った羊飼いだと思っている者が殆どだ。

「護衛なんて……チツチだけでも十分じゃないですか」

アウラはチツチの前でしか押し殺している、多くの気持ちを余り出さない。

作った笑顔じゃない本当の笑顔を見せられる人物もたかが知れている。

ましてや、感情のままに怒ったり泣いたりするのはチツチの前だけであった。

チツチがいると人目も憚らず泣く事もあるが、それだけチツチがいる安堵感がアウラの気持ちの多くを占め始めているという事だ。

「仕方ないなあ、行くか」

チツチが何時もの微笑みで応えてくれた。

二人は着替えを済ませると屋敷を抜け出した。しかし、流石は名も無き赤の騎士団。そう何度も出し抜かれる訳もなく、屋敷を出た直ぐに見つかってしまった。

「小僧！ 毎度毎度、上手く逃げられると思うなよ」
「それはどうかなあ」

チツチがそう言つとアウラの腕を掴み走り出した。

「痛むか？ アウラ」

チツチの問いにアウラは首を振って応えた。

二人は前夜祭で賑わう街中まで来ると人混みに紛れた。街中には普段着に扮した赤の騎士団の姿が見えた。

広場で少し息を整えていると、昼間に行われた羊毛刈の速さを競う競技で駆り集められた羊毛の一時置き場には山のように積まれた羊毛が見えた。それはまるで黒い積乱雲のようにも見える。

二人が息を整えた頃、普段着を来た騎士に屋敷からの連絡が入つたのか、辺りを見渡し始めた。一般の人たちより一際身体の大きな偉丈夫の騎士は高い視界から二人を見付け出すとこちらに向かって来ている。

チツチに手を引かれながら、二人は身を屈め姿を隠すと細い路地に隠れた。

他の騎士たちも集まり始め、何やら話しているようだった。

一人の騎士が額に手を当て天を仰ぐのを見て二人は、くすくす笑い合った。

その後もチツチの良く利く鼻と良く冴える勘、それに右眼に巻かれた包帯の奥からでもよく見える右眼で巧みに騎士たちを掻い潜り、何時もより多い露店を回っては逃げた。

シユベルクの街は多くの羊を飼っている為か、山羊の姿も時折眼に飛び込んで来る。

チツチがレースに出る事で噂にはなっているものの、山羊を連れていなければ一人の少年にしか見えない。

中にはチツチの事を知っている者もいて時折、道端の石や木の器に入れられた麦芽酒を飲み干した者が、チツチを見つけると罵声を浴びせられ、木で造られたジョッキを投げつけられたりもした。

「ごめんね……嫌な思いさせちゃうね」

アウラは切なそうに控え目な胸を両手で押さえた。

アウラには分かっていた。

山羊飼いが、どんな扱いをこれまで行く先々で受けて来たのか容易に想像も出来た。

「これじゃ、チツチの方が狙われちゃうね」

アウラは、自分の事しか考えてなかった事に、今更ながら気付き胸を痛めた。

「俺は山羊飼いだ。皆、悪魔や魔物を恐れて本気で俺を襲う事なんてしない。だから心配しなくても大丈夫だ」

「ごめんね……チツチ、私」

「何、誤ってるんだあ？ それより、楽しむんだろ？ アウラ」

肩を落としているアウラにチツチが声を掛け笑顔を向けた。

「うん」

チツチの何時もの笑顔にアウラも笑みで応え頷いた。

その後も二人は露店や旅の踊り子の舞台を見たり買い食いをして前夜祭を楽しんだ。旅の踊り子に舞台上げられた時は、屋敷の者や護衛の騎士に見つかりはしないかと二人で冷や冷やしながら踊ったりもした。

壁際に布を広げただけの露天の並ぶ場所でチツチが錬金物の銀細工のペンダントトップと革製を編み込んだ首紐を値切り倒して、銅貨二枚で買うと首に掛けてくれた。

値切られた店主が錬金石の載った滑稽な細工が施された指輪を出して銀貨一枚を要求していたが、結局長い旅の間に身に付けたのか目利きと巧みな交渉で銅貨六枚で買うと、チツチが指に嵌めてくれた。

前夜祭を十二分に楽しんだ二人は、街中を出ると屋敷裏の小高い丘に来ていた。

プラムに祈りを捧げた後、チッチは草原に寝そべった。

アウラは儂く光を放つ夜空を見上げた。

「綺麗」

やわらかな風が吹き抜けアウラの薄い水色のワンピースの裾を大きく煽った。

アウラは慌てて暴れる裾を抑え込んだ。

「薄い青の水玉」

チッチの言葉にアウラが反応したが、何時も持っている杖は今夜は置いて来ている。

「チッチ！ 眼を閉じなさい！」

「嫌だ。パン……星が見えなくなる」

アウラは、小さく溜め息を吐いた後、寝そべって夜空を見上げているチッチの傍らに座った。

やわらかい風に乱される細く長い髪を片手で押さえ、チッチの肩に頭を乗せて星空を見ているチッチに聞いてみた。

「レース中の天気どう思います？」

「酷くはない。が、中盤頃には雨が降る。レースは前半が勝負だ」

「私もそう読んです。だから、このレースに出場する牧畜者たちもそう思ってると思う」

そう言いながら、アウラは頭を起こし重ねるようにチッチに近づけ視界を遮った。

「空が見えない」

「……」

甘い髪の香りが鼻の奥をくすぐった。

不意にやわらかく温かい感触を唇に感じた。

一瞬の後、その感触は離れ、その唇からは言葉が漏れた。

「絶対、勝とうね。プラムの為にも」

「勝つさ。約束だ。英雄に誓を立てに、ここに来たんだからなあ」

「それと……今日はありがと……さっきのお礼、それとこれは勝利のおまじない」

アウラの顔が、再び近づくとやわらくて温かい感触が、再び唇に戻って来た。

儂い光を放っている星たちは輝き、二人を見下ろしている。

これから困難に挑もうとしている羊飼いと山羊飼ひ、二人に訪れた束の間の微笑ましい姿を……。

To Be Continued

く 英雄に誓を く 第二部 第九話 (後書き)

最後まで読んで下さいまして誠にありがとうございました。 > (

—) <

次回の更新もお楽しみに！

く 英雄に誓を く 第二部 第十話

第十話 く 英雄に誓をく (終幕)

星降る丘で

「チ、チツチ……今なら大丈夫ですよ……」

あの確信犯め！

アウラはテラスから顔を覗かせた。

その声に反応しテラス下の茂みが、ざわめきを立てる。

警備に当たっているはずの騎士や衛士の姿は見当たらない。

アウラたちが屋敷に帰った時、それはもう大騒ぎになっていた。

怪我の治り切っていないアウラと連れ出したチツチを屋敷中の者

たち総出で血眼になって街中を探し回ったのだ。

時折、視線が交わるものの、チツチは気配を読み取り巧みに逃げ、

アウラと共に前夜祭に賑わう街を楽しんだ。

月夜の中、白銀にブルーマールの映える少年が茂みの中から這い出した。

淡い月の光を浴び、ほのかにブルーマールの因子を帯びた白銀の髪が幻想的に映えている。

「まったく、仕方のない奴らだなあ」

チツチが碧眼を絞られた弓のように反らし微笑んだ。

その光景に暫し瞳を奪われた。

そよ吹く夜風が、少年の幻想的な髪の毛を揺らして遊んでいる。

持ち上げられた髪の毛は光に透けてより、いっそう青い輝きを放

っ。

まるで宝宝箱を開けた時のように……。

あの時も月明かりに少年のブルーマールが良く映えていた。

アウラはプラムの眠る丘での事を思い出し顔を赤らめる。

冷静に思えば、とんでもない事を許してしまったような気がする。

あの時も幻想的に月夜に映える少年の白銀髪を見て、お礼の『おまじない』だのと言って、その場を誤魔化した事を思い出す。

星空を眺めていたのか、はたまたスカートの中を眺めていたのかは定かでないものの、チツチの髪の毛は、まるで魅了^{チャーム}の魔術を放っているように思え、魔術に魅入られた自分は仰向けに寝そべるチツチにしな垂れるように寄り添い、天津さえ自ら唇を重ねてしまった。いろんな事に必死だったから、その後にチツチが発した言葉を良く覚えていない。

何処か遠くの方で聞こえているように感じ、チツチの碧眼を遠くに見て思わず「はい」と返事してしまった。

うつすら記憶に残っているチツチの言葉を反芻する。

「今夜いいか？」

アウラは必死で思い出そうとした。

遠くの方で聞こえるように思えたチツチの言葉を……。

確か、レースがどうのこうの言っていたようだった。

アウラは記憶を探った。

星降るプラムの眠る丘。

唇が温かい……頼もしく、やわらかい。安堵感が満ち溢れて来る。

そして何より、幸せを感じる……。

チツチの両腕が背中を抱き締められている。

力強く、とてもやさしく……。

そして何より、チツチの温もりを感じる……。

心臓が飛び出しそうな程、早く強く鼓動を打っている。

チツチはどんなのだろう？

首に回していた手を片方チツチの胸に置いてみた。

やや早くなっている鼓動が伝わって来る。

ドラゴンに育てられたとは言え、チツチも人間なのだと思
う。

チツチは何時も人間離れた感覚を見せられて来た。

時折、チツチが人間じゃないのではないかと心の奥底で思いもし
た。

グリーンベルを焼き払った魔物は、本当は自分の創り出した魔物で
はなく、世間で言い伝えられているようにグリーンベルを焼き払った
と言われているグリーンベルの悪魔^{ドラゴン}ではないかと……。

チツチも緊張してるんだ。

そう思うと無性にチツチが、かわいらしく思えてくる。

重ねた唇の形を確かめるように、こんなにも夢中になっちゃって
……。

チツチが背中に回している片腕が腰の方へと降りていく。

身体の線を確認、なぞるように。

くすぐりたい……。

でも、その手を制する事が出来ない。

……私、こんなにも夢中になってチツチの唇をなぞっている。

何だか……恥ずかしいなあ……。

「ひゃうー！」

転がるようにして不意に体を入れ替えられた。

今まで下に見えていたチツチの碧眼が上に見えている。

「あっ！……」

チツチの唇が……離れていく。

名残惜しく温もりだけが唇に余韻を残している。

思わず胸に置いていた手を慌てて首へと回し距離を取るチツチの
身体を引き留めた。

チツチの碧眼は、何時ものようにやさしく温かい微笑みを向けて

くれている。

「チツチ……私、あなたを恨むわ……」

「それでいい」

「だって、チツチの言う通りなら、私が組み立ててしまった魔方陣から創り出された魔物ごと故郷も家族も奪ったかも知れないのですもの……私から何もかも奪ってしまったのですよ？ あなたは……

いえ、それは違いますね……グリーンベルを滅ぼしたのは、私……」

「ああ、そうかも知れないし、魔物ごとグリーンベルを焼き払ったのは、もう一つの循環に精神を乗っ取られていた俺かも知れない」

「私は、チツチのお母様とチツチの安住の地を奪ってしまった。知らなかった事だとしても、例え間接的であつても……あなたから大切なものを奪ってしまった事に違いないのです……チツチも恨んでるよね？ 私の事……」

「ああ、俺は自身の手でアウラを討ち、いまわの際きわを看とつてやると決めている。だから、他の誰にもお前を討たせはしない」

「ねえ、チツチ？ 気付いてる？ あなたは私から、全てを奪ったグリーンベルの悪魔かも知れない……あなたが、私から奪っていったものは故郷や家族……それだけじゃないのですよ？……私の心まで奪っていくのね。いけない人……私の事好き？」

「アウラ……俺は……」

チツチの表情が俄かに曇った。

「いいの……私もそうだから、あなたの気持は良く理解しているつもりです。それにチツチは、人としての感情が欠落し過ぎているもの……でもね？ 大丈夫だよ。私がチツチに教えてあげるから、ね……人としての感情？ 俺は俺でいい。人成らざるモノを体内に秘めているから」

何処か寂しそうでもあり、誇らしくもある微笑をチツチが浮かべているように感じた。

「チツチを育て、愛して下さいましたあなたのお母様は、オフティマール気高き至高のドラゴンだもん。私が教えてあげられる事は、人としての行動や温

もり、愛しいと思う気持ち……それに人にしか持ていない感情だけ
かも知れないですけどね。えへえ」

「アウラ？」

チツチの碧眼が近付いてくる。

「チツチ……」

アウラは紫の瞳を静に閉じその待つ。

チツチのやわらかい唇の感触を感じる。

戻って来てくれた……やさしく温もりが……唇と胸の中に……肌

に……チツチの手が胸を弄って……！？」

慌ててチツチの身体を押し戻す。

「こ、こら！ チツチ……何を……だめえ……こんな所で、あつ

……ん」

「アウラがしてたから、こうするのかなあって思ってた……」

「違が……う。やあん！ わ、私はチツチの鼓動を確かめたかった
から、胸に手を、あつ……置いた……だけです。動かし……たりし
て……あつ……ないです、あつ……だめえ！ 動かさないで……あ
つ、ああ」

胸から手を離してチツチが耳元で囁いた。

「じゃあ何を教えてくれるんだ。アウラ？」

駄目！ 耳……甘噛みなんかされたら、私……。

「み、耳……だめえ……くすぐりたい……ああつ……らめえ……こ
んな所でなんて……」

チツチが胸から離れた手を腿へと移動させている。

「ここじゃなければいいのかなあ？」

「そ、それは……その……わ、私もこう言う事……は、初めてだか
ら……あつ、ん！ スカート……中、手入れちゃ……らめえ！ こ、
こん……な所じゃ……やつ、嫌だよチツチ……それにプラムが見て
るから、ね？ それに皆も心配してるだろうし……屋敷に帰ってか
ら、ね」

チツチが手を止めてくれた。

「屋敷ならいいのか？」

「……」

「今夜いいか？」

「……はい」

チツチが何時もの何倍も嬉しそうな微笑みを向けている。

ど、どうしよう……思わず『はい』で答えちゃった……。

アウラは自分の浅はかさにはひとりごちた。

事の次第を思い出し何だか頭が痛くなった。

屋敷に戻れば護衛の騎士や使用人たちがいる。

そう思って、つい『はい』などと安易に答えてしまった事を後悔した。

爵位を譲り隠居したフランクとは言い、貴族の屋敷には違いない。

まさか、戸締りだけを頑丈にして門番を含め、警備の騎士隊、使用人たち総動員で探している等とは、露程にも思わなかった。

屋敷に帰ると灯りは消され、門は閉じられていた。

アウラは、合鍵を使い鉄柵の扉で閉ざされた門の脇にある御勝手口を開いて屋敷の敷地に入った。

後ろでは、何だかそわそわして落ち着かないチツチの様子が、否が応でも感じ取れた。

屋敷の玄関に着くとアウラは、誰かが隠れているかも知れないから中の様子を見てくると言っただけでチツチにテラス下の茂みに身を隠しているようにと促した。

チツチは、心配がない事に気付いているようで、渋い顔をしていたが「言う事聞けないなら駄目」と言うと渋々応じ茂みへと向かって歩き出した。

アウラは、部屋に入ると明かりも灯さずたつぷりと悩んだ。

どうしたものかと頭を抱えているとテラスに小石が投げ込まれ、コツンと小さな音を立てた。

時間を置くにつれ、小石の投げ込まれる間隔は次第に間を詰め短

くなって来ている。

チツチが焦れている……。

アウラは、満面の笑みを浮かべていたチツチの顔を思い出す。

このままチツチを放置して置いて屋敷の者が帰るのを待っていようとアウラは考えていた。

そうすれば、チツチと言えどもそう簡単に部屋に忍び込めないはず……がない。

「はあ」

このままにして置いてもチツチなら、易とも簡単に忍び込んでしまっただろう。

チツチは、今まで幾度となく侵入して来ているし学園で再会する前には、ランディー率いる名も無き赤の騎士団を相手に半年も逃げ続け、北の神殿からシユベルクに帰る道中、謎の組織に浚われ、幽閉された難攻不落にも思えた断崖絶壁のアジトに易々と侵入して助け出してくれた。

何れにせよ。乙女の貞操を守る事は困難だと頭を抱えた。

もし、焦れたチツチが本気で襲って来たら……どうしよう。

私……乱暴に扱われるなんて嫌……と言っても、まだ招き入れるだけの心の準備が出来ている訳でもない。

アウラが悩んでいると……左の薬指に違和感を感じる。

「指輪……チツチが買ってくれた指輪」

チツチの事だから、その意味も知らず嵌めたのだろう……。

小石の転がる音がアウラの耳に届く。

チツチ……やさしくしてくださいね……。

アウラは、指輪に右手を添えると、決意を固め燭台の蝋燭に火を点け、テラスへと歩き出した。

「何の為に警備をしていると思ってるんだ？ 痛てえ！ しかも

熱いかも……」

その時、チツチの背後から脳天に痛みを伴い衝撃が走った。

「チツチさん？ あなたのような輩がいるからですよ」

痛みを伴う衝撃と共にチツチは、頭を抱えて蹲った。

チツチの耳に覚えのある声が届く。

振り返ると、そこには三俣の燭台を手に持ったトリシヤが仁王立ちしていた。

立てられていた蝋燭は粉々に砕け跡形も無くなっていて、先の尖った針のような物が露出していた。

「トリシヤ！ 何時の間に……ぬかった。今夜の事を考える余り、気配に気付かなかったとは……俺様とした事が……一生の不覚」

チツチは無念の言葉を残し地面へと伏していった。

「今夜の事？ さては、お嬢様を襲うつもりだったのね」

トリシヤが怪訝な顔をしながら、肩に掛けていたロープでチツチの身体を手際良く縛り上げた。

「……チツチ？ 大丈夫？」

「お嬢様！ よくぞ御無事で……心配しておりましたですよ」

「ええまあ……」

アウラは苦笑いを浮かべて答えた。

深夜を告げる星が天の真上に座した頃、アウラはベッドの上で寝返りを打った。

寝返りを打つてもそこにチツチはいない。

もし、トリシヤがチツチを捕らえていなければ今頃……と思いを巡らせ顔を赤らめる。

チツチは、そのまま木に縛り付けられたまま騎士団たちが帰ると五人の見張りを付けられ厳重に見張られる事となった。

アウラは、左の薬指に嵌められた指輪を視線の先に翳した。

暫し指輪を眺めた後、右手を添えて胸元に抱え込んだ。

「チツチ……」

毎晩のように侵入して来るチツチが来ない。

「あれ？ 何故……泣いているの？ 私……寂しいよ……チツチ」
特別な夜になるかも知れないと、あんなにも戸惑っていたのに、
チツチが来ないと眠る事も出来ないなんて……。

戸惑いながらも心の何処かで、何時かはそうなる事を願っていた
自分の気持ちに気付く。

今は、まだそうなる事に決心も勇気も無い事も事実。

二人の間には、複雑な想いが絡み合い過ぎている。

他の誰にも解く事の出来ない仇と言う名の絆で二人は固く結ばれ
ているのだから……。

アウラは、毛布の中で身を丸めた。

寒さを凌ぐ仔猫のように。

静かな夜に、カチツカチツと金属が擦れ打ち付けられる音が静かに響いた。

毛布の中で身を丸めていたアウラが、外の異変に気付いた。

何事かと思いついた瞬間、聞き耳を立てて様子を窺がっていると外
を警備する騎士たちの呻き声も交じり出す。

何者かが屋敷内に潜入し警備の騎士と相対しているのではないかと
身を丸めたまま、その恐怖に身を震わせた。

チツチは木に縛り付けられたまま。

アウラは、チツチの状況を思い出して起き上がった時、脳
裏に事故の記憶が蘇り身体は強張り意思に反して身体が動かない。

「怖いよ……チツチ。傍にいて……私を一人にしないで」

アウラは強張る身体を抱え込んだ。

コツコツとテラスの床を小石が転がるような音がした。

何時の間にか外は静まり返っている。

「アウラ……」

チツチの声にアウラは毛布を跳ね除け、飛び起きベットの脇に立て掛けた杖を手にテラスの窓を開け手摺の壁にもたれ掛かるように身を乗り出し下を覗き込んだ。

チツチの声を聞いたからなのか、自分でも不思議に思う程、恐怖は何時の間にか消えている。

「チツチ！」

辺りを篝火の明かりが照らし出している。

木にはチツチが縛られていたロープが地面に落ちていた。

しかし、チツチの姿は見えない。

地面には騎士が倒れている。

「チ、ツチ……チツチ！ 何処にいるの チツチ！」

アウラは、大声で叫んだ後、名も無き赤の騎士団の精鋭たちが、倒されている事実^{じじつ}に気付き杖を強く握った。

「……」

「ひゃう！」

下腹部の辺りで何か^{なにか}が蠢く^{うごめく}感触に声にならない悲鳴を上げた。

「……あふうら……ぐるじい」

「ひゃう」

アウラは、身体と壁の間を離し覗き込んだ。

手摺の壁とアウラの身体に挟まれたチツチが呻^{うめ}いていた。

「チツチよかった……無事で」

チツチの身体に争った跡^{あと}が見て取れた。

「遅くなつたなあ。アウラ」

ふらりと立ち上がり、崩れそうになるチツチをアウラは慌てて抱き寄せた。

アウラは、チツチの頭を胸元に抱え、崩れ落ちる身体に合わせて膝を着いた。

「どうしたの？ こんなにぼろぼろになって」

「……桃源郷」

「とうげんきょう？」

「なんでもない……」

「賊だったの？」

「ああ、やっこの思いで眠らせて来たところだ。それに毎度毎度、あの騎士団の相手とトリシヤから逃れる事は、流石に疲れる」

「御苦労様。チツチ」

アウラは、チツチの唇に自分の唇をやさしく押し付け、暫し互いの温もりを確かめ合うように唇を重ねたまま抱き合い、アウラは名残惜しそうに唇を遠ざけた。

「チツチ……あのね。レースが終わったら……その……いいよ……私の全てをあげても……だから、それまでは……ね。……でも過酷な命懸けのレースだから……チツチ？」

チツチの唇からは何時も間にか、すやすやと心地よさげに寝息が漏れだしている。

アウラは、軽く寝息の漏れるチツチの唇に己の唇を軽く重ね、遠ざけそつとチツチの胸に頭を乗せ寄り添った。

「おやすみ。チツチ」

草木も眠りに就く程、夜も更け切った頃。

天蓋付きのベッドの上、二人の寄り添う姿があった。

アウラの傍らで寝息を立てるチツチを見てアウラは呟いた。

「残念だったね？ チツチ。レースが終わったら……約束ね」

今日の朝陽が昇る頃、放牧レースの火蓋が切られる。

からんちゆ 魔術師の鐘 第一章 第二部 英雄に誓いを

） End

第三部 炎のレース

く 英雄に誓を く 第二部 第十話 (後書き)

最後まで読んで下さいまして誠にありがとうございました。 > (

—) <

第二部 く 英雄に誓を く 終幕。

第三部 く 炎のレース く いよいよ開幕!

次回の更新もお楽しみに!

く 炎のレース く 第三部 第一話（前書き）

様々に陰謀渦巻く中、放牧レースが火蓋を切る！

如何に失わず、如何に早く、如何に多く周れるか。

基本はシンプル。

チツチとアウラはレースを制する事が出来るのか！

そして…見え隠れする陰謀。

知恵、勇気、ハプニング？

炎のレース 第三部 第一話

第三部 炎のレース

第一話

始まりの朝

白い雲が流れ大きな音と共に青に空には白い煙の花が咲いた。

「ねえ？ チッチ？ もうとつくにみんなスタートしてるのですよ？」

スタート地点の隅っこに白銀の髪にブルーマールが映える少年が気持ち良さそうに寝息を立てている。

少年の顔の傍でしゃがみんでいる少女が声を掛けた。

細く長い桃色の髪を旋毛の辺りで紺のリボンで纏め、紫水晶の瞳が瑞々しい。

両手を立て頬を上げ顔を三角にして呆れた様子でチッチの寝顔を覗き込んだ。

「これも作戦？」

「……内緒」

「なにをすねてるの？もしかして……衣装着て来なかったからですか？」

アウラの服装は厚手の綿を若草色に染め上げた長袖のシャツ、踝の辺りまである若草色の厚手の綿のズボンにコルセットを兼ねるインナーベストは茶色。

革紐で編み上げる作り、腰の方から編上げられた革紐は胸元へと向かい編み上げられ最後に胸元で結わえるとかわいいリボンのように結ばれている。

荒地にも耐えられる厚い丈夫な革製の編み揚げブーツに革の手

袋といった、出で立ちのアウラの方にチツチが首を向けるとすぐさま逆方向の寝返りを打った。

「スタートは陽の昇り始めだったんですよ？　こんなのにんびりしていいいの？　チツチってばあ」

涼しい山の麓とはいえ、何時もの誇り除けのロープは陽も高くなり気温が上がり始めたので小脇に抱えられている。

「折角……仕立てたのに……見れないし」

「何が見えないの？」

アウラは首を傾げた。

「何でもない……これじゃレース……やる気でない」

「こら！　チツチ？　昨夜、約束したでしょ？　絶対に勝とうね、って！　それにレースが終わったらゴニョゴニョ……て約束もしちゃったなあ……はあ」

アウラは、昨夜の約束を思い出し顔を赤らめ誤魔化すように言葉を続けた。

「プラムに誓ったあれは嘘だったんですか？　チツチは覗き魔で変態でいやらしい所もあるけど、嘘は吐いた事ないでしょ？　私も魔術で補助するからね。がんばる」

「……アウラはタフだなあ。昨夜、あんなにも激しかったのに……それに衣装楽しみにしてたのに……衣装で二回戦……」

「誤解を招くような発言は止めてください！　昨夜、激しかったのはチツチだけです。進入した賊と警備の騎士さんみんな倒しちゃうから」

「だって、アウラとあんな事やこんな事出来ると思って頑張ったんだぞお！　そのお陰で両手の拳は骨折したし……寝たら治ってたけど、衣装着てアウラと想い出の夜を過そうと思っていたのにさ」

あの衣装を相当着てほしかったんだなあ、と改めて強くアウラは思った。

アウラは少し考え、たつぷり悩んでから答えた。

「わ、分かりました……総合優勝できたら、あの衣装着てもいい

よ……約束した事……の時に……はあ」

実はアウラは、この時獣の耳が付けられたカチューシャだけは一応持つて来たが、流石に街中の人目のある所で着けるのが恥ずかしく、肩掛けになっている鞆の中にしまつてあつた。

「本当に？」

チツチの耳が、ぴくりとアウラの言葉に反応した。

「ほ、本当だよ？ ……流石に気が向いたらでけど……」

アウラは、苦笑を浮かべて小さな声で語尾は濁した。

寝転んだままのチツチの拳が硬く握られ腰に引きつけた。

「約束だからなあ！ アウラ」

再度、確認をするチツチを見てアウラはそんなに着てほしいのだと改めて思い、僅かに軽く頷いた。

「萌えてきた　！　アウラ！　俺は断然萌えて来たぞ！　絶対に

このレース勝つから」

「チツチ？　ちよつと、はしゃぎ過ぎです。それに……何となく……もえる方向性が違うような気がするんだけど……気のせいかしら？」

アウラは顔を赤らめ俯いた。

アウラは、チツチが萌えて来たを燃えて来たという言葉の違いと意味に気づかなかつた。

「随分と余裕があるじゃないかね。頼もしい限りだよ」

耳に掛る金髪をさわやかになびかせ、銀色に輝く鎧と肩当てから表地のビロードの布地に名も無き赤の騎士団のも唯一、ランディーだけが縫い付ける事を許されている勳章が右肩に施され、裏地の血のように赤い布地には赤の騎士団が全員縫い付けている逆十字の銀刺繍が、ちらちらと見え隠れしていた。

「そっちはどうだ」

「まあ、ある程度金貨を入れながら噂と言う情報操作でオッズは動

かしている。山羊飼いになんて放っておいても誰も賭けやしないから、オッズは相当なもんになっている」

「で、例の方は上手く行ったのか？」

「フランク様が全財産を」

「足りそうか」

「正直、足りないがね。他にも手はあるんだろ？ 山羊飼い」

「俺に聞くなよなあ、それをやるのは向こうの連中だろ？」

「まあ、そうだなあ」

小声で話す二人の会話をアウラは、きょとんとして聞いていたが、良く聞こえなかった。

「いったいチツチたちが何を企んでいるのか、アウラにはさっぱり分からない。」

最後にランディーがチツチに耳打ちをするとチツチの唇が吊り上がり笑みを浮かべた。

チツチがゆつくりと立ち上がり、口笛を吹き周りで草を食んでいた山羊を集めた。

チツチが選んだ頭数は二十頭。

自分が連れて旅を伴にして来た山羊たちだ。

数字的には不利な数字である故に、どれだけ早く周れるかが勝負の分かれ目となる。

しかし、チツチは陽が昇り早々とスタートを切らず、惰眠を貪っていた。

本当なら一番にアーチを潜り街の外に飛び出して行ってもいいようなもんだ。

それを知っているからこそアウラはチツチに苛立ちを覚え気持ち良さそうに眠っていたチツチを起こそうと声を掛けたのだった。

「ねえ、チツチ？ これも作戦ですか？」

どうしても腑に落ちないアウラは、チツチに聞いてみた。

レースには、完全に出遅れている。今後どうレースを展開するの

か、何も聞いていなかった。

「もう直ぐ分かる」

スタートを切って街の外に出るアーチを潜る際、自分の番号と照らし合わせ日付と立派な花印を押して貰った証明書を貰わなくてはならない。

正式にスタートした事の証明になる。これを最後に持っていないければ、いくら早く早く失わず、コースを周っても無効になってしまう。

妨害は容認されていても違反は嚴重に取り締まるレースだ。

チツチは取り分け急ぐ素振りも見せず群れを進めていた。

街の外に出るスタート地点のアーチの丸い天井部分が見え始めた頃、既に手続きの混雑は過ぎていて出遅れたが、証明書を貰う間に群れが混ざり分ける作業に手間取った者たちが頭を、かりかり掻きながら苛立ちを見せて手続きを行なっている姿が、ちらほらと見えるだけだった。

「ほら、空いてるだろ？」

チツチの左目の碧眼は弓のように反れてアウラを見て微笑んだ。

シュベルクの街を出ると東西南北に分かれ、シュベルクの近遠にある今回のレースの通過点に定められた街を周る事になる。

今回のコースは、東に三か所。割りと近い場所に東の通過点が設けられていて、西に三か所。

西の街には、ほぼ一日寝る間を惜しんで歩けば着ける場所にあり、西を周り切りシュベルクに戻ったとすれば早ければ三日を切る事も不可能ではない。

南に二か所、シュベルクから真南に下った近い場所に一か所とそこから一日程、下った場所に北にある山脈から流れて来た川と東西距離はあるもの同じく北の山脈を源流とする川が集まりシュベルクの傍を流れている川が合流する事はないものの、すぐ隣り合っ

流れている。

北に二か所、距離は何処よりも近いが、指定された街との距離はない。

その街の近くに最南端の指定先の近くを流れる川が流れている。ただ足場の脆い道のない山を越え向かうか、大きく東西に迂回し丸二日程の距離を移動しなければならず、移動に時間を費やされるだけで無理をしてまで周る場所でもない。どのみち全てを周れた者など今までのいないのだから、捨てる事もレース展開中の戦略の一つだ。

チツチたちはあっさりと通過書を受け取り、淡々とレース開始の手続きを済ませる事が出来た。

「まさか……この展開を予想してたんですか？」

アウラの視界には、まだ沢山の羊の群れを追うレース出場者たちが映っていた。

チツチは何時もの笑みを浮かべている。

「内緒だ」

チツチがそう言うのと誰も向かっていない北の方へと山羊の群れを追いついた」

道なき荒野が広がり遠くの方に目標になる山の天辺が僅かに見え
ている。

「チツチ、北に向かうのですか？」

「ああ、天气が崩れる前に北の二か所を周り、そのまま西周りで南下する。」

「でも、あの山は岩肌が露出していつて足場も脆く、数頭の羊を追って超える事が出来そうな獣道があるだけです。危険を冒してまで北に向かう必要は無いと思うのですが……」

「だから先なんだ。雨の後では越えられなくなる。必ず勝つには十か所全部周る事が一番確実な方法だ」

「ぜ、全部ってどうやって、長い歴史の中でも今まで誰も誰一人と

して出来なかったのに」

「俺は山羊飼いだ。荒れた土地を旅する事は慣れている。柵の中で羊を追う事に慣れた奴らに出来ない事をやって退けるだけさ」

チツチは笑みを絶やさなかった。

「それに一番に北に向かえば妨害は少ない」

「でも、万が一誰かの刺客とかが荒野で待ち伏せしていたら……何時かみたいになっちゃうのかなあ……」

アウラは表情を曇らせた。

血溜りの野で笑みを浮かべ立っていたチツチの姿を思い出す。

あの笑顔が自分に向けられたものと分かってはいてもアウラは嫌だった。

血溜まりの中に立っているチツチの姿と微笑みが……。

「大丈夫だ。荒野の中、あいつらが俺たちを見付ける前に、こちらを見付け出して上手くかわすつもりだけど……いざとなったら、その時はアウラを抱えて逃げる」

チツチの微笑みをアウラは頬笑みで返した。

何時ものアウラが良く知っている姿がそこにはあった。

「うん！ そうしてくださいね。私のシュヴァリエ」

アウラは、そう言うとチツチの腕に自分の腕を絡めた。

To Be Continued

ゝ 炎のレース 〉 第三部 第一話（後書き）

最後まで読んで下さいますと誠にありがとうございました。 >（
—） <

第三部 〉 炎のレース 〉 いよいよ開幕！

次回の更新もお楽しみに！

く 炎のレース く 第三部 第二話

第二話

待ち伏せ

シュベルクを二人が出て半日も経たない内に山の麓まで辿り着く事が出来た。

多くの者は混雑する街道沿いを行き、中盤から降り出す雨を予想し川の氾濫に備えた。

万が一の大雨でレースが困難になった場合、短期間で出来るだけ多くの町を周り、確実に通過証明書を得てシュベルクの街に持ち帰る為に、出来るだけ近隣の東側の街か西側の街を先に周るだろうと、チツチはあたりをつけた。

東西には通過を指定された街が三か所ずつあるのだから、万が一にも雨による長期の足止めを余儀なくされても最悪、期日までに三枚の証明書を手にしてシュベルクに戻る事が出来る。

その後レースが困難を極めれば、誰が一番早くアーチを潜り証明書を貰うかだ。

賭けに出て危険を犯せばゴールは、おろか家畜を失い失格になる。それぞれの駆け引きや思惑が紙一重の所で交錯している事は必然的な事であった。

怪我が完治とまではいかないアウラと荷物を大きめの山羊に乗せ、何事もなく荒野を抜けた二人の目の前には、難関となる切り立った岩肌と急な斜面が待ち受けていた。

山の麓には小さいながらも森があった。

崖を削り斜面を利用しながら、人一人がやっと通れるくらいの獣道が山肌を螺旋状に天辺を目指して延びている。

「あ……あの道に行くの？　こんな軽装備で……」

アウラは目の前に立ちほだかる山を、ぽかんと口を開け見上げていた。

装備も野宿に備えた天幕と最低限の食料だけしか持って来ていない。

後はロープ等の備品だけを出来るだけ少なく纏め、鞆に詰め込んで来ただけだった。

アウラが四、五着の着替えをもう一つの鞆に詰めようとしていたら、チツチに取り上げられ少し喧嘩もした。

そのくせチツチは大きな革の水袋を用意していた。

チツチが言うには何があなくても水さえあれば生き延びる可能性が高くなる、だそうだ。

アウラには、どう見ても持って行く水の量だけが多過ぎるように思った。

アウラは年頃の女の子。何より野宿が続く事が予想されるレースだ。

いくら放牧レースが過激と言っても立ち寄った街で宿を取る事になれば、誇りと汗に塗れた身体を洗い綺麗な衣服に着替える事くらいしたい。

ちよつと浮かれているのは確かかも知れないかも……とも思わなくはない。

逢引き気分は無くとも、少しくらいお洒落な服を持っていきたい。街の人たちの人目も多いのだから、それくらいは許してほしい。

汚れたままの恰好でチツチの傍にいれない。

年頃の女の子なんだから……。

ちよつと御機嫌斜めだったアウラも今はそんな事など吹き飛んでいた。

陽が沈む前にこの山を越え、チツチが一番に目指す街に辿り着

かなければ、持ってきた食料は昼食で尽きるのである。

チツチは北の二か所の街を今日の内に周り、三か所目に立ち寄り、街に向かうつもりでいるらしい。

「いったい、どうやって行くのだろうか、とアウラは考えてみた。

山道と言つものは荒野のようになるだけ直線的な造りはされていない。

急な斜面に緩急のある勾配を付けながら、山の周囲を周るか蛇行させて造り、そして同じように下って行く。

考えてみれば、距離のロスは迂回して街道を進むのと然程変わらないのではないかと思ひ始めていた。

「アウラ　！　置いてくぞ　」

アウラはチツチの声に、ぴくんと身体を小さく跳ねさせた。

チツチは目の前にある山の裾野に生えた小さな森の方へ向かい山羊を追い出していた。

林道から山道に繋がっているようでそこから道に入り山を越えるつもりらしい。

「待ってください！　チツチてばあ　」

アウラはチツチの背中を追った。

鞍なんて物が無い山羊の背中には、厚手の布を置き革をなめした物を敷いてはいても、長い時間乗っていたせいでお尻が痛い。

痛むお尻を擦りながら、やっとの事で森の入口付近まで先を行っていたチツチの追いつき、ここまで乗って来た山羊に跨ろうとした時、チツチの腕がアウラを制した。

「誰かいる」

一瞬、チツチの微笑みが消えた事をアウラは見逃さなかった。

嫌な予感がする。

森の根元の下草がざわついた。何か来る。

そう思った瞬間。

森の中から数十人の大柄な男たちが飛び出して来た。

その手には斧やら鈍、中にはそれなりにあつらえられた良い剣を持ち、その刀身は既に剥き出しになっている。

「やれやれだなあ」

呑気な口調でチツチが言葉を続けた。

「待ち伏せかなあ　それとも……」

アウラも節くれた杖を構え、からんと軽い音を立て響いた。

「そんな事は関係ない。山賊でも構わんさ」

「山賊ねえ　、ご苦労なこつた……誰が何時来るか分からないこんな所まで妨害要因を用意しておくなんて……よつぽどの事がないとするもんじゃないなあ」

チツチが白銀にブルーマールの映える髪の毛の耳元に手串を通した。

ゆつくりと両手が下ろされ腰の近くまで下りて来ている。

アウラの不安が加速していく。

チツチが腰に差している大型のナイフを抜けば、あの日が再現されるだろう……。

嫌だあんなチツチは見たくない。

「チツチ！　やめて　！」

思わずアウラは声を張り上げた。

「みなさ　ん！　山賊が出ましたよお　」

「えっ？」

チツチは何を思ったのか、何時の間にか何時もの悠々閑閑ゆうゆうかんかんとした態度で声を上げた。

山賊を名乗った者たちが現れた森の近くの林から、鎖帷子を身に纏い手には長い槍と腰には鞘に納められた剣が差さしている偉丈夫が二人現れ、その後を悠然と鎧付きの軍馬で闊歩し金色の髪の毛を上下に躍らせながらランディーが現れた。

「山賊とはこれ如何に」

何処かで見ただ分身体がチツチとアウラ。それと待ち伏せをしていた山賊を名乗った一行の隙間に軍馬を捻じ込み、見事な手綱裁きで馬を制止させた。

「早かつたじゃないかあ、ランディー」

「それは、こつちの台詞だ。お前たちこそ馬も使わず、随分早いじゃないかね。危うく警備の時間に遅れるところだった」

ランディーが何時も鋭い金色の瞳を緩めた。

「遅れそうだったか？ そいつは悪い事をしたなあ？」

チツチが問うとランディーが答えた。

「こつちは西の情報も探ってから来ているのでね。間に合っただけでも有り難く思え」

そう言つと向き直り、男たちにランディーが金色の鋭い眼光を浴びせる。

妨害工作の為に待ち構えていた男たちが後退りし始めた。

「山賊と……、聞こえたか？」

数では勝つていても相手は戦闘の専門家。

それも、戦闘の中で幾多の功績を残した者だけが、国王自ら叙勲を授けられた者だけが名乗れる騎士。

妨害工作をしようとしていた男の一人が言った。

「軍や刑軍、それに騎士はレースの監視役を務めているはずだ！

その騎士が、レース出場者に肩入れをするのは卑怯だぞ！」

「俺には、あの山羊飼いが山賊が出たと言つたように聞こえたのがね」

ランディーの眼光が男たちの抵抗する意志を奪い取つていった。

「山賊行為は重罪ですな。隊長殿」

「そうだな」

「ここは我々二人に任せて、そこな少年と少女の保護をしてください」

「ああ、そうしよう。森の中には、まだ山賊がいるかも知れんしな

……護衛していく。アサー！ マイル、二人に任せるがいいか」

「「光荣であります」」

妨害工作に来た男たちの半数以上は持っていた得物を地面に放りなげた。

「お前ら裏切るのか！ 金はもう貰ってんだぞ」

男たちの中でも一際、身体の大きな男が怒声を上げた。

「「やめておけ」」

アサーとマイルが馬上から降り男たちの前に立ちはだかった。

男たちの中には傭兵を生業にしている者も混ざっているようで、なかなか鍛えられた身体は身に着けている着衣の上からでも見て取れる。

アサー、マイルはどちらかと言うと騎士の中では身体の大きい方ではない。

それを見て勝てると思ったのか、武器を捨てずに持っていた四人が二人に向かつて得物を構えた。

それを見たアサーとマイルは間合いを詰める。その武器を振るう暇を与えなかった。

間合いに入るや否や長槍を蛇のように扱い相手の得物を絡め取った。

それでも二人より身体の大きな男たちが素手で向って走った。

アサーとマイルではなく、二人の後ろにいるチツチとアウラにだった。

二人の脇を擦り抜けようとした瞬間、喉元に丸太がぶち当たったような衝撃が走ると宙を一回転した身体が地面へと叩きつけられ男たちは、もんどり打って地面に蠢いていた。

男たちが二人の両脇を擦り抜け様とした瞬間。

アサーとマイルの鍛え抜かれた鋼鉄のように硬い腕が両脇に伸び、男たちの喉元を捉えたのだった。

二人は、ぴくりとも動かさずこう言った。

「「隊長いかがだったでしょうか」」

「ああ、見事だった」

「「光栄であります」」

アサーとマイルに見送られながらチツチとアウラ、ランディーは森の中へと入って行った。

T o B e C o n t i n u e d

ゝ 炎のレース 〉 第三部 第二話（後書き）

最後まで読んで下さいまして誠にありがとうございました。 >（
—） <

第三部 〉 炎のレース 〉 いよいよ開幕！

次回の更新もお楽しみに！

炎のレース 第三部 第三話

第三話

俺って天才？

森の中を抜け切り立った岩肌に表面を削り取って造られた細い道があった。

チツチが敢えて不利を知らながら追う家畜を二十頭にしたのは、ここを抜ける為だったのだとアウラは気付いた。

アウラがその事を尋ねようとした時、チツチが先に口を開いた。

それはランディーに向けられた言葉だった。

「それで西側の様子はどうだったのかなあ」

「まあ、ここで起きたような妨害工作は見られないが、群れを故意に乱しに掛かったりと些細な妨害をしながら、レースを展開している」

「そうか、俺たちはここに来るまで妨害には合わなかったけどなあ」

「ええ、無事にここまでは来れました……あのランディー様ありがとうございました」

アウラは腰を折りお辞儀をした。

「そりゃそうだ。人の通らない所をほぼ直線で抜けて、ここまで来たんだから妨害する者もいないに決まっている」

「これもレースプランだったのですね」

言われてみれば妨害をするライバルが近くにいなければ、妨害される事などないと言う事に今更ながらに気付かされる。

何時もチツチは、他のものたちとは違う発想を持っていて行動をするのだと、改めて思わされた。

「それで西の街の様子は？」

「まあ、お前の想像通りだ。通過証明の手続きは混雑し順番を待つ

間には、妨害工作として他者の家畜と混ぜたりして、それを分ける為に焼印の判別に時間が掛かる事を利用して時間ロスさせたりしているさ。恐らく東側も同じだろう。後、南に向かった者たちは少ない。最南端にある指定の街までは距離があり過ぎて様子までは分からん。お前が西の街に訪れる頃には早馬が到着して情報が入るだろう。」

チツチがランディーの話聞きながら、ロープを鞆から取り出してアウラの方に向って来ていた。

アウラは、細い道を登って行った時の落下防止に使う為を用意しているのだと思った。

「で、頼んでおいた事なんだけど、引き受けてくれるのかなあ。」

「ああ、既に他の騎士が取り掛かっている。それに人数も増えた事だし作業もはかどるだろうさ。」

「あいつらも使うのか。」

「当たり前だ。刑罰の代わりなら喜んで協力するだろうさ。」

「じゃあ明日の朝、ペグの街の近くにある例の場所に置いといてくれたら、うれしい。」

「分かった。間に合わそう。」

二人が笑みを浮かべ互いを見ていた。

ランディーが去りチツチは早速、山を越える準備に取り掛かった。準備を終えるたチツチがアウラの肩を掴んだ。

チツチとランディーが何やら話している間に、山越えの準備を進めアウラは大きめの山羊に既に跨っていた。

「暫くこの道を普通に登る。いい場所を見つけたらそこから一気に山を越える。サインスの街は、この山の真裏にあたるから、急がないと晩ご飯食べられないかもなあ。」

チツチが山羊の群れを動かし始め、山道の坂を登り出した。

登り始めた頃は思った以上に道は整い足場も安定していた。

しかし、それも長くは続かなかった。

二人は山肌に斜面が見え掛けたところで昼食を摂る事にした。

食事の際もチツチは何かを考えているようで、斜面を見ながら時折、パンを口に入れては、もそもそ口を動かしたり止めたりしては、首を捻り、またパンを口に放り込んだりしている。

アウラは水を獣の皮を縫い合わせた水差しから、木を削った器に入れるとチツチに手渡した。

チツチが水を受け取るうとした時、肩口に掛けていたロープが外れ地面に落ちた。

「うむ……困ったなあ、思ったよりこの岩肌に造られた山道の地質が上に向かう程、脆いし道も細くなって来たなあ。……このまま登ると山羊たちを縦列にしないと登れない。山羊は好奇心が強いから、はしゃがなきゃいいけど……」

チツチがアウラの方を見た眼が笑ってる。

「はあ、上手く山道を登り下れたとしても、チツチの考えている時間にはサインスに辿り着けないのでしょ？ これじゃ迂回して向かうのと余り変わらない事くらい私にも分かります」

アウラは溜息を吐き諦めを含んだ口調で言った。

「理解が早くて助かる」

「それで？ 思わせぶりに考えている振りをしていても始めから何か考えてたのでしょ？ 適当な斜面見付けたら、そこを登るとか……」

「アウラは頭がいいなあ、本当に助かる」

「チツチと山羊は登れても私はどうするのです？ こんな斜面を私は登れませんから、方法はチツチに任せます」

「ほんと？ それは助かる」

チツチが短く聞き直すと決してなだらかとは言えない斜面を指差した。

「楽な斜面じゃないけど、割としっかり締まった地層が露出している。脆い表土が崩れ落ちて下のしっかりした地質が表面に出てるんだ。それに所々いい具合の石や岩場が露出している」

「はいはい。登りますよ」

アウラは最初からそのつもりだったんでしょと思いつつ、諦めた様子で頷いた。

チツチが、にんまり微笑むのが分かった時、アウラは何か嫌な予感を感じた。

チツチがアウラにゆっくり近付いて棒結びに纏めてあった親指程の太さのロープを靴から取り出した。

アウラは、チツチの肩に掛けられていた地面に落ちているロープを指差し言った。

「ロープならそこに　！　きゃあ　何するんですかあ　」

「これは命綱だから、アウラを縛るのはこっちの細い方のロープ。跳躍力はヤック程じゃないけど山羊は好奇心旺盛で遊び好きだから結構、岩場を登るのは得意だし跳躍力も結構ある。こいつらは俺と一緒に旅してきたから、こういう場所も慣れている怯えないし何しろ元気がいいし良く跳ねる」

「ちょ！　痛い……って、チツチ？」

チツチがアウラを縛り上げると満足そうに碧眼の瞳を反らし笑みを向けた。

アウラの身体に綺麗な鼈甲へっしゅう模様が施されていた。

「ほら、俺の方がセンスがいい。俺って天才かもなあ」

得意げな顔をチツチが見せている。

「……確かに天災ね。これに何の意味があるのかしら？　チツチ！

答えなさい！」

アウラは頬を膨らませ、眼を尖らせてチツチを睨んだ。

「直ぐに山羊の身体に括りつけてアウラの綺麗な肌を傷めない為なんだぞあ。ロープ同士がいい具合にクッションの代わりをしてくれると思うけどなあ？」

チツチは、アウラの言葉に答えると縛ったアウラを一番若くて力の強そうな山羊の身体に更に天幕用の生地やロープ、毛布などを山羊の背中に巻くとアウラを背に乗せ、別のロープを取り出しアウラ

と山羊の身体をしつかりと固定した。

「ちよつと痛いかも知れないけど、そいつは俺が引いて誘導しながら、なるだけ暴れないようにして登るから心配する事はない思うぞ
お」

チツチはそう言うところ一番近くにある岩場に軽々と飛び上った。

とても普通の人間の出来る事ではない、とアウラが思っているところ、ロープを引かれた山羊がチツチの乗っている岩場へと飛び跳ね移った。

「きゃっ！」

「しゃべるな！ 舌噛むぞ！」

強い口調でチツチの声が返って来る。

アウラを乗せた山羊が乗ろうとしているチツチがいる岩場はそんなに大きくはない。このまま山羊が岩場に乗ればチツチは突き飛ばされる。

アウラがそう思った瞬間。

チツチは次の足場へと飛び移り口笛を吹いた。

山道でのんびり反芻していた山羊たちが、それを合図に斜面に向い跳ね斜面を登り出した。

各々、自分が跳躍出来る距離を知っているかのように次から次へと足場を移し駆け上っていく。

時折、脆い足場を踏みバランスを崩し落下しそうになるものもいた。

それを心配そうに見詰めながら、チツチは山羊たちを見守っていた。

落下しそうになる山羊たちを見つけては、ロープの先に輪っかが作られている、太めのロープを握るチツチの手が強く握り締められるのがアウラの瞳に飛び込んで来る。

所々で山羊たちを止め、チツチがその後を追いつながら急な斜面を登っていく。

それを繰り返しながら登り、時には山道を登りながら山を登った。

「街の方向は？ 分かっているのですか？ 随分、地図に細かく載ってない所を進んで来ましたから」

不機嫌そうにアウラが尋ねるとチツチは、街の方向をレース前に手渡された地図とチツチが腰に下げた鞆から、頑丈な作りの革のケースを取り出しその中から三角形をした物に棒状の物が付いた道具を太陽と地形に向け何かを地図に書き入れたいた物を見せた。

「ばつちりだ。裏斜面はなだらかだし一気に街まで下るぞあ」

アウラはチツチの持っている道具を見た事がなかったので聞いてみた。

「それは？ それに水ください」

「ほら、余分と思つていても水は必要だったろ？」

「これだけ布に包まれてたら汗も掻きます。当然喉も渴きます」

「余り、水分取り過ぎると、もよおすぞ」

「ばかあ！ ぜ、全部、汗になって出て行ってます！ それよりその道具は何ですか？」

「これは六分儀と言う物らしい。旅の途中で出会ったじいさんに貰った」

「そんな道具で方向が分かるのですか？」

アウラの知的好奇心に火が点いた。

「分かる。太陽や特定の星の位置を基準にして周りの景色、距離や地図を見て正確な自分のいる位置を割り出すんだ」

「チツチならそんな事しなくても分かっているのだと思つてました。循鱗の力の恩恵で、気配や嗅覚、視覚に……えっと、何とか把握能力が優れてるってランディー様からお聞きした事がありますし実際、不思議な体験もさせて貰いましたから」

「循鱗の恩恵があつても山の中や砂漠、広い湖なんかでは確実にはいかない。俺は人間なんだぞあ、一応なあ」

チツチがそう言つて微笑んだ。

アウラはチツチの発した言葉で胸の奥に支えていた不安が和らい

でいく気がしていた。

T O B E C O N T I N U E D

ゝ 炎のレース 〉 第三部 第三話（後書き）

最後まで読んで下さいまして誠にありがとうございました。 >（

―） <

第三部 〉 炎のレース 〉 いよいよ開幕！

次回の更新もお楽しみに！

炎のレース 第三部 第四話

第四話

美少女台無し

険しい登りと違い下りの斜面は切り立ってはおらず、山肌ではなく緩急のある斜面が続いているチツチと山羊たちは一気に駆け下った。

山の斜面を駆け下り陽が沈む前にサインスの街に到着する事は出来た。

しかし、一頭の山羊の背中の少女は、かなり御機嫌麗しくない様子である。

それもそのはず、山羊の背に縛り付けられたまま急斜面を駆け登った揚句、斜面とはいえ山の中の低い雑木の生える場所を山羊と伴に飛び跳ねながらの到着だった。

いくらチツチが誘導してアウラの体に掛る衝撃の少ない所を選んで来たとは言っても、無事で済むはずもない。

チツチが山羊の背中からアウラを下ろし通過証明の手続きに向かおうとした時アウラが、むすつとした表情と声でチツチを呼び止めた。

「チツチ！ 縄解いてください」

アウラは怒りを含ませた震える声で言ったが、チツチが振り向くと視線から逃げるように顔を背け俯いた。

「予定より少しばかり遅れてるんだよなあ、手続き直ぐに済ませてくるから、ちょっとだけ待っていてくれるかなあ」

「こ、このまま放つて行く気ですか？ ひ、人目もあるし恥ずかしいじゃないですか！」

チツチの呑気な口調にアウラは俯いたまま声を荒げた。

「どのみち、次のペグの街まで山羊に乗って行くんだから、そのままでいいじゃないかあ、縄は解くけど、手続き済ませたら直ぐに発つから、別のそのままでも俺は構わない」

「わ、私が構います！ 縄が肌に食い込んで痛いし……それに顔を拭きたいです」

アウラは語尾に向かうにつれ、小さな声になると恥ずかしそうに言った。

チツチが、やれやれと肩を竦めアウラに近付くとアウラはより、いつそう顔を俯けた。

「ちょ！ ちよつと待つて！ チツチ……でも……早くしてほしいかも……」

近付いて来るチツチをアウラは止めた。

「なんだ？ どっちなんだ？ 俺はどうすればいいのかなあ」

「チツチ……顔覗いちや……だめですよ？ 約束ですよ？」

「うん。分かった。で、どうすればいいのかなあ」

「縄を解いてハンカチ鞆から出してくれればいいです」

チツチが少し考えてから返事を寄こした。

「まあ、サインスの街には当分誰も到着する事なんてないからいいかあ、込み合わなければ手続きも早く終わるだろうし、それくらいは頼まれてもいいかなあ」

再び、チツチが近付き始めた足音が聞こえる。

「約束……覚えてます？ 顔見ちゃ駄目ですからね」

「これからずっと？ 見ちゃいけないのかなあ？」

チツチの寂しそうな声がアウラに聞こえた。

「そんな事ないですよ？ 見ても……好きなだけ見てもいいけど……今はね……」

「どうしてなのかなあ？」

「えつと……！ そう！ 山を駆け登ったり下ったりしただから顔が誇りや土で汚れちゃって……こんな顔を好きなチツチに見せたくないんですよ？ でも、約束破ったら仇討ちの時まで見せて上げな

いですからね！」

そう言うのとチツチは「分かった」と嬉しそうに声を弾ませ答えるとロープをアウラの上に掛けアウラと山羊の身体を繋いでいる縄を解き出した。

チツチが易とも簡単に結び目を解くと縄は、掛けられていた魔法が切れたかのようにアウラと山羊との戒めが解けていった。

アウラはロープの中から手を出すとチツチがハンカチを手渡してくれた。

少し身を動かしハンカチを手渡して貰おうとした時、掛けられていたロープが無情にも地面へと滑り落ちていった。

アウラの顔の正面には微笑みを浮かべたチツチの顔があった。

一瞬、表情を固まされたが、慌ててハンカチで口元を拭った。

チツチの眼には、美少女アウラの凄まじい顔を映し出している。

チツチの微笑みが固まっている事に気付き、アウラは顔を拭くと顔を真っ赤に染め俯いた。

「み、見ました？ し、仕方ないじゃないですか！ あんなに飛び跳ねられたら……涎くらい出ちゃいます……拭けないし……」

美少女台無しの顔を恋心を抱き始めている少年の前に曝してしまつたのだつた。

チツチの微笑みは暫く固まっていた。

凍結状態から生還したチツチが、アウラを山羊の背中から降ろすとアウラを縛っているロープの結び目に手を掛けようとした時、一人の頭には黒い布を巻き顔全体を黒い三角布で覆い全身黒尽くめの服とズボン、漆黒のロープを纏った人物が、チツチの傍に音もなく近付き、まるで空気のように立っていた。

年の頃は、その風貌からは見て取れない。背格好はチツチと同じくらいか、やや小さいくらい的人物。

誰かが寄越した妨害工作人員かも知れない、背中に緊張が走った。

チツチの縄を解きに掛ろうとしていた手が止まっている事が分かる。

アウラはチツチの様子を窺った。

チツチが得物を突き付けられている様子はなかった。

それよりも当のチツチに慌てている様子は見られなかった……と言っても、何時もぼんやりしているチツチであるからして、余りあてにならない。

黒尽くめの人物が、チツチの耳元に口を寄せた。

チツチに慌てる様子はない。それどころか耳を近付けたようにも見えた。

「アウラ。縄解くの後。少し用が出来た」

「えっ！ 少しってどれくらい？」

アウラは顔に焦りを見せ、小刻みに震えている。

嫌な汗が身体から噴き出してくる。

「うん。話は直ぐ済むけど、ついでに手続きの済ましてくるから、じゃあ！」

「ちよと！ チツチ、先に縄解いてえ！ チツチてばあ」

「直ぐ済むから待ってて」

そう言い残しチツチは黒尽くめの人物と手続き所のある方へと何やら会話をしながら、歩き出した。

アウラは、赤かった顔を青ざめさせた。

嫌な汗は何時の間にか、ひんやりした脂汗へと変わっていた。

「そんな……これじゃ……御手洗いに行けないよ……ズボン……失敗だったかなあ？ でも山越えだったし……チツチ、早く帰って来て……お願い間に合ってね」

アウラは身震いしながら天に祈った。

チツチが一刻も早く戻って来てくれる事を願って祈りを捧げるしか出来なかった。

チツチは黒尽くめの人物と歩きながら会話をしていた。

「お前！ 報告が遅いから探してみれば、何を呑気に放牧レース何かに出場している」

黒尽くめの女性が、潰れたかすれた声でチツチに問い掛けた。

「アスカ・シリング。俺って、そんなにのんびりに見えるかなあ？
これでも急いでるんだけど、手続き済ませて次の街に陽が落ちる前には着けるように、本当に急いでんだぞ！　嘘じゃないぞ」

アスカが大きな溜息を吐いて肩を竦めた。

「はあ……お前と言う奴は、まったく……わたしが言っている事は
そう言う事じゃない。わたしが言いたいののはだな」

アスカが文句を付けようとチツチに声を張り上げた時、黒尽くめの衣装に隠れた、たわわに実るやわらかい果実の谷間から蛇に四枚の透明な羽根を持った生物が顔を覗かせた。

「こら！　リヴァ、人がいる時は出るな！」

アスカの言い付けで大人しく胸元にリヴァは潜り込み姿を隠した。
「心配性だなあアスカは……あの情報ならランディーに報告は入れておいた」

「それで時期は？」

「恐らくレースが終わるまで奴らは動かない……が、レースが終われば、たぶん何らかの行動を起こすはずだ」

「冴える勘……てやつか？　それとも確かな情報なのか？」

「不確かな情報だ。俺が引き金になるからなあ　レースに勝てればの話だけどなあ」

「お前が負ければ、行動を起こさないとでも？」

「そうかなあ、俺が負ければ急いで行動に出る必要がなくなるって事だけど、俺は勝つからなあ　このレース……いろいろ事情があつて負けられない」

「相変わらず、へらへら笑っているくせに、自信たっぷりと言う奴だ……まあ、そう言う奴は嫌いじゃない」

アスカが片方の唇の端を上げ僅かに笑みを見せた。

「それで、旅すがら見た事を教えてくれないかなあ？　東から来たんだろ？　アスカ」

「まったく……お前には敵わないな。まあ、見た事を教えてやるく

らい構わない」

チツチの問いにアスカは苦笑で応えた。

T o B e C o n t i n u e d

ゝ 炎のレース 〉 第三部 第四話（後書き）

最後まで読んで下さいますと誠にありがとうございました。 >（

―） <

第三部 〉 炎のレース 〉 いよいよ開幕！

次回の更新もお楽しみに！

炎のレース 第三部 第五話

第五話

乙女危機一髪！

通過証明の手続きを終えたチツチは、アウラの下に向かい帰る途中の壁際にもたれ掛っている黒尽くめの人物と落ち合い話を聞く事になっていた。

初夏という事もあり夕方に差し掛かる頃だというのに陽は、まだ高い所にある。

アスカの話を聞きながら、アウラの下に帰り縄を解いてサインスの街を直ぐに出発すれば、深夜になる前にペグの街に到着出来る算段だ。

サインスの街からペグの街まで歩いても半日も掛からない距離。

「東に羊を追って行った連中は一日目の日が落ちる始める前えに早いは数は数か所を周り、通過証明を手にしたようだったが、街に出入りする為の入出許可を貰うのに何処の街も混雑していた。三か所の街に分散しているとは言え、その何十倍もの羊を始めとする家畜たちでごった返していたぞ。案外放牧レースに出場する者が多いのだなと驚いた」

「まあ、賞金の額が大きいから出場者も多くなる。その後も優勝者は優遇されるからなあ」

「妨害工作も次の街に向かう街道上や街中以外の所で起こるだろう。人目に着く所では群れを乱したり、故意に他人の群れを誘導して混ぜたりと、かわいいもんさ」

「東方面からの分散状況はどうだったかなあ？」

「そうだな。シュベルク経由の西行と南に動く者が目立っていたかな？ おい！ グリンベルの悪魔！ 北に向かうには、お前のよう

に無謀な賭けに出て山越えをするか時間を掛けて迂回するかのどちらかだが、どうして混雑を避け北に向かう者が少ないんだ？」

アスカが顎に手を当てると首を捻った。

「雨だ」

チツチが短く答えた

「それがなんだ。その雨が大きく影響するのかわ？」

「晴れなら別に時間のロスだけで済むが、雨に山間部で降られれば、街道やその近辺の地面のように踏み固められてないからなあ、下手をすると足止めを食らう。羊飼いや山羊飼いは天候を読んで遠い昔、放牧の旅を続けたからレース中盤頃に雨が来ると読んでるんだろ」

「お前は、読めなかったのか」

「馬鹿言うなあ！ 読んだから一番に北に来たんだ。十か所、全部の街を周り切る為にどうしても最初に北に来なければならなかったんだ。雨が降って山越えが出来なくなる前に」

「しかし、この先はどうする今度は西か東に向わなければならないんだろ？ 山を大きく迂回すれば時間を失い結局、同じ事じゃないか」

アスカの問いにチツチが唇の両端を吊り上げ微笑んだ。

「秘策を用意してある」

「何をするつもりだ！ お前は……、そういや東で柵が付けられた六頭立ての大型荷馬車数台に家畜を積んでいた奴もいたが、お前もそうするのか？」

「俺はそんな馬車持ってない。見れば分かるだろ？ まあ、妨害容認の言ってみれば何でもありのレースだから、見つかった時は減点されるかも知れないけど覚悟の上だろ。基本のルールはシンプルだ『どれだけ失わず多く早く周れるか』多く街を周れば原点数より加点の方がはるかに得だからなあ、それにのんびりしていて妨害に遭うよりリスクが少ないから色々知恵を絞るんだ」

「なら、お前は角笛で聖獣やら魔獣やら呼ぶ気か？ 呑気なお前が、特に何か知恵を絞っているようには見えないな」

「知恵は絞っているさ。角笛何か使って何だかんだと呼んだりしたら大騒ぎになる。奴らが予定より早く動き出すかも知れない。それは困る……それに、こここの所、たて続けに使ったから暫くは使えない。強い者と呼ぶには俺もそれなりの代償を払う事になるからなあ、身体が持たない。それで奴らとやり合う羽目になった時のこっちの戦力は整うのかあ？」

「ああ、ランディーの奴が手筈しているはずだ。そう言えば街に来る途中、山賊なんぞ捕まえ木を切り出してたぞ！ そんな暇もなかろうに」

「アスカ！ 西周りで来たのか？」

「そうだ！ ランディーに報告がてら来る羽目になった。まったく！ うろちよろ良く動く奴だ」

二人が会話をしながら歩く視界の先に、もじもじ身体を動かしたり小刻みに上下させたりと落ち着かない様子のアウラが映った。

「アスカあ、情報ありがとなあ」

「私は旅すがら見た与太話をしただけさ。騎士が参加者に加担してはいけないんだろ？」

「さっきの礼は仕事の情報分の礼。与太話ありがとうなあ、アスカあ、それと後の事よろしく」

チツチはアスカに微笑み掛けた。

「まったく、へらへらと……、それはいいとしてお前の連れの娘……様子が可笑しいぞ？ 熱病にでも掛ってないか？ 震えが酷いようだぞ」

ローブをしつかり纏いアウラが確かに震えているのが分かった。

「こら！ チツチ……早く縄を解いてえ」

チツチを見付けたアウラが泣きそうな声を苦しそうに張り上げ紫水晶の瞳を潤ませていた。

アスカとはその場で解散しチツチはアウラの下に向かった。

「チツチ！ 早く……もう限界です」

アウラは落ち着きなく足踏みをしながら紫水晶の瞳が潤ませ訴えた。

「あはあはあ、そういや昼飯から何も食ってないからなあ……？
そんなに腹が減ってるのかあ、アウラは食いしん坊だなあ」

「ちっ……がうう　！　早く縄解いてえ　、でないと間に合わないかも……」

「うむ？　そうだよなあ……アウラは食が細いもんなあ？　しつかり飯食わないから、だから病にでも掛ったんだなあ、震えてるけど熱でも出てるのかあ？」

「冗談で言っただつもりだったが、よく見るとアウラの顔色は青ざめているようにも見える。

やや、前屈みの姿勢で下腹部の辺りを落ち着きなく小さな手が動き時折、強く握りしめている。

内股をしっかりと強く締め、もじもじ小刻みに腿を擦り合わせている。

何処か具合でも悪いのかと勘違いしたチツチの手が、アウラの額に触れた。

異常なまでにじつとりとした汗の感触がチツチの手の平に纏わりついている事を感じた。

「熱は無いけど……　・　すごい汗だあ、ペグ行きは明日の朝に変更して医者に診て貰おう。場合によってはレースも棄権するしかないなあ、アウラごめんなあ……　山越えをしてアウラに無理をさせ過ぎた」

チツチがアウラを縛っていた縄に手を掛け解き始めた。

「大丈夫……じゃないけど……大丈夫ですよ。病気じゃないから医者には行かなくてもいいですよ……その代わり、出発ちよっとだけ待っててね。用が済んだら予定通りペグに向かいますよ」

「用って？」

「大した事ないの……あるけど……直ぐ済む小用だから気にしないで……それより早く縄……解いてくれますか？　もう限界です」

「ごめんアウラ痛かったろ？ 縄の触れる部分には厚めにしっかり当て布をしたけど思ったより斜面がきつかったし地盤も脆かったから山羊が少々あばれたからなあ。擦り傷してないといいけど……」
「まったりとした呑気な何時もの口調でチツチは答えている。」
「だ、大丈夫だから……縄、はあ、早くううう」
アウラはそう言いつつも焦りは増していく。

このままでは危ない！ 乙女の最大の危機が迫って来ている。

もじもじ動くアウラにチツチが尖った言葉で言った。

「そんなに動くと解けない。じつとして」

「だあ、だって……分かったから早く！ お願い！ 急いで」

既に我慢の限界が迫っている。これまで動いてみたり他の事を考えたり、魔術書で覚えた事を反芻して気を紛らわしていた。

もう直ぐ危機を乗り切れる、そう思いアウラは大人しくチツチに従った。

山羊の身体から自分の身体を離れた時のように魔法も如く縄が、するりと解けるだろう……と思っていた矢先、チツチの口から疑問を含んだ言葉が飛んで来た。

「……アウラ？ 縄の結び目弄った？」

「……うん、早く解きたかったから……どうしたかしたの？」
時折、息を喉に詰まらせながらアウラは苦しそうに尋ねた。

「結び目の解き目が固くなってるし解き目が分からなくなった……ロープを掛けている時は緩み辛く、解く時は、解き目を引っ張るだけで簡単に解ける結び方にしといたのに」

アウラの顔色が一気に青ざめる。

「えっ！ そんなあ……、チツチ、どうしよう……もう限界だよおおお……」

「うん？ 何が限界？ 腹減ったのか？ それとも何処か痛いのか？」

「……もう……れそう」

恥ずかしそうな表情でアウラは小声で呟いた。

「生まれそう？ 俺何もしてないぞ？ レースに勝ったらの約束だから、それまでは我慢する。約束は守る」

「違うううう！」

チツチは小首を傾げてぼんやり考え尋ねた。

「だから、なにが？」

「ばかあ！ 気づきなさいよお、勘が良いくせにこんな時は鈍感だから、御手洗いに行きたいのっ、おしっこ漏れちゃうううう 早く何とか解いてえ！」

アウラは涙眼でチツチを見つめた。

「ばかだなあ、それなら通過書の手続きしにいつてる間に行つとけばいいのに……あつ！」

チツチがアウラの服装を見て気付いた。

アウラになるべく怪我をさせないように丈夫な生地を服装をさせていた。

アウラは高原や広野を散歩代りに放牧をする時、何時も丈夫な生地のシャツに長めのスカートを好んで着ているが、今日は厚手のズボンを履かせた。直に肌が雑木や岩肌に触れても擦り傷をしないように気を利かせた事が仇となっていた。

滑落防止の為に太いロープを括れる為に腰の辺りと足の付け根にはしっかりと縄を巻いて両方の縄の間に縦に繋いである。

流石に股には縄を通してないが、この状態では履物のズボンはずらす事すら事はできない。

「チツチ！ もうだめえ……漏れちゃうううう！」

悲痛なアウラの訴えにチツチは素早く腰のナイフを抜き出し縄を切った。

「アウラ！ 頑張れ、こんな所で産んじやだめだ！」

アウラは身体が自由になると、既に探してあった公衆手洗い場へよろよろとした足取りで歩いては駆け出しながら向っていった。

「アウラ　　！　がんばれ！」

チツチの呑気な応援を聞きながら、割に整備された綺麗な公衆手洗い場にアウラは駆け込むと入口で人の背中と出くわした。

この辺りの街はどこもかしこも収穫祭で人出が多い。

サインスの街も例外ではなかった。

そんな事を考えている暇はない。手洗い場の前には五人程の列が出来ていた。運が良いのか悪いのか人出の割には少ない人数だ。

耐えるしかない！　もう少しの我慢。

アウラは自分にそう言い聞かせ耐え抜いた。

後一人。

一人前には黒尽くめの人物が背を向け自分の順番が回って来るのを待っていた。

何処かで見えた覚えがある衣装。

チツチと話していた黒尽くめの如何にも怪しい人物だ。

緊張と緊迫の中、更にアウラに違う緊張が走った。

チツチと親しいのかどうかは分からない。

会話をしていたが、ただいるだけでピリツとした空気が流れる歴戦の戦士が持つそれに似た威圧感を感じる。

着ている着衣も見るからに怪しい得たい知れない人物である。

チツチは無事に帰って来たのだから、敵や自分たちに害する者ではないのだろうと判断した時、強烈な刺激がアウラの下腹部を襲った。

手洗い所の先客が用を済ませ、黒尽くめの人物の順番が来ていた。

「お前！　チツチの連れの娘……もしかして震えていたのはずっと我慢していたのか？　私がチツチを連れ出してから……」

苦しそうなアウラを見た黒尽くめの人物が喉の潰れたしゃがれ声で尋ねて来た。

声は潰れて男のようだったが、出ている部分がしっかりと膨らんでいるしここは女性用の手洗い場だ。

アウラは「女の人だったんだ」と脳裏を走ったが何も言わず小さく頷いた。

「お先にどうぞ」

僅かに笑みを浮かべ、黒尽くめの人物が先を譲ってくれた。

アウラは「ありがとうございます」と言い残し礼も程々に手洗い所の個室に飛び込んだ。

T o B e C o n t i n u e d

ゝ 炎のレース 〉 第三部 第五話（後書き）

最後まで読んで下さいまして誠にありがとうございました。 >（
―） <

第三部 〉 炎のレース 〉 いよいよ開幕！

次回の更新もお楽しみに！

炎のレース 第三部 第六話

第六話

インヴィンジブル・イントルダ
姿無き不可視の影

アウラを待つ間、ペグの街に向う準備をしているチツチの傍に通過証明書の手続きをしていた男が近付き話し掛けて来た。

「サインスの街には小僧たちが一番乗りだ。正直驚いたよ。サインスとシュベルクの街の距離は、そんなに遠くない。しかし、あの山のお陰で大きく迂回して東西どちらかの街道を使ってサインスやペグの街には来るんだ。昔はよく山越えをした者もいたと聞くし山道も今よりもつと綺麗に整備されていたと爺さんに聞いた事はあるが、今はあの山道は荒れ放題でまさか山越えをしてくる奴がいるとは思わなかった。小僧！ 若いのに大した奴だ」

良く肥えた丸いお腹と身体にあるのかないのか分からない首に据わったまん丸の顔に生えた無精髭を掻き男は、にんまりと大きく口を開いて歯を見せた。

「それもレースが始まって半日過ぎた頃に現れたから街の者たちは皆驚いてたぞ！ まあ、その後、小僧が連れて来た山羊を見て妙な納得の仕方をしている奴もいたがな。魔物の力でも借りたのかなんて言う奴もいたが、ぶっ飛ばしてやった。わはあはあはあ！」

男は豪快な笑い声を辺りに響かせてチツチの力強く肩を叩いた。「痛い、痛いって、おっちゃんは嫌がらないんだなあ、俺が山羊飼いだと分かってても」

チツチがそう言うと男はチツチの肩を今度は軟らかく、ぽんぽんと叩いた。

「俺のじいさんは放牧はしてなかったけどな、他から見れば結構な数の山羊を飼っていてな。よく魔物使いだとか悪魔の使いだ！ な

どど罵られたらしいが、俺にはやさしい、ただの爺さんだった。魔物なんて呼べねえし悪魔でもねえ天使みたいに、よく皺くちやの顔に皺を増やして笑う爺さんだった……そうだな？ 小僧みたいによく微笑んでいたけ……、といけね！ そろそろ休憩が終わっちゃうじゃあな小僧頑張れよ」

男はそう言いつとチツチの頭をくしゃくしゃと乱暴に撫でた。

チツチは大きな丸い身体の男に向かって微笑を返したて言った。

「そんなに酷い雨じゃないけど、早ければ明日の陽が傾き沈み掛ける頃に降り出すから、山の地盤が緩い所には落石除けの柵を作って、備えておいた方がいい」

「はあはあはあ！ 面白い事を言う奴だ。分かった皆には伝えよう。収穫祭で浮かれてどうなるか分からんけどな。ありがとよ！ 小僧頑張るんだぞ」

男は大きな身体を揺らしながら大声で笑い、そう言ってレース用の通過証明書を発行している建物へと帰って行った。

暫くして黒尽くめの衣装を纏ったアスカが近付いてくると声を掛けて来る。

「言い忘れた事でもあるのかなあ、それとも俺が伝え忘れてるのか？」

「いいや、どちらでもないが、ところでお前の連れの荷物はどれなんだ？」

「アウラの荷物？ そんなの聞いてどうするんだあ？」

ペシッとチツチの頭がいい音を出した。

「痛い……、何するんだ？ アスカ。お前は次の任務があるんだろ？ こんな所で収穫祭楽しんでいいのかあ？ 俺は困らないけど、ランディーが困るぞあ」

チツチは頬を膨らませ拗ねた表情を作った。

「いいから、どれだ」

「なんだよ。これだけど、……それよりアウラは？ お前まさか！
ペシッ、アスカの手の平がチツチの頭を再び叩く。

「何も聞くな。それに何もしていない……今はな」

「ならいい。もしアウラに何かあった時には、アスカも姿無き不可
視イントルダの影の連中を潰してやる。この俺が」

引きしぼられた弓のように反れていたチツチの碧眼を薄く研ぎ澄
まし鋭い眼光をアスカに向けた。

ペシッ、アスカの手の平がチツチの頭を三度、急襲し良い音を出
した。

「はあ、勘違いしない！ 今の彼女は我々の保護対象だ、守り
こそすれ危害を加える事はしない。……ただこのままの彼女でいて
くれればの話だが……、それにチツチ！ お前の持つその騎士勲章
が何にを意味しているのか、本当に分かってるのか？ 我々、姿無
き不可視インドルダの影の役割を……？ もしかしてお前何も知らず、考えず
に叙勲したんじゃないだろうな？」

「くれると言ったから貰った。どうせなら食べるものが良かった」

「馬鹿が……大方、ランディーの奴に唆されたんだろう。はあ

！ まったく」

アスカが大きな溜息を吐くと付け加え言葉を継ぐんだ。

「その事は何れ分かるだろう……、それとだ。お前の連れが帰って
来ても何も聞かないいな。後、出発は少し遅らせる。時間はそう掛
からない。分かったな」

「分かった。どのみちアウラが来なきや出発はしない。アウラの体
調次第では、今から仮眠を取って夜中に出発してもいい」

「それで、荷物は？」

「これだけ」

チツチはアウラの肩掛け鞆と山羊の背に載せてある手荷物用の鞆
を差し出した。

「それでアウラの体調は良くないのか？」

「それは大丈夫だ。体調に問題はなさそうだが、少々へこんで元氣

がない。戻って来たたらやさしくしてやるんだぞ。いいな」

アスカは少し考えた後、両方の荷物をチツチの手から引き剥がし奪い取ると手荷物と人混みの中へと消えていった。

サインスの街を出たのはアスカが去って暫しの時間が流れてからの事だった。

アウラは何時も放牧に出る時の服に着替えていた。

レース前、チツチに多めに着替えを詰めていた鞆を取り上げられたアウラが持つて来た最低限の着替えだ。

肩を落として、とぼとぼ歩くアウラにチツチは声を掛けれずにした。

アスカから「なにも聞くな」と強く言われている事もあるが、それにしてもアウラの元気がない。

時折「はあ」と大きな溜息を吐いては俯いて歩いている。

一度、チツチがアウラの怪我を心配して大きめの山羊に乗るかと思聞いたが、アウラは首を横に振るだけで何も喋らず俯いているだけだった。

それどころかチツチが近付くと近付いた分の距離を離れた。

初夏という事もあり陽は長くなっているが、陽は地平線へと消え掛け辺りも大分薄暗くなつて来る。

それでも明かりを灯すには、まだ余裕がある。

サインスからペグに向かう街道は普段から人の行き来は少なくとも多いが街道程整備は整つてはない、どちらかと言うと山道に近くそんなに酷く荒れた所は見当たらないが、所々に穴が空き平ではなく波打っている。

この辺りの粘土の混じる地質から考え、推測を立てると波打った山道の近い街道の窪地に雨水が溜まり泥濘移動は困難になるだろう。

ただレースの出場者たちは、荷馬車を引いている訳ではない車輪が轍に取られ泥濘にはまり込んで難儀するといった事はないものの、泥濘の道を進むのはやはり困難である事には違い無く、余計な体力

と時間を費やされる事は明白だった。

時より山の中から鳥たちの囀る声が聞こえていた山道に近い街道も陽が落ち静まり、辺りには山羊たちの首にぶら下がっているカウベルの小気味良い音色と時折、聞こえる山羊たち鳴き声だけになっていた。

チツチは、鞆から革の袋を取り出すと道沿いに落ちていた拾った木の枝に布を巻き付け松明を数本作り上げた。

枝に巻いた布に獣から油分を絞り出した獣油の入った革の袋から流し布へと掛けた。

獣油独特の獣臭さの残る匂いが辺りに立ち込めた。

サインスでアウラを待っている間に用意しておいた火種を使い集めた木の枝と木の葉で火を熾し松明へと移した。

火の点いた松明をアウラに近付き渡そうとした今度は離れる様子は見られなかった。

辺りが暗くなって来ているせいなのか、考え事をしているのか、チツチが近付いた事に気が付かないようだった。

「アウラ。松明」

チツチが短い言葉をはするとアウラは何か考え事をしていたようで華奢な身体を、びつくと跳ねあがらせ、チツチと距離を取ろうとした。

チツチの手が離れようとするアウラの腕を掴んだ。

「いい匂いがするなあ　アウラは」

「えっ！……」

「離れてたけど、甘くていい香りがする。サインスを出した時からずっとしてた」

チツチは、表に出ている碧眼の瞳を弓のように反らしアウラに微笑み掛けた。

何時ものチツチの微笑みが松明の頼りない明りの向こう側に見たアウラは小さく息を吐き胸を撫で下ろした。

「どうかしたのかあ？ 急に」

「なんでもありません。チツチは鼻が利くから、ちょっと気になる事があっただけですよ」

アウラも微笑みでチツチに応えた。

「嫌われたんだと思った。山越えて酷い思いをさせたから……サインスでもアウラの様子に気付いてやれなかったから」

しょんぼりとうな垂れるチツチの姿を見たアウラは申し訳ないという思いに駆られた。

自分の事を気にしてチツチに寂しい思いをさせていたのだとアウラは思った。

サインスの街からここまで山羊の群れを追うのもチツチ一人に任せばなしていた。

話す相手がいる喜びを二人は痛い程知っている。

チツチは街を魔物に襲われた際、二人旅を長く続けていたその旅道中で誰よりも話をする事が楽しかった母を亡くし、また自分も幼い時に街を焼かれ、亡くした家族と羊の世話を終えた後の団欒が楽しかった事が今も大切な家族との思い出としてはつきりと残っている。

たまには、家族が団欒中に言い争い黙ってしまい静かな食事をした事もあったが、その時は怒っていても心の何処かに寂しさを覚えたのを思い出す。

「ごめんね……チツチ」

アウラは、うな垂れるチツチをやさしく抱きしめた。

「アウラ？ もしかして間に合わなかったのかなあ？」

チツチが弱々しい声で呟くように言った。

「えっ！ そ、そんな事ないですよ。チツチ……、そんな事言わないで……ほら、ペグの街までもう少しだけど、それまで、うっん……これからずっとだね。たくさん話そうね」

アウアは、そう言っただけでチツチを抱きしめる腕に力を込めた。

「だから、間に合わないとか言わないで」

「でも……間に合わなかつたんだろ」

「そんな事ないですよ」

アウラはチツチの身体を細い腕に力を込めて抱きしめ直した。

「……小用」

チツチが、ぽつりと呟いた。

「えええっ！……チツチのばかあ」

からん からん からん

揺れる松明の明かりだけが、頼りなく揺れる街道の暗い闇の中に
小気味よい鐘の音が鳴り響いた。

To Be Continued

〵 炎のレース 〵 第三部 第六話（後書き）

最後まで読んで下さいますと誠にありがとうございました。 > (

—) <

次回の更新もお楽しみに！

炎のレース 第三部 第七話

第七話

英雄との約束

夜も更けた頃、当然出場者など誰一人として来ていない北方面を周る二人は、妨害にも合う事も無く無事にペグの街に着く事ができた。

山越えの前に出場者の誰かが用意した妨害工作者はいたが、運よく？ ランデーたちのお陰で時間を大きく失う事もなかったのだから、危険な賭けをして山越えをした甲斐もあったと言うものだ。

チツチの読み通り北を最初の目的地に向っていた者がいなかった事も大きい。

世の中には、いろんな事を考える者や用心深く先手を打つ者もいるもんだが、その点で言えばチツチの方が一枚上手だったようである。

その結果。当然他のレース出場者から、ねちっこい妨害を受ける事はないし通過許可書の手続きもチツチたちだけなので混雑に会う事もなかった。

ペグの街でも当然、突然現れ通過許可書の手続きに来た一番乗りには通過書を渡す人たちは目を丸くして驚いている様子だった。

皆の様子は、山を大きく迂回して回らなければならぬ北方面には殆どのレース出場者らがこんなに早く訪れはしないだろう、と思っていたのだから、初日に訪れたレース参加者に驚くのは無理からぬ事だったのかも知れない。

迂回すれば一日半から二日の時間的ロスを背追う事になる。来るだけならそれでいいが、来たという事は帰りにも同じだけか、それ以上の日数を要する事になるからだ。

来る時には体力に余裕があっても帰りは疲れが徐々に現れ家畜を追う速さは落ちてしまう。

家畜の中でも馬を追う者なら作戦上北に向かっている者がいるかも知れないが、早馬を出す軍隊のように目的地まで、その馬が持てばいいなどと考える訳もなくレース参加者が家畜である馬を長距離駆け続ける事などできないのだ。

レースである以上、家畜のそれぞれの家畜に合わせ、一定数を失えば失格になるし家畜を失う事は下手をすれば、その後も無能の烙印を押されかねないのだ。

馬は機動力に優れている為、他の家畜より失う減点も頭数も厳しく、無事に連れ帰っても一頭当たりの得点も加点も少ない上に早く周った日数による加点も少ない、馬より高い得点が定められている家畜を連れた参加者がゴール時に同じだけの通過証明書を集めていれば、その時点で負けが決定してしまう。

もう一つ街の者たちを驚かせたのはサインス同様、山羊飼いであった事と牧羊犬や群れを追う馬も持っていない少年と少女であったからだった。

チツチは手続きを済ませると明日の出発の為に準備を始め出した。

「アウラ　！　ここに書いてある食料の調達を頼めるかなあ」

「自分で行けば」

アウラは軽く頬を膨らませ、むすつとした顔で返事を返す。

折角、自分の事を反省してチツチと伴に頑張ろうとしたのにあれじゃ台無しじゃない。

せめて、黙っていてくれれば清々しい気持ちで協力で来たのに……でも、と思う。レディに対する気使いのないチツチが悪いんだから……と思った所でアウラは思い直した、その時チツチから思いも

よらぬ言葉が返って来た。

「アウラ……お前、誰の為に……何の為に放牧レースに出場したんだ？俺が勝手にアウラをパートナーに登録したからか」

何時にないチツチの冷めた声色だった。

怒ってる……何時ものんびりと微笑むチツチが怒ってる。

自分は、何処かでレースの事より領地に戻る何日も前から、顔を見ていなかったチツチが傍にいる事の喜びが大きく、気持の大半を占めていた事に今更ながら気付く。

チツチが屋敷を訪ねてくれた時、ベッドの中で涙を流した。泣く度に打ちつけた身体が痛んだが、チツチは……方法は、その……別にして介抱を一生懸命してくれた……方法は、その……なんだけど。

プラムの為に、わざわざソルシエルまで呼んでくれてプラムの遺体が傷まないように、なるたけ生前に近い状態を保つ為に魔法陣まで施して貰いプラムの姿を見る事が出来き埋葬にも立ち会えた。

もしあのまま、プラムを放置しておいたら使用人の誰かが埋葬してくれただろうが、あんなにも見晴らしの良い場所に埋葬し墓石に素敵な言葉を残しては貰えなかっただろう。

「俺はプラムの為にレースに出る事を決めた。プラムはお前とレースに向けて沢山訓練してたんだから、学園にいる時もお前と散歩に出る時も何時も……何時も……それにアウラが困ってると思ったからだ。アウラを山羊追いのパートナーにしたのはお前には、どうしても阻止したい事があって頑張っていたからだ。俺一人が出場したら、お前の思いは何処に行ってしまうんだ？プラムは何の為にあんなにもお前と頑張ったんだろうなあ？きつと、このレースにアウラと出て勝ちたかったんだろうなあ」

アウラは、何も言い返す事が出来ず両膝を組んで腿に腕を回し膝の間に小さな顔を埋めた。

「ごめん……、チツチ」

アウラは蚊の鳴くような声で呟いた。

「じゃあ！ これ」

チツチが傍に来ると次の街まで行く為の食料と必要な材料が書かれた牛の皮で作られた羊皮紙を差し出している事が顔を上げていないアウラには分かった。

アウラは暫くチツチの顔が見れなかった。怒った顔のチツチは見たくない。

これまで何度かチツチの怒っているかも知れない顔や自分の為に怒ってくれている顔は見て来たが、自分に向けられている怒り顔を何故か見たくなかったのだ。

もしかしたら近い将来、遠い未来、何れ本当に見る事になるような予感がしていたからだった。

アウラが顔を上げた時、チツチは何時もの微笑みを浮かべていた。アウラは苦笑で返すと羊皮紙を受け取り書かれた物を見て眼を皿のようにした。

羊皮紙に書かれていたものは、次の街までの最低限の食料と細かい日用品。

それに裁縫道具、しかも絨毯を縫える程の物が必要だと書かれ大量の縫い糸とそれに大量のロープ、大量の厚手の布だった。

布の材質や糸の太さ、針の大きさまで細かく書かれていた。

そして最後に婦人用の洋服一着。

「この時間からだ大変だと思うけど品物は揃い次第、取りに行く」と店主に言っておいてくれ、俺はこれからそれらを運ぶ荷車を調達してくる」

チツチが、そう言い残すと革の財布を投げて渡した。

養女とは言え、貴族の娘である自分でも見た事がないくらいに革袋の財布は、ごつごつ歪に変形している。

いつぞや、ランディーの副官がチツチに差し出した物よりも一回り大きかった。

「チツチ！ このお金どうしたの？ レースに出る前は持ってなかったじゃない。チツチまさか！ あなた」

「その金は、まあ、アウラが思っているような事をして手にしたもんじゃない。労働に対する報酬ってやつかなあ？ サインスでアスカから渡して貰ったものだ」

「チツチ……いったい何してたの？ いったい私の知らないところで何者になっちゃったの？」

「内緒だ……それとアウラの知っているグリーンベルの悪魔で事になっている……今は違ったアウラのシユヴァリエだっけか？」

チツチはそう言い、おどけた様子で微笑んでいた。

アウラが買出しと手に持てない荷物の買付を済ませ、チツチを待っていると夜も遅くにチツチは荷車に揃えられた荷物を載せアウラが眠っている天幕の傍で荷車を止めた。

昨夜、ペグでも一番の商会に赴いたアウラが持っていた羊皮紙を見た商会の主が荷場の男に声を掛けると早々と準備させ、瞬きをしている間に注文の品を揃えたのだ。

アウラの持っていた革の袋を見て、にやけた表情を見せている商会の主は些か気に食わなかったが、店主はチツチの探し出ている荷車が見つかり次第持つてくるようにとアウラに告げた。

アウラは、商会を後にし天膜に戻り山羊の様子を見ながら仮眠を取っているとチツチが、ぼろぼろの荷車を引きながら天幕まで引いて来た。

アウラは、商会主の言葉を告げるとチツチと伴に商会に戻り、すぐさま積み込みを済ませた。

無論、荷揚げ場の男たちが全て載せてくれたが、ぼろぼろの荷車を見て修理と補強をしてくれると言って笑っていた。

荷揚げ場の男たちは荷物を盗まれないように、この場に置いて、

荷車の修理が済むまで仮眠を取れ」と言い無償で修理と補強までしてくれると言う。

少し疑い、不思議な感じはしたが、レースの出場者の中でペグの街に一番乗りした二人へのサービスと言って喜んで様子だったので、そのまま商会の広場に天幕を張らせて貰う事も出来た。

無論、沢山の買い物をして貰った、上客であった事もあるだろう。収穫祭で朝まで賑わう街中で金や沢山の荷物を持ったまま野宿をするのは、荒野で天幕を張るより危険かも知れない。

「さてと……出発だ」

チツチが、荷車を牽き街道に出るとその街道を外れ山の麓の方へと方向を変えた。

「チツチ！ 次の街は街道を下って行けば一日でいけるのですよ」

「そんな事は分かってる……俺の予定では、昼前に次の街ベールングとその日の夜までに出来れば残りの二つの街も周る予定だ」

「それは、いくらなんでも無理です。西側を周るだけでも二日は掛るのですよ？」

「まあ、心配しなくていい。なんとかする名案があるから」

チツチがそう言うとは時もの微笑みをアウラに向けた。

To Be Continued

〵 炎のレース 〵 第三部 第七話（後書き）

最後まで読んで下さいますと誠にありがとうございました。 > (

—) <

次回の更新もお楽しみに！

く 炎のレース く 第三部 第八話

第八話

夢の破片 かけら

チツチが川沿いにある木々の生えた場所に来ると足を止め辺りを見渡した。

「あれ？ 予定じゃこの辺に丸太の山が出来てるはずなんだけどなあ」

首を捻って、きよろきよろ辺りの様子を窺っていたが、その内に表情を引き締めると神経を研ぎ澄まし辺りの気配を探り始めた。

「いやあつて、チツチの表情が何時もの笑みに戻った。

「なんだ。あつちか！ ちょっと到着が過ぎたのかなあ？ それともランディーの手廻しがいいのかあ？」

独り言の様に呟き、チツチは河原の方へと歩き出した。

「チツチ！ 待ってください。私も一緒に行きます」

アウラはチツチの背中を追い掛けた。

陽は、まだ顔を出しておらず辺りは、まだ薄暗い。

闇を物ともせず歩くチツチにしてみれば何と言つ事のない暗さかも知れない。

しかし。

アウラには、まだ夜と然程変わらない暗さだった。

「きゃっ！」

チツチの背中に追いつき腕を掴もうとした時、河原の不安定な足元に転がっている石に蹴躓き、アウラは前のめりに倒れる格好にな

った、腕を掴もうとした小さな手がチツチの腕を掴み損じる。

アウラの手の平が、無情にも闇夜の空間を掴みチツチの腕をかすめアウラの手が追い越して行く。

「えっ……?」

アウラが石の転がる河原に倒れる事を覚悟した時、チツチの身体が倒れ掛けていたアウラの前に滑り込んで身体を支えてくれていた。

丁度、正面から抱き合う恋人のように。

「あ……ありがとう……」

続け様にドジっ子ぶりを見せてしまった恥ずかしさと顔を上げた位置にある、チツチとの視線が交わる心地よい恥ずかしさの両方で頬を赤らめ俯いた。

まだ辺りは暗くアウラの頬が赤く染まっていた事にチツチの眼を持っただけでも気付かなかったようだった。

一瞬の出来事の後、まだ短い時が流れただけ、しかし、アウラはチツチに抱きしめられている時間が、もう半日くらい過ぎたように思える程長く感じていた。

闇の向こうをに揺らぐ心許無い明りに気付いたチツチが、アウラから支えていた腕を離れた。

「あっ！」

不意にチツチの腕が離れると思わず声を上げてしまった。

アウラの声に気付いたチツチが尋ねる。

「大丈夫かあ? どこか打ったかあ」

「う、うん……大丈夫」

小さく頷くとチツチの手の平が、細い触れば溶けてしまいそうなアウラの桃色の髪を撫でた。

チツチがアウラの手を取り河原を下り始めて暫く歩くと闇の中から、聞き慣れた声が聞こえてくる。

「随分遅かったじゃないか？ 山羊飼い」

「もつと早く来れたらここで天幕を張っていた。これでもぼろの荷車を直してから、うるさい祭囃子まつりはやしの中で仮眠をとって急いで来たんだぞお」

「それだけか？ 本当はアウラに山越えをさせる無茶をしたから彼女の回復と体力に合わせてゆっくりしてたんだろうがね」

ランディーがそう言うつとアウラの頭をやさしく撫で、にっこり微笑んだ。

「ラ、ランディー様……」

「そうじゃない。アウラは何時も訓練を怠らなかつたから体力に問題は無い。ただ……ペグの街でいろいろとあつて準備が遅れた。俺のミスだ」

「いろいろ？」

「ああ、いろいろだ。アスカに会って話をしたし……それにアウラが」

からん

「チツチ！」

「痛いなあ、話は最後まで聞くもんだ。初めてアウラに出会った時も言つたような？ 言わなかつたような？」

「チツチ！ あの事は絶対に言つちゃ駄目だからね！」

口に手を添えチツチの耳元で小さく呟いた。

「あの事？ ……つてなんだ？」

チツチが首を傾げた。

「わ、わわ忘れたなら、それでいいです……」

アウラは、ほっと胸を撫で下ろした。忘れてくれているならそれでいい。二人の思い出にはしたくない事だから……が、自分は忘れないだろうけど……と思つた時。

パンと拳を手の平で打つ湿り気を含む乾いた音が辺りに響いた。

「あつ！ 思い出した！ アウラが」
ゴキツとチツチのこめかみから鈍い音を発て地面に膝から崩れ落ちた。

「チツチ　！ 私、粗相なんてしてないからね！　覗き魔、変態、エッチ！　ばかあ　！」

フルコースの呼び名を口走りながら、顔を真っ赤にし地面に横たわるチツチを何度も何度も踏みつけた。

「粗相？　山越えの時、山羊の背にでも乗って酔ったのかね」
ランディーが頬笑みを向け言葉を続けた。

「それは災難だったね。アウラ」

「は、はい……ランディー様……」

アウラは俯いたまま恥ずかしそうにそう答えた。

気を失い、顔の腫れ上がったチツチをアサーとマイルが脇の下から持ち上げ、悪戯をして近所のおっさんに捕まった悪ガキのような恰好で吊られながら、チツチが予定していた物が置かれている場所まで移動した。

チツチは暫くしてから息を吹き返しペグの街で仕入れた厚手の丈夫な布と裁縫道具で縫物をしながら小声で何やら、ぶちぶちと呪詛を唱える魔術師のように呟いている。

「最後まで人の話を聞かないから……、アウラは」

「ごめ　ん、チツチ。その事は、何度も謝ったじゃないですかあ」
「俺はアウラに山越えさせる無茶をさせたから、いくら訓練をしていて普通の女の子より体力があるアウラでも無理をさせないように長めの仮眠をとってたと言おうとしたんだぞあ！」

チツチは、晴れ上がった顔でアウラを睨んだが、何時もは弓のように反れる左眼の碧眼は腫れ、薄く僅かに開いているだけで、隙間から漏れ出すその眼光から睨んでるとアウラは判断した。

「で、でも、その後言おうとしたでしょ？　誰にも言わないって言ったじゃないですかあ！」

「俺は何も言っていないだろ？ 忘れてたのに、アウラが思い出させるから」

「私のせいにするのですか！」

「だって……、自滅したのはアウラだぞお？」

「……そんな事ないもん……、私が自滅しなくてもチツチが言おうとしてました！」

口喧嘩をしながら布を縫っている二人から少し離れた場所で布を手早く繕っていた人物が言い争う二人に声を掛けた。

「夫婦喧嘩は犬も食わないって言うが、若い二人の喧嘩は女神と恋敵が喜ぶだけですうぜ」

二人は声を掛けた人物の方に振り向くと野太い声から身体も大きい騎士かと思っただが違った。

その男は二人が山越えをする前に襲ってきた男たちの集団にいた人物だった。

ランディーたちが来て直ぐに得物を放った数人の内の一人がそこにいた。

その男が声を掛けるとチツチたちの見えない場所から大きな音を発して作業していた残りの男たちが集まってくる。

その男たちも早々と得物を捨てた人物たちだった。

「そっちはどうだ」

二人に声を掛けた男が集まって来た男たちに尋ねた。

「まあまあ、できあ。騎士さんたちが持ってきた、へんてこな、からくり付けてたから、あれが精一杯とこでしょう。後はそいつを張るだけでさあ」

男がそう言っただけで衣服に着いている木端を払った。

「向こうで何してるんだ？ 俺はこれを縫い上げたら」

「その作業は俺たちが済ませておいた。つっても突貫工事だからあれで精一杯だな」

「だから……？ もしかして作っておいてくれたのかあ？」

チツチが腫れ上がった唇から出した籠った声で尋ねた。

「ああ、騎士さんたちに話を聞いてな。何でも小僧が隊長さんに俺たちは、山賊じゃないと耳打ちしてくれたうえに、得物を捨てた俺たちを罪に問わないようにと言ってくれたらしいじゃないか。まあ、その礼さ！」

「早く見たい！」

チツチは、おもちゃを拵えて貰った幼い子供のように、はしゃぐと音のしていた作業場へ駆け出そうとしたが、男の丸太のように太い腕に首の裾を掴まれた。

「まだ、最後の仕上げが残ってる。素人にうるちよろされると邪魔だ。ここでこれを仕上げておいてくれ」

木端を払った男がそう言い残し作業場へと戻っていった。

「出来上がったからのお楽しみだ！　しかし、あんな物を一人で、しかもたつた一晩で作ろうとしたのか？　小僧」

男は呆れた顔をして肩を竦めた。

「そつだ！」

チツチは、満面の笑みを浮かべ短く答えた。

「はあ、あきれるねえ。まあ、俺たちは職人だ！　お前さんの想像以上の物を期待しろ！　立派な山羊用の柵も付けておいてやつたぞ」

男が豪快に笑うと布を繕い始めた。

「アウラ楽しみだなあ、それにしてもアウラ繕い物上手だなあ」

「そ、そう。ありがと……小さい時からやってたから……いい、いいお嫁さんになれるかな？」

顔を赤らめアウラは恥ずかしそうに俯くと腿の辺りで人差し指をもじもじしながら小さな声で言った。

一方、チツチは男の話を聞いて早く見たい気持ちで嬉しくて仕方がないようで、アウラの問いが聞こえていたのか振り向いて言った。
「アウラ　！　手洗い場が付てるといいなあ」

チツチが、恐らく微笑んでいるだろう、腫れ上がった顔をアウラ

に向けた。

「もう！ ばかぁ ！」

からん からん からん

闇夜に地平線から白い光の膜が天に向い広がって行く。

もう暫くすると陽は地平線から顔を出しこれから更に苛酷さを増すだろうレース二日目の幕が上がる。

T o B e C o n t i n u e d

〵 炎のレース 〵 第三部 第八話（後書き）

最後まで読んで下さいますと誠にありがとうございました。 > (

—) <

次回の更新もお楽しみに！

炎のレース 第三部 第九話

第九話

西の街へ

上流に近い所を流れるべールング川の幅は、シュベルクの東を流れているシュベルクの川幅程広くはない。

シュベルクは、大陸の北に位置する場所にあるイリオン王国の更に北に位置している。

大河の広がる南方の国から運ばれてくる様々な物資。

言わば、陸路の街道が整備された陸も交通網なら、川は高速道路に匹敵する一度に大量の貨物を運べる貴重は交通網とも言える。

南方の国を流れる大河は、対岸が見えない程もある。

その川幅は幾つもの川の流れが北の山脈から集まり一つの大きな流れとなって海へと流れ込んでゆくのである。

シュベルク川は、比較的川幅も水深もあるのだがそれに比べ、べールング川は水深も浅く大きな船は川を下れない。

チツチは眼前に置かれた物を見て何時もの微笑みを更に頬を大きく釣り上げて嬉しそうに眺めている。

待ち伏せをしていた男たち数人が、河原の上に丸太を水の流れる方向へと並べ木の実から絞り出した油を敷いた丸太に、たっぷり撒いている。

「すごいなあ　！　これ一晩で造ったのかあ？」

チツチは、信じられないと言った顔？　をして見入ってそれを見つめている。

「どうせ、筏いかだでも組んで西に下るつもりでいたんだろ？　小僧」

「ああ、筏に帆を張って一気に西のジールに向かい、そのまま南下

するつもりだったんだ。それに山羊を乗て」

チツチの引いていた荷車を見た男は、にやりと笑って言葉を続ける。

「俺たちは元船大工だ。丸太は切り出してあつたんだがな。間に合わないと思つて作業場に眠つていた船を引つ張つり出して来てやつた。それに騎士の連中が持つて来た凶面と見た事もない、からくりを取り付けたが、一晩ではこれで限界だった」

「すげえなあ……、これつてもう立派な船じゃないかあ、ありがと！ おつちゃん」

「小僧！ あのからくりは何だ？ 無数の車輪やそれを組み合わせたようなものは？ 他にも見た事もないような物が沢山あつたが？」

「あれは俺が考えたものだ。でも、俺はレースの事もあつたから作る暇がなかつたけど、学園の錬金技術科の生徒でエリシャと言う名の友達が代わりに作つてくれたものだ」

チツチは、得意げに胸を張つて誇らしげに言った。

「あと、小僧の荷車に載っている物から大体想像はつくだが、いくら流れが緩やかと言つても素人が造る筏じゃ、南まではもたんたるさ。俺たちを捕まえた騎士たちが木を切り出してつたんでな、聞いてみたら筏を造る材料だと言つたんで俺たちがもつとましな物を造つてやつたのさ」

男は一度言葉を切るとチツチに尋ねた。

「小僧。操船は出来るのか？」

「旅してた頃に元船乗りの爺さんが教えてくれた。その後、爺さんの代わりに船で荷物を運んでいた事がある。今考えたらこき使われていたような気がして来たなあ」

チツチは小首を傾げて頬を膨らませた。

「知っているかも知れんが、平底の船は喫水が浅い。水面に浮かべれば不安定だ。こいつは、ここいらの川を航行させる小型船、喫水が浅い平底に近いと言つてもそれなりにはあるがな」

「ああ、知ってる。そこでちよつと手を加えてほしいんだけど……、

いいか？」

「まあ、保障は出来ないが外着けで済む事なら、やってやる」
チツチが男を手招きすると耳元で話した。

「なるほど、船底ではなく、両脇の船底の横角に長いキールを角度をつけて水中に伸ばして付けるのか！ そいつで水面での安定性と水の抵抗を稼ぎ帆が受ける力を効率良く使って船足を増そうと言うのか？ 面白い！ 任せろやってやる。陽はもう直ぐ昇る。それには間に合わんが出来る限り早く付けてやる！ いや、間に合わせる」
「帆の艤装もしたいし、そうして貰えるところらしい。少しのロスなら十分取り戻せる。風もいい具合に吹き出したからなあ」

船に夢中になっていているのを森と川原の境目辺りで膝を組んで見ていたアウラの頬は膨らみ、眼を三角に尖らせている事にチツチが気付いたのはその直後だった。

川原と森から迫り出した境目に出来ている低い段差にチツチが腰を下ろし、そのまま草むらに上半身を倒し寝そべった。

「出来るまで仮眠をとっておこう。アウラ」

「楽しそうですね？ チツチ」

膨れた頬が空気を吐き出しそう言つと眠りに就こうとしているチツチを見て細くした眼の上をなぞっている細く形の良い眉を吊り上げて頬を更に膨らませた。

「はあ」

アウラは自分のしている顔に気付き、かわいらしい溜息を吐いた。
少し前にも思っただはずなのに……。

レースに集中しようと、そしてプラムとシュベルクの為にも優勝しようと思いを引き締めたばかりなのに、チツチに相手をして貰えず放って置かれると、どうも苛々してしまう。

心の奥底の何処かでは、チツチの事を恨んでさえいる自分もいる事に気付いている。

それはチツチも同じで時折、そのような事を口にする。

二人が仇同士であると言う明確な証拠は今の所ないので『かも』
知れないと思う気持ちとチツチの言うように、二人にとって良くも
悪くも、それは切っても切れない二人の絆。

小さな恋心がそれを否定し何時も押し殺している事にアウラはも
う気付いている。

出来る事なら……普通でいいから……もっと……。

「はあ」

アウラが、もう一度溜息を吐いた時チツチの声が聞こえた。

「夢」

チツチが返した言葉にアウラは、はっとし我に返る。

二人の成し遂げたい想いとは違う、チツチだけの純粹な夢。

『大きな船を手に入れて世界中を周りたい』

アウラは自分の夢を考えて顔を赤らめた。

幼い頃、ランディーに助けられ騎士に憧れチツチと出会うまでラ
ンディーに対する憧れを恋だと思っていた。

何時か綺麗になってランディー様のお嫁さんになりたいと言う、
かわいらしい夢……。

でも、今は……。

「おやすみ……チツチ」

アウラは小声でそう言くとチツチの隣に寝転び、寝息を立て始め
たチツチに身を寄せ瞳を閉じた。

地鳴りのような声に二人は夢の世界から引き戻された。

「でかメロン！ あれ？」

「小僧。完成だ！ 頼ませた頼まれていた物を付けておいたが、溝を付けて嵌め込んで数か所で組み合わせた所を楔を打って固定してあるが、突貫ものだ。小僧が望むだけの働きをしてくれるかは分からない」

元船大工をしていたと言う男が天に響く程の声で言った。

「うむう？ ありがと……おっちゃん」

左眼を擦りながら、寝ぼけ声を出すとチツチは上体を起こした。

「舵に改良を加えておいた。舵は無風の時には櫓こになるよう振り幅を大きく取っておいたが、その分操作も微妙で困難になる。舵の予備と竿も用意しておいた」

「櫓にもなるようにしてくれたのかあ？ それは有難い。上流は川幅が狭い、この船の帆の艤装は微風に弱いから助かる。感謝を表す言葉がこれしか今は見つからない、ありがとう、おっちゃん」

「それと準備の良い騎士たちと操船を楽に出来るように、からくりを作ってくれた友達にもな。騎士たちが一揃いの道具も持っていたから造れたようなもんだ。本当は中立の立場にある警備の騎士が個人に加担するのは不味いんだろ？ それを今日、明日は非番だからと言って多くの騎士たちも手伝ってくれたんだ。必ず勝つて！ がんばって行つてい！」

「おっちゃん……」

寝ぼけたチツチの背中を男の大きな手の平が叩き気合いの入った音が陽が地表から離れたばかりの空と森の中へと木霊した。

船は既に岸と川の流れの狭間で不安定に揺れていた。

船の大きさと言うとベールングで漁業を営む平均的な漁船の約二・六倍以上あり、河口から荷物を載せて運ぶ小型の商用船よりは小さい。い。

ベールング川を航行する船は小型の商用船と漁船のみで喫水の深い大型船や中型船は、これから向かう街の下流にある今回のレース

の最南端リスブルの街までしか川を上れないので行き交う時に難儀する事もないと思われる。

大方の小型船は二十フィール（約七メートル）以上で上流まで上る船舶は平均二十五フィール（約七・五メートル）の物が多く、マストはメインが一本と船尾側に三角帆を張るマストが装備されている。

この辺りの小舟、漁船の大きさは約全長七フィール（約二メートル）前後、一番広い部分の幅は二フィール（約六十センチ）前後の物が主流でチツチの船の大きさは平船底の船に近く、全長約二十フィール程で先端部の幅は六・三フィール（約二メートル）、一番幅の広い部分は約十五フィール（約四・五メートル）程で、先端に向かう程、急な弧を描き細めて中央を広げた肥満型の造りになっていた。

中央とその船尾側には普通の小型船より見るからに短めのマストが二本立と後部にマスト一本が立てられたマストに、アウラと繕った継ぎ接ぎの帆が付けられていた。

山羊二十頭を載せるには最低限の大きさに抑えた造りで甲板を半分程、掘り下げた所が山羊の乗る場所となっていてスロープと柵が設けられていた。

船の舷側にタラップを掛けると山羊たちをアウラと共に巧みに誘導し船の中程に造られた柵の中に入れ柵を閉じた。

「親方、言っちゃなんですけど……あれを一人で操船するのは無理ですぜえ。竿舟なら一流の船乗りだったら荷物を載せて川も上れるでしょうが、身体の小さな小僧には無理です。メインと他の二本マストの帆を調整しながら舵をどうやって操舵するんです？」

「小僧は、筏でそれを造りやるつもりだったんだろがな。あの船の設計図を騎士の隊長に渡された時、帆の形に驚いた。からくりとその帆の艤装にもそれを出来るように工夫されていた。マストは小僧が舵は娘が取るんだろうさ。小僧一人でも出来るかも知れんがな」

男がそう言って完成した船の方を見た。

「縦帆船なんて初めて見ましたぜい」

「そりゃそうだろ。初めてそれを造ったんだから……俺たちが」

元船大工たちがチツチを見ると腰のナイフで何かを船首に掘っているのが見えた。

「小僧。その船の名は？」

親方がチツチに尋ねた。

「^{グロリ}栄光」

「いい名だ」

「素敵な名ですね！」

アウラも親方の言葉に便乗する。

「……本当はアウラー号」

チツチが小声で呟いた。

「チツチ！ それはやめてください……」

「プラム二号は？」

「それもだめえです」

「^{グロリ}刻んだ文字は栄光だ！ おっちゃん！」

チツチが舳いを解き手に持っていた竿に身体全身の力を乗せて船を岸边から押し出した。

「西の街へ」

チツチは早々と川の流れに船を乗せた。

二人と山羊を乗せた船は^{グロリ}栄光に向かい進路を川下へと向けた。

To Be Continued

〽 炎のレース 〽 第三部 第九話（後書き）

最後まで読んで下さいますと誠にありがとうございました。 > (|
—) <

次回の更新もお楽しみに！

炎のレース 第三部 第十話

第十話

裏の首謀者

収穫祭で賑わう今年の主催会場シユベルクの街には、放牧レースの情報が早馬と共に入りては出、出ては入りしている。

レースも序盤だと言うのに入る情報に歓喜と嘆きの声が入り混じり、ちよつとした騒ぎになっていた。

「ここまで壮絶な妨害の情報は入っておりません。大方のレース出場者は西と東に分かれレースを展開している模様です。ここからがこのレースの本番！　ここまで進路の妨害をして時間を失わさせる為の工作など、かわいらしい妨害だけでレースは進んでおります。通過証明も最多で三枚を持つ者が大半を占め、レースは膠着状態。

この先あの手この手を繰り出し他者への妨害も過激さを増して参ります。死人や街道、橋などの破壊工作により、領地の財産が失わなければ良いのですが……只今、新しい続報が入りました。東で早々と通過書を揃えたバルシオ商会の御子息、バルシオ・トマウスが減点覚悟なのか大型の荷馬車、五台程で陽が昇る前から西に向かったとの報告が入りました。トマウスは一番人気の配当金三・八倍となつております。……それともう一つ驚きの情報が入りました。移動に時間が掛る為、敬遠されると見られていた北方面の街をたった一日で二つの街の通過証明を受けた出場者がいるようです！　信じられません。無謀にも山超えに挑みサインス、ペグと周りその日の夜にはペグを出発したと言う事です。その出場者は……これまた驚きです！　二人連れの少年と少女の山羊飼いだそうです」

山羊飼いと聞いたせいか、地面を揺らすようなブーイングが広場に響いた。

「……その二人の配当金は……い、一、十……失礼。百二十四万倍もし、山羊使いが優勝する事があればとんでもない配当金となりますが、何故、一日で北を周れたのか……、恐らく賭けに出て山越えをし成功したとしか考えられません、これから西へと進路を取り周るには、街道を迂回して時間を失う事になります……、いったいどのように、これからレースを展開するのでしょうか？ この先もレース展開から目を離せません」

一瞬、会場が凍りついたが、続々と飛び込む情報に会場に集まった者たちは一喜一憂していた。

歡喜に沸くシュベルクの街の静かな一室に蠟燭の明かりの下で静かに今後の目的と収穫祭の騒ぎに乗じて人気がない場所で試す予定の実験を遂行するかどうかの会談が持たれていた。

「このシュベルク一帯は遠い昔、北に魔物たちを封じた際にグランソルシエールを中心とした十賢者が新たな魔術を作り出し実験を繰り返した場所だ。その時に残された禁術書の走り書きや実験痕後も残っている」

黒いローブを身に纏い深々とフードを被った小柄な男が僅かに見える口元を吊り上げた。

「君に今回の大事を任せても大丈夫なのかね？ 我々は確かに魔物に対する力を求めてはいるが、その力は『神の奇跡』の力でなければならぬのだぞ。万が一実験に失敗しシュベルクの領地が消えるような事があれば、折角手に入れた力を教会側としては使えない。無関係を装う立場を取らざるを得ない」

「まあ、司教殿。我々も教会が民から吸い上げている寄付金には随分と手助られています。禁術の搜索費用、魔術の解読に掛る必要な経費などをそちらからの御厚意で受けそれはもう感謝の一語に尽きます。この力は教会側の物と言って誰も文句は言いませんまい。神の為に寄付を寄こしたのも、また民なのですからな」

蠟燭の光りの中、磨かれた金属の鎧が鈍い光を乱反射させている

偉丈夫が口元の髭を触って撫で上げた。

「実験はシユベルク買収が済んでからでも遅くはなかるう？ 今シユベルクの領地を継いだ息子は我らの寄こした女たちに夢中。毎晩のように舞踏会を開いて浮かれて資産は底をつき掛けたところにシユベルクの街付近の買収を持ち掛けたら、こちらの言い値で売りおつたわ。書類を交わすのは収穫祭が終わり落ち着いてから直ぐにと約束を取り付けてある」

豪華な身形をした口髭の男が鼻で笑った。

「それに近隣諸国に比べ、我がイリオン王国は魔術文化の衰退が激しい。かと言って近代武器の発展も途上国だ。万が一戦が起これば我が王国は、大国ラナ・ラウルか近年西の制圧を果たし最大の強国となったカリユドス帝国の属国となる事だろう。戦の際して、この地は守りに易く攻めに難い。魔物を復活させる為に北に行くにもこの地は利が良い。王国もさぞ高く買うだろう」

獅子の紋章を胸元に下がっている。

それは、紛れも無くイリオン王国の紋章だ。

政に携わっている者でも高い地位の者が着ける事を許された紋章だ。

王家の紋章を身に着けられる者は、その血を引いている者だけだ。「万が一シユベルク買収がならなかった時は、この地を更地に戻せばいい。そして王家に献上させる。その時は司教殿？ 後の民の先導任せるがよいか？」

「はい。御意に」

紋章の男が僅かに唇を吊り上げ失笑を漏らした。

「民を導くのは、羊飼いやなどではない。貴殿ら教会の神から賜りし役割だ」

「はい。おっしゃる通りでございます」

司教が深々と頭を下げる。

「しかし、王も近年の情勢に慌てふためき隣国と条約などと……ふん！ 円卓上の話し合いと紙切れに書いた文字如きに国の行く末を

委ねるとは……つまらん」

紋章の男が肩肘をつき拳を顎に当てるとワインの注がれたグラスを磨かれた大理石の床に投げつけた。

控えていた侍女が割れたグラスと床に広がったワインを拭き取り片付ける。

「そう逸りまするな。ラナ・ラウルもカリユドスも近年増える魔物の対策に手を焼いております。イリオンもまた同じでございますが、ラナ・ラウルでは守護者ギルドなる傭兵どもを集めた戦闘集団の中には、魔術を超える蛮族の技を扱う者もいると聞いております。またカリユドスでは遺跡を漁り、古の魔人を発掘していると聞いております」

豪華な身形をした口髭の男が紋章の男に恐恐とし伝えた。

「それで我が国は、禁術の魔術か？」

「いいえ『神の奇跡』の力でございます」

司教が言うつと紋章の男が鼻で笑った。

「その神の力の実験。シユベルク買収失敗に終わった後、直ちに実験に入る。良いな？」

「御意のままに」

「皆に伝えよ。おい！ 魔術師、更地にしてもいいぞ」

「分かりました。早速準備の入ります」

黒いローブの小柄な男が被っていたフードを脱いで紋章の男に恭しく一礼をした。

紋章の男がローブの男の顔を見て言った。

「ふん！ まだ少年ではないか……、しかし、酷い火傷の跡だ……」

ふん！ 禁術でも試したのか？」

「ええ、幼い頃に火事に遭いまして……それでは」

黒いローブの少年がフードを被り直し密室を後にした。

少年の手には鉄杖が持たれ、その上に飾り付けられた鐘が、からんと小気味良い音色を奏でた。

心地良く吹く順風を帆に孕んだ船が川を西の街に向け南下している。

その船には黒い四角い瞳に白い髭が愛らしい山羊も乗っていた。チツチは帆の最適帆トリムを合わせロープを結ぶ為トに開けられた船縁の穴に括り付けるとアウラと舵を代わり操船に勤しんでいる……はずだった。

「きゃあ、チツチ！ ぶ、ぶぶつかるううう、船が傾いてるよおおお！ チツチ！」

「うるさいなあ、アウラは……うるさくて眠れないじゃないかあ」「私、船なんて動かすの初めてなんだから！ ちゃんと見ていてください！ ぶつかるううう！」

チツチが起き上がり、舵を代わり僅かに舵を切り方向を修正した。川の水面に他の船は見当たらないが、左岸には大分近付いてはい

る。チツチは右眼に巻かれた包帯を解くと濁った水面を見詰め、暫く考えているような様子を見せた。

手元の舵の握りながら、マストに伸びるロープを素早く解きと帆の風を抜いた。

近くに据えられたいる荷車の車輪を改造して作られた円形の物に付いている持ち手を回すと、帆はマストに吸いつくように置かれた。タイミングを見計らっていたかのように別の円形の車輪を回してマストを回し同時に舵を右に切り、素早く帆を畳んだ持ち手を掴んで逆に回すと再び帆が張られる。

帆の開き替を終え、最適帆を合わせをしながら緩んでいたロープを引き結ぶ為トに開けられた船縁の穴に括り付け、アウラの手を掴み船の陀輪を握らせ舵を渡した。

「えっ！」

「そのまま」

ゆっくりと船の傾きが逆の方へと変わっていく。

「きゃっ！ 今度は逆に船が傾いたよううう」

ひよろひよろと、よろつくアウラの腰に手を回しチツチが支え舵を握った。

「川幅も広くなってきたし川の流れる早さを計算に入れて船体が流される分も見越して船首を調整したから……少し船足は落ちるけど、この舵の角度を動かさなければ、ジールの街の船着場に着く。時々、確認して指示を出すから大丈夫。川の流れや風が変わるか他の船がいたら教えるんだぞあ、後、船着場が見えたら起こしてくれるかなあ」

そう言い残しデッキに突っ伏した。

アウラには、まだ遠くに右岸しか見えなかった。

「また寝るのですか？ いつ起きてるんですか！ チツチ！ 特に学園では」

「寝てない時は起きてる」

チツチは甲板に突っ伏したまま答えた。

「白」

「えっ！ ……こら！ チツチ覗きましたね！ 覗き魔　！」

「雲」

「嘘つき！ 雨が近いですから大分、灰色になってますよ？ スカ

ートの中、覗いたでしょ！ 誤魔化さない」

「まだ大丈夫だ。少なくとも今日辺りまでは持つと読んでる……それと覗いだんじじゃない。見えたんだ偶然」

「うそばかり！ よく偶然が続きますね？」

「偶然が続くなんて時は、得てしてそんなもんだ」

船の足は速く岸を離れてからまだ間が、ないというのに離岸した場所はもう見えなかった。

上流と言っても川の流れは然程、早くはない。北の山脈から大分距離もある。

その間、幾つかの源流が集まった川の流れは、そんなに早いとは思えない。

グローリー号は、アウラの知っているどの船よりも速いと感じた。

メインの二本のマストに張った帆が北の山脈から吹き下ろす追い風を一杯に孕んでいる。

チツチは一体、今度はどんな魔術ちえを使ったのだろう、とアウラは考えながら舵を取った。

T o B e C o n t i n u e d

〵 炎のレース 〵 第三部 第十話（後書き）

最後まで読んで下さいますと誠にありがとうございました。 > (

—) <

次回の更新もお楽しみに！

炎のレース 第三部 第十一話

第十一話

羊飼いのアウラ

ジールの街の船着場。

アウラは舫もやいを放る為、自分の手首程もある円状に整えられた太いロープの前に立っていた。

チツチは既に帆を畳み、マストに括りつける作業を終え船足も十分落ち、接岸する為の微調整に入っていた。

アウラが舫もやいのロープを見て、わざとらしく、嫌味を込めて棒読みの言葉をチツチに向けて放った。

「これだけ太いロープだといいですね　？　いくらチツチでも細かく結べないでしょ？　私太いのが好き！」

「何だつて？　良く聞こえなかつたなあ」

アウラは、忙しそうに奔走しているチツチを見て本当に聞こえていないのだと思った。

「わたし　！　太い方が好き　！　太いのがいいつて言ったの！」

「……そうかあ　！　そんなに太いのが好きかあ？」

「なんだ……ロープの事かあ……それ重いぞお」

「うん！　油の匂いがするね。でも大丈夫ですよ」

アウラは、そう言うのと操船の為に舵を固定し長い竿に持ち替え、船着き場に寄せようとしているチツチを見てその距離を確かめた。

舫もやいロープをか細い両腕で抱え持ち上げようと足を踏ん張り持ち上げ始める。

「よいしょっ！　？　お、重い……」

アウラは、チツチの場所を確認するとロープを抱え上げた。

「重いよ　、チツチ、手　」

『手伝つて』と言い掛けアウラは言葉を呑み込んだ。
チツチとロープの組み合わせに異常な程、警戒心を持っている事に気付くアウラだった。

「ちよつと待つてほしいんだけど……今、忙しいから」

「だ、大丈夫です！ 一人でやれると思います……なんとか」

「それは助かるなあ、山羊たちを乗せてるから竿を押しすので精一杯だったんだ、実は」

船着き場に近寄った時、小型船接岸用の二股に分かれた片側の棧橋の先端にいる男数人が舳ロープを放るように手招きで合図を寄こした。

舳を受け取り、ロープを引いて船を寄せてくれる手伝いをしてくれるようだ。

アウラは、何とか持ち上げた舳いロープをお腹の辺りで懸命に支えながら、大きく腰を捻じりロープを力一杯棧橋に向って放り投げた。

「えい！」

かわいらしい気合いの声と共に舳いを放つ。

ドッホン。切ない響きが水面に木霊した。

「……」

「……」

「……ごめんなさい」

棧橋の男たちが苦笑を浮かべ、すぐさま長い竿を持って来ると舳いロープを拾い上げ船を曳いてくれた。

「……ごめんなさい」

とことんロープには恥をかかされる。

「はあ」

アウラは、溜息を吐くのがっくり肩を落とした。

「気にするなよ。アウラ」

竿を置いたチツチがアウラの肩を叩いて微笑んでいる。

「これからが本番だ。真つ先に西に向かっていた奴らも、ちらほらいるみたいだし東に向っていた奴らも速い奴は今日の夜、遅くても明日には押し寄せてくる。妨害も受けるから気をつけないとなあ」
チツチが、やさしい微笑みをアウラに向け言葉を続けた。

「家畜の追い出しはアウラの得意分野だし……直ぐに初めて次の街に向かおう」

「……うん。ありがと、チツチ」

顔を見合し軽く笑い合ってから二人は山羊たちを船から降ろし始めた。

ジールの街を囲む外壁が、船着場から見えている。

船着き場からは、大きく重い荷物にも耐えられる広めの石畳で造られたしつかりと整備された街道が敷かれている。

船着き場から少し離れた街まで荷馬車を使い荷揚げされる荷物を、速やかに街まで運ぶ為に一直線になっていた。

当然、街の外壁にある一番広い幅のアーチが街道の先にある事は間違いない。

街に出入りするのにはレースに出場している者だけではないので狭いアーチの所から街に入ろうとすれば、余計な混雑に巻き込まれる事になる。

しかし、この街道は普段、平時は船着場から揚げられた荷物専用の搬入出口になっているようで辺りには一般人と思われる人の姿は見受けられなかった。

二人は少し離れたジールの街に向け山羊の群れを追い立てた。
陽は、まだ地と天中の中程で燦々（さんさん）と輝いている。

二人がアーチの前まで来ると荷物搬入出口ともあり、税関や検問所が置かれていた。

山羊を伴いアーチを潜ろうとした時、税関の者に引き止められた

が、放牧レースの出場者である二人がシュベルクを出発する際に手続きをし貰い受けた免税証明書を見せると、すんなりアーチを潜らせてくれた。

二人は街に入って直ぐに祭りで賑わう本通りを避け人気の疎らな場所を探し、ジールにある通過証明書の手続きを行っている建物の位置を地図を見ながら、妨害と人混みを避け、最も早く着けるルートを検討していた。

二十頭の山羊を伴いながら収穫祭で賑わう道を通るのは困難な事だった。

レース初参加の二人は、サインスでそれに巻き込まれ通過書を貰いに行くのに時間を取られた。

通過証明を貰うには、連れている家畜の頭数と登録された焼印代わりの丈夫な鉄錠の掛った首に吊るされてタグを見せて確認をとって貰い途中で別の家畜と入れ替えてないか確認される。

連れて行くか、広場に置いて監視委員をその場に連れて来なければならぬ。

街の地図を二人が見入っていると本通りの方からざわめきが起った。

本通りに細かい土埃が舞い上がり、通りを歩いていた者たちが、慌てる様子で散り散りに動き出し二人のいる辺りにも息を切らせた人が多く寄せて来る。

徐々に土埃が納まって行くにつれ本通りの方からは罵声の交る口論が聞こえ始めてくる。

二人の傍に逃げ出して来た者と思われる、少年が文句を付けていた。

「ちくしょう！ あいつら人混みの中をあんなに多くの馬を伴って駆け込むなんてどうかしてる！ あそこにいた人に怪我がないといけど……ちくしょう！」

二人と同じ年頃だと思われる十代半ばの少年は本通りの方を見ながら声を荒げた。

「あ……あの！ どうしたのですか？ そんなに息を切らせて」

アウラは、恐る恐るといった様子で少年に声を掛けた。

「なんだよ！ 何か用か！」

余りの事に収まりが着かないのか、少年から強い口調の言葉が返って来る。

少年の強い口調に驚いたアウラの華奢な身体が、ぴくんと跳ね傍にいたチツチの袖を掴んだ。

「痛ででえ、アウラ……身も一緒に掴んでる」

周りの様子を気にした風もなく地図を睨んでいたチツチが突然、降って湧いた腕の痛みに声を上げた。

怯えるアウラを見た少年が額に片手を当て頭を下げた。

「ごめん……きみに怒っている訳じゃないんだ」

「放牧レースの出場者さ、馬を放牧している奴だろうけど、人混みの多い本通りに物凄い勢いのまま何十頭も連れて突っ込んできやがったんだ。怪我人が出てなければいいけど」

「おやさしいですね。貴方は」

アウラは、チツチの袖を離し立ち上がるとお尻に着いた草と誇りを払った。

チツチに向けて。

少年が少し顔を赤らめながら、ちらちらアウラの方に視線を彷徨わせている。

「いや……そんな事ないですけど……」

「おやさしそうですね。とっても……誰かさんと違って」

「誰かさん？」

「……いえ、なんでもありませんわ」

アウラは少年に微笑み掛けた。

「俺は何時もやさしいけどなあ」

チツチが剥れた頬を開き抗議の声を上げた。

「あんな事をする人の何処がやさしいんだか」

「……まだ怒ってるのかなあ？」

「別に」

アウラは短く答えると通りの方が一段と騒がしくなっている。

喧嘩が始まったようだった。

「駄目だ。あれじゃ死人が出ちまう」

「私で宜しければ、お手伝い致しましょうか？」

「でも、きみは女の子だしあの騒ぎの中に入るのは危険だよ」

少年が慌てた様子でアウラに言った。

「大丈夫です」

アウラは地面に置いていたロープを手に取り草と誇りを払った。

にこりと微笑んでアウラは手に持っている節くれた杖の鐘を鳴らした。

からん からん からん

小気味良い鐘の音色を響かせながらアウラは荒れる人の波へと向って歩き出した。

少年が心配そうにアウラの小さな背中を見ていて周りで小気味良い音を、こころ奏で時折鳴く動物に気付いた。

「山羊飼いだっただのか……あの娘……た、大変だ！ 魔物を呼び出す気じゃ」

少年の声に被せるようにチツチが言葉を乗せた。

「心配無い。あいつは羊飼いだ。それに山羊飼いは俺」

「もしかして、きみたち……レースの出場者？」

「そうだけど……ちょっと困ってる。アウラが騒ぎを収めたら頼みたい事がある。いいかなあ？」

「はい……いいですけど、本当に収める事が出来るのですか？」

「アウラなら出来る」

「分かりました約束します。それより、きみは行かなくていいのか

い？ あの娘一人で行かせて」

チツチが左眼の碧眼を弓のように反らして少年を見ていた。

「俺は山羊の番をしてなくちゃいけない。まあ、必要ならその時に行く」

「ぼ、僕は行きますよ。やっぱり心配だ」

少年が人だかりの方に振り返り、アウラの背中を追って走り出した。

T o B e C o n t i n u e d

く 炎のレース く 第三部 第十一話（後書き）

最後まで読んで頂き誠にありがとうございました。

次回もお楽しみに！

炎のレース 第三部 第十二話

第十二話

アウラ名誉挽回

からん からん

騒ぎの中を節くれた杖と持ち、茶色のローブに身を纏いフードを深々と被る。

杖を片手に持ち、羊を伴っていない時、羊飼いの風貌は魔術師にも見えなくもない。

羊の群れを連れていないアウラの姿は混雑している多くの者たちの眼には、本当の魔術師に映ったのかも知れない。

小柄な人物が鐘の音を響かせ、人混みの中を無人の野を行くが如く混雑する人の間を歩いていく。

アウラが鐘の音を響かせる度、人だかりは両脇に割れ人垣を作り、アウラの通る道を空けるかのように開いていく。

それに呼応するように騒ぎで飛かっていた怒声も徐々に納まっていく。

旅の章より、守護と導きの祈り。

「カノ kano・オウ of・ライソ raido。 エイワズ eihwaz・アン and・アルジ algi
ズ z・トゥ to・ライソ raido・テイワズ teiwaz。 ライソ raido・オウ of・ウンジ un
ヨー jo・ゲーボ gebor

(旅の始めに守護と星の導きを。旅人に喜び満ちる旅の贈り物を)

アウラが、旅の導きに用いる古語の交る常套句を述べると辺りの

混乱も一瞬にして治まった。

『羊は羊飼いに導かれ広野を歩き、羊飼いは人を導き、神に導かれ楽園に導かれる。』

旅をする旅商人や旅芸人たちは勿論の事、教会の教えが広まっている世で誰もが知っている、その件くだりがその場の人々を沈めた。

からん

「争いを止めてください」

アウラは、地面で額から血を流している一人の老婆に手を差し伸べその身体を起こし支える。

「大丈夫ですか？」

懐からハンカチを取り出すと老婆の額に流れた血を拭き取りあてがった。

「羊飼いか？」

騒ぎの中心人物が、馬上から口髭から伸びた顎髭まで繋がった、もつさりとした髭を鷲掴みに撫でた。

「はい。私は羊飼いですが？ それが何か？」

アウラが珍しく挑発的な尖った言葉を放った。

「お前も放牧レースの出場者か？」

「さて……どうでしょう。もし私が放牧レースの出場者ならどのようになさるおつもりですか？」

「知れた事を！ このレース妨害黙認の過激なレースと知って言っているのか？ 小娘」

アウラともつさり髭の男の口論に本道りにいた人々が集まり出し、二人を囲むように周りを囲い始める。

本通はまだまだ混雑しているが、揉め事を避けこの場を離れた人たちも多く大分人通りが少なくなり始めている。

先達ての騒ぎの際に多くの人は危険を感じその場を去り、残りは野次馬と化し二人の周りに集まったからだった。

「ええ、知っています。私はそのレースに出場している者の助手パートナーとして、この度の放牧レースに出場しております」

「それで連れてくる家畜は何だ」

「山羊でございます」

「わあはあはあはあ！ 羊飼いが山羊を追ってレースに参加しているのか？」

もつさり男が、豪快に笑い声を上げた。

「はい、羊飼いは多くの羊の群れを追う際、羊の群れに一・二割の山羊を混ぜるのです。ご存知ですか？ 羊はのんびり屋さんで余り動き回りません。その群れに好奇心の強い山羊を混ぜると、それに感化され羊も良く動くのです。この旅のレースは山羊しか連れていませんが」

「いや、嘘だな」

「何故？ そのようにお思いになるのですか？」

「知れた事を東なら一日掛ければ到着でき残りの二か所の街も知恵と策を用いれば総数二日で通過証明を三枚手にするだろうが西は違う、東より距離があり丸一日寝ずに歩き通しても着く事は不可能に近い。早い者でも陽が天中を下り始めた頃に辿り着くのがやっとだ。俺の家畜は馬。半日で西側の南方面に着き、北上して来たジールの街が西側の最後の街だ」

「レースが始まって、丸一日とまだ天中半ばのこの時に、羊飼いや山羊飼いは到着出来ないとおっしゃりたいのですか？」

「そうだ。お前の言う事が本当だとしても、まだ一枚の通過証明も持っていないと言う事だ。違うか？」

もつさり髭の男がもじゃもじゃの髭を誇らしげに撫でて言った。

アウラは薄く笑みを浮かべた。

「私たちは、既に二か所の通過書を頂いております」

「なんだと？ それは嘘だ！ 家畜の中で最も足の速い馬を持つ者

たちでも西側の街を回り切るのがやっとだったんだぞ。早い者はもう次の街、北、南、東の街に散って行った者もいる。お前が言う事が本当なら通過証明書を見せてみる！」

男は撫でていた、もっさり髭から手を離すと怒声を上げた。

「貴方は、妨害か混雑に時間を失い、その焦る気持ちから人混みの多い本通りを通り抜けようなどという無茶な事をしたのですね？

分かりました。お見せします」

アウラは、チツチのいる方向に振り向き両手を開いた。

野次馬の人だけが、割れるように開いていった。

まるで神の導きを受けた救世主メシアが、災害に喘ぐ人々を導く為に海を割ったように両脇に人垣が分かれアウラとチツチまで一筋の道となる。

『羊は羊飼いに導かれ広野を歩き、羊飼いは人を導き、神に導かれ楽園に導かれる』と言われ原典にも記される、羊飼いは時に教会の司祭程の影響力を発揮する。

無論、羊飼いであって普段から特別な権力などは持っている訳ではない。

しかし、古コトシからの口伝と習慣と老婆を労り、横暴な輩に立ち向かう美少女アウラの堂々たる姿勢が、それをさせたのだった。

アウラは、大きく息を吸い込むと視線の先に見えるチツチに向い、かわいらしい大声で伝えた。

「チツチ　！　今よ！　通過許可書！　今なら本通りに人は少ないですから行ってください　！」

チツチは、アウラの意図を汲み取り口元に指を当て口笛を響かせた。

街の隅で食べた草を反芻していた山羊たちが主の呼び掛けに、ころころとカウベルの音を響かせ顔を上げる。

チツチが通過証明の手続き行っている建物に向かい走り出すと長い間伴に旅を続けてきた、阿吽の息でチツチの動きに連動しているかのように駆け出した。

馬を連れて来た男とその後には本通りから街に入ったレースの出場者たちは、騒ぎで出来た人垣に阻まれ右往左往している。

その後から、またレースの出場者たちが続いて街に家畜の群れを連れて入るのだから、何をしなくても辺りはごった返し出場者たちが懸命に自分の家畜たちを誘導するものの、時既に遅しと言った感じだった。

次々に家畜たちが混じり合う。

それに街の者たちも混乱して騒ぎ出した事が、主たちの家畜を御する鐘を始めとする様々な鳴り物や声を阻んで家畜の制止もままならなくなった。

もうこうなつてしまえば、後の祭りだ。フェスティバル

しかし、人が騒ぎそれに怯えた家畜たちの中には暴れる家畜たちも出て来ている。

このままでは、折角収めた騒ぎが無駄になるどころか、多くの怪我人が出る事は火を見るより明らか事だ。

からん からん からん

アウラの持つ節くれた杖に括られた鐘の音を響き渡った。

からん

アウラが鐘の音に魔術を乗せ響かせた。

煮え滾る湯に水を打ったように辺りの騒ぎが収まっていく。

その中で収まりが着かな者がいた、最初に本通りに入って来たもつさり髭の馬上の男だった。

「小娘が！ 邪魔をしゃがって！」

男が馬上から下馬するとアウラに険しい表情で歩み寄った。

「このレース妨害は容認されているはずですよ。それより貴方の無謀な行動は出場者全員の品格を下げる愚行です。レースに出場している者同士なら兎も角、収穫祭を楽しみレースを楽しんで頂いている街の方々に危険を及ぼす行為を黙認出来るはずがありません」

凜とした姿勢でアウラは正面に立ち杖を構えた。

「何を偉そうな事をほざくか！ この小娘が！」

もっさり髭の男がアウラに掴みかかるうとした時。

からん

鐘の音が響くと男は、その場から一步も動けなくなった。

アウラが魔法陣術式破棄の魔術で魔除けの結界を張った。

その魔術の力加減で人も結界の対象となる。

周囲の人々は羊飼いが魔除けの方を使う事を知ってはいるもの、まじない程度のものであるように認知していただけでアウラのそれらしき力に驚いていた。

野次馬たちは、魔術を初めて目の当たりにしたのだから、当然と言えば当然の事なのかも知れないが、誰も魔術の存在など信じているはずもなく、華奢な身体で凜として立ち向かったアウラの姿勢が大の男を退かせたと思ひ込んだ。

喝采が起こると波が寄せるように野次馬の群衆がアウラを取り囲み始めた。

「えっ！」

予期せぬ事に驚いているアウラの背中から聞きなれない少年の声が聞こえて来る。

「こっち」

アウラの後ろを追ってきた少年が声を掛けた。

アウラは、魔術を解くと少年に手を取られ街の中へと走った。

To Be Continued

く 炎のレース く 第三部 第十二話（後書き）

最後まで読んで頂き誠にありがとうございました。

次回もお楽しみに！

く 炎のレース く 第三部 第十三話

第十三話

苦悩

アウラは、街の狭い路地を少年に手を引かれ走っていた。

「ちょ！ ちよつと待ってください。はあはあはあ」

息を切らしているアウラを見て少年が言った。

「少し休みましょうか？ 急にすいません。勝手な事しちゃって…
…しかし、あの場所にいたら興奮した街の人たちに、きみのか弱い
身体が潰されてしまいそうだと思うたので…：…つい」

少年がそう言いアウラから視線を外し走ってきた細い路地の方向
に振り返った。

少年の顔は、陽に焼けている赤黒い顔に赤みを差しているように
も見える。

「ありがとうございます。でも、あの場所でチツチを待っていない
といけませんから…：…戻ります、ね」

アウラは、やわらかく少年に微笑み掛け元来た道に戻ろうとした。
「えっ！」

戻ろうとしたアウラの腕を少年は咄嗟に掴み直した。

不意に腕を掴まれたアウラの身体は、後ろに引つ張られる形にな
り体制を崩し少年の胸に倒れ掛けた。

倒れ掛けたアウラの身体を少年の胸と両腕に、しっかりと受け止
められた。

丁度、アウラが少年の胸に飛び込んだような形で支えられたので
傍目から見れば、その光景は路地裏で逢引きをする恋人同士のよう
にも見えなくもない。

「あの人は？」

何時の間にか、少年の腕はアウラの細い身体をやさしく包込んで
いる。

「あ、あの人って？ チツチの事？」

「そう……そ、その仕事仲間とかなのかな？ それで一緒にレース
に二人で組んで出場したとか……、それとも……こ、恋人？」

アウラは、くすくす静かに笑い少年の胸板を、そっと押し戻し腕
の中から離れた。

「どっちも不正解です。仕事仲間でもないし……ましてや、こ、恋
人でもないですよ。強いて言うならイリオンにある学園の同級生で
す」

顎に小さな手を当て眉間に皺を寄せるとアウラは考えた。

チツチとは、仕事仲間では無論ない。

同じ学園で互いの先の夢や想いの為に一緒になってはいるものの、
学園内で仲むつまじく休日を楽しむような、一部の生徒のように特
別なお付き合いをしている訳でもない。

「でも、きみはあの人に特別な感情を抱いてる」

「ええ……抱いています」

アウラは、にっこり微笑んなんの迷いもなく答え、顔を曇らせ言
葉を綴った。

「……私と……チツチは、他の誰もが築けない絆で結ばれています
から……」

アウラの言う絆とは言うまでもなく“仇”同士であるかも知れな
い間柄であるという事だ。

チツチの記憶には、明確にグリンベルの街を焼き払った事の覚え
はないようで風狼に銜えられ気が付くと焼けているグリンベルの街
を見ていたとの事だ。

当時チツチの母、ドラゴンが与えた循環鱗の破片がチツチという意
志を持つ人間を寄り代にとして彼の身体を侵食し始めたのだと言っ
ていた。

欠片程と言ってもドラゴンのような強大な人外の力を持っている
循鱗という物質の一部が、新たな意志となつて目覚め初めチツチの
身体と精神を乗っ取るうとしていたとしても、何ら疑う余地はない。
しかし、チツチにとってアウラは違う。

アウラが組み立てたと聞いているグランソルシエールが完成を成
しえなかつた禁術の魔法陣を組み上げ今も尚、魔法陣は健在し、そ
の陣から創り出され続けている異形の魔物らが、チツチ親子の定住
をし始めていたハングレードの街近郊を、ほぼ壊滅させてしまつた
事は紛れもない事実なのだ。

自分の知らぬ間に多くの人の命を奪つてしまつたという罪の意識
と罪悪感が、その事実を知ってしまった日からアウラの胸を締め付
け続けている。

チツチの馬鹿な行動を見ていると何故か、その苦しみが和らいで
行く気がする。

チツチが、自らグリンベルの悪魔であると豪語しているのは、自
分もアウラと同じく多くの人たちの命を奪つてしまつたと言つてい
るようにも感じていた。

今、自分たちが成すべき事は苦しみ嘆く事ではなく、今も生まれ
る出る異形の魔物たちと北に封じられた魔物たちの活発化の阻止。
チツチの言動がアウラに、そう言っているようにも感じられた。

浮かない表情のアウラに少年が声を掛けた。

「僕がきみを守ります。何があつても今みたいに！」

少年の強くたくましい言葉にアウラはすっかり視線を合わせ少年
の言葉に答えた。

「ごめんね……、貴方に私は守れない」

アウラは、明確な事実を少年に突き付けた。

「彼なら……チツチとか言う山羊飼いなら、きみを守れると言つた
かい？ 乱闘をする人混みの中に飛び込もうとしていたきみを止め
ようともせず、レースの事を優先させるような奴にきみを守る資格

はあるのかい？」

「……正確に言うとなツチにしか、本当の意味で私を守る事の出来る人はいないので……もし、私が誰かに守られる資格があるのだとしたら、そして彼を守ってあげられるのも私にしか出来ない事なのかも知れません」

少年の真剣な眼を見据えてアウラは、はっきりと答え軽く杖を振り鐘を鳴らして魔術を使って見せた。

旋毛の辺りでリボンの布で束ねられたアウラの細い桃色の髪の毛が、ふわりと宙を踊った。

アウラの身体を弱い旋毛風が纏い肩に触れようとした少年の手を弾いた。

「……魔術師。初めて見た」

少年は驚き短く呟いた。

「私たちの成すべき想いに必要な力です。驚きましたか？」

アウラの言葉に、二人がこれから何と対峙していく事になるのかを悟ったのか、少年は溜息を吐いた。

「はあ、一目ぼれだったのに……彼も魔術師なのかい？」

「チツチは魔術師ではありません……、普段の彼は普通の人ですよ。私にとっては……少なくとも今は……」

アウラの不可解な言葉に少年は眉を潜めた。

魔術師を守る程の技量を持つ戦士なのだろうと思ったのか少年が、アウラに尋ねた。

「彼は、僕と然程変わらないあの若さで強い戦士なんだね……きつと」

「違いますよ。チツチは、ただの学生で、そして山羊飼いの少年です。あつ！ それとシュヴァリエかな？ だから戦士でもあるのかな？」

「シュヴァリエ？」

この辺りでは聞きなれない言葉に少年が問い返した。

「騎士ナイトですよ。正真正銘、叙勲を授かった」

「……なっ！ ナイト……あの歳で……、はあ」
少年は絶句した後、溜息を吐いた。

「あつ！ アウラこんな所にいたのか、探したんだぞお」
間の抜けた声色が狭い路地に響いた。

「チツチ！ 通過証明書の手続きはもう済んだの？」

「アウラのお陰で混雑する前に済ませる事ができた」

チツチは、満面の笑みをアウラに向けた。

「チツチ？ ところで山羊たちは？」

「アウラを探す前に船に追い込んで柵に入れといた」

「そう、何時も段取りがいいですね。私を放っておいてねえ

ツチ？ 先に山羊たちを安全な場所に連れてったんだあ？ ち

ん

少し怒った顔をしたアウラがチツチを覗き込んだ。

しかし、もたもたしている訳にもいかない。

船着き場には、荷揚げ場の男たちが大勢いるが、それを聞き付けた他の出場者たちがどんな手を使って山羊たちに危害を加えるか分からない。

荷揚げ場の者たちは、チツチたちを船主と思い、それに乗せられていた山羊たちは運ん来た単なる荷物だと思っっているだろう。

船主の船や荷物に万が一の事があれば、船着場を預かる者たちにとつて不名誉この上ない事だ。

そうは思うものの、やはり一時も早く船に戻るのが得策、自分たちの手の打ちを他の者たちに知られない内に次の街に向かわなければならぬ。

「船？ きみ船まで持っているのかい？」

あきれた声の混じらせ少年が言った。

「……？ 誰だっけ？」

「もう忘れたのかい？ 騒ぎの始まった時に、きみが僕に何か頼みたい事があるって言ってたんじゃないか！」

チツチは、少年の言葉に何処か殺意の籠ったようなものを感じた。
「あつ！ 思い出した！ で、何を頼もうとしてたんだっけ？ ア
ウラ」

チツチはアウラに丸投げして寄りこした。

「し、知りません！ 私は……わ、私の護衛とか……じゃないんで
すか？」

むくれた顔をしてアウラが答える。

チツチは、掌に拳をぶつけ、ぼんと鳴らした。

「思い出した。この街の下水道の図面をどこに行ったら見れるか聞
こうと思つてたんだ」

「「下水道？」」

アウラと少年がチツチの不可解な言葉を聞き返した。

「でもいいや、もう手続き済んだから、アウラのお陰で思い出した
し」

チツチの頬笑みがアウラに向けられた。

からん

「私を見て下水道思い出したですつて え！ どう言う意味です
かあ！ 失礼ね。ふん！」

「僕はベールングから南西にある街ジールから来てるんだ。隣の街
に住んでいて漁夫を営んでいるけど、船着場は街から遠くにあるし、
近くを流れる川も狭いから捕れる魚の数も少なくていて収穫祭の時期
は、捕る魚の量じゃ足りないから川沿いのベールングの街ま
で仕入れに来ているんだ。ジールの街なら分かるから案内するけど
ね」

少年はそう答え自分の名前を名乗った。

「僕の名は、ノイル。よろしく！ チツチ」

チツチの手を握ったノイルの腕には渾身の力が込められ何故か腕
の血管が浮き上がり、ぶるぶる震えていた。

T
O
B
E
C
O
N
T
I
N
U
E
D

く 炎のレース く 第三部 第十三話（後書き）

最後まで読んで頂き誠にありがとうございました。

次回もお楽しみに！

く 炎のレース く 第三部 第十四話

第十四話

逆風に向かえ！

ノイルは、眼を点にしてチツチたちの船に見入っていた。

船体自体は然程、新しくもない物だったが、至る所に見慣れない奇怪な物を取り付けられ小型船には珍しいメインマストが二本、そのマストの高さは他の小型船の一本マストより低かった。

通常マストが高いのは帆を沢山張りたいと言う単純な事だけではなく、索敵などの周囲警戒をする為には、より高い方が遠くまで見渡せるからだ。

何より驚いたのは帆の艤装だった。

本来、多くの船は横帆を何枚か張るように作られているが、チツチたちの船のマストはメインマストの一番上に、二枚の横帆が張れるようになっていて、その下に大きな帆が縦に張るようになっていて、二本目のマストには縦に張られる帆があるだけだった。

「こんな船見た事ない」

ノイルは大きく口を開け、ただただ呆気に取られていた。

この船着き場に着いた時も人集りこそなかったものの、遠巻きから注目を浴びていた。

「ねえ？ チツチ？ 船に取り付けた、からくり何時用意したのですか？」

アウラは、準備の良過ぎるチツチが不思議でならなかった。

何時も人とは違う物の見方と行動で驚かされているが、まるでこのレースに間に合うように整えられているように思えた。

「うん？ 前から」

気のない返事でチツチが答えたその言葉で、チツチの純粹な『夢』を思い出した。

「前からって、何時から？」

「学園に入って間もない時に錬金技術科のエリシャに図面を見られた。それを取り上げられて『造って』みたいと言ったから、そうしてくれと頼んでおいた。でも、これは有り合わせの物を使って急ぎで作った試作品だそうだけど……」

出航準備が忙しいのか、淡々と素っ気ない言葉が返ってくる。

「そう言えば、私がレースに出場する為にシユベルクに戻る随分前から姿を見せなかつたけど……これを錬金技術科のエリシャと作ってたのですね？ 私の見送りにも来ないでエリシャと研究塔に籠り切ってたとか」

アウラは、じつとりと湿っぽい紫の視線をチツチに送った。

「内緒」

素っ気ない短い返事が返って来た。

「ふう　ん……、内緒ねえ　」

「……」

チツチは一瞬、出航準備の手を止めた。

「それを聞いてどうするんだ？　アウラ」

「別に何も」

御立腹の様子が明らかに窺える返事がチツチの背中に突き刺さった。

「アウラ？　俺が内緒って言う時、必ずしもアウラの期待している答えを返すとは限らないんだぞお？」

さっきまでとは、違った冷たささえ感じる声でチツチの言葉が返って来る。

「期待？　そ、それ……どう言う意味？　ですか……」

アウラは動揺し紫水晶に瞳を落ち着かない様子で彷徨わせると眦が潤み始めている事に気付いた。

もしかしたら、チツチは錬金技術科の栗毛に琥珀色の瞳の美少女

エリシャと只ならぬ仲なのではないか、と言う思いがアウラの胸中に広がった。

錬金技術科のエリシャなら、チツチの純粋な夢を叶えてくれる船を造ってくれるかも知れない。

自分とチツチの成し遂げたい想いは同じ……二人の想いが成し遂げらる事、自分がチツチに叶えさせてあげられる事。

それは悪夢。

アウラは、小さな手の平で顔を覆った。

次に向かうジールの街は、放牧レースで周る西方面の街の中では直接川に面してない平原にある街でシュベルクから西側では、一番離れている場所に位置している。

サインス川に流れ込んでいる支流があり、遙か西に聳える山脈から細く長く流れ込んでいるのだが、支流の船着場からジールに向かえば街まで陸に敷かれた街道を往くより山羊を追う距離は少なくなり、半日程度で済む事が地図からも見て取れる。

そのまま街道を南下しイマルクの街に向かえば、丸一日で二つの街を周れるが、支流を西に上れば船まで戻る事になるのだから、ジールに半日で行けたとしても復路が発生し結局一日掛る事になる。

しかし、ジールの南に位置するイマルクには船着き場が街の中にある。ベールングの時のように直接街の中に入る事が出来き混雑を避けられるが、支流に入り船まで戻る時間一日と川を下って支流を上り下る時間と出航準備などを合わせると大よそ一日程度の時間を費やす事になる。

シュベルクを南下したりスブルの街との間に位置するナーンの街以外の他の街は川沿いか近い場所に位置しているが、もしかすると、船を捨てて後のレースを乗り切るつもりでいるのだろうか？ しかし、チツチは全ての街を周ると言っていた。

船を乗り捨てその後、残りを周り切る事が、困難になる事は明明白白であつた。

チツチは、いったいどうするのだろうか？ と先程の事と併せてアウラが考えていると……。

「冴えない顔をしているね。彼と何かあつたのかい？」

ノイルの言葉で先程のチツチとの会話のやり取りを思い出したアウラは顔を曇らせた。

ベールングからチツチたちの船に半ば強引に乗り込んで来たノイルが寂しげな表情を浮かべ、物想いに耽っているアウラの顔色を窺つた。

「……」

「あいつと何か、喧嘩してみたんだけど」

「喧嘩？ ……してませんよ」

気のない返事をアウラは返し紫水晶の瞳は遠い眼をしていた。

「もう直ぐ支流が見えてくる頃だけど、あいつどうするのかな？」

漁船なら兎も角、川の流れに逆らって備え付けられた櫓を漕いで上るつもりなのか？ この大きさの船で……それとも何処かに接岸して街道に行くのか？」

ノイルが船首のデッキに立っているチツチを見た。

舵はアウラの代わりにノイルが取っている。

支流に近付くとチツチが振り向き笑みを浮かべた。

「風が強くなってきた。いい風だ」

現在は、順風に近い北西の風。

「支流を上る」

「はあ？ 本気か？ 支流を上れば風は逆風になる。この船は櫓が備えてあるみたいだが、この風の中、小型の漁船なら兎も角、荷を載せた小型船で風と川の流れに逆らって上るのは無理だ！ 縮帆して櫓で漕ぐとしても漕ぎ手が二人しかいないんだぞ」

ノイルが声を張り上げた。

「心配ない。出来ないと思うなら黙って見ている！ アウラ。こっ

ちに」

チツチの呼び掛けにアウラは反応を示さず、考え事をしていた。

「アウラ！」

チツチの怒鳴り声にアウラは、現実に引き戻される。

心の中に戸惑いを感じながらも、からくりを操作する物が集まっている場所に陣取ったチツチの傍に行こうとした。

どうやら、チツチは支流を上る為に微妙な風を読む事と展帆作業に集中する様子だ。

本流と支流が交わる分岐点が見えて来た。後、少して支流に入る。

川の流れが、ぶつかり会う場所には緩い渦が数か所出来ている。

たどたどしい足取りでデッキを歩くアウラの身体が船の揺れでよるめいた時、腕を掴まれ引き寄せられ倒れる事はなかった。

「舵離れるな！ 少々忙しくなる気を抜くな！ アウラ」

チツチの何時にない苛立った声が乱れ飛んだ。

操船に集中するチツチ。

アウラを支えたのはノイルだった。舵を放しアウラの身体を支えたのだ。

「あ、ありがとう」

「あいつ！ 何怒ってるんだい？ 俺も船乗りの端くれだけど、あいつのやるうとしてしている事は無謀だ！ 小さな漁船なら兎も角小型船で逆風の中、川を上るなんて」

ノイルがそう言う舵を片手で握り直しアウラの腰に一方の腕に回すとしっかり支えた。

「俺の指示で舵を取れ！」

厳しい口調のチツチは珍しい。

アウラは気付いていなかった自分でも気付かぬ嫉妬の気持から、チツチがエリシャといたのではないかと勘ぐってしまい、レース中だという事も忘れ、プラムの墓前に誓った事も蔑ないがしるにしてチツチ

を怒らせてしまった事に。

そして、チツチが『内緒』と言ってアウラを気遣った事に……。

支流の流れ込みに差し掛かっているノイルは、アウラの身体を離し手すりにしつかり掴まっているよう促すと舵を握る手に力を込めた。

この船で逆風に向かい川を上るには、もうチツチの指示に従うしかない。

「面舵一杯だ」

チツチの声にすぐさまノイルが面舵を切った。

風の向きに合わせ、チツチは指示と同時に素早く帆を畳み入れ、マストを回す。

「舵戻せ」

帆がバタつきを見せ始める。

チツチは手元の舵輪を回し帆のトリムを合わせた。
船足は衰えない。

船首が支流を向くと船は支流を上り出した。

本流より狭い支流では川岸が直ぐに迫ってくる。

「面舵」

チツチは支持と共に張られていた帆から風を抜き、帆を素早く畳んだ。

船は急速に方向を変える。

「舵戻せ」

チツチは畳んだ帆を素早く出し、帆に風を張った。

バフ、という音を立て張られた帆は風を孕んだ。

それに伴い次第に船の傾きが変わっていく。

船足は衰えないどころかチツチがトリムを合わせると風上の向かい船足を上げた。

「すげえ……」

ノイルが呆気に取られ呟いた。

「上手回しだ。これを繰り返して風上に切り上がる。この船の喫水は浅いから、無理はさせられない気も抜けない」

何度も上手回しを繰り返してジグザグに川を上った。

ジールの船着場が見えてくるとチツチがノイルに尋ねた。

「あれなんだ？」

「ああ、あれは船を傷ませない陸に上げるスロープだ。ジールは船着き場が遠いからな。馬で牽いて船ごと荷馬車に載せて荷物を街まで運ぶんだ。船を水面に浮かべたままにも出来ないからさ」

それを聞いたチツチは満面の笑みを浮かべた。

「地図には載ってなかったけど、俺が旅をしていた時船着き場の遠い街は、こう言うのが付けられていた事を思い出した。もしかしたらジールにもあるかもと思ってたんだ」

「お前……それで支流を？」

「そうだ」

「しかし、漁船のような小船とは違うぞ！この船は」

「心配ない。ちゃんと付けてある、この船にはな」

チツチは、そう言うとは何かしらの準備をする為、船底に入り何かの準備を始めた。

To Be Continued

く 炎のレース く 第三部 第十四話（後書き）

最後まで読んで頂き誠にありがとうございました。

次回もお楽しみに！

炎のレース 第三部 第十五話

第十五話

陸上の帆船

チツチが、準備を整えデッキに戻ると最適帆を合わせ船足を上げた、ぐんぐん船着場が近付いてくる。

普通なら船足を落とし接岸に備える距離だ。

「お、おい！ 何やってんだ！ 早く縮帆して船足を止めて裏帆を打たせ停船させるんだ。この船の大きさから考えると岸まで十六フィール（五メートル）辺りで座礁するぞ」

チツチの背中に向かいノイルが大声を張り上げ制止した。

「ちっ！」

ノイルが舵を切ろうとした時チツチが叫んだ。

チツチが右眼の包帯を緩めて解いた。

「チツチ！ あなた」

一部の者は知っているが、アウラの前でしか決して解かない右眼の包帯をチツチが解いた事に驚きアウラは咄嗟に叫んだ。

後ろで舵を取るノイルからはチツチの背後しか見えていない。

チツチの細かい指示がノイルに飛ぶ。

船体がスロープの辺りに差し掛かるまで後少し船着場までは、まだ距離がある。

その時。

「取り舵一杯」

「なっ！ ここで取り舵を切ったら、スロープに乗り上げるぞ！」

「大丈夫……スロープに上がるんだ」

チツチは、帆の最適帆を維持し船足を落とさない。

「怖気付いて舵を戻すなよ。ノイル」

チツチの相手を抑え込むような強く鋭い言葉がノイルに飛んだ。

空は雲り風も強くなり始め、この船の行く末を案じているようにもノイルには思えた。

舵を持つノイルの手が震えている。

「アウラ！ 衝撃に備えておくんだぞお」

何時もの間の抜けた声のアウラに向けられた。

その声を聞いたアウラは胸の奥に張り詰めていたものが溶け温かいものを感じる。

「うん……分かった」

それはアウラにとって安堵にも似た安らぐ気持ちだった。

アウラは、今にも舵をどちらかに切りそうな程、緊迫した面持ちのノイルの舵を持つ手にしっかりと小さな手を添えた。

「大丈夫。何時ものチツチだから、なんとかしてくれませ……何かをしつかりと考えてるから、ね？ だから大丈夫です」

ノイルが反身を開けアウラと並んでしっかりと舵を固定した。

船はスローブに向け垂直に向いている。

チツチは帆のトリムを合わせながら、船の流される分を調整し舵取の指示を出していた。

いよいよ船がスローブに近付くとチツチが素早く帆を畳んだ。

操作を乾燥化する為のからくりが並ぶ中にあるデッキから縦に伸びた四本程ある棒状の物を握り前へと倒した。

ガコン、鈍い音とカリカリカリという連続した音を立て始める。

マストが床に沈み込むように下がり短くなり、マストの中程から上部のマストは根元の内側へと消えて更に短くなった。

「陸に上がるぞお……その前に船底が川底ボトムに擦るから、急激に船足が落ちるかも知れない……まあ、大丈夫だと思っけど」

チツチの声の後、船底から突き上げるような衝撃が奔った。

舵を持つ二人はしっかりと舵と手摺を握り、衝撃に耐える。

時折、ギシツギシツと船体が軋む嫌な音が聞こえる。

それでも思った程の衝撃は無く軋み音はするものの、船体の破壊音が聞こえる事はなかった。

最初の衝撃が落ち着くとチツチが別の棒状の物を手前に倒し、最初に倒した棒状の物を引いた。

マストが元の状態に戻り、チツチはマストに帆を張った。

バフ、と帆が風を孕み、船足を上げていく。

やがて、船は緩やかなスロープに船首を上げた。

船首を上げながら、船体はスロープの角度に並行して船体も傾きを変えていった。

「陸に乗り上げた……」

ノイルが呟き辺りを見渡した。

景色は流れている、まだ船体は停止していないようだと言付き、その景色の流れる早さに驚いた。

「陸を走ってる？」

「思った以上に天候が荒れそうだ。強い風が吹きそうだったから船を陸に上げた」

チツチは、船が完全に陸に上がり安定を取り戻すと外していた右眼の包帯を乱暴に巻き出した。

見兼ねたアウラがチツチの傍に行き包帯を巻く手伝をした。

「ありがとう、アウラ。船の操作から手を離せないから困ってた……、それに疲れて上手く巻けない」

「もうう！ チツチは何時も乱暴な巻き方してるじゃないですか！」

アウラはそう言って包帯を巻き直し始めた。

「怪我をしているのか？」

ノイルが心配してか二人に尋ね二人に近づこうとした。

「来ないでください。今は……、怪我をした訳ではありませんから

……眼の病です。状態が酷いので人に見せたくないのです。ごめんなさい」

アウラは強い口調でノイルを制した。

誰にも見せたくはなかった……あの眼を。

自分以外と僅かにそれを知る人物以外に知られなくなかった。

本来、自分が憎むべき『あの眼』を持つチツチを……今は守って上げたい。

船が陸を走り出す。

水上より、やや速力は落ちるものの、風に恵まれ通常に馬を走らせるか、それと同等以上の速力で陸に上がった船は疾駆し次の街ジーンへと向う街道の見えない一面薄い黄緑の草原駆け抜けた。

船の舷側に向け、甲板の淵から身を乗り出し船底を覗き込んでいるノイルが尋ねた。

包帯を巻き直し終えた、アウラも手摺りから舷側の方を覗き込んで見る。

「なあ！ あの喫水域に当たる舷側の船首後から船尾くらいまでの船腹に付いている羽根のように斜め下に向けかって伸びた長めの板は何だ」

「竜骨だ」

チツチが短く答えた。

「竜骨？ 舷側に？」

竜骨は船の背骨に当り船体の命とも言える部位で通常の船は、それを中心に組まれ船の船底にある。

無論、グローリー号の船底にもある。

帆船の場合、舷側に櫂を備えている櫂船と違い長く薄く延びるような喫水の深い船底になっている。

帆が風の力を受ける。その力をキールが水の抵抗を得て前に進む為の力に変えている。

その分、喫水が深くなり、浅瀬や浅い川を航行する事は困難で深い所を測深しながらの航行となるが、チツチの船は元々川で荷物を運ぶ為に造られた喫水の浅い階船を改造したもので、まったくの平底ではなく、ゆるやかに丸味を帯びていた。

しかし、帆を張るにあたって元々水面上で不安定な平底に近いチツチの船は喫水域が浅く、マストの丈を抑えていてもこれだけの帆を張るには無理があった。

大型船なら二艘式にする等の工夫も出来たが海や大河なら兎も角、チツチたちの下るベールング川は広いと言っても大きな川程しかなかった。

「竜骨つて普通、平底だろ？　なぜ、どてっ腹にしかも斜め下向きに付けてるんだ？」

ノイルが不思議そうに問うた。

「それはサイドキールと言って本来水面で船の安定を増す為の物だ。それに喫水が取れないから、出来るだけ帆を展帆した時に水の抵抗を得る為、長めにしてあるんだけど……お前？　喰いつく所が違わないか？　船が陸を走行しているのに……」

チツチの間の抜けた中にも何処か残念そうな口調で答えた。

「おお！！　それ！　喫水域の舷側から生えてるこの板みたいなのが、続けて回転している物はいったい何だ？　車輪では無いようだし……」

ノイルがサイドキールの下辺りで僅かに見えている。ガラガラ音を立て回転している見た事もない車輪代わりの長い帯状の物体を指さし訪ねた。

「それは車輪だ」

チツチの碧眼と口元が弓のように反れた。

「嘘つけ！　丸くないぞ！　板が無数に連なって回転してるじゃないか！　見れば車輪で無い事くらい僕にも分かる！」

「そう怒るなよ、それは履帯りたいと言って、歯車の付いた駆動輪と転輪、誘導輪を並べ、誘導帯の中を回ってる無限軌道の車輪だ。」

独立した転輪が、振動や起伏のある所でも滑らかな走行を実現してくれるし、振動も少なくて済むように考えてある。通常の車輪に比べ接地面積が広いから悪路にも強い。地面にかかる接地圧が少なくなるからなんだけど」

「ほ　う……まったく分からん」

ノイルが小首を傾げた。

「操作は二本の棒を引くだけだ。片側を引けだ引いた方の履帯が停止し抵抗となつて方向を変える事が出来るし、両方同時に引けば制動を掛けられるようになって……船を走らせる為の推進力が風だけだから、無風になると水面なら兎も角、陸の上では困った事になるけどなあ」

「ふ　ん」

「お陰でこつちの操作は楽なんだけど……帆の調整が入るからやっぱり大変だ……。ちよつと不味い設計をしたなあ」

チツチがそう言つて珍しく渋い顔をしていたが、困った様子に見えないのはなぜだろう？　とアウラは思った。

きつと、普段からの行いがそう見せているのだ。

自業自得だとアウラが思っているとチツチに声を掛けられた。

鼻や眼は良く利くし以前、風狼と出会つた時、北の神殿の事柄から耳も良かったんだ、この地獄耳。

言葉に出してないのに……、聞こえてるはずはない。

「はあ　」

アウラは、かわいらしい溜息を吐いた途端、気持悪い感覚に襲われた。

「アウラ。下ばかり見てると船酔い？　乗り物かなあ？　どつちでもいいけど、酔うぞ」

アウラは気持ち悪さを我慢して、ふらふらとチツチの傍に来ると身を寄り添いもたれ掛つた。

T
O
B
E
C
O
N
T
I
N
U
E
D

く 炎のレース く 第三部 第十五話（後書き）

最後まで読んで頂き誠にありがとうございました。

次回もお楽しみに！

炎のレース 第三部 第十六話

第十六話

不思議のチツチくん

チツチとアウラ、二十頭の山羊を乗せ振り出した雨の中をグロリー号は履帯から泥水の飛沫を巻き上げ走っている。

ジールの街と次のイマルク街で多少の混雑はあったものの、ノールの案内で失う時間は最小限に留める事が出来た。

他のレース出場者に船を見つかりと何かと厄介な事が増えると考え、万が一の為に離れた場所に船を隠した。

人気のない見付かり難しい場所を勘の良いチツチは、あっさりと見付け出してしまった。

山羊たちを追って街に入ると二日目の昼を過ぎた頃には、流石に他の出場者も多く到着していて、チツチと手続きの順番を待っている間、他者からの妨害を防ぐ為に山羊たちはアウラが見る事になった。

アウラは、人除けの魔法陣を地面に描き、魔術を行使すると人はアウラと山羊たちのいる一角を避けるように通り縋っていった。

チツチが頼んだとは言え、ノールの案内のお陰で下水やら匂いの酷い裏通りやらを駆けずり回る羽目に遭ったが、丸一日掛らずに周る事が出来た。

ノイルとはイマルクの街で別れた可哀そうな事にノイルは再度、密かにアウラにアプローチを試みたのだが、桃色が髪のアウラ天使は微笑みを浮かべ、やんわりと断った。

それともう一つ、可哀そうな事に仕入れの為にベールングの街に乗って来ていた自分の漁船をそのままに残して来てしまったのである。

ノイルはベールングの街まで漁師仲間の船に乗せて貰い戻るか、街道沿いにある馬車を使って戻らなければならぬのだ。

西方面全ての通過証明の手続きを終え、南方面の通過所を選ばれた街ナーンに向かう途中、船に設けられた狭い船室で一夜の休憩と仮眠を取った二人は一路、ナーンの街を目指していた。

次に向かう街はシュベルクからは然程遠くない。ジールの街より広野の中に位置している。

一度ベールング川に入水し再び広野に上がった頃、雨脚は強くなり風も強まった。

広野には所々に泥濘も出来ている。

昨夜。

時間に余裕が出来た事もありアウラの悲願によって街の公衆大浴槽に入り、さっぱりすつきりとした二人は、チャートルームを兼ねた狭い船室に備え付けられた一つだけある板張り狭いベッドとハンモックを吊るしの寝床に入った。

すると、アウラが口を開いた。

「ねえ……チツチ？ 聞いてもいい？」

アウラは遠慮がちに尋ねた。

「なにをなのかなあ？ 別にいいけど」

何時ものチツチの口調が返ってくる。

「この船の事……これ、何時か話していた元船乗りのお爺さんか、お母様に教えて貰ったの？ それともエリシャかな？ 『さいど…

…』 何とかとか『りたい』とか言う、からくりの事とか」

やわらかい口調の言葉でアウラは聞いた。

「どれも違うかなあ。母さんは沢山の事を教えてくれた。遠い昔の出来事や人が極北に追いやった蛮族、魔物と呼んでる異種族なんかの事、毒のある食べ物の見分け方や天候の事……いろいろ教えてくれた。爺さんは船の扱いを覚えてくれたけど、普通の船の操船とか原理とかを覚えてくれた……それと天測のやり方や夜空に輝く星の

中での星を基準に航海や旅をすればいいのか、砂漠を旅した時も役立ったかなあ」

チツチも間の抜けた締まらない何時もの口調で答え言葉を続けた。「……記憶に残ってるんだ……からくりの原理とか、いろいろな知識が……現状で可能な技術も未知の技術も……たぶん、生まれた時から……現在で作れない物はエリシヤが工夫したんだ」

チツチは淡々と話した。

チツチの言っている事の大半を理解する事が出来なかったアウラは取り合えず、一番気になってる事を聞いてみた。

「私がシュベルクに戻る前から、このからくりを錬金技術科のエリシヤと作っていたのですよね？」

エリシヤの事が絡むとアウラは、つい口調を尖らせた言葉になってしまう。

「怒ってるのかなあ、それとも妬いてるのかなあ」

すつとボケた様子の中に、からかいの混じる口調でチツチが返して来た。

チツチの言葉にアウラは何だか無性に、むかむかする気持ちが湧き上がって来る。

「べ、別に妬いてません！ チツチの方こそベールングの街で出会ったノイルさんと私が路地で話してた内容が聞こえて妬きもち、妬いてたんじゃないのですか？ 随分、出航前から御機嫌麗しくないようでしたからあ！ 誰かさんは耳も良いですし」

「なんのことかなあ？ 出航前は忙しくてピリピリしてたし、複雑なからくりを上手く操船出来るか不安だった上に操作にも疲れていたのでかなあ、……アウラとノイルの話なんて聞こえなかった……知らないなあ」

また、とぼけた声でチツチが返して来る。

「ノイルさんが言っていましたよ。騒ぎになりそうになった人混みから手を取って裏路地に逃げた時『僕がきみを守るよ。危険な場所に平気で送り出すような奴が、きみを守れるとは思えない』って……、

イマルクで別れ際にもプロポーズされちゃった……ど、どうしようか迷いましたけど、チツチの面倒は私にしか

「アウラの言葉を遮りチツチは声を荒げた。

「そう！ 良かったなあ……前から思ってたんだ……、俺はアウラを苦しめてるんじゃないかって……これまでも、これからも俺はアウラの仇でグリンベルの悪魔と呼ばれる存在を、この身に宿している。……だからあの時、ランディーたちから逃げ回り学園に行く事を避けていた……、でも、あの時、約束したから……アウラと約束したから逃げないで」

チツチの荒かった声は次第に勢いを無くして行き、最後は悲しさを表すかのように語尾に向かい小さな声になっていった。

「かも、でしょ？ ……」

アウラは、突然吐き出したチツチが抱えていた苦しみの吐露と心の迷いに驚き言葉を失った。

暫くの沈黙が続き、会話の無い静かな時間が流れる狭い船室には強くなった雨が船体を叩く音と風がマストに張られたロープを通り過ぎる音はまるで口笛のようでもあり、ロープを切りそうな音が、外の様子を伝えてくる。

同じ気持ちだった。

その事は良く知っているつもりだった。

自分もそうなのだから……。

何時もは、へらへらして締まりのない間の抜けた様子で本心を見せる事のないチツチだから、本当の意味で気付いて上げる事が出来なかった。

思い上がりかも知れない。でも……。

チツチは、きつと自分を好いていてくれる。

だから、余計に苦しんでいたのだろう。

仇である人を好きになる……自分もその苦しみに気付き始め良く知っているはずだった。

チツチは何時も危険を冒し自分を助けてくれた。

風狼に出会った時、北の神殿で禁術書を狙う騎士と魔術師の一団の時、北の神殿からシュベルクに帰る途中、何者かにさらわれた時、レース前に羊たちを追って訓練に出掛け傭兵たちに捕まってしまった時も……、時にはチツチ自身の身体に大きな代償を残す循環の封印を解いてまで自分を守ってくれたのは、王国の騎士団でも憧れのランディーでもない。

分かっていたからノイルにもそう言ったはず……。

ここにいる一人の山羊飼いの少年。

アウラは、ハンモックから起き上がりお尻を支点に、くるりと身体を回して床に足を着いた。

静かに立ち上がりチツチが横になっているベッドの傍に来るとチツチを押し退け、天井を見ながら仰向けになっているチツチに背を向ける形で身体を横にし床に潜り込んだ。

「このからくりは、エリシャが一人で試作したんだ。実験用の小型船に合わせて作ってあった……俺がレースに出るとランディーの部下から聞いて用意してくれたんだ……」

チツチが、ぼそりと震える声で呟いた。

「なぜ、何日も学園休んでいて、突然シュベルクに来たの？」

チツチがアウラと背中を合わせる形で横向きに寝返った。

「……それは言えない」

「この期に及んで私に隠し事？」

「……言えない事もある……言えなきゃとアウラが悲しむから」

「私が悲しむような事してるんだ」

「……」

「何処かの女の子と仲良くしてるのかなあ？」

「違う……けど言えない」

「じゃあ、許してあげる」

「言えなくて、ごめんなあ……」

アウラがチツチの方に寝返りを打とうとした時、一瞬早くチツチの寝返りを打つ床擦れの音が聞こえた。

アウラは、そのまま背を向けていた。

きつと、今寝返りを打てば熟れた桃のように桃色に染まっているだろう、顔を見られてしまう事が恥ずかしくて堪らなかった。

暫くそのまましているとチツチの腕が腰の上を撫でるように通り過ぎ、お腹を通り越してシーツの中と外側からアウラの腰へと回った。

「チツチ……くすぐりたい」

「アウラ……寝床から落ちる」

チツチがそう言うてアウラの身体を引き寄せた。

二人の身体の温もりが伝わり合う。

何時の間にか、チツチは静かに寝息を立てている。

アウラは、チツチの腕枕の中で寝返りを打った。

チツチの顔が、ランプの薄暗い明りの中で近くに見える。

「ごめんね……チツチ」

アウラは、自分の唇を薄い寝息の漏れているチツチの唇に近づけ軽く触れさせた。

その後、強く押し付けその感覚を惜しむようにゆっくりと唇を離れた。

「おやすみ……チツチ」

アウラは、そっと紫水晶の瞳を瞼で覆い被せた。

「おやすみ。アウラ」

チツチが起きていた事を知って驚き、今さっき自分のしでかした事に顔から火が噴き出すかと思う程、頬が熱くなった。

「朝……刺さってたらごめんなあ。アウラ」

チツチが、寝言でも言っているように呟いた。

「なっ！ なにが？」

「なんでもない……けど、ごめん」

「うん」

アウラは、混乱していてチツチの言っている事の意味も理解せず「うん」と答えた。

何時しか風雨は収まり掛けているのか、外の様子は先程より静かになっていた。

T o B e C o n t i n u e d

ゝ 炎のレース 〉 第三部 第十六話（後書き）

最後まで御読み下さいますと誠にありがとうございます。 > (—
—) <

次回もお楽しみに！

炎のレース 第三部 第十七話

第十七話

雨中の砲撃

翌朝。

昨夜、一度大人しくなった雨は夜が明けても降り続いていた。昨日は時折、地面の土を叩き上げる程、降ったり小雨になったりと落ち着かない空模様が続いている。

雨の中、晴れていたら陽の昇る頃に当たる時間からチツチは船を出ず準備を急いでいた。

風が強い内に船を動かしたいからだ。

水上でも同じであるが、帆船と言うものは最初の行き足をつける為にタグボートで牽いて貰うか、それがない場合下ろした錨を巻き上げる際に、その力を利用して船に行き足をつける。

陸でもそうすれば良いのである。

タグボートの代わりに牛か馬が何かに引かせればいい。

しかし、生憎広野の真ん中に野生の牛や馬が都合良くいるはずも無いし、いたとしても捕まえることに時間を費やしてしまう。

チツチも碇は下ろしておいたものの、水面のように上手く行くかは分からない。

幸い風向きと風の強さに恵まれ、用意した錨いかりは既にしまった。

「ふあ　！　おはよ……チツチ」

目元を擦りながら、ふにやふにや顔のアウラがチャートルームの丸い窓からチツチを見ていた。

レース中は旋毛の辺りで纏めてある細く美しい桃色の長い髪は下るされていて所々で跳ねている。

小ぶりで形の良い薄桃色の唇をのたくる蚯蚓ミミズのように時折、へに

やへにやと歪めながら、鼻の下を擦っては欠伸をし紫水晶の瞳は虚ろで虚空を見つめている。

アウラは低血圧で朝は弱い。

「おはよう。アウラ」

作業中という事もあって何時もより、はっきりとした返事がチツチから返って来た。

「昨夜は、あれから良く眠れたかあ」

チツチの問い掛けにアウラは無言のまま、こくりと頷いた。

「雨が酷いから、出航までもう少し寝ててもいいぞあ」

アウラは、こくりと頷くと船室の寢床に突っ伏した。

大人しかつた雨風が強くない始めた頃を見計らいチツチが出航しようとした時、アウラは髪を梳かし旋毛のあたりでリボンで結わえ身形を整え外に出ようとした。

「船室のにいいてもいいぞあ、今日も荒れそうだから　！アウラが風雨に打たれて風邪引いたり、疲れたりするとレースの後半に差し支えるから」

チツチの声が何時もより、はつらつとしているようにアウラには聞こえた。

昨夜の出来事が、そんなに嬉しかったのかと思う。

二人は身を寄せ合い狭い船室のベッドで眠った。

アウラは、チツチが寝る前に言った言葉が気になっていた。

あの時は、チツチが起きていたとは知らずに自分から唇を寄せてしまい、チツチが起きていた事に驚き恥ずかしさの余り混乱していたチツチの言葉に何気なく「うん」と答えたが、よく意味が分からなかった。

アウラは、昨夜チツチが言っていた言葉を聞いてみた。

「ねえ、チツチ？　昨夜、何か謝っていたよね？　なにを謝っていたのです？」

一瞬、チツチは身体を竦めた。

「……なんでもない。幸い？ 事故は起こらなかったけど……」
「事故てなに？ ねえねえてばあ！ 確か……『朝、刺さってたらごめん』て言っただけですかあ」
「そんな事、言っただけかなあ？」
「うん！ 言っただよ。私、何も考えずに『うん』て言っちゃったから気になって……教えてえ、チツチ」
アウラは嬉しそうな微笑みを浮かべて聞いた。

「……ね、寝ぼけて覚えて無いなあ？ 寝言……言っただのかなあ」
チツチは誤魔化すように言葉を濁した。
覚えてはいる、悪気で言った訳ではないけど……。

言えるはずがない。

「寝言だったんですね？ チツチの寝言にしては何時もと違う感じでしたけど……！ それと事故ってなんですか？ でも、安全な旅が一番ですね」

アウラの頬笑みが、チツチの胸に突き刺さる。

「そつだ！ 事故は無い方がいい……なあ」

万が一事故が起きていたらと考えると心が痛い……。

「そうですね！ うふふ」
「そつだよなあ、事故じゃない形がいいよなあ」
チツチは小声で呟いた。
「なにか、言いました？」
「なにも……」

男の子の朝の事情を話せる訳がない。

「か、風がいい。出航するぞお」

チツチが操船を行う為の操作場に立ち、陀輪を回しマストに展帆すると帆は風を一杯に孕んで膨らんだ。

制動を外すと、ゆっくりと船体が動き出した。

船の行き足が十分に付くと最適帆を合わせ、次の街、ナーンに船首を向けた。

南に向うに連れて激しさを増す風雨の中を走るチツチの船から、見て東側に数台の大型の馬車がナーンの街に向け疾駆している。

恐らく出場者が家畜を運んでいるのだろう、と思われた。

もう、これでは放牧レースと言うより家畜を運ぶレースだ。

数年前から昔ながらの家畜を追って歩いたて周っていた放牧レースも様相をすっかり変えている。

街の発展も放牧レースを変えていった一つの原因だった。

指標になる街には、収穫祭にレースの出場者たちを見ようと多くの人が集まる。

人が集まれば街の経済が潤うのは道理。

その指標の街になる為に指標街の登録をする街は次第に増え、周る距離も延びていった。

次第に過激さと苛酷さを増していく放牧レースに熱狂する観衆の要望に伝統は崩されていった。

ここ数年は特に様々なレース展開が繰り広げられ更に人々は熱狂していった。

様々に変更されていくシンプルだったレースのルール。

「チツチ、この船で山羊を運んでいても減点にならないのかな？」

確か馬車で家畜を運ぶ事は減点の対象になっていたと思うんですけど

ど」

アウラは、船室の丸窓から顔を覗かせチツチに尋ねた。

「確か、登録外に他の家畜を使って追う事を禁止していたはずだったなあ？ ……でも馬車は家畜じゃないから減点にはならないけど、それを引いているのは馬だから減点される。これは船だし他の家畜を使つてる訳じゃないからなあ」

放牧では羊を追うのに牧羊犬を使う。

主は、馬に跨つてその後を追つたり、群れから逸脱しようとする家畜を追い群れに戻したりする。

群れを組む習性の家畜もあるので、放牧民は馬や牧畜犬を用いて旅をしていた。

レース前に、家畜を追う言わば道具として馬を登録してあれば何の問題もないが、その分最初からハンディーを背負う持ち点となっている。

それぞれの出場者たちは、あれやこれや点数を考えながらレースを展開しているのだ。

「チツチ！ 馬車の窓が開いて何か筒のような物が出て来ましたよ？」

アウラは、チツチが六分儀を使う時に使用していた望遠鏡を覗いて並走して走る形になっている馬車を見ていた。

「これ！ すごいですね！ 麦粒程にしか見えてない馬車が、こんなに近くに見えるなんて」

はしやぎながら望遠鏡を覗いてアウラが言った。

「爺さんが言うには、六分儀もその望遠鏡も何処かの遺跡で見つかったものらしい。今ある望遠鏡より数倍遠くまで見れる。それにこの世では、まだそれを作る技術もないらしいから、今直ぐ作れるような代物ではないらしいぞお」

「ふん。そうなんだ。世界って不思議でいっぱいですね。チツチ……あつ！ 何か光った」

アウラの声に数瞬遅れて轟音が届いた。

「雷？ ですか……雨は次第に弱まって来ているし稲光も見えないのに……」

アウラの言葉を聞いたチツチは素早く右眼の包帯を解き、アウラの見ている方向に振り向いた。

その時、重苦しい音と伴に近くの地面は草や泥水と土を弾き、吹き飛んだ。

「きゃあ！」

続け様に砲撃音と着弾音が雨中に轟音を響き渡らせた。

「きゃあつ！」

アウラは綺麗な桃色髪の頭を抱え込み、その場にしゃがみ蹲る。

「大砲だ！ アウラ船室から出てこつちに来い！」

雷の苦手なアウラは、一目散に船室から出るとチツチの傍らに寄り添った。

「大砲を馬車に積んでるの？」

着弾地点はまだ遠い。

「俺たちの情報が流れてるのかなあ？ しかし、妨害工作に大砲まで持ち出してくるかなあ……普通」

「チツチ、呑気な事言つてないで逃げなきゃ」

「その必要はない。ふむ……二百六十三フィール（約八十メートル）て所かなあ？ もう少し先になれば別だけど当分この距離を保てば向こうの砲撃は届かない」

大砲を載せた馬車はナーンに向かう整備された街道を走っているようだった。

チツチたちの船は、道なき草原を走っている。泥濘の中を走れるのは、履帯のお陰であるが、ナーンに向かうに連れ街道との距離はじわじわ縮まり、やがて大砲の射程圏に入る。

向こうもそれを知っているはず、そう考えチツチは、この砲撃をただの威嚇と判断した。

このまま距離を保っていけば砲弾は船まで届かない。

大砲の射程距離は、大よそ……百六十四フィート（約五十メートル）。

船との距離は、チツチの目測で大よそ二百六十三フィート。

「どうするの？ チツチ」

「どうもしない。このままナーンに向かい一気に南の街リスブルに向かうだけだ」

雨は次第に弱まるが砲撃の雨は次第に激しさを増す。

目指している南の方角は明るくなって来ている。

天候が回復すれば火薬を濡らし湿らす心配がなくなり、今より激しい砲撃が予想された。

To Be Continued

ゝ 炎のレース 第三部 第十七話（後書き）

最後まで御読み下さいますと誠にありがとうございます。 > (—
—) <

次回もお楽しみに！

炎のレース 第三部 第十八話

第十八話

チツチ倒れる

南に進むに連れ時折、日差しが雲の間から差し込み光の幕を下ろしている。

その風景は光で繕った光のレースのカーテンのように見える。

など、と呑気に自然が生み出した奇跡の風景を楽しんでいる暇はない。

砲撃は暫くの間止んでいる。

それは天候の回復とチツチたちの船と街道を並走している武装馬車との距離。

相手もその事を良く知っている。

射程外から撃つて来たのは恐らくチツチたちを意図的に任意の場所に追いやるための威嚇。

チツチたちがナーンの街に向かっていている事を。

このまま並走を続ければ、嫌でも大砲の射程に向うから近付いて来てくれるようなものだ。

「どうするかなあ？ でもなあ……」

チツチが、ぼそりと呟いた。

「なに言ってるんですか！ 徐々に距離が詰まって来てますよ！ チツチ」

「風が良過ぎるから進路変えたくないんだよなあ」

呑気な口調で顎を掻きながら、チツチは武装馬車との距離を測っているようだ。

そうこう言っている間に先に見え出したナーンの街と緩やかに街に向けて曲がっている街道が見える。

ナーンの街へ入る西の街道も見え始め、街道を大型の馬車が数台走っているのが見えた。

「よし！ 決めた」

チツチがそう言い、すぐさまマストに張られた帆の風を抜き、帆を畳み込むと履帯を操作する握り手の右側を強く引いた。

「きやつ」

くるりと百五十度程、船体を回すと風上への方向に船首を向けた。急な方向転換にアウラの身体は振られ、チツチの方へと倒れ込んだ。

普段、操船が忙しい時は畳んである操作場にあつらえられてある二人掛け程の広さの腰掛けに二人並んで座っていた。

操船にも大分慣れて来たのか、座ったままで操船するチツチの傍らに座っていたアウラはチツチの膝に倒れ込んだ。

風上に向かうと思いきや、もう一度進路を戻す。

武装馬車が街に、そのまま入ってくれるか街道を更に南へと向かってくれれば距離が開くはずだった。

しかし、武装馬車は急激に速度を落としチツチたちの船に向かって街道から平原へと降り此方に向かって来る。

西にいた武装馬車らしきものも、街道から外れこちらに向かって距離を詰め出した。

チツチは、船首を風上に向け切り上がり始める。

武装馬車を誘導するように。

「チツチ？ 街から離れてますし気のせいかな追いつかれてるような

……気がします……」

「そうでなければ困る」

チツチの碧眼が笑っている。

「なぜ？ この船も大砲を積んでいるとか……？」

「そんな物積んでない。船の自重が重くなると陸を走れなくなる。馬で牽いてる訳じゃないからなあ」

ある程度、街から離れると再び砲撃が始まった。

一見してみると追い込まれているようにも見える。

「奴らは激しい雨の中、砲撃をして来た。なのに小雨になり雨が上がってからも砲撃をしてこなかった」

「それがなにか？」

轟音が響き大地が揺らぐ。

「街が近付いていたからだ。街の近くで激しい砲撃をすれば街の駐留軍に気付かれるからなあ、奴らは、この船を撃破したかった。なら、もっと早くから平原に入れば良かったが、そうしなかった」
「どうしてですか？」

着弾が地表を吹き飛ばし地面を抉る。

「泥濘の中を重い大砲を数台積んで入れれば、馬車の車輪が沈み動けなくなるからだ。奴らは、街に近付いていたから西側に俺たちを追い込み、挟み射程に入ったところを一齐射して沈める為に西側の武装馬車に信号旗を上げた。それが見えたから、俺は一度進路を変えたんだ」

チツチは、上手回しを繰り返し風上に切り上がる。

「でも、これ程街の近くで一度に撃つたら、駐留軍がやはり出てくるわけではありませんか？ それに動けなくなるかも知れないのに街

道を外れてまで追ってくるのはなぜです？」

砲撃音の轟音と着弾音の間隔が短くなっている。

「あの場所で砲撃したとして、砲撃の音を聞きつけた軍が大砲の準備をして出てくる頃にはそれぞれ、街を通り過ぎ逃げ切れるからだ。俺が一度、進路を変えたからあいづらは焦った。雨も上がりこの辺の地は、まだ締まってきたから追って来た」

「でも、どうするの？ このままじゃ追いつかれて射程圏に入っちゃうんじゃない……きゃっ！」

船体の近くに着弾し地面を抉った。

「大丈夫だアウラ。俺たちは風上にいる。帆船は風上の方が有利だから……帆船どうしならだけど」

「どうして？ きゃっ！」

砲弾が船の真横の地面を弾き飛ばす。

「風下になら、自由に船首を向けられる」

「でも、相手は馬車……きゃっ」

チツチは、帆の最適帆を合わせ船の足を上げた。

地面もやわらかい場所まで近付いていた。

「よし、引っ張り切れた。途中で引き返されて待ち伏せされるのは、ごめんだからなあ」

やわらかくなり始めた地面に重い武装を積んでいた馬車の速度は急激に衰えるが、履帯を足に持つチツチの船は僅かに速度を奪われるだけだった。

射程圏から十分に離れるとチツチは船首をナーンの街へと向けた。武装馬車は、泥濘に車輪を取られ、もう既に動きを止めていた。

チツチの笑顔がアウラの紫水晶の瞳に映り込んだ。
武装馬車の殆どが、泥濘に車輪を取られ傾いている。

もう、大砲の射角を調整しても船には当たらず、明後日の方向へと飛んでいくだろう、と思われる。

船がその横を通り抜けようとした時、轟音が響き渡った。

「きゃっ！」

砲弾は船の二本のマスト間を通り抜け直撃を免れた。しかし、砲弾はマストから船体に向けて張られていた一本のロープを掠め切つて行った。

張りつめられていたロープは弾き、チツチとアウラの方角に向かって飛んで来る。

「アウラ！」

チツチがアウラを抱きしめ、床に押し倒した。

その直後、メキツ、ミシツと鈍い嫌な音がアウラの耳に飛び込んだ。
だ。

「チツチ大丈夫？　ありがと、かばってくれて」

チツチはアウラに覆い被さる形で、ぴくりとも動かない。

「チツチ……チツチ　てばあ……痛っ」

アウラの頬にのほんの少し痛みが走り、手を触れると赤い血が滲み出していた。

船は切られたロープ以外に損傷はないように思えた。

船体も操船場も壊れたようには、アウラの眼には映らなかった。

船はナーンの方向に進んでいる。

履帯のお陰で進路も殆ど外れてないように思えるが、後ろのマストに張られた帆は、バタつき抵抗となり船足は徐々に衰え然程、速くはないが走っている。

ただ、チツチだけが動かない。

「チツチ……ねえ……眼を覚まして……チツチ　！」

アウラの白い肌に、少し粘り気を帯びた熱い液体が、ぼたぼた落ち始め白い頬を赤い鮮血で染め上げ、錆びた鉄のような臭いが鼻腔の奥を刺激した。

アウラは、無意識にチツチの頭部に触れた。

生暖かい感触がアウラの小さな手の平一杯に広がっていく。

持ち上げ様としたが持ち上げる事が出来なかった。

ゆっくりとチツチの身体を抱えながら横向きに倒した。

チツチを抱え直し操作場の椅子にもたれ掛けさせ、アウラは衣服の袖を肩口から破き傷口に巻いた。

アウラは、他に怪我がないかチツチの身体を隅々まで見渡した。

左手と左の足が、在らぬ方向へと向いている事に気付き、添え木になる物を探した。

船着き場に船を寄せていた時のチツチの姿を思い出す。

竿がある場所に来たが添え木に使うには長すぎる。

アウラは、自分が何時も持ち歩く節くれた杖を思い出し船室に戻った。そこには地図に自船の進んで来た航路を経路を書き記す為の道具があった。

定規を掻き集め、すぐさまチツチの下へと戻り手当を始め様として船室から出ると態勢を整え直した武装馬車がゆっくりと近付いてくる様子がアウラの眼に飛び込んだ。

チツチの下に行き治療を始めようとして自分の眼から溢れ出す、熱い透明な液体に気付く。

こんな時に魔術を使えたらと悔しくて下唇を噛んだ。

自分は、まだ強力な魔術を十分に扱いきれない。

悔しい。

涙が止まらない。

現代のグランソルシエールとソシエール本人から言われているが、今の自分は禁術の魔術を解読と魔法陣の解析に長けているだけで魔

術の威力や効果は然程、成長が見られていない。

悔しいよ……チツチ。

涙は溢れ視界が霞む、噛みしめた下唇が痛む。

「チツチ、死なないで」

アウラがそう呟いた瞬間。

態勢を立て直した武装馬車からの砲撃が再開され轟音と着弾音が辺りに響いた。

距離が開いたお陰で直撃は免れている。

「チツチ、死なないで……お願い眼を覚まして」

チツチの白銀にブルーマールの映える美しい髪が鮮血の赤に染まっていた。

袖を破って巻いた布はどす黒い色に染まっていた。

船の直ぐ近くに着弾し船体に衝撃が奔しる。

やわらかい足場に苦戦しながらも砲撃は徐々に正確さを増して来ているように思えた。

アウラは、チツチに応急処置を施し終わると節くれた杖を強く握りしめ立ち上がった。

禁術は自分の身にも大きな負担が掛る。未熟な自分が禁術を扱えばどうなるか皆目見当もつかない。

しかし。

禁術を使っても、チツチの船ゆめを守って見せる。

アウラは決断した。

その時、アウラの腕の中で血まみれのチツチから弱々しい声が聞こえた。

「アウラ……を……早く」

「チツチ！ よかった」

拭ったはずの涙がアウラの紫水晶の瞳に溢れ出す。

チツチが立ち上がるうとして床に崩れるように伏していく。

アウラは慌ててチツチの身体を支えた。

「アウラ……封印を……解いて、くれ」

轟音が響き砲弾の雨が降る中、チツチの碧眼と普段は包帯の下に隠れている人外の真紅の右眼が、冷たい眼光を放ってアウラを見つめている。

T o B e C o n t i n u e d

ゝ 炎のレース 〉 第三部 第十八話（後書き）

最後まで御読み下さいますと誠にありがとうございます。 > (—
—) <

次回もお楽しみに！

炎のレース 第三部 第十九話

第十九話

覚醒する悪魔

轟音が轟き近くに着弾する度に泥水と土煙が小さな礫となって二人を襲う。

「封印を解いたらチツチの身体は姿を変えてしまっじゃないですか！今は右眼だけです。その内、人でなくなってしまうかも知れない……そんなの……そんなの私嫌です」

「血と体力を失い過ぎた。もう一つの循鱗が……グリーンベルの悪魔が……俺の身体と精神を取り込む前に……早く！」

「あいつ？」

着弾は続いているより近くにより正確になりつつある。

「母さん、の……循鱗……力を解放……して本来の、循鱗……効果を最大限に引き出し……あいつを……追い払う。武装馬車も」

「いや！お願いチツチ、もう封印は解かないでえ！チツチが人でなくなっちゃったら……私」

支えのロープを無くしバタつく帆は無駄に抵抗となって船足を落としていく。

「大丈夫……アウラ信じてくれ、このままでは……何れ追いつかれることになるだけだ」

唇を近づけようとするチツチの身体をアウラは首に両腕を回し強く抱きしめた。

「アウラ……」

チツチの肩には爪先立ちで精一杯背伸びしたアウラの小さな顔が乗っている。

「封印は解きません……絶対に」

その時、船尾の手摺りを砲弾がかすめ、破片が飛び散った。

「あぐう……」

チツチがアウラを床に押し倒し被さるように破片から守る。

アウラは、それでもチツチの首から腕を離さなかった。

「ア、ウラ……封、印……を」

先程より弱々しく消え入りそうな、チツチの声のアウラの耳元で囁かれた。

チツチの身体の下でアウラは床一面に広がってゆく血溜りに気付いた。

背中から感じる生暖かい感触と一面を覆う錆びた鉄のような臭い。

「チツチ？」

ぐったりするチツチにアウラは呼び掛ける。

チツチの流す血でアウラの白い絹のシャツも真紅に染まっていた。

流れ出している血の量と自身を染める出血量でチツチの傷が相当酷い事を感じる。

これ以上血をチツチが失う事は死を意味する。デッキに広がる血溜まりと衣服が湿った感覚で理解出来た。

「チツチ？ チツチ！ チツチ」

ゴボツ、ぴちゃぴちゃと不快な吐血の滴り床に落ちる音のアウラの耳元で聞こえる。

それでもチツチは右腕を伸ばし右膝を立て起き上がろうとしている。

自由にならない左腕と左足を引きずりながら、アウラの身体から逃れるように離れていく。

アウラは、呆然と首に巻いていた腕の力を抜いて離れるチツチの身体を見送った。

「おれ……は……アウ……ラを死な……せたくない」

「ばかあ！ 何時も何時も自分の事……放つたらかしでえ！」

「それ……でもだ」

アウラは、チツチが流した血の海の中で真つ赤に染まりながら呆

然としていた。

それでも変わってほしくなかったグリーンベルの悪魔ドラゴンの姿に。

封印を解く事を拒んだ結果。チツチは、更に重い傷を負う事になっ
ってしまった。

後に残ったのは切実な願いと大きな後悔。

「アウ……ラ」

「チツチ……なあに？」

「だよ」

チツチの苦しそうな微笑みが、虚空を彷徨うアウラの紫の瞳にぼ
んやりと映り込んだ。

「……ばか……こんな時に……」

アウラは、動けず何も答えられずに灰色の空を見上げた。

激しい砲撃は続き、やがて武装馬車は大砲の有効射程にグローリ
ー号を捕らえようとしていた。

重そうに身体を引きずりながら這い出すチツチを、ただただアウ
ラは見送った。

「チツチ……」

アウラは震える声でそう呟いた。

チツチは不自由な身体を引きずりながら船尾の甲板に向かった。
船の縁に右手を伸ばし手を掛け立ち上がる。

(山越え、操船に準ずる諸々の事に……母さんの力を使い過ぎた……
今の俺にはこれ以上、循環鱗が持つ本来の力をもう引き出せない……
アウラが封印を解く事を拒む以上……あいつを一度、解放し身体
を回復するしかない)

チツチは胸の中で呼び掛ける。

おい！ 今から俺の意志を弱めてやる。本当はお前なんかの力なんか借りたくはない。しかし、このままではアウラが……お前も危ない。俺が死ねばお前も死ぬ。お前は俺が赤ん坊の時、母さんが俺の体内に埋め込んだ循鱗の破片！

「情けない奴め人間如きが完全な循鱗われの力に頼りよって愚かな奴だ。もっと弱ったところでお前を古き循鱗と伴に取り込んでやろうと思つたが、なかなかしぶとい。流石は循鱗を宿す者と言っておく」

お前は俺の肉体と精神を乗っ取り母さんの循鱗をも取り込もうとして同化を試み一度、しくじつたお前は母さんの循鱗と違い不完全だ。俺と伴に消えてなくなるか、それとも元の循鱗に回歸し生きるかだ。どの道、お前は消えるだけだなあ！ さあ、どうする？ グリンベルの悪魔。

「愚かな奴め、我も貴様の母の循鱗同様封印されている事を忘れたか」

お前は一度、俺の肉体と精神と同化してる。俺の意志を全てお前に委ね、お前の意志を前面に出せば、循鱗おまえの力を使えるかも知れれい。俺の肉体と精神を使つて出てみるか？

「安い挑発だ。愚か者め！ 我の力を一時的に使い超再生能力を発揮した後、回復した貴様は母の循鱗を解き放ち瞬時に意志を入れ替え、あわよくばそのまま我を母の循鱗に回歸させるともりなのだろう」

流石は俺だなあ……お前は、俺の分身体のような奴だからな

あ。よく分かつてるなあ。

「……まあ良い。その試み我も乗ってやるう。だが、貴様がしくじった際には、その肉体と精神を媒介にさせて貰う。そして我が新たな唯一無二の究極のドラゴンとなるう」

まあ、そうはさせないけどなあ。

「人間よ！ さあ貴様の全てを我に渡すが良い」

アウラは血溜りの中で我を取り戻す。

甲板には血で赤く染められている所からチツチが這って行った方向に刷毛で伸ばした染料のように伸びた赤い血の後が残されている。血の海の一部は所々黒く色を変えていた。

「チツチ！」

アウラは身体を起こすと態勢を低く取り四つん這いで這うように床に伸びた血の跡を追った。

砲撃は更に正確さを増しているが、やわらかい地面と揺れる武装馬車から上手く狙えないように思われる。

着弾で舞い上がる泥水と泥の雨と衝撃で揺れるグローリー号の甲板を這いながら、アウラはチツチの下に急いだ。

アウラの紫水晶の瞳がチツチの姿を捉えた。

チツチの様子が可笑しい。

確かにチツチは酷い傷を負っているが、それとは明らかに異なる異変がチツチの身体に起こっている事が分かった。

「チツチ！」

アウラは砲撃と着弾音が響く中、喉が潰れてしまうかと思う程大声でチツチを呼んだ。

チツチに声は届かなかったのか、何の反応も見せなかった。
アウラの瞳にチツチの背中が革の水袋一杯に水と詰め、張り裂けるくらいに膨らんでいる時のように膨れ上がり衣服が裂かれて行く様子が映り込んでいた。

アウラは砲撃の衝撃に揺れる甲板に立上がり、手摺を掴み辿るようにチツチの下へと急いだ。

チツチの背中中の生地が張り裂けた。

左首筋に描かれた封印の魔法陣が漆黒の光を放っている。

封印が解ける？ でも何かが違う。

裂けて無くなった布地の中から血の色に染まった赤黒くなっているチツチの背中に突き刺さったグローリーの船体の破片が無数の小さな翼のように見えているのだとアウラは思った。

痛々しいチツチの背中に刺さった破片が形を変えていく。

封印を循環の解いた時に北の神殿で見た時のような虹色に輝く美しい翼ではなく、黒い結晶が集まった漆黒の翼。

折れて動かす事も出来なかったはずの左手は持ち上がり、黒く鋭い爪を備えていた。

左足も同様、人外のものと化している。

全身がドラゴンの姿をしている訳ではなく、遠目からは人に見えるだろう、と思われた。

変化を起こしているのは両手足と背中中の翼のみ。

「チツチ！」

アウラの声に反応しチツチが振り向いた。

「チツチよかつ……」

アウラは声を失った。

チツチの左の碧眼と炎のように赤い右眼は漆黒一色に染まり、そ

「五月蠅い！ 小娘。こ奴の全てを我が頂く邪魔をするな」

「あなたは、だれ？ チツチから出て行って」

「それは無理だ。我とこ奴は既に遺伝子レベルで融合している。追
い出したくば、こ奴ごと殺すのだな」

「いでんしれべる？ 何？ それ、言っている事が分からない」
アウラは、聞いた事もない言葉に戸惑いを覚えたじろいだ。

「リヴァ！ あいつを取り押さえろ！」

何処からか一度聞いた事のある声が聞こえチツチの身長のはあ
るうかと思われる白い大きな蛇に羽根のような物が生えた生物がチ
ツチの身体に纏わりつくとその身体を巻きつかせ、チツチの身体を
締め付けた。

「己！ リヴァイアサン邪魔をするんな！」

「お漏らし娘何をしている！ 早く封印を」

「なあ！ なぜそれを……」

「おしゃべりは後だ。チツチに巣くう化け物を早く封印しな」

「あつ、はい」

アウラは手に持っていた節くれた杖に括られた鐘を響かせ口上を
述べた。

からん

「パース perth・ウルズ uruz・ベルカナ berkana」

(秘め事よ。力を戻しなさい)

変わり果てたチツチの形相に臆せず薄桃色の唇を寄せ唇を合わせた。

「後、少しで私の身体になったものを……」

チツチの声に重るくぐもった声が口惜しそうに言い残り消えた。その声が消えるとチツチの身体がその場に崩れ落ちた。

「まったく、世話の焼ける奴だ」

アウラの背中の後ろに黒づくめの姿が現れた。

「あなたは……確かあの時の」

アスカが倒れたチツチを抱え上げた。

T o B e C o n t i n u e d

ゝ 炎のレース 〉 第三部 第十九話（後書き）

最後まで御読み下さいますと誠にありがとうございます。 > (—
—) <

次回もお楽しみに！

炎のレース 第三部 第二十話

第二十話

風が変わる前に

桃色の美少女が少し剥れた顔で速度の落ちたグローリー号を操船している。

好奇心豊かなアウラはチツチに操船の仕方を教わっていたが、からくりのお陰で大分乾燥化されている操作も並みの人間が操るには複雑なものだった。

アウラは何とか舵の操作をしているだけで特に複雑な帆の調整などを行えるはずもない。

切られた帆の修理などはアスカがしてくれ、帆の調整も合わせてくれた。

その後、アスカはチツチのブルーマールの映える白銀の髪を自分の腿に乗せ膝枕して甲板上に座っている。

暇なのだろうか時折、アスカがチツチの頭を撫でたり自分の身体を前後に動かしている。

アスカが少し前に身体を倒すと、それだけで何を食べていれば、あそこまで膨れ上がるのかと思える程の凶悪な胸がチツチの顔に押し付けられる。

アウラは自分の控えめな胸元を見て切なさを覚え小さく溜息を吐いた。

グローリー号をナインの近くで停船させ眠っているチツチの代わりに通過証明書を貰う為に山羊を船から降ろし始めた。

頭数は二十頭。

際にも砲撃の直撃を受けずに済んだお陰で山羊を一頭も失う事は

なかった。

「わたしが、この船とこいつの面倒を見ておいてやるから手続きを済ませて来るといい」

アスカがそう言っつて、まだ残っているチツチの顔に付着していた血を水に浸した布で拭き取っている。

チツチの状態というと酷かった怪我は、一時的に循鱗の破片を解放した際にチツチの母の循鱗が共鳴し力を発揮したのか、みるみる内に傷口を塞いでいった。

その時アウラは初めて循鱗が本来の力を発揮した、その凄まじいまでの超再生能力を目の当たりにしたのだった。

チツチの姿も依然と変わらず右眼の瞳だけ人外のものそのままだったが、他に変化は起きていなかった。

ちよつと心配ではあるだが、チツチとアスカを残しアウラはナーンの街へと山羊たちを追って向かった。

アウラの心配事とは無論、チツチの容態。しかし……やけにアスカの事が気に掛かる。

黒尽くめの外套と口元の黒い巻き布を取り去ったアスカは、とんでもない二十歳前後の美人だった。

この辺りでは、殆ど見る事のない艶やかな黒い髪に茶色掛った美しい黒い瞳は、同性のアウラから見ても惚れ惚れするような容姿端麗の美女に思えた。

その上、凶悪とも取れるあの胸の持ち主で魅力的な女性である事に間違いはない。

アウラはグロリー号が見えなくなるまで、ちらちら振り返りながら街の中へと入っつていった。

ナーンの街に入ると思っつていた以上に混雑していなかった。

レースが始まっつて三日目にもなれば、他の出場者もその他の出場

者たちの動向を探り多方面に散らばり始め、どの街に行けば通過証明の手続きで混雑を避けられるかなどを考え出す。

チツチの読みと勘は間違つてなかつた。

始めから南方面に向かつた者たちは既に南を周り東か西に移動を始めているだろう。

当然ながら西から来る者たちは西方面を周るのに二日間程、時間を費やしているはずだ。

風に恵まれた足の速いグローリー号のお陰で通常二日近く掛かる西方面を一日で周り切る事が出来たチツチたちを追隨して来ても追いつけないので、まだ到着している者たちはいなかつた。

東から流れて行つた者たちは、東方面を周り切る事は、頑張れば一日程で周り切る事が出来るだろう。

その後、一日余りで到着出来るリスブルかナンンに向かうか、約二日程掛け東に向かうかのどちらかだ。

恐らく移動に約二日を費やす事になるが、通過書を三か所で手に入れる事が出来る東に向かうことだろう、その後シュベルクまでの移動に一日掛けても計六か所の通過許可書を手にしてシュベルクに戻る事が出来る。

遅れをとっている者は当然ながら、足自慢の家畜を追う者や減点覚悟で大型の荷馬車を使用して西に向かう者が多くなる。

東から南に下つた者たちは一気に最南端の街リスブルに向かい、シュベルクとリスブルの大よそで直線状にあるナンンの街を後回しにして残りの日数と移動日数を考えシュベルクに帰る途中に立ち寄り通過証明書を手にしていくだろうと、チツチは読んでいた。

広野の中にあるナンの街に先に寄れば、くの字を描く進路を取る事になり道程が増える事になるのだから、わざわざ移動距離を増やす事をする者は少ない。

中には、裏を搔く者たちもいるはずだから、多少の混雑は覚悟の上だった。

これ程速やかに通過証明を得る事が出来るとはアウラは思つても

いなかった。

その後、残りの日数を考えれば南方面で二か所の通過証明を受取って計五か所の通過証明を持ってシユベルクに戻る事になる。

アウラは、ナンで六か所目の通過許可書を受け取ると急いでグローリー号へと向かった。

チツチの容態が心配事でそうさせるのか、はたまた恋心がそうさせるのかアウラは自然に足早になる自分に気付くが、逸る気持ちで最後には駆け足で走るようにスカートの裾を掴み、後頭部で纏められている桃色の髪を上下左右に揺らしながらグローリー号へと急いだ。

グローリー号に着き甲板に上がると二人の姿が見えない。

アウラは辺りを見渡し二人の姿を探していた、その時。

「うぐう……」

船室の方から苦しそうな呻き声が聞こえた。

「大人しくしている！ 無理はしなくていい……お前は寝ているだけでいい」

「触るなよお！」

まだ何処かに傷が残っているのだろうか、とアウラは思い船室の扉を開こうとした。

「あつはあはあ！ お前……大分溜まっているな？ わたしがやさしく抜いてやるう」

「いいのなあ？ もの凄く溜まっているし今、もの凄く硬くなっていると思うぞお、たぶん」

「その方が遣り甲斐がある」

「ふむ……じゃあ、頼んでいいかあ？ 正直、毎日辛かったんだ」
「まっ……そうだろうな」

アスカのやわらかで意味ありげな声が聞こえる。

「アスカ、早くしてくれ」

「そう慌てるな……久し振りみたいだから、ゆっくり丁寧にしてや

るからな」

アウラは、始め二人が何を話しているのか分からなかったが、ロザリアが読んでいた小説を半ば強引に渡され、読んだ時に書かれていた内容を思い出し頬を赤らめた。

アウラは本の題名に興味を持ち読んでみたがその内容に、初心なアウラは思はず絶句した事を覚えている。

『鳥籠のローラ姫と悪戯騎士』と見開きに銘打たれた題名に、城を鳥籠に例えた話で城の外に出る事の出来ないローラ姫を悪戯好きの騎士が時折、人眼を盗みローラ姫を外に連れ出し城から出て一時の自由を楽しませている内に、やがて恋に落ちる話なのだと思像していた。

冒頭はそのような展開で物語が進んでいたが、その内にアウラの口からは決して言えない行為が行われ始め、顔を赤らめながら読み進めていくと更に信じられないローラ姫と騎士の二人は通常でない愛情表現を展開する物語だった。

「お前は疲れているだろう？ 横になっていればいい」

「ああ、そうする」

「では、始めるぞ」

アウラは扉の向こうの光景が物語の一部の内容と重なって船室に入る事が出来ず、呆然と立ち尽くすた。

まさか！ そんな事……な、ななないよね？ チツチ？

「アスカ……そこ気持ちいい……やっぱりアスカ上手だなあ」

「ばか……恥ずかしいから、そんな風に言うな。そんなに慣れている訳じゃないんだぞ……本当に気持ちいいか？」

「ふむ、最高に気持ちいい……天に昇って行くような気分だ」

「じゃあ、少し本気を出すからな」

「そんなにされたら、本当に直ぐ天に昇ってしまうじゃないかあ」

アウラは顔を赤らめながら突然、別の感情が顔を覗かせると一気

に船室の扉を開いた。

「チツチ！ なにやってるの二人とも！ 破廉恥な行為をしてるんじゃない……ない……よね……」

「……」

「……」

狭い船室の空気が急速に温度を下げて空気中の水分全てが凍りついた。

「破廉恥？」

チツチとアスカは、あんどりと口を開けて呆然としていた。

「……な、ななんでもありません！ これは……その……そう！
「ご、ごご誤解です」

アウラはこれ以上茹でても赤くならないと言う程に顔を赤らめ、
そう言い残し船室の扉を閉めた。

「はあ」

アウラの切ない溜息が灰色の雲が覆う空に木霊した。

「凝りをほぐしてたんだ……勘違いしちゃった……うう、恥ずかしい」

アウラは、しょんぼり項垂れ、膝を抱え込み膝に顔を埋めた。

「もう、チツチの顔……見られないよお……」
「なにがあ？」

間の抜けた声のアウラの背後から飛んで来た。

「……なんでもない……それより怪我はもういいの？」

「ああ、一時的に母さんの力を使い過ぎて循鱗の力を出せなくなっただけだ」

「……でも、封印も解かずにドラゴンの姿になり掛けてたじゃないですか……北の神殿や風狼の時とは真逆で……とてもおぞましくて、その……怖い感じがしました」

「まあ、複雑な理由があるんだなあこれが……何れ話すかも知れな

い

チツチはそう言い終わると展帆し出した。

後から船室を出てきたアスカはアウラを見て、くすりと笑いチツチの作業を手伝い始めた。

「アスカ、あんまりアウラを虐めるなよお、アウラを虐めていいのは俺だけなんだから」

「チツチにもそんな権利ないです！」

アウラは頬を膨らませ、ぷいっと横を向いた。

「さあ！ 出航だ。晴れ間が広がり風向きが変わる前にリスブルに到着させる」

昼を半ば回った頃、グローリー号はナーンの街を後にした。

「腹減った」

バフ、帆が風を孕む音がチツチの声を掻き消しグローリー号はリスブルへと船首を向けた。

To Be Continued

く 炎のレース く 第三部 第二十話（後書き）

最後まで御読み下さいますと誠にありがとうございます。 > (—
—) <

次回もお楽しみに！

炎のレース 第三部 第二十一話

第二十一話

炎の海

風に恵まれその風を上手く掴み、その日の陽が落ちる前にリスブル到着出来た。多少の混雑はあったものの、七か所目の通過書を手にしたチツチたちは一路東へと向かっていた。

激しい砲撃を受けたにも関わらずグロリー号に深刻な浸水は見られなかった。壊れた個所の応急修理を行ってシュベルク川を川上へと上った。

雨が上がった後、一番上に張られている横帆を縮帆しながらジグザグに上手回しを繰り返し風上に切り上がる。

途中、無風状態が一時あったものの、暫くして吹き返しの強風が南から吹き始めるとチツチは、帆を張り増し船足を上げた。

陸上の街道より広く、起伏がない川は丘や窪地を迂回しながら敷かれていく街道より、次の目的地の街までの距離は短い。

シュベルク川はベールング川より、はるかに水量も多く川幅も水深も深い。思う存分グロリー号の性能を発揮する事が出来た。

チツチも操船に随分慣れて来ている上に浅瀬に座礁する危険を避ける為、アウラの知らない所でも右眼の包帯を外し使える限界まで目一杯、循環の力を使っていたベールング川では時折、チツチが見せた険しい表情は消え、右眼の包帯を外して循環の力を使わずに済み、何時もの笑みを絶やさな顔に戻っているチツチの表情にアウラは安堵した。

チツチは笑顔が一番。

操作場の腰掛けに座るチツチの隣には、アウラは腰かけ薄い笑みを浮かべる。

「ふうふうふう、なかなかお似合いじゃないお二人さん？ 何時も何か私たちの会話に誤解を招くような、如何わしい事でもしてるのか？」

腰掛の後ろから、にやけ顔でアスカが声を掛け二人を冷やかした。「あ……あの！ アスカさん？ チツチが目覚めた時……なにか口走りませんでしたか？」

アウラは、先程の失態を誤魔化しチツチが何時も口走る、あやしい言葉をネタに今の微妙に状況までも誤魔化そうと試みた。

「うん……、わたしの膝枕から起き上がった時、胸に頭をぶつけた反動で床に後頭を打ち付けながら、そいえばなにか言っていたな、確か……」岩盛りゆわもデカパイン伝説！ あれ！』だったかな？」アスカが、そう言うのとチツチの頭の中では伝説とかになっっている凶悪な胸をチツチの頭の上にポイン、ポインと乗せチツチの背中にもたれ掛った。

「なっ！」

アウラは思わず絶句した。

「アウラはいいいな？ 肩凝らないだろ？ その胸なら。ああ！
これ、楽でいいわぁ」

アスカの顔が幸せ一杯といった表情になった。

アウラはチツチの表情を窺がって見たが、何時もの微笑みを浮かべる。

気のせいかな、その頬笑みが何時もより幸せそうに見えるのが腹立たしい。

なんなの？ 嫌がらせ？ それとも嫌味？

アウラは、学園の授業中にチツチがロザリアの隣に座っていた時、

居眠りから目覚めて時に口走った寝言を思い出した。

「チツチ？ 何時か授業中に口ザリアの隣で居眠りから起きた時になんて口走ってたか覚えています？」

「うん？ 覚えてないなあ？」

何時もより三割増しの笑顔でチツチが答えた。

「メ、メメ……」

「メ、メメ？」

「メロンパイですよ……メ、メメ、メロンパイ！」

アウラの声が裏返り震え出す。

「そうだったかあ？ 覚えがないなあ」

チツチは動じる事無く笑顔も崩さない。

「わ……わわ、私の時は何時もなんと吠えて目覚めます？」

「桃！」

即答だ……。

「な……なぜ即答？」

「なんでかなあ？ イメージ？」

「な、ななにのですか！ い、いったいイメージかしら？」

「胸」

またか！ また即答か……。

からん

アウラは節くれた杖を握りしめた。

「さてと！ 東の街のもう直ぐだし……、わたしはシュベルクに先に戻ってる。仕事もあるしな」

良からぬ殺気をアウラに感じたアスカは、そう言いチツチから離れると船の縁を掴むと飛び越え、川に飛び込んだもつとしている。

「アスカ　！　ここ川　！　岸に着けるから……遅かった、まあいいか」

「えっ！　まあいいかって！　チツチいくらなんでもそれは酷いんじゃない」

その時、アスカが水面に向かいあの翼の生えた大蛇の名を呼び川に飛び込んだ。

「リヴァア！」

その呼び掛けと同時に川の水面が盛り上がる。

アウラの眼には、悪しき循環鱗を自力解放したチツチを取り押さえた四枚の翼を持った大蛇が水面に浮かび上がった。

「死ぬなよ！　チツチじゃあな」

からん　　からん　　からん　　からん　　からん

小気味良い鐘の音がグローリー号の船体を揺るがした。

「はぁ、はぁ、はぁ」

アウラの荒い息遣いがアスカの耳に届いた。

「折角、怪我が治ったっていうのに……可哀そうな奴だ。まったく……」

アスカはリヴァアの背に乗り陸へと向かった。

東方面の指標街は三か所。

南からマキスの街、ヘスル、ギョスと川沿いに船着き場を持つ街が並んでいる。

レースは今日で四日目、東方面は大よそ一日だ周り切る事が出来る。

リスブルの街で通過証明書を受け取り、仮眠を取ってから出航した頃には雨も上がり空には星たちが踊っている。

月明かりとグローリー号に備え付けられている。航行灯の明かりを頼りに北に上ったチツチたちは、アスカと別れて間もなくマキス

の街に到着すると東側の通過証明をその日の内に全て揃えた。

流石に手続きの時に混雑に巻き込まれたが、陽が沈む頃には、十か所の通過証明を手にする事が出来た。

後はシュベルクに戻るだけ、恐らく全ての指標街を周り通過許可書を手にしたのは、チツチとアウラの二人だけと思われる。

夜間航行をしている時には、回復した循環鱗の力を存分に使い、万が一に備え座礁の危険を避けて来た。

そのお陰もあり時間に余裕が出来、ギヨスの街の宿を取りゆつくり身体を休める事にした。

無論、二部屋取り別々に休む事にした。

アウラが御立腹だったからではなく、常識的な事の流れで二部屋取つての事だ。

旅の疲れからか各自の部屋に入りベッドに潜り込むと早々に二人は夢の世界へと船を漕ぎ出した。

翌朝、陽の昇る前から東方面最北端に位置するギヨスの街をシュベルクの街に向かい船首を南西へと向けグローリー号を出航させた。無論、最短距離を行く為に陸路を走る。

風は南東の風。

風上航には違いないが最適な風向きでもない。

何事もなく行けば、シュベルクには陽が天中に差し掛かる前に到着出来る予定だ。

シュベルクとギヨスを間の広野をグローリー号は二つの街を結ぶ、ほぼ直線上で航行する。

南西の方角に向かう。

風の影響を受け船体は若干風下に流される為、時折進路を修正する必要がある。

水面を風上に切り上がる時、チツチは最新の注意を払い難しい上手回しを繰り返して来た。

風上に向かう際、風下に流された進路を上手回しで切り上がろうとすれば一度、風を真正面から受ける事になる。

帆船は風上に切り上がる限界の角度があり、それは船の性能や帆の偽装によって、切り上がり角度は変わるが、風に向かい真正面方向には絶対に進む事は出来ない。

上手回しは一度、帆の風を抜きマストを回し帆の張りの面を変える為、失敗して裏帆を打たせてり帆をバタつかせれば、船足は落ち最悪裏帆を打たせてしまった時には帆が破れ航行不能に陥る危険も孕んでいる。

チツチが設計したグローリー号の偽装は縦帆で風上に切り上がる角度を横帆船より深く取れる。

同じようにジグザグに航行しても直線状をコース上と考えるならば、コース上からの逸脱が少なく済むと言う事は、それだけ速い船であると言う事である。

コース上から風下に流される角度が大きい程距離が延びる為、切り上がり性能の良い船は結果的に目的地に早く着く事が出来る。

真正面から来る風に帆の角度を合わせながら風下に落ち、くるりと船体を旋回させる下手回しもあるが、大周りになる為、進路を修正する際、上手回しより容易な分若干時間が掛る。

地上を走る時には、履帯のお陰で少しの進路変更なら帆の張り替えをしなくても済み僅かな帆の調整と合わせるだけで済む。

風が強く大きく流されれば地上でも上手回しか下手回しを行うが、小回りの利く履帯の特性を生かせば無理に上手回しをしなくても下手に回って旋回する事ができ時間のロスも少なかった。

陽も昇り広野をひた走りシュベルクに向かう広野に突然、炎の壁が現れた。

「チツチ！ 前方に火が！」

アウラは突如現れた炎の壁を指差し叫んだ。

「見えてる」

呑気な声でチツチが答えた。

炎のは壁というより広野に燃え広がった炎の海と形容した方がしっくりくる。

「酷い……あの辺りには牧草地だけでなく麦畑もあるというのに……」

……、これも妨害工作なの？ チツチ

悔しそうな表情と言つよりは、何処かやるせないと言った感じの表情をアウラが見せた。

麦の収穫は、まだ始まったばかりで炎の上がっている辺りは航行中も麦粒が実った穂が黄金色に輝く美しい風景だった。

「チツチ！ なんとか出来ないのですか？ まだ炎は上がったばかり……、被害を最小限に食い止める手立てはないのですか？」

「うん……、言われなくても何とかしないと終着点のシュベルクに入れない。あの炎を迂回すれば大きく進路を西か東に取らないと駄目なんだけど……、生憎南東の風が吹いているから西に進路を変えざるをえなくなるなあ、それに」

チツチが何かを言い掛けたところでアウラの怒りの声が重なった。

「チツチ！ この状況で良くもそのような事が言えますね！ あの麦畑の大半が焼かれれば麦不足にこの辺りの街一帯が陥ってパンを食べられなくなる人たちが沢山ですよ！……見損ないました」

アウラは、何時もやわらかく輝く紫水晶の瞳を鋭い視線に変えチツチを睨みつけた。

「だから、話は最後まで聞くもんだと何回も言ってるだろ？」

アウラは、チツチの言葉で怒りで煮えくり返っていた頭を冷やす。

「えっ……ごめんなさい……、何か良い策があるのですね？ チツチ」

アウラは、チツチに飛び付き表情を一転させ嬉しそうな笑みを浮かべた。

「この風じゃ、西にも向かえない。火は風に流され北西に向かって走り出しているからなあ」

「チツチ……あなた！ まだレースを優先させるつもりなのですね……」

アウラは、一度言葉を切ると言葉を紡いだ。

「分かりました……チツチがその気なら、私はここで船を降りてあの炎を何とかします……まだ上手く使いこなせないけど、魔術を使って炎を消しますから船を止めてください」

アウラは節くれた杖を強く握り締めた。

「だめだ」

チツチがアウラの言葉に短く答えた。

To Be Continued

ゝ 炎のレース 〉 第三部 第二十一話（後書き）

最後まで御読み下さいまして誠にありがとうございます。 > (—

—) <

次回もお楽しみに！

く 炎のレース く 第三部 第二十二話

第二十二話

炎を包め

チツチの言葉にアウラは逆上し天を衝く程の声を上げた。

「チツチが、こんなに冷たい人だとは思わなかった……、食料不足に喘ぐ人々の姿をチツチは知らないから、そんな事を平気で言えるのですね」

アウラは、チツチと並んで腰掛けていた操作場の椅子から立ち上がるとグロリー号のの船首に向かい駆け出した。

からん

アウラは、節くれた杖を一振りするとアウラの周りを取り囲むように風の渦がゆっくりと回り集まり出した。

アウラは魔法陣も言葉の詠唱もしていない。

術式破棄の魔術。

渦巻く風の塊が次第に加速し回転は速度を増していく。

「アウラ！ 待てて、慌てる事はない。風に流されて火は広がっているけど、幸い先日降った長雨のお陰で火が広まる足が遅い。今、グロリー号を止めれば火の海の起こす上昇気流で動けなくなってしまう。今吹いている北西の風は雨が降り、温度が下がって気圧が低くなった所に空気の場合に南の暖かい気圧の高い風が流れ込んでいるんだ。この風が乱されない距離にいる内に進路を変えないとゴール出来なくなってしまう」

「チツチにはレースの事しか頭にないの？ 本当に見損ないました」
アウラはそう言い杖を炎の海に向け振り下ろした。

アウラの周りを回っていた風は蛇がとぐるを崩し得物を狙い動き出したかのように解け、風帯となって燃え盛る炎の海へと向かっていった。

「アウラ！ なにしてんだ？」

「魔術で作りに出した風で炎を吹き飛ばします」

アウラの魔術が作り出した凄まじい勢いの風帯が炎の海を直撃した。

燃え盛る炎が低く小さくなって風帯に押されている。

「もう少し」

アウラは魔術に魔力を上乗せした。

「ハガラス h a g a l a z ・ ウルズ u r r u z」

（突風よ。力を）

からん

アウラは言霊を乗せ杖を振り下ろす。

魔力の上乗せされた魔術の風帯は流れる速度を増していく。

強風に煽られた炎は薄く延び、千切れて消え掛っているように見えた。

よし！ いけるかも！ もう一度、魔力を上乗せすれば。

「ハガラス h a g a l a z ・ ウルズ u r r u z」

（突風よ。力を）

からん。

アウラが魔力を上乗せし杖を振ろうとした時、アウラの腕が掴まれた。

「やめる！ アウラ、よくあれを見る」

チツチの言葉にアウラは、燃え広がる炎の海を目怒らし良く見つめた。

千切れそうになって延びていた赤い炎が、青白い炎の色に変わっている。

「中途半端な風を送って炎を煽ってどうするんだ。火の温度は高温に成る程、青くなり白に近付いて変化する」

「……し、知ってます！ それくらい……でも！ この方法しか思い浮かばなかったんです」

アウラが放った魔術の風を受け炎は更に勢いを増し燃え広がっていった。

「この辺りの水路の水だけでは、あれだけの炎の海を消せないと思つて……」

アウラは表情を曇らせ紫水晶の瞳を潤ませながら下口唇を噛みしめた。

自分には存在する水を魔術に利用出来ても、存在しない水を魔術で生み出す事は今の力量では出来ない。

勿論、理論もそれを行う為の魔法陣も知っている。

だからと言って、一長一短で身につくものでもない。

いくら天才と言われていても、まだ若いアウラには絶対的に不足している事がある。

それは知識でもなければ魔力の大きさでもない。

いくら積んでも、いいくらいの努力とその先にある経験則が足りないのだ。

風は空間に偏在している。扱い易い触媒だ。

魔術に使う触媒としては事欠く事もなく扱い易い。

熟達の末、空気中に含まれる水分だけを分離させたり地中に含まれる水分だけを取り出し凍らせ氷の魔術に変換するなど、高度で緻密な魔術を行使するには経験が少な過ぎるのだ。

チツチがアウラの肩に手を乗せた。

アウラは我に返り、ある事に気付いた。

「操船は？」
「固定して来た」

チツチの笑顔。

「炎の中に突っ込むつもり？」

「まさか」

「じゃあどうするの？」

「火を消してシュベルクに向かう。進路は変えない。レースも勝つ

！ 英雄フラムとの約束だからなあ」

「……チツチ、あのね……そのね」

アウラはそう言うと爪先立ちをしてチツチの耳元に唇を近付けた。

「……大好きだよ」

鈴に音が消え入るような小声で囁いた。

「アウラ？ 炎の魔術を扱えたよなあ？」

「はい。炎の魔術は今の未熟な私ですが、最も得意な魔術ですが」

「以前、魔物除けの小さな火を魔法陣の中に起こした時、牧草は焼けてなかった。その時何か言ってたよなあ……詳しくは言ってたかったけど」

「うん、魔術の効力は、自分の指定したものにしかその効力を発揮しないからだよ」

「ふむ？ 炎の魔術で炎を消そう」

チツチが荒唐無稽こうとうむけいな事を言い出した。

「炎で炎を消す？ どうやって？ それに未熟な今の私が大きな炎の魔術を使うには媒介が必要な……小さな松明くらいの火じゃあ炎には遠く及ばない炎しか作り出せないのです」

アウラは俯き肩を落とした。

「それなら、消して終いたい程あるじゃないかあ」

チツチは燃え盛り広がる炎を指差した。

「そうか、あの炎を媒介にすれば……でも、どうやって炎で炎を消

すの？」

「アウラの魔術で作り出す炎で、あの炎を包み込んで消すんだ」

血土の口元が、にやりと吊り上がる。

「……、あの炎が自然ではなく魔術によって作り出された物なら、私の魔術で作り出した炎に取り込み、魔術を閉じれば消滅される事が出来るかも知れません……、但し……炎を作り出した魔術師の実力を私の魔術の実力が超えられればの話です。もし、相手の魔術師の実力が上なら魔術で作り出した火は取り込めない……下手をしたら逆に私が魔術で作り出した炎を取り込まれ、相手の魔術師が自分の作り出した炎に乗せられるかも知れません。それなりに高等な技術を必要とし要求されるのですが……」

アウラは表情を曇らせた。

チツチ、本人は魔術を扱う事は出来ないが、魔術の知識に長けている事をアウラは良く知っている。

恐らくチツチはアウラが魔力で作り出す炎で、野に広がっている炎を取り込み、アウラが作り出す魔術の炎の支配下に置き、魔術を終える事で消し去ろうとしているのだとアウラは考えていた。

しかし。

「……自然界に発生した炎は、魔術で作り出す炎に取り込み支配下に置く事は出来ません……無論、自然界の火を魔術の媒体にする事はできません。魔術で作り出す炎を作り出すきっかけには出来ませんが、炎自体を制御する事は出来ません。魔術によって作り出す炎は、魔法陣の法則と言霊を発する事で一種の精霊的、或いは自然界の力を引き出しますから、例えば地中を這う地脈にある竜脈なのですが、ですから魔術の炎は術者によって制御出来るのです」

アウラの言葉を気にした風もなくチツチは微笑みを崩さない。

「知ってる。アウラの言う通り、人が持つ魔力の根源は未だに謎が多いけど、魔法陣は精霊的、自然界の力を無理やり引き出している

か、魔法陣の術式に何らかの契約が結ばれていて魔術を行使する際、その精霊的、自然界の力を引き出し借りてある種、人工的に炎や水、風などを作り出し、魔方陣を中心に意図的に術者の支配下に置いて制御するんだろ？」

チツチは、得意そうに笑みを増し更に唇の両端を吊り上げた。

「そうです。だから、誰の支配下にもない自然界で発生するただの炎を制御する事は出来ませんし、その炎を魔術で作り出した炎に乗せする事も出来ないのです」

アウラは、チツチの笑みの意味が分からず不思議に思いながらも説明を終え力無く肩を落とした。

「でも魔術で作り出した炎も媒体と空気中の酸素で燃る事には違いないだろ？」

「あのね……チツチは魔術の事に長けてはいますが、媒体と魔力の源、そして魔術の深い相关性までは知らないのです。魔術を扱える私や長年の研究者たちにも、まだ分からない事が多いのですから、ソシエールさんにさえ、以前チツチが推論した事に対しての明確な答えは分からないようでしたから」

アウラは、チツチが魔術を扱えなくても魔術の事に長けているのはソシエールとチツチの母、風狼が協力して魔術の基礎を組立魔術を生み出した時の話を聞いているのだろう、と思っていた。

その基礎を組み上げたソシエールでさえ、特定の人物が持つ魔力と魔力の根源については不可解な事が残っているのだと言っていた。

アウラは、それでも消えないチツチの笑みを見つめていた。

どうやって燃え広がる炎を消すのか。

「消せる」

自身たっぷりにチツチは満面の笑みを浮かべ、アウラに耳打ちをして炎のどう扱うかを耳打ちをした。

「……あなたと言う人は……本当に何時も驚かされます。そのような発想を思いつくなんて」

アウラは、やわらかい笑みを一瞬、浮かべ表情を引き締め節くれた杖に括りつけられた鐘を鳴らした。

からん からん ……からん

アウラは、術式破棄の魔術を行使し燃え盛る自然界の炎を苗代に魔術で炎を生み出し、間を置かず生み出した魔術の炎に上乘せをした。

「kano・uruz」

（火よ。力を）

魔術によつて生み出された炎が地を這う蛇のように燃え盛る炎の海をぐるりと取り囲んだ。

「kano・uruz・kano・ansuz・uruz・geb
o」

（火よ。力を！ 焰よ。神から賜れし力の贈り物を）

からん からん

アウラは、更なる言霊を乗せ杖を振り魔力を上乗せする。

魔術で作りに出した炎は壁状の帯になり、燃え盛る炎の海を囲み始め魔術の炎は燃え盛る炎の海を天からも覆い囲み始めた。

以前、アウラが言っていたように魔術で生み出した炎は麦畑や牧草は、おろか地面さえも焦がす事すらしていない。

アウラが支配下に置いてある魔術で作りに出した炎は地面から半円状に膨らんでいるような形で燃え盛る炎の海を覆い尽くした。

T
O
B
E
C
O
N
T
I
N
U
E
D

ゝ 炎のレース 〉 第三部 第二十二話（後書き）

最後まで御読み下さいますと誠にありがとうございます。 > (—

—) <

次回もお楽しみに！

炎のレース 第三部 第二十三話

第二十三話

炎の消滅。そしてゴールへ

燃え盛る炎の海をアウラが魔術で作り出した炎が半円上に包み込んだ。

「アウラ！ 一気に炎に魔力を与えて炎を活性化させる」

アウラはチツチの言葉に、こくりと頷き鐘を鳴らし言霊を乗せた。

からん からん

「kano・uruz・kano・ansuz・uruz・geb
o」

（火よ。力を！ 焰よ。神から賜れし力の贈り物を）

魔術で作り出された炎が一気に勢いを増し燃え上がる。

その熱は離れた場所のグローリー号にまで届いた。

しかし、アウラが言っていたように魔術の炎は標的に定めた炎以外の物を破壊する事はない。

放たれる熱量で近付く事は出来ないだろうが。

「そろそろかなあ？」

チツチの間の抜けた声にアウラは小さく頷くと魔術を解いた。

アウラが地面から上に半円状に作り出した魔術の炎は次第に消滅していき、暫くして完全に消滅した。

魔術の炎が消えた後には、燃え盛っていた炎の海の跡は熱で萎れ

る麦穂、葉を擦じらせ白くなった牧草、焼けて灰色と白くなった植物と燻ぶり立ち昇る白い煙をあげる黒い焼き爛れた地表を見せた。

炎は完全に鎮火されている。

その事を確認するとチツチは、操作場に戻り帆のトリムを合わせ船足を上げた。

二人と山羊たちを乗せたグローリー号が燃え盛っていた炎跡に近付き、まだ熱気を放っている地面に差し掛かった。

「酷い……」

アウラは、草色と麦畑の麦穂が生み出していた黄金の風景を思い出し震える声で呟いた。

「なんて言うかなあ、これだけの被害で済んだのはアウラの魔法のお陰だし、俺たちも進路を変える事く、終着点のシユベルクの街に向かう事が出来るなあ」

チツチの不器用な慰めの言葉にアウラは頷くと、両腕を臀部辺りで手の平を組みチツチがいる操作場の方に振り向いた。

アウラはチツチの傍に近付くと、小柄な身体をくの字に折りチツチの顔を覗き込んで僅かに微笑んで見せた。

「相変わらずチツチは励ましとか慰めが下手ですね？ でも、こんな方法で炎を消すなんて事を思い付くなんて……素敵ですよ」

「そうかなあ、プラムの時には上手く慰めたじゃないかあ？ その後の介抱も 痛い……」

からん

アウラは、僅かに苦笑を浮かべた後、静かにくすくす笑い声を漏らし紫水晶の瞳を笑みへと変える。

プラムの事を思い出すと複雑な気持ちが入り混じり思うように上手くは笑えない。

何より焼かれてしまった食物たちの焼き爛れた黒い大地が、その気持ちに拍車を掛けていた。

アウラは、尊敬にも値する発想を思い付き燃え盛る炎の海を消してしまったチツチにせめてもの感謝と敬意を含め精一杯笑って見せ

た。

「炎の力で炎を消す……チツチ？ 何時も何処を見てるの？ チツチ？ 何時も何を考えてるの？」

アウラは複雑な心境の中、今できる精一杯の頬笑みを浮かべチツチに尋ねた。

「アウラの 痛てえ」

からん

「たぶん言おうとしている事と違うし言わなくていいです」

「話は最後まで聞いた方がいいぞお？ 何度も言ってるけど」

「じゃあ、言ってみてください」

アウラは引き攣った微笑を浮かべた。

「小さな火は水をかければ簡単に消える。強い風で仰げば消えたりもする。でもあれだけの炎は簡単には消えない、例えば水をかけたとしても風で仰いでも簡単には消えたりはしない。逆に大量の空気を送って炎は勢いを増し強く燃え上がる。瞬間的に爆風でも起こせば別だけど」

チツチは一度、言葉を切ると引き攣った微笑みを浮かべていたアウラの様子を窺がった。

アウラの表情は真顔でチツチの話を喰い入るように聞いているように見えた。

「それで？」

「炎が燃える時に喰らう周りの酸素を奪えば火は燃える事が出来なくなるから、炎が燃える為の媒体をアウラの魔術で作り出す炎を利し炎を包み込んだところで一気に魔力を上乗せして魔術の炎を加速させ、炎が使う酸素を奪い窒息させれば、炎は消えると思ったんだ。こんなにも上手く消えるとは思わなかったけど……アウラ偉い！」

チツチが微笑み頬を向け近付けアウラの反応を窺がっている。

「はあ、あなたって人は……」

アウラは、かわいらしい溜息を吐くと関心しているのか突飛な発

想を咄嗟に思い付く、チツチの思考に呆れているのか分からない複雑な顔をしてチツチの頬に軽く口づけを与えた。

チツチの碧眼が更に反れ満足そうに微笑んだ。

「さあ！ シュベルクへ」

二人を乗せたグロリー号はゴールのシュベルクへと快走を続けた。

シュベルクに向かう途中、炎をと煙の気付きシュベルクから出た駐留軍や麦畑の管理を任されている人物たちとすれ違った。

その前には、逸早く野の火事に気付いて駆けつけた者たちが燃え盛る炎を目の前にしながら、空気を伝わる炎の熱と巻き起こす熱風で近づく事すら出来ず、ただ見守っているしかなかったのだろう、突然炎に包まれ炎が納まると野の火事は鎮火していた。

不思議な光景を目の当たりにして呆然と立ち尽くしている姿を横目に見ながら、グロリー号はシュベルクの街へ入った。

灰色と黒の交じる大地を見て悲しそうな表情をして佇んでいる少女の姿があった。

美しいブロンドの金色に輝く髪は、妖精と見間違う程で歳の頃はアウラやチツチと同じ十代半ばと思われ、片側の前髪が下ろされ右の瞳を覆っている左側に覗く翡翠色の瞳を潤ませている。

腰まで伸びているであろう後ろ髪を頭部の耳上で纏めリボンで纏めた、羞花閉月しゅうかへいげつと言うに相応しい少女が、静かに唇を震わせ、焼け野原になった大地を見つめていた。

その隣には、漆黒のローブに薔薇と妖精がモチーフされた赤い刺繍と背中には一風変わったゴーレムが光沢のある黒い刺繍糸で模されている。

陽の光を浴びるとほのかに陽の光にブルーが映える銀髪の少年が立っていた。

「……悲しいことです」

「そんな顔すんなつてえ」

「寂しいですう」

「たく！ わあつたよ！ 分かりましたやりますよ。やればいいんだろ？」

ブライナゴールド

白金髪の少女は静かにう頷いた。

銀髪の少年が右腕の装飾品に手を掛けた。

装飾品にあしらわれていている宝石のように美しい透明色の滑らかな弧を描く丸みを帯びた部位の中には六芒陣が描かれていた。

銀髪の少年がそれに触れると眼の前には光輝く六芒陣が中に描かれ、その中から大剣の柄らしき物が現れた。

少年が六芒陣に現れた柄に手を掛け陣から引き抜いた。

十二枚の翼が刀身を包むように閉じられているが、柄の大きさと比較が不自然な程短い。

「さてと……始めますか」

銀髪の少年は、すつと腰を下げ剣を構え口上を唱えた。

「聖界十二の宮殿より黄金の扉を開き、集い来たれ事象を絶つ刃よ。我の意志に応えよ」

口上を述べ終わると刀身を覆っていた十二枚の翼が開き出し柄から伸びる短い刀身が姿を現した。

刀身から光の筋が延び鍔下では光が広がる。

やがて、金属とは違う透明な大剣と呼ぶに相応しい光の刃が形を成し七色に輝いた。

銀髪の少年が、身の丈をその大剣を軽々と焼け野原となつた大地に向け横に薙いだ。

刀身から放たれた光の波紋が、焼け野原を通り過ぎると灰色の大地に緑の牧草と黄金の麦粒を垂れた麦穂が姿を現し何事も無かつたかのように元の姿へと戻り、黄金に輝く大地が甦った。

「ありがとうございます」

妖精のように美しい金髪を風が揺らす。

少女は、やわらかい笑みを浮かべて感謝の言葉を述べた。

「陸を走っていた船に乗っていた男の子……似てるですう」

「お前さあ？ 良く見てなかったのか？ 俺の方が男前だったろ？」

「右眼の辺りに包帯を巻いてましたですう。怪我でもしたのですうかねえ？ それでも美男子でしたですう」

「お前っ！ 眼がハート型になつてんぞ？ まあ、似てたかもな！

髪の色も似たような感じだったし確かに男前だったかもな？……でも、俺はあんなに呑気で間抜けな顔をしないぜ」

「あれは微笑んでいたのですう！」

金髪の少女と銀髪の少年が、苦々しい表情を浮かべ暫くの間睨み合いを続けた。

「しかし、俺たちが駆け付けた時、あの白銀頭の包帯野郎と桃色髪の女の子が、なにをするのか気になつてお前が、ぎゃ　すか騒ぐ中、見てたけどさ……まったく、とんでもない事を思い付きやがるまあ、頭が冴えているのは桃色髪のかわいい女の子の方だろうけどな」

「方法を思い付いたのは、きっとあの包帯美男子でえすう！ それよりあの子……魔法を行使したんですかあねえ？ 精霊の振動に似たものを感じたですう……それと！ おばかあ！ こんなにかわいい私がいるのに！　どこぞの女に眼を奪われるとは、ゆるさんですう！」

「てめええ！ 自分の事は棚に上げやがって！ 見てなかったのか？ あの包帯野郎、かわいい子が炎を消し終わった後、ほっぺにキスしてたぞ！ 羨ましいなあこの野郎。俺なんかなんもなしだつてえの」

「ふん！ この程度の働きでキスされると思ふな！　ですう」

二人の痴話喧嘩を姿を戻した麦の大地が黄金の麦穂を上下に頷かせながら、楽しそうに風に揺れて二人を見ているようだった。

その頃、シュベルクの街の付近にグローリー号を停船させ、山羊たちを下ろしたアウラとチツチは最終手続きを受けに外壁のアーチ

を潜った。

手続きを済ませ、何か所かの街を周り既に手続きを済ませた者やこれから陽に入りまでに戻ってきた者たちの結果を集計し発表を待つだけとなった。

チツチたちがシュベルクに到着したのは、天中に陽が昇り詰めるまでには大分時間がある頃だった。

明日の順位発表までの間、手続きを済ませた二人はそれぞれアウラは屋敷に。チツチは一度グローリー号に戻りフランクの屋敷にグローリー号共々、夜陰に紛れて戻る事になっていた。

チツチがグローリー号に戻るとアスカが姿を現しチツチに話掛けた。

「不味い事になるかも知れない……奴らが動き出した。ランディーたちと他の仲間に使いを送っておいたが……果たして間に合うかどうか」

アスカは表情を曇らせた。

「いざとなれば何とかする。今シュベルクには国外のお偉いさんの護衛に各国の兵が、要人護衛に集まって来てるんだなんとかなるだろ」

「まったく、お前は何時も呑気でいいな」

その夜、暗雲が漂い始めるシュベルクの街にチツチのグローリー号は夜陰に紛れ人知れぬ場所からフランクの屋敷へと入った。

To Be Continued

ゝ 炎のレース 〉 第三部 第二十三話（後書き）

最後まで御読み下さいますと誠にありがとうございます。 > (—

—) <

次回もお楽しみに！

く 炎のレース く 第三部 第二十四話

第二十四話

コインの表側

シュベルクの朝。

フランク邸の一室で桃色髪の毛が白いシーツの上でもそもそと蠢かしながら、薄いシーツの中で旅の疲れからかアウラは何時もよりお寝坊さんを楽しんでいる。

桃色髪の持ち主は頭に敷いていた、ふかふかの枕を外すと両腕に抱え込んだ。

ギヨスの街で宿に泊まった時、敢えて二部屋とったというのに、チツチはアウラの部屋に潜り込んで来なかった。

レース前、プラムの事を聞きつけやって来たチツチは毎晩のように護衛の騎士が見張っている。

それも国外までその名の轟く名も無き赤の騎士団の騎士の警備を、あざ笑うかのようにアウラの部屋に易とも簡単に忍び込み、ベッドの中に潜り込んで『介抱』と言っては破廉恥な行為を散々繰り返したのである。

無論、チツチに悪気はなく母に自分がされていたように介抱をした訳であった事も理解している。

思い起こせば北の神殿に向かう際、豪雨に足止めされ宿を取った時に雷が苦手で雷鳴が怖くて仕方なくチツチの部屋にアウラの方から出向いた事があった。

アウラの脳裏は、あの時のチツチの姿を思い出して頬を赤く上気している事が分かる。

この一件は、一先ず置いとく事にしましょう。

無論、チツチのベッドに潜り込み雷鳴が治まる頃には安堵感から睡魔に襲われ、チツチのベッドで不覚にも朝まで眠りに就いてしまったが、当然のように何も起こらなかった。

北の神殿からシュベルクに帰った時、旅支度が整うまでの僅かな時を伴に屋敷で過ごした最初の朝、眼を覚ますと鍵を掛けていたはずの部屋にチツチが忍び込み、そのままどう言う訳かベッド下の床で眠っていて目覚めたアウラがベットから立ち上がるうとして危うく踏んづけそうになったが、足に何かが触れた事に気付き、悲鳴と共に素早く足を引っこめ思いつきり全体重を掛けてチツチを踏むという難を免れた。

その後、恐る恐るベッドの下を覗き込むとチツチは眠っていて驚き怒ったアウラが毛布を剥ぐとチツチの姿に悲鳴を上げた事を思い出し上気した頬が更に赤みを増して行く事が分るくらい頬が熱い。チツチが寝ている時の姿は、身体を子猫のように小さく丸め眠っていて実にかわいらしく見えるのだが……。

チツチは眠る時、何時も全裸。野宿の時も……何故に？

流石と一緒に旅をしている時と今回のレース中は、夜寝る前に服を脱ごうとするチツチに再三注意をして来たので全裸で寝ている姿は見なかった。

昼寝をする時は、きちんと服を着て眠っているのだから不思議で仕方がない。

チツチが屋敷にいる間、毎晩のように忍び込み朝になるとアウラの悲鳴が一番鳥より早く屋敷の中に木霊していたのであった。

昨夜は、レースも終わり、事前に狙われたような事はないだろう

と一応警備を敷いているが屋敷の外に重点を置いての警備を行っている。

アウラは昨夜、部屋に鍵を掛けずに眠りに就いた。

チツチはどんな事をしても部屋に潜り込んで来るのだから、鍵を閉める事に何の意味もない。

寝る前に良く考えてみた。

チツチ以外の人物への警戒に掛けた方がいいのは当然だ……しかし、アウラは鍵を掛けた。

屋敷のみんなと警備の人たちを信用しているからで、決して（・・）チツチが部屋に入り易いように鍵を掛けないのではないのだと、自分に言い聞かせ床に就き眠りに落ちた。

そして、今朝はチツチは来ていない。折角、鍵を開けて置いたのに！

アウラは、チツチが来てくれる事を期待していた自分に気付き顔を熟れた無花果イチジクの实くらいに顔を赤らめシートの中に頭の先まですっぽりと潜り込んだ。

雨中での激しい砲撃を受けた時、グローリー号の上でチツチが言ってくれた『　だよ』の言葉がアウラの胸の中で何度も何度も繰り返し聞こえているように繰り返し響いていた。

シユベルクの街のとある静かな蝋燭の火が揺らめくだけの薄暗い一室には、獅子の紋章を付けた男がワインの注がれたグラスを不敵な笑みを浮かべて揺らしていた。

周りには侍女が数名控えているだけで司教の姿も口髭の男も、そして……小柄な黒いローブの魔術師の姿も見当たらなかった。

「おい！ コインを貸せ」

控えていた侍女が、恭しく一礼すると用意したコインを男に渡す。紋章の男が、一枚のコインを手の上に乗せると親指で弾き宙へと

舞い上がらせた。

紋章の男が手の甲でコインを受け素早く残る片方の手の平を覆いかぶせた。

「さて……、コインはどちらを見せる」

男は不気味にも思える程、唇の両端を吊り上げ笑みを作った。

コインを隠している手の平をゆっくりと持ち上げ男は呟いた。

「表か……」

男がそう呟き、パチンと親指を弾き合図を送くると傍に控えていた一人の侍女が部屋と後にし部屋を出て行った。

「まあ、裏でも結果は変わらない」

男はそう呟くと掛けていた椅子から腰を持ち上げ蠟燭の淡い火に鎧を輝かせながら、マントを翻し部屋を出て行った。

シュベルクの街中の広場の一角には、立派は来賓用の席が設けられ各国の要人たちが腰を据えた。

広場にはレースの結果を知りに大勢の人が押し寄せている。

間もなく五日間に及んで繰り広げられた放牧レースの結果が告げられる。

昨日の日没までにシュベルクまで帰り、最終手続きを済ませたチツチたちレースの出場者は、設けられた舞台の裏広場に集まって結果の発表を待っていた。

「各競技の優勝者の発表が終わりました。それでは続きまして収穫祭最大の催し物、放牧レースの結果をお知らせ致します。それではこの度レースの一切を取り仕切るバルシオ商会の会長バルシオ・デイマスより、レース得点集計の結果発表を行って頂きます。尚、今回のレースでは前人未到！ 指標点に指定されている街を全て周るという快挙を成し遂げた放牧者が出ております。配当倍率についても過去最高の結果となって折りますので皆様ご期待ください。では、バルシオ・デイマス会長」

司会をしていた人物が舞台袖に移動するとバルシオが舞台の中央

へと歩みを進めた。

中央に立つたバルシオは俯いたまま小刻みに身体を震わせ手に持つ、金の帯符で筒状に丸め込まれた羊皮紙が平たく潰れる程握りしめ、暫くの間立ち尽くしていた。

ややあつて、苦虫を噛み潰した表情で羊皮紙を開いた。

結果の書かれている羊皮紙を両手で開く手に必要以上の力が込められている事が分かる程、羊皮紙共々落ち着かない様が見て取れた。震える声でバルシオは結果を読み上げ始める。

レースに連れていった家畜クラス別に、その順位を読み上げていく。

最後に優勝者の名前が呼ばれると、名前を呼ばれた三位までの出場者が晴れの舞台へと裏広場から上がっていく。

舞台上上がった者は順位に合わせ色の違う楯と賞金を受取り舞台の後ろに控えた。

チツチたちが連れていた山羊は羊と同じクラス。

次々に結果の発表が行われていった。

いよいよ最後に、この度の収穫祭の主演。羊、山羊の部優勝者の名前が呼ばれ、その後総合優勝者の発表となる。

三位の出場者の名前が呼ばれた。

裏広場から舞台上がる。

次に名前を呼ばれたのはバルシオの息子、バルシオ・トマウスであつた。

トマウスは唇を噛みしめ苦々しい表情を浮かべながら、チツチとアウラを一睨みし唇を歪め不敵な笑みを浮かべ舞台へと上がっていた。

アウラは、その視線に怯えチツチの袖口を思わず摘まんだが、チツチは何時もの笑みでその視線を見返していた。

「で、では、羊、山羊部門の優勝者……チツチ、アウラ・ヴァジニティー組」

怒りか、それとも悔しさか唇と声を震わせながらバルシオが名前

を告げた。

広場に怒涛のような歓声が沸き上がる。バルシオが両手を肩口から下にゆっくりと上下させ、広場に集まった人々をなだめた。

暫しの間を置き怒涛のように沸き上がっていた歓声が止み、一転して静まり返る。

最後に発表される総合優勝者の名前とその賭け率に注目し広場に集まった人々は固唾を呑んで舞台上を見守っていた。

歓声の静まりを確認したバルシオが口を開いた。

如何にも悔しそうな苦々しい表情を浮かべ、最後に唇を吊り上げた。

「総合優勝は……チツチ、アウラ・ヴァジニティー組」

歓声は、まだ起こらない。

「配当倍率に……百……二十四万倍」

余りにも高い配当倍率に広場の人々は声を失った。やがて、ぼつりぼつりと落胆の音が漏れ出す。

その静けさの中、バルシオ・トマウスが異議を申し立てた。

発表を行っていたバルシオ・デイマスが頬を吊り上げる。

「異議とは、なにかね？ バルシオ・トマウス」

「はい。その者は伝統ある放牧レースを侮辱する行為を行いレースを展開してあります」

「それは、それは……、もし、その行為がレースに違反するものならば無論の事、余りにも卑劣な行為であれば、総合優勝の取り消しも審議に掛け検討しなければならんな……で、その行為とは？」

バルシオ・デイマスが不快な笑みを浮かべ、トマウスに問うた。

「はい。その者は川を船で下り得体の知れない陸上を走る船で家畜を運びました」

来賓席と広場の人々の間で、ひそひそと話す声が聞え出しそのざわめきは次第に大きくなっていった。

T o B e C o n t i n u e d

ゝ 炎のレース 〉 第三部 第二十四話（後書き）

最後まで御読み下さいますと誠にありがとうございます。 > (—
—) <

次回もお楽しみに！

く 炎のレース く 第三部 第二十五話

第二十五話（終幕）

動き出す陰謀

ざわめき出す広場の観衆をバルシオが制し静けさを取り戻そうと
していた。

「皆さん！ お静かに」

バルシオの呼び掛けに観衆は応え、興味を審議の行く末に注目し
出している。

「一応、きみの言い分を聞いておこうか」

バルシオがチツチに向かい頬を吊り上げ、おぞましい表情の笑顔
を作り出した。

「何でも有りと言ってモルール書をレース前に渡されたから読んだ。
基本はルールはシンプルだったなあ？ 如何に失わず如何に早く如
何に多く周れるか！ 他に細かい事は書いてあつたけど確か申請以
外の動物を使つて家畜を追えば減点の対象になる。例えば、牧羊犬
だけを申請しているのに馬に人が乗って追うのは減点の対象になっ
てたっけ？ 最初に馬を登録してしまうと人は楽だし有利に家畜を
追う事が出来るから持ち点からその分、点数を引かれて始めから不
利な条件でレースをする事になるからみんな登録をせず見つかった
時の減点覚悟で使う」

チツチは微笑みを崩さない。

「その通り、実際に監視に見つかった者は減点されている」

バルシオも凍った微笑みを崩さずに言った。

「それで荷馬車はいいのか？ 申請せよとは書いてなかった。それ
に俺は何台もの六頭立ての大きな荷馬車を使つて羊を乗せて運んで
いる者たちを見聞きしたが荷馬車を使つて運ぶ。それはいいのか？

申請してなくても」

「それは構わない。あくまで移動の手段でもある。それに荷場車自体は家畜を追えない。ただの道具だからな。問題なのは荷馬車を牽く荷馬にあり、それは減点の対象になるが」

チツチはその言葉を聞きいて微笑もを増した。

「それなら船は移動の手段で道具だ。船は山羊を追ったりしない。それに船は馬を使って牽いたりしない。それにバルシオ・トマウスは荷場を使い馬車を使ったと聞いたしここで行われていたレース中継でも司会者が言っていたと聞いたが、公開された得点表は減点されていなかったなあ？　なんでだ？」

チツチは如何にもわざとらしく腕を組み微笑みを消すと、ぽかんと口を開け不思議そうな顔を見せているつもりで表情を作った。

隣にいるアウラがチツチの身体を肘で突くと小声で言った。

「不思議そうな顔になってないですよ」

「そうかなあ？　俺は不思議でたまらないから、こんな顔をしてるんだぞあ」

「トマウスが減点されなかったのは監視員に見つかってないからだ」
バルシオは苦し紛れに、そうチツチに説明し言葉を続けた。

「広場にいるのは観衆であって監視員ではない」

「公になっているのにか？」

「そうだ。あくまで現場を見た監視員だけが減点行為を告発できる」

「俺は監視員とやらに減点行為として告発されたのか？　得点表に減点はなかったけどなあ？」

チツチの指摘にバルシオの凍った笑みは消えていた。

苦しくなったバルシオは話を反らし始める。

「きみはナーンで砲撃を受けたと聞いているが？」

「ああ、酷い目に遭った」

「酷い目って、チツチ！　死に掛けたじゃないですか！　あの時の砲撃音は聞こえていたはずなのに、ナーンの監視員や駐留軍すら来てくれなかったんですよ！　呑気な顔してないで少しは怒りなさい

！」

アウラは口を尖らせチツチに抗議した。

「アウラ？ 抗議するなら俺じゃなく向こうにしてくれ」

「もしかして妨害工作の数々はあなたたちの仕業ですね？」

「いいぞお！ アウラ」

「私は主催者で妨害に加担する事も指示を出す事も出来ない立場だ。その時監視員や駐留軍が来なかった。だから、きみは減点されなかつたんじゃないのかな？」

バルシオは形勢の入れ替えを試み、そう言うと頬が吊り上がる。

「問題なのは前例のない船を使った事だ」

「何故？」

チツチの碧眼がバルシオを眼光炯炯、睨みつけた。

「ルール書には川を移動してはいけないと書いてなかった。これまで誰一人として川を利用してなかっただけだ。流通には以前から使われているのだ。ついでに言うなら放牧者は遠い昔から風を読み天候を読んで放牧の旅を続けた。俺は文字通り帆船を使い風を読んで放牧レースを制した」

「そ、それは……」

チツチの眼光に気押ししたバルシオは口籠る。

その様子を見てチツチは追い討ちをかける。

「このレース、得点表を見る限りバルシオ商会の出場枠以外で出た者たちの殆どが、荷馬を使って荷馬車を牽き家畜を運んで減点されている。これだけあからさまに主催者の思惑が見える出来レースだ無効にして掛け金全て払い戻すか、成立させて俺に賭けていた人に配当金を支払うかだ。無論、個別順位予想や二位、三位予想をしていた人達にもだ」

チツチの配当倍率は百二十四万倍、イリオン金貨一枚が百二十四万枚になる。

バルシオ親子は悔しげな顔を見ると発表を中止し舞台袖へと姿を

消した。

「俺に賭けてくれた人を一人知っているが、その人は三百二十八枚のイリオン金貨を賭けてるんだぞお」

「三百二十八枚？」

アウラの声が裏返る。

チツチの配当倍率が百二十四万倍なのだから、返還される配当額は四億二つ転じて六百七十二万枚。

買収されると聞いているシュベルクの領地どころか近辺の領土も軽く買ってしまう枚数だ。

アウラは、チツチが声を荒げた事を珍しそうに見ていたが、ふと考えた。

確かチツチは山羊飼いの自分に賭ける者はいなかったと言っていた。

「チツチ？ いったい誰なのですか？」

「俺」

「へえ？ 三百二十八枚もの金貨をどうやって！ チツチ……あなたまさか！」

「俺とフランクの爺さんにランディー、それにソルシエルのお婆……お姉さんにロザリア、エリシャ、とロツカもだっけ？ フランクの爺さんが殆ど用意してくれた。ソルシエルのお婆……姉さんが十枚とランディーも安い年金から十枚。その他のみんな一枚ずつ、そして俺が五枚、学園のみんなや教師たちも少しづつ足してくれた」

「ランディー様やソルシエルさんまで……それに学園のみんなが、どうしてシュベルクの事情を知ってたの？ ……まさか！」

「ロザリアだろ？ ランディーにでも聞いたんじゃないか？ アウラの故郷のが危機だと言って集めてくれた。それをランディーが爺さんに届けたと聞いている」

「……チツチ、ありがと」

アウラは、チツチの胸に顔を埋め震える小さな声で言った。

「違うだろ？」

「みんな……ありがとう」
「そうだ」

チツチは満面の笑みを浮かべて、そつとアウラを抱きしめた。

後日、審議の結果成立しフランクは領地を継がせた実の息子にレスで手に入れた配当金を使い領地買い取りの売買契約を結び、その他にも買収されると噂されていた領地に向かい話を聞き、買収話が真実であった事を知るとその領地も買い取った。

残りの金貨をシュベルクの存亡に尽力してくれ金貨集め、貸してくれた者たちにささやかではあったが礼を尽くし出資金に上乗せして金貨を返した。

フランクが改めてシュベルクを中心とした領地を持つ伯爵位を国王より賜り貴族に戻り領地を治める事となった。

明後日。

シュベルク邸に夏休みに入りつたばかりの学園に生徒たちは、チツチとアウラの応援と収穫祭を見に来ていたアウラの友達を招き、ささやかな宴が執り行はれている。

女性生徒たちは華やかなドレスに身を包み男子生徒は正装をしている。

宴の間に楽師たちの演奏が流れる中、大広間で社交会を楽しんでいた。

その会場にアウラの姿はなかった。

大広間の繊細な彫刻が彫られた豪華な大扉が開く。

それを合図に楽師たちの演奏が曲調を舞踏会用のものへと切り替えた。

大扉から大広間に赤絨毯が従者の手により、敷かれ終わると開かれた大扉の向こうに見える手摺りのついた階段を白桃色の豪華なドレスに身を包み、ランディーにエスコートされ、ゆっくりと昇ってくるアウラの姿が現れると皆の眼を独り占めにした。

ランデューが差し出した右手を肘から脇の半ばまである真っ白な長手袋をした細い指先で軽く摘まむように添え、細い右手でふんわりと膨らむドレスを摘まみ揚げている。

細く美しい長い桃色髪は頭の上で纏め上げられ整えられた前髪と耳元に下ろされていく軽く捩じりを加えた巻き毛がふんわりとやわらかく揺れている。

アウラの八面玲瓏と言うに相応しい姿に会場にいる全ての人物が眼を奪われ、魂を抜かれたような顔で大扉の方向に釘づけになっていた。

大きく開いたドレスの胸元から覗かせている胸元はコルセットの恐ろしいまでの威力でアウラの控えめな胸に谷間を作り出していた。ドレスの胸元には淡雪のように白い乳房が露わになっている。

元イリオンの北の地方グリーンベルに生まれ羊飼いをしていたアウラの肌は白く透き通るようでもあり、その肌は陽の光のしたで広野を放牧する羊飼いととても思えない。

グリーンベルを焼かれ天涯孤独になったアウラは孤児院に贈られるはずだった。

幸いな事に貴族の養女として幼い頃に隠居したばかりのフランクに迎えられ恭しく振る舞い事も出来る。

裕福な貴族の養女になってからも羊飼いをしている少女とは思えぬ程、その容姿は美しく一国の姫君を思わせる程の気品を振り撒いている。

アウラが大扉の入口で一度立ち止まり、エスコートを仰せつかつていたランデューは恭しく一礼をすると身を翻し大扉の脇に立った。ドレスの後ろ側に伸びる裾を持ち上げていた侍女たちも扉の陰に退いた。

一度下ろされたアウラの左腕がゆつくりと持ち上がる。

その腕から伸びる細い指先の延長線にはチツチの姿があった。扉から先のエスコートの指名をアウラが示したのだ。

何時もの微笑みを絶やさないチツチの視線がアウラと交わる。

作法など微塵も知らないチツチに口ツカが耳打ちをした。

チツチがアウラの下に向かい近付くと持ち上げ宙たアウラの手に右手を差し伸べた。

「私と一曲、踊ってくれませんか？ 私のシュバリエ」

二人の指先がゆっくりと近付き触れようとしている。

アウラは、ほのかに顔を赤らめチツチの微笑みを見ていた。

二人の指先が触れようとした時。

一人の騎士が慌ただしい様子でランディーに近付き耳打ちをした。
「隊長。シュベルクの南西、ナーンの街付近に異形の魔物十体が現れたとの報告を持ち、先程早馬が到着致しました」

ランディーの顔に緊張の色が窺がえる。

「それで状況は」

「はい、その魔物は人型。ゴーレムかと思われず。先行したナーンの駐留軍が接敵砲撃を行いましたでしたが砲弾をまるで受け付けません。無論、剣や槍、弓などは論外。現在シュベルクに向け北上中。その足は遅く荷馬が軽く駆ける程度との事、その足から推測されるシュベルク到着は日没から夜半、恐らく夜襲を掛ける腹積もりかと思われず」

「ちっ！ シュベルクには、まだ各国の要人が滞在しているのだぞ！ で、ナーン駐留軍に増援は？」

国外まで名を馳せる名も無き赤の騎士団の隊長が険しい表情を見せている。

「ナーン駐留軍は奮戦する間も無く壊滅。イリオン正規軍及び、近隣の軍は援軍に向かわず邀撃体制を整えております」

ささやかな宴は白昼夢のように儂く一時の安らぎの間は崩れ去って行た。

） E n d 。

第四部 ） 選択 ） に続く。

T o B e C o n t i n u e d

ゝ 炎のレース 〉 第三部 第二十五話（後書き）

最後まで御読み下さいまして誠にありがとうございます。 > (—
—) <

第一章 第三部 〉 炎のレース 〉 終幕。

次回第一章 第四部 〉 選択 〉

次回もお楽しみに！

〈 選択 〉 第四部 第一話（前書き）

からんちゅ 魔術師の鐘 〉 遙かなる想い 〉

いよいよ！ 第一章エンディングに向け、 第一章 第四部 〉
選択 〉 の始まりです。

過酷なレースを制したアウラとチツチ。

しかし、一時の平穩は突如、砕かれる。

そして、アウラを待つ更なる悲しみが訪れ選択を迫る！

物語が交差する！

く 選択 く 第四部 第一話

第一章 第四部 く 選択 く

第一話

異形の魔物

アウラに触れ掛けていたチツチの指先が、アウラの細い指先に触れる事はなかった。

チツチはアウラの傍らを擦り抜け、正装の上着を剥がすように脱ぎ駆け出し大広間を出ていった。

アウラは呆然としたまま立ち尽くす。

アウラにもランデーの話も聞こえていた。

でも何故？ チツチが？

アウラは、血相を変えて駆け出したチツチの形相を思い出す。

そっか……。

チツチの傍にいと直ぐに忘れてしまいそうになる事……。

アウラの胸の奥深くに眠る復讐心。

恋は盲目と言うが、これ程までに普段は忘れてしまうものなのか。グロリー号の上で瀕死のチツチが気持を言葉にしてくれた。

うれしかった……。

チツチの笑顔を見ていると薄れていく醜い感情に自分は安堵を感じていた。

しかし、チツチは違った。

チツチの中には、街を焼き母親を死に追いやった異形の魔物に対する憎しには、微塵も失つてはいないようだ。

自分のように恋に浮かれ、心の片隅に追いやっている復讐心を。自分も行かなければと、アウラは我に帰る。

振り向くとチツチの脱いでいった上着と何時もアウラ以外の人前で決して外す事のない右眼を覆い隠している包帯が無造作に床に捨てられている。

チツチの後を追おうとした時、ランディーに肩を掴まれた。

「ランディー様……私も行かなくてはなりません！　どうか御手を離して下さいませんか」

アウラは、硬い表情でランディーを見つめた。

「そう怖い顔をしなくてくれアウラ。しかし、美人という者はどんな顔にしても絵になるものだね」

ランディーが先程見せていた険しい表情を緩め、頬笑み掛けた。

「ランディー様！　こんな時に何を呑気な事をおっしゃっているのですか！　チツチが……チツチが」

軍が邀撃態勢を整える前にチツチは異形の魔物と接敵するだろう、とアウラは思っていた。

チツチがスレイプニルを呼び、異形の魔物に向かえば、どのような物を使って向かうより早く着ける。

「やれやれ……きみは見た目に似合わず、せつかちなんだね。山羊飼いの彼は異形の魔物を討ちに行ったのではない。まあ、結果的には討つて貰う事になるかも知れないがね」

「では……チツチは何をしに出て行ったのです？　あんなにも血相を変えて」

「彼は彼の仕事をしに行ったのだよ。彼の仲間と合流する為だね」

「チツチの仕事？　チツチは学生で……はっ！　騎士勲章」

アウラの脳裏に以前、傭兵たちに襲われた時に助けに来てくれ傭兵一小隊を一瞬の内に葬り去り大地を血の海へと変えたチツチの姿が浮かんだ。

それと、もう一つ気になる事がある。

ナーンの街付近で砲撃を受けて瀕死のチツチが自力で封印を解き、おぞましく禍々しい気を放つチツチの中に母が埋めた循鱗の破片から新たに生まれたもう一つの循鱗。

自分がチツチの循鱗ははの封印を解かなければ、チツチが追い込まれるような状態に陥れば、あの漆黒の循鱗を、その力を使って自力で封印を解くかも知れない。

それに循鱗を封印出来るのは私だけ。

「ランディー様？ チツチのお仕事とは……いったい、何なのか？」

「すまんが、それは私にも分らない」

アウラは、ランディーの何かを隠しているような答えを聞いてランディーを振り切り、再びチツチの後を追おうとした。

「まあ、待てと言っている」

「待ちません！ チツチの身に危険が迫るような事があれば、彼の封印を解かなければなりません。それに異形の魔物を創り出す術式を組んだのは私です。その責任も果たさねばなりません」

「そう気負うなアウラ。我々も出る。きみにも一緒に来てもらわねば困る。一人で向って何が出来るというのかね？ 今のきみに」

「そ……それは……」

アウラは悲しげな顔をして視線を落とした。

「すまん。言い過ぎた」

ランディーがアウラを宥めると言葉が続けた。

「彼らの仕事の内容を本当に私も知らない。アウラはおかしいと思はないかね？」

「何を……ですか？」

「どうして突然、こんな所に異形の魔物が現れたのか……きみが幼い頃に描いた魔物を創り出す魔法陣は北にあったグルンベルの近く

の小さな森に三つ、グリーンベルの街中に四つ、そして街の周囲に二つだという事が調査と後の検証で分かっている。このような場所にきみは描いた覚えがあるのかい？ それに今のきみは、なぜか魔物を創り出す魔法陣を覚えていない。無論魔法陣を描く事は出来ない。違つかね？」

「……違います。だとしたら、いったい誰が……もしや、あの魔法陣を組立描ける魔術師が現れたのですか？」

「そうかも知れないが今のところ情報はないがね。そう考えるのが妥当かも知れん」

ランディーが難しい表情をして答えた。

「隊長！ 出陣準備整いました」

「よし！ 名も無き赤の騎士団出るぞ！」

「アウラ来てくれるね。きみは我が隊が名誉と誇りにかけて守り抜く」

「はい」

アウラは短い返事の中に強い意志を込め答えた。

シュベルクのとある最高級宿。

「うん？ この音……」

「どうしたんです？」

「これ……もしかして……あれだよお」

「『ゴレム』」

「たくっ！ 面倒な事になってるみたいだ。きな臭ええ、匂いがしやがる」

銀髪の少年が突っ伏していた机から上体を起こした。

「行くんですかあ？ じゃあ、アイナも」

美しい金色髪の少女が何かを言おうとして時、銀髪の少年が言葉を被せた。

「お前は、ここで大人しくしてる！ 他の仲間も動き出す。てか！ お前、なんで仕事について来てんだ？」

「そ、それはですうねえ……！！　そう、そうです　！　折角の休みだから他国の祭りとやらを見に来たのですう」

「うふふ、いいじゃん！　一緒にいこ！　折角、他国の街に来たんだからさあ！　この娘が危険な目に遭いそうになったら、お兄ちゃんを守ってあげれば済むんだよお？」

人の姿はしているが、背中には半透明の羽根を生やした小さな少女と金色髪の少女が声を揃えた。

「「ねえ！」」
「ですう」

「お前らな！　何、観光気分出してんだ！　俺は観光に来てんじやねえつうの！　仕事！　要人護衛！」

三人？　が、やいのやいのと騒いでいた時、宿の外に砲撃の音が木霊した。

その音の大きさと音の長さから銀髪の少年は、まだ遠いと判断した。

「きな臭ええなあ！　休憩は終わりだ。行くぞ」

「わたしも行っていいですかあ？」

「……まあ、一人にしとくのも、かわいそうだしお前を放っておく方がゴーレムに襲われる街より心配だ」

「もふう！　素直じゃないなあ、ふうふう。私は当初の予定通り連絡役があるからあ、お二人でどうぞ」

「うるせえ！　行くぞ。他の連中と話し今後の対策を練る」

外には砲撃音と共に聞き覚えのある物が出す鳴き声（似た音）が響いている。

シュベルクの南西。異形の魔物が現れたとされる場所に向かったいたチツチとアスカは壊滅したナーン駐留軍の戦場を見ていた。

「これは酷いな」
アスカが眉をひそ顰め呟いた。

「でかい足し跡に踏みつぶされてるなあ」

「魔術師の作り出したゴーレムの仕業か……しかし、何だ！ この足跡は人や獣、魔物の類いの足跡ではないぞ。それに地面の陥没からして相当な質量を持っているゴーレムだな……石のゴーレムか、或るいは鋼鉄のゴーレム」

魔術師の作り出すゴーレムの足跡は人間の足跡と、大きさはさて置きほぼ変わらない。五指の跡が残るはず。

しかし、この場に残されている足跡は長さ九フィール程と優れた魔術師が一人で作り出すゴーレムと似た大きさで、その形に指の跡らしき物は無く、爪先はやや丸みを帯び側面に向かい角ばった所も見られ、足跡の中には丸い穴と地面に深い溝が等間隔に何本も規則正しく並んでいた。

「数も複数……一、二……九、十。十体か……となると敵は十人以上の魔術師と、その護衛にあたる騎士や戦士が複数という事になるな」

アスカが、敵の戦力分析をしているとチツチがそれを否定した。「ゴーレム以外の足跡も匂いも残っていない。もしかすると魔術師が少数のみかも知れない。それに嗅いだ事のない匂いだ。金属には違いないと思うけど……それと」

チツチたちは見た事のない光景を見ていた。

地面は砲撃で耕されている。それも尋常では程の弾痕が残され、人の亡骸はもはやその姿を保ってなかった。

「足跡の後を辿り魔法陣の残された場所に急ごう」

「こんな事なら、アウラを連れてくるべきだったなあ」

「はあ、お前と言う奴は、こんな光景をあの娘にみせたいのか……まったく」

アスカが大きく息を吐いて厭きた顔をした。

「違うぞお！ 魔法陣を解除して貰う為だ！」

「そうかい。それは悪かったな……それより急ぐぞ。調査を済ませ戦場に早く戻ってやらないとランディーの奴が、後でうるさいからな、リヴァー！」

アスカがリヴァを呼び出し二人がその背に乗るとリヴァは蛇が水面を泳ぐように低空を飛んだ。

チツチとアスカはゴーレムの足跡を辿りながら、二人は急ぎ魔法陣の描かれている場所を探しに向かった。

T o B e C o n t i n u e d

く 選択 く 第四部 第一話（後書き）

最後まで読んで頂き誠にありがとうございました。

次回もお楽しみに！

く 選択 く 第四部 第二話

第二話

異国の戦士

シュベルク近郊南西部。

青銅製の砲が、ずらりと据えられた台車が隊列を成す最終防衛線。

それらの指揮を執る先遣隊隊長は思いを巡らせる。

近隣にある各駐留軍に増援要請の早馬をやったが、間に合わない事など火を見るより明らかだった。

事態を知り既に召集された駐留軍は隊を成し先遣隊として第一陣、第二陣を向かわせ接敵し邀撃するも届く報告は各隊の全滅か敗走の報告ばかりだ。

他の街から重い砲を牽きながらシュベルクに到着するには、どれだけ急いでも丸一日以上掛る事は分かっている。

早馬が駐屯地に到着し準備を急ぎ整えてシュベルクの街に援軍を寄こしてくれたとして、逸早く駆けつけてくれても、やって来れるのは比較的軽装の騎士隊が明日の開け方に到着するのがやっとだと思われる。

幸い。収穫祭のお陰で各国の要人がシュベルクを訪れているという事もあり、同盟国の要人護衛で来ている戦士の力を借りる事が出来れば戦力は申し分ない。

しかし、自国の要人護衛を優先すると思われ期待は出来ない。

その間にも得体の知れない異形の魔物は、ナーンの駐留軍と先遣隊を道端に転がっている小石を蹴飛ばすくらいの容易さで軍の先遣邀撃隊を突破する。

シュベルクを目指しその歩みを止める事はない。
急ぐ事もせず、ゆっくりとその歩を進めていた。

「見た事もない型式だな……」

銀髪の少年が呟いた。

「記憶のないによく覚えてるね？」

「殆どないけどな……。幸いお前と戦った時、戻った知識は少なくはないぜ」

「……そっか！ エピソード記憶がないんだもんね！ 記憶喪失と言っても何もかも忘れる訳じゃないもんね！ 言葉とか知識とか」

銀髪少年の肩口で小さな少女が自分の言葉に頷く。

「あれは俺の知っている型番には味方にも敵軍にもない……敵の新型か味方の物か、それとも別の代物か近付いて識別を見れば分かるかもな」

「ちよっ！ 危険ですう！ それにお仕事の方はどうするですう？」

「今回、うち（ギルド）の選りすぐりが来てんだ。心配ねえよ。一応、伝えてから調査に出るけどな」

そう言つと銀髪の少年は仲間の下に向かった。

「まった く！ しゃあねえ奴ですう」

折角、護衛の交代時間を利用して異国の街をデート気分で散策しようと思っていた矢先の出来事に金色髪の少女は、がっくりと肩を落とした。

「全軍！ 砲撃しつつ後退！ 撃退出来なくてもいい我々の方に誘導出来ればそれでいい。決してシュベルクには近付けるなあ！」

先遣隊の指揮を執る人物は苦々しい表情を浮かべ唇を噛んだ。

「我が軍の魔術師部隊は、まだ、あれの準備が整っていないのですか？ 隊長殿」

「我がイリオン王国は、魔術に関して他国に比べその知識も技術も

遅れをとっている。秘密裏に魔術の研究と解析に取り組み始めたばかりだ。小さな魔法陣を準備するにも魔道書片手に四苦八苦しなから描くのがやつとなのだぞ！ 禁術書の解読は進んだと言え、実戦投入は今回が初めて……仮に成功してもどれ程の戦果を上げられるかは分からん。野の魔物や他国の軍ならば精強の騎士団を持つ我が国だからこそ互角に渡り合い今日まで平穏な日々を送る事が出来てはいるがな」

先遣隊の隊長は異形の魔物と対峙してみても初めて分かる。

特殊な能力を持つ騎士団と言えども、この異形の魔物に果たして敵う事が出来るのだろうか。

「我々の任務は異形の魔物の撃退。それが成らんとするならば、せめてイリオン全土に散らばった騎士団が集結するまで、或いは魔法陣の完成まで奴らを少しでも足止めし時間を稼ぐ事だ」

せめて、現在シュベルクに駐留している名も無き赤の騎士団でも援軍に来てくれたならばと思えば隊長は首を振った。

イリオン王国が魔術の力を手に入れつつあると他国に知れば、他国に脅威を与え兼ねない。

そうなれば、漸く苦勞し結んだ条約も水の泡となり兼ねないのだ。その為、魔術師が陣を整える間、何者も近付ける事の無いように名も無き赤の騎士団が監視と護衛に当たっているのだから、せめてイリオン正規軍の名誉と誇りにかけてシュベルクに滞在している各国の要人たちが少しでも遠く離れた場所に避難するまでの間、時間をかせがなくてはならない。

と言ってもこちらの砲撃は死に物狂いで有効射程に入り異形の魔物に当たっても傷一つつける事が出来ない。

それに比べ異形の魔物は、こちらの大砲の射程を軽々と凌駕する上に次弾の転送時間が無いのかと思われる程に続け様に連射してくる。

先遣隊の砲撃は異形の魔物の随分手前の地面をえぐるだけ、それでも進路の妨害になれば時間は稼ぐ事は出来ると思っていた先遣隊の思惑も泡のように消えて行く。

砲撃の効果は皆無に等しい。

地面に出来た着弾跡の穴など気にした風もなく異形の魔物は歩みを続けていた。

「出来ました。しかし、この魔術は禁術の初歩の初歩です。果たしてこれで生み出すゴーレムで異形の魔物を止められるかどうか……」

アウラは顔色を曇らせた。

「そいつでは無理だな」

「だよねえ」

「あれらも何処かの遺跡から空間魔法を用いて呼び出したものだろうけど。あんたたちがゴーレムと呼ぶものを俺たちはよく知っている。あれらは俺が知る物より先に試作された無人のものだ」

どこから名も無き赤の騎士団の監視する防衛網を抜けて来たのか、銀髪の少年と肩口に乘る妖精が現れた。

「チツチ……？」

アウラが声のする方へ振り向くと銀髪の少年を見て思わず口から出た言葉に自分でも驚いた。

すぐさま近くにいたランディーが腰に帯びている剣の柄を掴み刀身を少年の喉元へと突き立てた。

「何者……かね？ きみは」

「早いねえ、流石は音に聞こえる騎士団の隊長さんだ」

銀髪の少年は喉元に剣の切っ先が突き付けられているにも関わらず、眉一つ動かす事はない。

「褒め言葉と受け取っておこうか？ しかし、流石と言っのはきみも同じ……我が名も無き赤の騎士団の防衛網を掻い潜り、あまつさえ気配も気付かせぬとはね」

ランディーが硬い表情のまま唇を吊り上げた。

「そりゃどうも」

「きみを見ていると、ある人物の顔が浮かぶ。奴にも良く掻い潜られたものだ」

「そんな事は知らねえが街に向かっている。あれだけど恐らく何処かの遺跡から呼び出したものだろう……と思う。だが、それにしては状態がいい。あんたらにどれだけの戦力があるかは知らねえけど、一筋縄ではいかない相手だ。悪い事は言わねえからあんたらも軍ごと、この場を引き上げる事を俺はお勧めするね！ まあ、誇り高き騎士が引くとは思わないけどな」

銀髪の少年が背中中に隠れ様子を窺っている金色髪の少女に言う。

「なあ、あの魔法陣どう思う？ ラナ・ラウルに仕掛けられている魔法陣だと思うか？」

「違いますうねえ……私は魔法陣の事は詳しくないですう」

「あれだけ強力な魔法を扱えるのにか？」

「私も一緒ですう、魔法陣の系譜が違いますしそもそも私の魔法は――」

金色髪の少女が何かを言い掛け口を両手で押さえ言葉を飲み込んだ。

「て、事は今や西の強国、カリユドス皇国……今は帝国か……西側の系譜か？ あの国には遺跡の数も多いからな……まだ決まった訳じゃねえが」

独り言のように話す銀髪の少年にランディーが声を掛ける。

「先程逃げると言っていたが、きみたちはどうやって異形の魔物を倒すというのかね？」

「それは！ 秘密だ」

「やれやれ、何処かの誰かと同じような事を言うな……なあ、アウラ？」

「はい。そつくりです。ランディー様」

アウラが驚きと共に銀髪の少年を見つめた。

「あれは俺たちが食い止める。俺たちにも俺たちの仕事があるから

な！ 共倒れはご免だ」

「要人護衛かね？ 守護者」ガーディアン

「まあ、そう言う事になるか……そこでだ。あんたたちはあれを呼び出した術者を探し出してくれ、術者を倒せば、あれらも動きを止めるはず、強制的に魔法陣の力で動かしているようだった。確認済みだ間違いないね」

銀髪の少年がそう言い淡いブルーの瞳を細め微笑みを浮かべた。

「まったく……その笑顔までそっくりだ」

ランディーはやれやれと言ったように肩を窄めた。

「術者は恐らくゴーレムの見える範囲に潜伏しているはず。あんな物呼び出した魔法なんて見た事がねえ、うちにはその手のスペシヤリストがいるが、その術式とも違うようだ」

「その魔法陣の確認に私の知り合いが調査に出ているはずだ。私の部下でもないのだがね。それが奴らの仕事だからな。もう直ぐ情報を持ち帰ってくるさ」

「魔法陣を乱せば術は弱まるから見つけ出し乱してくれれば、こっちも楽なんだけど……そいつ置いてくから術者を探す時にでも役に立つと思うから……。だが、護衛を付けてやってくれ一応、そいつは一般人なんでねえ」

「分かった。丁重にお預かりしよう」

銀髪の少年は、そう言うのと金色髪の少女を残しその場を後にした。「では、我々も行くでしょう」

ランディーの指示で魔術師たちの護衛と敵の魔術師搜索隊の二手に分かれ、ランディーの率いるゴーレムと術者の護衛隊にアウラと金色髪の少女が同行する事になり、その場を後にした。

To Be Continued

く 選択 く 第四部 第二話（後書き）

最後まで読んで頂き誠にありがとうございました。

次回もお楽しみに！

く 選択 く 第四部 第三話

第三話

夢か、果たして幻か

異形の魔物の足跡が途切れた場所にチツチとアス力は、その周囲を搜索する。

「魔法陣見つかんないなあ」

何時ものように間の抜けた声でチツチが、ぼそりと呟いた。

「ああ、何かが可笑しい……ソルシエールが言うには魔法陣を見つけて出し術式を乱せば、行使した術者の能力にもよるが大方の魔術が効力を失うか、或いは弱まるかゴーレムは本体に術式を書いたものを貼り付け術者の意のままに動かす事が出来ると言っていたなあ確か……。その術の書かれた札なり、胴に直接刻んだ術式にも魔法陣の効果があり、本陣から引き出した何らかの力を受け取り本来の力を発揮するとか言っていたけどなあ……」

アス力は頭を捻り考える。

無論、術者も馬鹿ではない。

簡単に見えるような見つけ易い所に魔法陣を描いているはずはない。

出会い頭に魔術師同士が魔術戦を行うとなれば、そんな悠長な事をしている暇は無い。この件に関しては事前からそれなりの地位を持つ何者かの協力があり準備され異形の魔物を呼び出したに違いない。

でなければ、十体にも及ぶ異形の魔物を時間も掛けずに誰にも悟られる事すら無く作り出せる訳がないのだ。

しかしながら、魔物の出現したと思われる場所には魔法陣を隠す場所が見当たらない広野だ。

もし隠すとするならば……。

地中。

アスカは視線を地面に落とした。

地面が掘り起こされた形跡もない。

リヴァを呼び出地中に潜らせ調査した。

……が呼び出しに使用したと思われる魔法陣を見つける事が出来なかった。

「うん？　もしかしたら魔法陣を描いた術者が消したか、魔物を生み出して消えたか、魔物を創り出す術式を完璧に組み立てられるのはアウラしか今のところいないはずだから……本人は忘れてるみたいけど……本当は思い出さないように自分の心に鍵をかけているんだと思うんだよなあ？　異形の魔物を創り出す術式を知らない間に組み上げてしまった事に対する罪の意識があつてアウラは、決して表に出さないけど何時も苦しんでいるみたいだからなあ」

チツチは、何時ものように微笑みを浮かべ、アスカに顔を向けた。「なら、どうやって異形の魔物が、こんな所から突然現れ本陣も無しにあれだけ駐留軍に損害を与える力を得ているんだ！」

アスカのかすれた声がチツチに向かい怒りと苛立ちを見せた。

「まあ、ソルシエールが言うように本体の術式だけで動いているんだろ？　生命を持った異形の魔物を創り出せる魔法陣はアウラにしか描けない」

「では、なんだ！　駐留軍を壊滅させた化け物とは一体なんだ！

お前もあの惨状を見たらうに、そんな化け物を創り出せる奴が他に何人もいると言うのか？」

「アウラが描いた魔法陣から創り出された異形の魔物を見た事があるか？　アスカ。……俺は一度もない。ランディーが言っているだけでグリーンベルの他に今まで異形の魔物に襲われたと言う話を聞いた事があるか？」

インヴァンシブル・イントルダ

「姿無き不可視の影、我々の調査では確かに創り出されている事を魔法陣の発動形跡から見ても間違いない。もしかすると創り出されているのではなく……」

アスカがチツチに食い下がる。

「なんて言うか……よくそんな場所に潜り込める奴がいるもんだなあ、……リヴァアか？」

「そつだ。リヴァアを調査に向かわせた事がある。他の奴らも同じような手法で調査した結果の結論だ」

「その異形の魔物は、いったい何処に消えるんだろつなあ？」

「そこまでは分からない。組織の偉いさんが必死で解明しようとしているだろつさ……何れ何らかの形で我ら人間の災いになる……そんな気がする。だから私は力を持つ者の一人として組織に入った……こんな私を色目無しに育ててくれた。今は亡き祖母の為にも私の力が災いで無い事を自分自身に示す為に……」

険しかったアスカの表情の中に、何か寂しげな蔭が見えたように思えた。

チツチは、アスカの隣に立つと軽く肩を叩いた。

「人は、自分と違う者を認めたりは決してしない。でも、分かってくれる人も沢山いた。俺の旅した幼い頃の話だけ……」

チツチとは、別の意味で何時も表情を崩さないアスカの表情が悔しげに曇りだしている。

「まったく……お前は……慰め方を知らない奴だな」

アスカは、口を嚙みチツチに寄り掛かると正面から抱き寄せた。

チツチより、顔一つ分背の高いアスカの顎下にチツチの顔がちよつと来る形になる。

チツチの頭を抱えたアスカのお陰でチツチの顔面は『デカパイーン伝説の神々しい谷間』に埋もれる。

「アスカ……ぐるじい……いぎが……べぼ……いいがぼ」

チツチはアウラがこの場にいない事に感謝した。

アウラがこの場において、この状況を目にしたら有無を言わず鐘の

音が数回鳴り響いているに違いない。

「調査は、これで終わりだ。何も見つからない以上、ここにおいても無意味だからな。私たちもシュベルクに戻ろう」

アスカがチツチの頭を抱えたままそう言った。

「一わがじまじだ（分かりました）」

「こら！ 胸元で余り喋るな、くすぐりたいだろ！ リヴァ来い！
アスカがチツチの頭を放すとリヴァを呼び戻した。

白金髪の少女は面識のない人たちに随伴し魔術師捜索に協力する事になったが、人見知りが激しいせいか、おどおどしながら下ろされた髪に隠れた瞳と表に露出している、緑の宝石エメラルドのように美しく輝く瞳を彷徨わせ落ち着かない様子だった。

同じ馬の背に乗せられ横向きに並んで座っている。

歳の頃も同じくらしい美しい白金髪の少女。

隣に座っているアウラが白金髪の少女に話掛けた。

「綺麗な瞳ですね」

「……」

アウラの紫水晶の瞳と視線が交わる。

「それに綺麗な髪。まるで記述に残っているエルフの女王様のようなですね」

「……」

「それに美しく線を描く顎の形に綺麗な肌にのる、かわいいお鼻」

「……あつ……あなたも……きれいですう」

「まあ！ ありがとうございます」

アウラは、頬笑みを向けると金色髪の少女も微笑みで返した。

美少女二人のひそひそ話す姿に馬の手綱を引いている騎士の鼻の下が伸びている。

「その下ろした前髪の奥にも、翡翠色の美しい瞳が隠れているのですね。両目が揃った時、それはそれはお美しいのでしょうね」

「……」

アウラは、元貴族のフランクに幼少の頃から育てられている事も
あり恭しく話を続けた。

アウラの何気ない一言で金色髪の少女の表情が悲しげに曇った。
その事に気付いたアウラは不思議そうな顔をしたが、ややあつて
チツチの右眼を思い出す。

チツチのような事はないだろうが、何かの事故で右眼に傷を負っ
たのかも知れない、と思いつつ気がまずい空気が流れた。

年頃の娘が顔に傷を負うという事は何よりもショックであろうし
気にしているに違いない。

自分がもしそうだったとしたら、やはり触れられたくはない
だろう。

金色髪の少女は黙って俯いたままだ。

「あの……お気に触ったのならごめんなさい。知らぬ間にお気に障
るような事を言ってしまったのかも知れませんが、本当にごめんな
さいね」

白金髪の少女は俯きながら、ぼそりと呟いた。

「……つるぺた」

「えっ！」

アウラは一瞬、白金髪の少女が何を言っているのか分からなかつ
た。アウラは少女の視線を追った。

その視線は自分の控えめな胸の膨らみへと続いている。

アウラの視線も自然に白金髪少女の胸に向かった。

大差ない……いや、むしろ……。

アウラの控えめな胸の膨らみはチツチ曰く、桃なのである。

視線の先にある膨らみと言うと……オレンジ程。

アウラは、がっくりと肩を落として溜息を胸中で溜息を吐いた。

腹が立つというより比べるだけで虚しくなってくる。余程、気にしている事に触れてしまったのだと頭を切り替え反省していると白金髪の少女が細い声で尋ねて来た。

「……陸を走っていた船を見た時は仰天したですう……あれに乗っていた男の子も右眼に包帯を巻いていたですが、彼は右眼をどうかしたのですうかあ？」

「は、はい……彼の右眼は病に侵されていて、それで包帯を巻いているのですよ」

アウラは、あたり触りの無いように答えた。

白金髪の少女は「そうですかあ」と答えると、そのまま黙って何か考えている様子で俯いていた。

その時、一人の騎士が隊列に進軍停止の合図を手振りで伝えた。

「前方に魔術師らしき人影、数……一人です」

騎士の声から信じられないと言う心情が読み取れた。

魔術師は本来、魔法陣を描き杖、聖具など基本的なものからアウラのように鐘を用い杖の振り方、聖具の掲げ方など魔術の発動条件を決定し魔術を行使する。

事前に魔法陣を描いておいた自分に有利な場所で戦う以外、周りには魔法陣を描き術の発動までに掛る時間、魔術師を守り援護する為に騎士や戦士などと連携し戦闘を行う。

単独で姿を騎士隊の前に曝したという事は、魔術師の有利な領域に足を踏み入れたか、或いは相当の実力者でないと一人姿を見せる事など皆無だ。

アウラのように魔法陣を用いず行使する禁術書でも覚え扱えない限り魔術師が、のこのこ騎士隊の前に姿を現すなど自殺行為に等しい。

「さて、あの無謀な魔術師は敵なのか……それとも味方か」

ランデイーが眼光を研ぎ澄ました。

魔術師の姿など敵も味方も似たような身なりで、その姿から唯一識別するとすれば隊章のみ。

同じ組織か軍に属する者ならば、その人物の顔を確認する事も出来るが……。

魔術師は小柄な身体つきで黒いローブに身を包んでいる。

その魔術師は顔まで隠れて程、深く被っていた外套に手を掛け、ゆっくりと取り去った。

顔には、眼を覆いたくなる程の火傷跡が痛々しい。

魔術師は、引き攣った唇の端を僅かに上げた後、引き攣る頬を持ち上げ微笑みを創り出し口を開いた。

「姉さん……久し振りだね」

からん

その顔は火傷痕が酷く変わり果ててはいるが、幼い頃から残る面影とヴァジニティー家の羊を示す焼印が彫り込まれた鐘。

「その声……その瞳」

アウラの顔色は失われていく。

「ア……ウル？」

アウラは、紫水晶の瞳を潤ませグリーンベルで死んだ弟、虚空を見詰めるようにアウルを潤んだ紫の瞳に映していた。

To Be Continued

く 選択 く 第四部 第三話（後書き）

最後まで読んで頂き誠にありがとうございました。

次回もお楽しみに！

く 選択 く 第四部 第四話

第四話

奇跡の再会。

思いも寄らぬ突然の再会にアウラは動揺した。

グリンベルで街と共に焼かれ死んだ筈のアウルが痛々しい素顔を
見せアウラを姉さんと呼んだ。

生きていれば十四歳になっている。

アウルを名乗る魔術師の背格好は、他のその年頃の少年たちと同
じ程度。

少し大人びた声になっているものの、忘れもしない弟の今は少し
大人びた声と自分と同じ色の瞳と髪の毛、記憶に残っている面影を
見て無意識の内にアウルの名を呟いていた。

アウラは馬上から飛び降りると夢遊病者のように、たどたどしい
足取りでアウルの方へと歩き出した。

周りの騎士たちは、それぞれ警戒を怠らない。

各々が持つ得物を構え、一時たりとも魔術師から刃物のように研
ぎ澄ました眼を逸らす事をしていない。

それはランディーも同じだった。

騎士隊の前を阻むように立っている。

魔術師のローブには『アイゼンガルド国境無き楽園の使者』を表す紋章が刺繍さ
れている。

北の神殿で交戦した騎士団と同じ紋章。

北の神殿からアウラとチツチがシユベルクに向かう途中、アウラ
を連れ去り各所に在るとされるアイゼンガルド国境無き楽園の使者のまさしく鉄の
砦にアウラを幽閉した組織。

その砦は強固な要塞もあれば何処の街中にある商会だったり、教

会であつたり岩肌を刳り貫き砦になつてゐるなど、特定するには困難なアジトを名の示す通り各国に点在し、それに加盟する使者の総数はおろか、アジトの数さえ知る事は出来ていない。

臨戦態勢を整える騎士たちの間を縫うように、アウラは死んだと思つていた弟の方に近付いていく。

余りにも突然の再開にアウラは放心状態のまま。

本来なら喜びの余り瞳に涙を潤ませ駆け寄る事だろう。

ふらふら何かに憑依されたかのように瞳は虚空を見つめてゐるように輝きを失つてゐる。

そんなアウラの腕を細い指先の手が強く掴んだ。

アウラの歩みが制される。

「つるぺた！ 行つては駄目ですう！ あの子には得体の知れない強力な魔力を、それも禍々しい魔力を感じるですう」

アウラを制したのは白金髪の少女だった。

突然、腕を掴まれ呼び止められたアウラは自我を取り戻す。

しかし、アウラの動揺は続いていた。

「離して！ あの子は私の弟なのつ。八年以上前に死に別れたと思つてゐた弟なの！」

アウラは、心の動揺を表しているかのような荒々しくも震える声を張り上げた。

「あなたの事情は知らんですう……ですが、あの子が発している魔力は危険ですう！ 近寄つてはだめですう」

白金髪の少女は懸命に訴えを続けた。

魔術師が不意にシュベルクの外壁の外へと顔を向けた。

「姉さん、僕は行くよ。待つていたモノも来たようだしそろそろ時間だ…… 本当は再開をゆつくり味わいたかったけど、どうやら僕らは騎士さんたちに歓迎されているようじゃない。分かつてはいたけどね。それと一つ姉さんに伝えておかないといけない大切な話だけしておくよ」

アウルは、火傷で引き攣る頬の肌を吊り上げ微笑み言葉を継ぐんだ。

「本当は姉さんを連れて行って、ゆっくり話をしたいし合わせたかったんだけど、元気で父さんも母さんも生きてるよ。西の強国カリユドス帝国でね。じゃあ、僕は行かないと」

アウルはそれだけ伝えると地面に何時も間にか描いていた魔法陣の上に杖を突き立て言霊を呟くと鐘を鳴らした。

アウラの全身を旋風が包み込み、旋風は数瞬の後に消え去った。アウルの姿と共に。

騎士たちは緊張の糸を緩めたのか、糸を切られた操り人形のように得物を構えていた腕を下ろした。

「何をしているか！ 我れも急ぎ向かうぞ」

気を緩めた騎士たちをランディーが一喝する。

「はっ！」

ランディーは両腕を見た。毛穴は逆立ち嫌な汗が額から流れ落ちている事を感じた。その感覚は両腕に止まらず全身に広がっている事に今更ながら感じ取っていた。

精強の名も無き赤の騎士団の約半数を前にして無防備にも程がある。あの魔術師の自然な振る舞い。

その見えない実力は異常な程、不気味で異様な程に警戒心を駆り立てた。

実力者揃いの名も無き赤の騎士団だったから、こそ不用意に仕掛けず事無きを得た。

「さて……どうすっかな」

銀髪の少年が呟いた。

「俺も、あれ呼び出すか？ つつても俺たちが見つけたモノは状態が悪過ぎて動きはするもの……あの数を相手に、まともやり合うのは無理だな。こりゃ」

「じゃあ、どうするの？ この国の軍隊じゃあれは倒せないよお」

少年の肩口に座った小さな少女が少年の耳たぶを引っ張った。

「まあ、魔法でもぶつ放してみるさ」

「あの娘の危機じゃない時は、まともに行使できないくせにい
「うるせえ！　なら、お前があの姿に戻ってやっちなえ」

「やだお　！　疲れるしい！　わたし一人じゃあの姿でいられる
のは、ほんの短い時間だけなんだよ？　何れ、わたしはSIONの
導きで心も身体も一つになれば、何時でも鬼神の力を際限なく使え
るのにい　、お兄ちゃんが態度をはつきりしないからだよ……
あの娘の事を想う気持ちは分かるけど」

「何が、言いてえんだ」

「好きなんですよ？」

「うるせえ」

「ほらね」

「……」

「お兄ちゃんは、記憶を戻さなくていいの？　方法はもう知ってる
のに……それにあの娘は自分の出生の秘密を知りたがっている。だ
からギルドを辞めると言いだしたんだお？　マスターが無期限の休
暇という事にしたみたいだけだね」

「おい！　それ……本当か？　俺は何も聞いてなぞ」

「今回、収穫祭の要人警護依頼に半ば強引に着いて来たのもお兄ち
やんが記憶を戻す事に専念出来るように、そしてあの娘は出生の秘
密と弟を追って得体の知れない『アカデミアの森』に行く為なん
だよお！　生きて帰れないかも知れないから、だから収穫祭が二人
の最後の想い出になるかもって……お兄ちゃんは女心を何も分かっ
てないんだから！　振られても知らないからねっ！」

「……あいつ……一人で大丈夫なのか？　アカデミアの森に行く
なんてよ。それに想い出つて言うのは生きているからこそ分かち合
えるものだろ……生きて帰れねえなら、一人で行こうとするんじゃない
ねえよ……」

「あの娘は強いよ。心も魔法の力も……普段は、おどおどして頼り

なく見えるけどおね」

「でも……今は悩んでる暇はないよお？ あれを倒さないと多くの人の命が掛ってるんだから！ あの娘が一番悲しむ事って何さあ！ お兄ちゃんは何知ってるでしょ？ だったら、ちよっとは格好いいところ見せてやりなよねえ！」

「……そんなじゃ、まあ！ 始めますか」

銀髪の少年は前を見据えシュベルクを囲む外壁の向こうを見詰めた。

アウラと名も無き赤の騎士団は白金髪も少女が騎士団を先導し消えた魔術師を追っていた。

「こっちですう」

白金髪の少女が魔術師の魔力を辿りながら行く先を示す。

そんな中、白金髪の少女がアウラに話掛けた。

「……あなたの気持は少し分かります。私にも弟がいるのです、あつ！ わたしたち姉弟は一卵性の双子なんです……今弟は霸王の力に目覚め、自分の思うがままの理想郷エテ・ヘブンを創生しようとしているのです……一度、その世界の一部を見た事があるのですが、わたしも初めは素晴らしい世界だと思っただです……でも、一緒にいた鈍感銀髪野郎が、その世界の結界で創り上げた幻想をぶった斬つて、その世界の真実を知ったのです……とても寂しくて悲しい世界だったです。私は弟の野望を止めたいのです。あなたのように死に別れたと言う訳ではないですが。あなたは口には、出さんですうがわたしも弟が目の前に突如現れれば、きつとあなたの思っただ事と同じような事を思っただと思っただです」

白金髪の少女が翡翠色の瞳にやさしい笑みを浮かべ、アウラに向けた。

見透かされているようだった。

死んだと思っていたアウルが『敵』として現れカリユドス帝国には父も母もいると言う。

祖父母の話が出なかったのはきつと、もう他界しているのだろうか。

祖父母の年齢から考えて、あの惨事から無事に逃げ出せていたとしても、その心労に耐えられなかったのだらう。

アウルと両親が、なぜ無事で遠く離れたカリユドス帝国にいるのか。

しかし……腑に落ちない事がある。

その事がアウラの心を更に混乱へと落していった。

シュベルクの外壁の外。

異形の魔物たちはゆっくりと歩みを進めていた。

邀撃に向かい交戦中のイリオン軍は、距離を保ち届かない砲撃を続けながら後退戦を強いられる。

「弾こめえ　！　てえ　！」

火薬の炸裂音と火花、白煙が大砲の筒先から吹き上がる。

次弾を込める作業中に弾を込め終わった砲列が続けて砲撃を行なっていた。

「弾か火薬が切れるまで撃ち続ける！　決してシュベルクには近付けるな！」

隊長に怒声が飛ぶ。

解っている。あの異形の魔物を止める事は出来ない。

人型のゴーレムと思われるが、それにしても頑丈で時より当たりそうになる砲弾を素早い動きで難なくかわし直撃しても傷一つ付ける事が出来なかった化け物。

シュベルクの外壁が隊長の視界に入り出した。

これまでか……しかし、イリオン軍の誇りにかけて諦めはせん。

邀撃部隊隊長は口元を真一文字に結び、異形の魔物を鋭い眼光で見据えた。

その時。

聞き慣れない何か唄のように聞こえる、まるで詩人の唄う詩のように軽やかに言葉が隊長の鼓膜を揺らした。

「九つの冥界より来たれ漆黒の業火よ。我との古き血の契約に従い我の呼び掛けに応えよ。汝、我が魂を糧とし力を行使せよ。漆黒の炎となり敵を焼き尽くせ」

「一ダークネス フラム（漆黒の爆炎）」

唄うような朗読が終わると漆黒の炎が一体の魔物を包み込んだ。

「何だ！ あれは」

イリオン軍が極秘裏に進めている魔術研究を知らされていない一介の隊長は驚きの声を上げた。

しかし、遠い昔には魔術が存在した事くらいは知っている。

「あれは……魔術なのか？」

漆黒の炎に包まれる魔物を見て隊長は呟いた。

周りの兵士たちは、ただ凄まじいその光景に眼を奪われた。

To Be Continued

く 選択 く 第四部 第四話（後書き）

最後まで読んで頂き誠にありがとうございました。

次回もお楽しみに！

く 選択 く 第四部 第五話

第五話

宿命の出会い

「何が起こっているというのだ。いつたい」

ランディーが率いる名も無き赤の騎士団とアウラ、それに金色髪の少女は魔術師の後追ってきた場所には漆黒の炎に包まれた異形の魔物……というより遠い昔、世界を救ったとも世界を滅ぼしたとも様々に記述されている神話の魔人にも似たゴーレムの姿を眼前に捉えていた。

「……あれが私が組み立てた魔法陣から創り出され続けている魔物なのですか？ ランディー様……」

アウラは、その異形と呼ばれる十体もの巨人を呆然と見据えてランディーに問うた。

「そうとも言えるし、そうでないとも言える。確かにグリーンベルの街が焼かれたあの日、街に転がっていた残骸はあれに似ている。しかし、魔法陣を守護している異形の魔物はあれではない。なんとも形容し難い様々な異形の形をしているのだよ、私の知る限りだがね」

ランディーが何処か不可思議さと曖昧さの残る答えを返した。

「あれは……遺跡のゴーレム……ちよつと違いますう」

「あれを知っているのかね？ 貴女は」

「……わたしには詳しい事は理解出来ないのですが、あれに似た物は近隣国々の遺跡で眠ってるそうです。ラナ・ラウルにも幾つか遺跡があり、その遺跡から次空間魔法を用いてあれを呼び寄せる事が出来る人物を知っていますう」

白金髪の少女は最初の異形の魔人の事を得意げな顔をして両の拳を肩の高さまで上げ人差し指を、ぴよこんと天に向け立て得意げに

話した。

「魔法？ 魔術の事ですか？」

イリオンでは聞きなれない言葉にアウラは聞き返した。

「魔法は魔法です。あなたの言う魔術とは私たちの国で言う理論魔法の事だと思っすう」

「その遺跡から、あれを呼び出せる人物とは誰だね」

「私といた野郎です。名前はシオン！ あっ！ シオンというのはですねえ　！　ラナ・ラウルガーディアンの守護者ギルドの人間で戦士としては、超お　優れた力を持ち強いのですが得体の知れない記憶喪失者で鈍感でエッチい　くせに晩熟おくてな、まったくどうしようもない野郎なのです」

天に向け立てたままシオンの事を話していたが話している内に、むかむかし来たのか次第に表に現れている深い緑色の瞳を細め口を尖らせ表情を変えた。

「何を話てるんだあ？」

「「きやあ！」」

「な、なんか下から声がしやがったです」

「はっ！？」

アウラは溜息を吐くと両膝をしっかり閉じ両手をその膝の間に滑り込ませスカートの生地を押さえた。

「純白シルク、紐」

「……遅かった」

アウラは毎度の事に呆れた顔で切なげに呟いた。

「どうしたのです？」

おどおどしながら白金髪の少女がアウラに尋ねた。

「スカート押さえてください。手遅れだと思いますが……一応」

「スケスケレース」

「へえ？ わたしのパンツ？」

顔を合わせて話していた美少女の間からチツチがひよっこり顔を出す。

「スケスケ？ ……ですか……はあ」

白金髪の少女は、なんだか良く分からないと言った顔をした。顔を赤らめたアウラが少女の耳元に顔を近付けると小声で伝えた。「そうですね……し、下着の事です。それにしてもスケスケですかあ……私も頑張ったのに」

アウラは、がっくりと肩を落とした。

「おのれえ　！　右眼包帯男！」

白金髪の少女は怒り顔を赤らめ、慌ててスカート裾を押さえた。「なあ、ランディー？　今、異形の魔物と戦っているのは誰なのかなあ」

「異国の守護者だ」

「そうか、強いなあ、あいつ」

「それで魔法陣は見つかったのかね？」

「いや、見つからなかった。怒るか？」

「お前たちに見つけられなかったものを誰が見つけられると言うんだね」

「よく分かっているじゃないか、ランディー」

何時も間にか、ランディーの傍らに立っていたアスカが肩を叩いた。

「な、なんと！　凶悪な悪魔の果実を装備してるんですか！　あの女……ミルさんと同等……それ以上ですっ」

白金髪の少女はアスカの胸元を見て驚愕した。

「あれは……チッチ曰く、デカパイン伝説と言う代物らしいですよ」
アウラはそう言うと、はたと気付き白金髪の少女に尋ねた。

「あの！　お名前は？　名乗るのが遅れてすみません。私はアウラ・ヴァジニティーと申します。アウラと呼んでください」

アウラは、緊迫している街の様子を気にしながらも恭しく一礼し自分の名前を名乗った。

「わ、わたしはアイナ……アイナ・デュラン・ミラ・カストロス……ですっ」

白金髪の少女は覚悟を決めたかのように一度大きく息を吐き唇を固く結んだ後、アウラ以上に洗練された一礼を恭しくし、これまでに誰も名乗った事のない全ての名を口にした。

「カストロス？ 亡国の姫君……」

ランディーが驚きの表情で呟く。

「何を、こそこそ話しているんだ？ 俺たちも行くぞお」

「でも私たちは、あれを呼び出した或いは創り出した魔術師を追って」

アウラの心情を読み取ったかのようにアイナは言葉を被せた。

「あの魔術師はあの場にいるですう」

異形の魔人とシオンが交戦している場所を刺した。

「いくですよよ！ 大丈夫ですよ！ シオンは人を殺めたりせんですう。それだけの技量を持ち合わせているですうよ」

心配そうに戦場を見つめるアウラにアイナが微笑み掛けた。

「わたしたちも、しゅっぱああつですよ！」

既に戦場に向かったチツチとランディーの後を追い残った騎士団と共にチツチの後を追った。

「くそ！ 装甲に耐熱処理はしてあると思ったが、その上から更に魔法で耐火対策まで施してあるとはな、俺のとおきのおきの魔法だぞ！ まだ完全に使いこなせてけどな」

シオンは唇を噛みしめた。

「装甲にダメージを与えられなくても内部の配線を焼き切ってやろうと思っていたんだが、耐火処理と併せて冷却処理も施してやがる」

「シオン！ 手伝ってやろうか？」

「レイグ！」

「依頼人には安全な場所に移って貰った。ミルの次空間魔法でな」

「で、あれは援軍か？ 出来の悪いゴーレムが向かって来てる。この国の騎士団……あれは！」

ランディーたちがこの場に向かう少し前、魔法陣から創り出した

土のゴーレムを従えた国軍がランディーたちの騎士団より先に戦場に到着した。

「まあ、この国は魔法後進国だ。あれに期待するのは止めておこう」
レイグはそう言うのと炎の魔剣を構えた。

「剣に宿りし炎の化身よ その力 今 解き放て」

レイグが口上を延べ剣に宿る炎の化身、炎の魔人^{イフリート}を解放する。

「さて、搦し三千度を越える炎、受けてみるがいい。鉄の融解温度に達する炎を味あわせてやろう」

「無駄だ……俺のダークネスフラムも完全なら三千度を超える。今の俺には二千度が精一杯か」

「妖精がいないと本来の力も出せんとはな」

二人が、口論を楽しんでいるとイリオンの魔術師が創り出したゴーレムが異形の巨人に近づく。

異形の巨人が背中に背負っていた筒状の物を肩口に構え、シユパンと酒瓶に醗酵したガスがコルクを抜いた際に出すような音を立て筒先からは煙の尾を引いた砲弾がゴーレムに向かい飛んだ。

砲弾をまともに受けたイリオン軍のゴーレムは弾着と共に炸裂し砕け散った。

「あらら一撃かよ！ あれじゃ術式の書かれた札も文字ごと粉々だぜ、再生出来そうもないな、あれでは……にしても持たせた武器にも御丁寧に耐火耐熱処理を施してやがったとは……通りで誘爆しなかつた訳だ」

「仕方ねえ、剣で斬ってみるか？ 雷撃系の魔法も試したがECM加工もしっかりしてやがった。ラミネート加工もな。恐らくこいつを呼び出した魔術師はカリユドスの手の者。向こうには、こいつらを整備出来るだけの施設と技術者がいるとしか思えねえ」

シオンは苦々しく顔を顰めた。

「シオン？ 新しい呪文でも覚えたのか？」

レイグが不思議な聞いた事のない言葉が混ざるシオンの話を聞いていて尋ねた。

「魔法じゃねえ、デスペル魔法の専門家がこの場にいれば……いな
いとなると魔法は駄目だ剣で斬ってみるしかねえ！ 案外斬れるか
も」

「そうかもな」

二人は顔を見合わせ笑い合った。

「シオン 用意できたよお」

「遅せえよ、リーシャ」

「でもいいの？ 遺跡で見つけた最後の機体だよ？ 一番まともに
動かないし」

「この際、仕方ねえ」

「うん？ あいつらやられてるよ？」

リーシャの言葉に目を凝らし異形の魔人をシオンたちが見た。

巨大な蛇が魔人に巻き付き締め上げる。

螺旋状に巻きつかれた魔人は、ギシギシと嫌な音を立て圧壊する。
そこに少し遅れて白銀髪の少年と金髪の騎士、二人の少女と共に
異形の魔人に向かい二人の少女が魔法陣の解除を行うと少年の鉈の
ような双剣が分厚いはずの装甲を破り穴を穿つ。

刀身より長い範囲を切り刻んでいる。

「あれは……アイナ？ なんでこんな所にいるんだ？」

「それに……あの双剣、どんな物質で出来ているんだ？」

「それは俺たちが持つてる剣も同じだろ？」

「まあそうだけど……俺たちも」

戦いに二人が加わる。

シオンはフィノメノン・ソードを思う存分に振るった。

シオンが斬りたいと迷いなく強く思えばフィノメノン・ソードに
絶て（きれ）ない物はない。

戦闘はこれまでの苦戦が嘘のように思える程、短い時間で片が付
いた。

異形の魔人の身体からは、もうもうと黒い煙と火花を吹上沈黙し

ている。

「まあ たくう！ シオンはアイナがいてやらんと、とんだ役立たずですう」

「うるせえ！ それよりあいつは」

シオンが不機嫌そうな顔をしてチツチを睨みつけた。

「知らんですう！ でも、この娘はアウラって言うですう」

アイナと共にシオンに歩み寄ったアウラは恭しく一礼をすると改めて自ら名乗った。

「アウラと申します。シュベルクの街を守って頂きありがとうございます」

「いや、俺らは仕事上、奴らの足止めに来ただけだ倒したのは、あんたたちだから礼を言われても」

「いえ、あなた方がいて下さらなければ街は壊滅していたと思います」

「私は名も無き赤の騎士団隊長。ランディー・ハーニングだ。礼を言わせて貰いたい。きみたちのお陰で街は救われたありがとう。異国の戦士たち」

「ほら！ チツチもお礼を言いなさい」

「何て言うかなあ？ まだ喜んでもらえないなあ。操っていた魔術師の御登場だ」

チツチの言葉にアイナも神経を研ぎ澄ました。

「魔力を感じるですう……強い魔力を……はっ！ 魔人を復活させる？ それとも新たに呼び出す気ですう」

禍々しい魔力と共に魔術師が姿を現す。

「……」

アウラは、魔術師の声と顔を見て言葉を失った。

「まさか、呼び出した魔人を壊されるとはね」

チツチが間髪入れず魔術師に刃を向けた。

「チツチ！ 止めてえ！」

チツチの動きが、ぴたりと止る。

「弟なの……グリンベルで死んだと思っていた……私の弟アウルなの」
アウラの縋るような紫水晶の瞳を見てチツチは構えた双剣を、だらりと下ろした。

「はっ！ 駄目ですう！ 右眼包帯！」

その瞬間。

からん

魔術の乗せられた鐘の音が響いた。

T o B e C o n t i n u e d

く 選択 く 第四部 第五話（後書き）

最後まで読んで頂き誠にありがとうございました。

次回もお楽しみに！

く 選択 く 第四部 第六話

第六話

それぞれの選択 前編

それは油断だったのだろうか。

魔人を倒し張り詰めていた緊張感を緩ませ互いに名乗りあつていった。

初めにチツチだけが気配を完全に消していた魔術師の存在に気付いていて魔術師に対し反応した。

その直後、アイナも禍々しい強大な魔力を感じたようだ。

それは動揺だったのか。

チツチはアウラの悲痛な訴えに動きを止めた。

アウルが無数に発生させた風の刃が一瞬動きが鈍ったチツチに向かい襲い掛かる。

「チツチ！ 危ない！」

アイナの叫びに反応しチツチは身体を捻り刃をかわす動作を取ったが、完全にはかわし切れずチツチの顔をかすめ通り過ぎていく。

「お願いチツチ！ 止めて、弟と……アウルと戦わないで！」

そして、アウラの声に一瞬チツチの身のこなしが止った際、風の刃のまともに喰らう。

シユベリクの危機が去って気を緩めていた面々の瞳には、地面に倒れるチツチの姿がゆっくりと流れ込んで映し出している。

顔面の右側辺りからは、赤い鮮血が吹き上がり斬り落とされたブルーマールの映える白銀の髪の毛が、ぱらりと宙に舞った。

ほぼ同時にチツチの全身から吹き出す鮮血に赤く染まりながら、ひらひらと宙を舞い上がる。

チツチが地面に伏した後を追うように赤く染まり切った白銀の髪が自らの血に染まった重みで、ぼとりと重々しく身体の近くの地面に落ちた。

チツチの全身から流れ出す鮮血が地面に赤い血溜りを作り出す。

ゆっくりと広がり乾いた地面を染めていく。

「チツチ　！」

アウラは悲鳴混じりの声を上げた。

「山羊飼い」

ランディーは呆然と呟いた。

「チツチ」

アスカは叫びチツチを呼んだ。

「右眼包帯！」

アイナは我を忘れて声を上げた。

うつ伏せに倒れているチツチにアウラたちが駆け寄ろうとした時から　　魔術師の鐘を響かせ、アウラが鋭い眼光を向けている。

威嚇。

魔術師は唇を僅かに吊り上げチツチの下へ近付き出した。

駆け寄ろうとしたアウラとアイナを除く四人は臨戦態勢を整え足を止めた。

対峙しているのは魔人を十体も呼び出し平然と屈強の名も無き赤の騎士団の前に姿を現す魔術師だ。

戦闘後、それぞれの力は消耗していて迂闊に魔術師に手を出す事が出来ない。

力を持つ者だからこそ、分かる相手の技量。

四人は、それを知りながら戦う姿勢だけは崩さない。

しかし、魔術師は魔人を倒す際の戦闘で一気にそれぞれの持つ力

を解放し消耗し切っている事を知り尽くしているかのように平然と歩みを進めている。

アウラとアイナは禍々しい魔力に恐れ警戒心からその足を止めていた。

アウラの手には何時もの節くれた杖が強く握りしめられている。

チツチの傍に一刻も早く行きたい。

「やれやれ……こいつのお陰で苦勞して遺跡から掘り出し集めた魔人が台無しだよ。あのお方にどやされるかな？」

魔術師がチツチの傍まで近付くと石ころでも蹴飛ばすようにチツチの身体を足蹴にしなから口走った。

アウラは、その光景を見ながら薄らと滲む程、唇を噛みしめ杖を更に強く漕ぎり締めた。

「この辺り一帯を更地にする方法は、いくらでもあるけど、まだ時ではないと言う事かな？ それに……二つ目の目的だった姉さんを連れていけば、お咎めも無いかも知れないし……それに見た事のある金色髪の人……これで二人。あの時は銀髪の人に奪還を許してしまっただけ」

「あつ！ お前はあの時の……ランスを連れて行った魔術師！」
「どうやらシオンとアイナはアウルと言う魔術師と面識がある様子だ。」

チツチ……ごめんね。

アウラは、チツチを助けられない悔しさと目の前にいる魔術師の姿で現れた死んだと思っていた弟に魔術を行使出来ない板挟み状態の自分にもどかしさと戸惑いが心を潰していくように感じていた。

「何してるんですか！ このままでは右眼包帯が」

「……分かつてる……分かつてるけど……私には……」

恐らくチツチは循環の力を使い過ぎている以前の時のように。チツチが自力で封印を解放する姿はもう見たくない。

しかし、そう思いながら動けない悔しさと生きていた弟に魔術を向けられない歯がゆさの混じる表情を浮かべるアウラにアイナが声を掛けた。

「あなたの気持はなんとなく分かるです……でも、このままでは本当にあの右眼包帯の命は何れ消えてしまうです。そう遠くない時間の内に……一刻も早く治癒しないといかんです」

「大丈夫……大丈夫……チツチには特別な……」

アウラは自分に言い聞かせるように言い掛け言葉を呑み込んだ。

そんなアウラにアイナが一瞬、微笑み掛け厳しい表情に変えた。

「シオンたちの消耗は激しいです。それは魔術を解除して^{デスベル}いた私たちも同じです……でも右眼包帯は、それでもあの魔術師に気が倒そうとしたです……自分も消耗していたです」

「それは……アウルは、チツチたちの敵だから……」

「ちがうです！ 右眼包帯は魔術師があなたを狙っていた事に気付いたから、アウラちゃんを守る為に魔術師に向かって行ったのです」

「そんなこと……」

「あの魔術師が言ってたです？ 第二の目的はあなたを連れて行く事だ、と……ぴやあ　！　良く考えたら……アイナもです……」

以前にもアウラは連れ去られチツチに助け出されたが、何が目的で連れ去られたのか定かではなかった。

アウラの手にした禁術書か、或いはアウラの魔術解読、解析の才を欲してか。

「姉さん、僕と一緒に来てくれないかな？ カリユドスには父さんも母さんもいるから僕たちの理想に協力してほしい。姉さんの力が

必要なんだ。理想を叶えて、また家族一緒に平和に暮らそう。そして、もう二度とグリンベルの悲劇のような事が起こらない平和な世界で」

アウルが問い掛け、言葉を続けた。

「今のおんたたちでは僕を倒す事は出来ない……分かるよね？ 今日の所は姉さんといいでに白金髪の人を渡してくれれば僕は引くけど、まあ他の人たちはどうするか知らないけどね」

アウラの心が大きく揺さぶられる。

無論、アウルが言う理想などに興味はない協力する気も毛頭ない。

大体の察しは付く、アウルは“アイゼンガルト国境無き楽園の使者”を名のる言

わば革命軍なのだろう。

何時の時代も自由という名の蜜のように甘い言葉を囁き、世界の全てを手中に治めようと企む独裁者はいるものだ。

しかし、アウルの言うように本当に父と母が生きているのであれば、アイナの生まれたカストロス王国を滅ぼしてから長きに渡り戦火を広げ、次々に西側諸国を属国として取り込み国土と軍事を拡大したカリユドス帝国にでも、何処の組織であろうとそこがどんな所だとしても会いに行きたい。

死んだと思っていた弟アウルは、酷い火傷を負いながらもこうして生きてアウラの目の前にいる。

父と母が生きていても不思議ではない。

「姉さんが僕と一緒に来てくれるならシュベルクの街もここにいる皆さんもこのまま見逃してもいいよ」

心揺れるアウラにアウルが追い打ちをかける。

アウルの歳でどれ程の魔力を手にして、どれだけ強力な魔術を得ているかは正直疑問が残る。

だが、名も無き赤の騎士団と他国の屈強の戦士を前に威風堂々姿を曝せる魔術師が、どれ程存在すると言えるだろうか。

アウルから感じる禍々しいまでの気は尋常ではない。

シュベルクとみんなを救えるなら……チツチを救えるなら……ア

ウラは決意した。

「私は」

「オレンジと桃に　！　板挟み？　あれ？」

アウラの声と決意を掻き消すような声が張り上がった。

地面に伏していたチツチが突然、ゆらりと立ち上がる。

「チツチ！」

アウラは、チツチの立ち上がる姿を見て思わず名を呼んだ。

「右眼包帯……」

アイナは、チツチの露わになっている右眼を見て絶句した。

虫の息だったチツチが突然息を吹き返し跳ね起き瞬時に距離を取った。

その一瞬を、シオンにレイグ、ランディー、そしてアスカが見逃すはずはない。

瞬時にチツチと魔術師の間に割り込み立ちはだかった。

アウラとアイナは、こめかみの辺りから血を流しているチツチの傍に掛け寄った。

「チツチ！　大丈夫？」

アウラは、ハンカチを出すとチツチのこめかみの傷口にあてがった。

「傷、酷いですう？」

アイナがチツチの怪我の様子をアイナに尋ねた。

アイナは静かに首を振った。

「かすり傷程度です」

そんなはずはない。

アイナの判断では、あの出血量からしてその傷は頭蓋の奥。脳にまで達していたに違いないと思われた。

守護者ギルドにいれば、大怪我を負ったガーディアンの手当をする事にも慣れている。

確かに瞼の上など、少しの切り傷でも派手に血が流れる場所もあるが、風の刃はチツチの右眼を通り抜けるように、こめかみを切り裂いていった。

致命傷だと思っていた。即死していてもおかしくはない。

アイナはチツチの傷口を覗き見た。

確かに血は滲んでいるが、切り傷程度の跡が残っているだけだった。

「癒しを司る水の精霊 辺りを取り巻く風の精霊よ 汝、古の盟約により 我の命に応え、彼の者を癒せ」

アイナは魔法の詠唱を口ずさんむ。

チツチの傷に眩い光の粒が集り傷口に吸い込まれるように消えていく。

傷口は、みるみる塞がれ全ての光りの粒が消えた時には綺麗に傷痕は消えていた。

「……今のは？」

アウラは狐に摘まれたような顔で、その光景を見ていたがチツチの傷が消え去った後、アイナに尋ねた。

「精霊魔法です」

アイナはアウラの耳元で小声で答えた。

「精霊魔法……魔術ではないのですか？」

「何と云うんですか……魔術の基になったものです……それより今は」

アイナは、そう言っていると魔術を行使する構えに入った魔術師の方に翡翠色の眼をやった。

To Be Continued

く 選択 く 第四部 第六話（後書き）

最後まで読んで頂き誠にありがとうございました。

次回もお楽しみに！

く 選択 く 第四部 第七話

第七話

それぞれの選択 中編

魔術師の周りには不気味な黒い影のような物が集まり出した。

「対魔法・対物理結界」

シオンが眉を顰めた。

アイナの思いに応え殺さずを貫くシオンには魔術師を切れない。
心のどこかで迷いが生じる。

何よりも生命の息吹に敏感なアイナを思う気持ちをよく知るシオンは戸惑った。

「世の中は広いな。魔術師が魔法陣無し詠唱無しにあれを張るかよ」
レイグも渋い表情を言葉が続ける。

「こっちは消耗が激しい。異形の魔人を相手にした後だ……人数で勝っていても分が悪い」

魔術師の前で戸惑うシオンの前に、傷の癒えたチツチが立ちはだかった。

「お前……よく生きてたな」

「なんとか、生きてた」

「よかった！ チツチ……生きてくれた。でも……似てる」

アウラは、紫水晶の瞳を潤ませチツチにしがみつき並んで立っている銀髪の少年に、ちらりと眼をやる。

「なにが？ だけど、こいつの治癒力？ てか、生命力……人間離れしてねえか？ なあ、アイナ」

「シオンが言うなですう……しかし、近くで二人が並ぶとそっくりですうねえ」

アイナは、何かを考え込んでいる様子を見せている。

「どうかしたのか？ 難しい顔して」

「顔や背丈、容姿の特徴もですが、シオンを治癒する時、なぜか分らんです。が他の人間を治癒する時と違って、ちょっとコツが要るのですが……右眼包帯もシオンと同じような……ですが少し違うコツが要ったのです」

回復力の尋常さでは劣らずの治癒をおこなったアイナとシオンも、それに凌駕する回復力と生命力に驚いていた。

からん 鐘の音を鳴らし魔術師が先手を取る。

「敵を間も前にして悠長におしゃべり？」

隠され仕込まれていた魔法陣が地面一面に輝きを放つ。

魔術師アウルの動作と現象と共に辺りの空気が流れ出す。

「ちっ！ 異形の魔人の方が困だったのか！ 街の外壁の外、街までは距離があるといえ軍や騎士団も収穫祭で浮かれていたにしても、これ程の陣を準備されるとは……いったいどうなっている」

レイグがイリオン軍の警備、索敵態勢を嘆いた。

「内通者、協力者が軍の中に紛れ込んでいるのさ。アウラを事故に見せ掛け亡き者にしようとしたのも、シュベルク近郊の買収話もそいつらの仕組んだ事だろう」

ランディーが苦々しげに唇を噛んだ。

「何時までしゃべっているんだい？ 遠慮せず先手を取らせて貰うよ」

アウルの魔術で作り出した風の刃が無数にチツチたちを襲つ。

チツチは風の軌跡を読み取りかわす。

アスカはリヴァをけし掛け、風の刃をけちらせれる。

シオンはフィノメノンソードで風の刃を無効化していく。

レイグは魔剣フレイムソードの炎を巻き上げ、上昇気流を起こし風の刃を天へと蹴散らした。

「私も名も鳴き赤の騎士団隊長の力を見せねばならんか」

ランデューは、腰に帯びた軽剣の柄に右手をかけ、口上と共にその刃を抜き出した。

「王家の墓場を守護する鉄の乙女達よ。バルキリアス 我がオーディンの剣の下にレーディング集いて、勇者に口づけを敵には死を与えよ」

ランデューの引き抜いた剣の刃から、無数の鉄の女戦士が実体化し風の刃と魔術師アウルに向かい猛然と襲い掛かる。

「私の後ろに下がります」

弟、アウルからの攻撃に呆けていたアウラにアイナが声を掛け前に出ると魔法を唱える。

「風と大地の聖霊よ。汝、古き盟約に基づき命を果たせ。我らが弱き者を守護せよ」

襲い掛かる無数の風の刃を地面から風に持ち上げられた砂塵が二人の前で壁を作り出し刃を弾き、時には取り込み消滅させた。

からん

アウルも次の魔術を行使する。

魔術戦は敵との読み合い。敵の攻撃に対して予想される防御策と反撃の攻撃手段を先読みし行使していく。

チッチたちとアウルの壮絶な戦いを茫然と見ている事しかアウラには出来なかった。

恋心と憎しみを抱く少年と死んだと思っていた弟……アウルとの激戦。

どちらに加担すれば……いや、そう言う事すらアウラの頭の中には考えが及んではいなかった。

アウラは、ただ眼に映っている出来事を見ている、その光景の中にチッチが腰の双剣を引き抜き、アウルに向かう姿とチッチを邀撃しようと杖を構えたアウルの姿が映り込んだ。

アウルが次の魔術を行使するより早く、チッチの双剣が黒いロー

ブを切り裂いた。

「止めてえ　！」

戦いを茫然と見つめていたアウラの悲鳴にも似た叫び声が響き渡った。

「もう……止めて……二人とも」

チツチが動きを止めた。

チツチと共に共闘していた面々も動きを止めた……。

その行動はアウラの叫びによるものではない。

「ア……ウル？」

アウルが纏っていた黒いローブが、地面へと滑り落ちていく。

そのローブの中には、得体の知れない生物と呼ぶべきなのだろうか、異形の魔物が蠢いていた。

その姿は一見キメイラのようにでもある。しかし、幾つかの人の顔とその頭から生える掬じれた角。

人の身体は保っているものの、身体中には無数の触手が蠢き、その先端にある、口からは、唾液を垂らし牙を剥き出しにしているもの、光の当たらない洞窟内を流れる川や湖に生息しているような、めしした奇怪な眼を向けている。

皮膚はそれらの為か、人のそれとは違い爬虫類のようにも見えろが、その実態は定かではない。

「性悪金色魔法っ娘」

チツチがアウルを見据えたままアイナをそう呼ぶと言った。

「怖いかい？　おぞましいかい？　僕のこの姿が」

アウルが引き攣った頬を吊り上げ、動きの止まった戦士達に問い掛けた。

「僕のローブを裂いた奴！　お前も変わった毛色をしているね。人とは違う感覚を感じてたんだ。姉さん以外の他のみんなにもね。特別なものちからをさ」

「なんとなく、俺もお前にそう感じてはいたけど……魔術師」

チツチはそう言くと、じわりとアウルとの距離を取った。

「勘がいいね」

「よくそう言われる」

チツチはアウルから眼を逸らさない。

「俺が今からそっちに行く。俺は封印を解く、その後アウラを頼む」
「ふういん？ なんですか？ それは」

チツチは叫び声を上げ弟アウルの姿を眼にして以来、半狂乱になっているアウラの肩を抱くアイナに頼み事を言った。

「俺の封印を解いたらアウラを眠らせてくれないかあ」

「……解ってるです……このままではあの子の……アウラちゃん
の精神は」

これから起こる事を察したアイナは悲しそうな声で答えた。

チツチが一気に二人の方へと向かって駆け出した。

「そうはさせないよ」

魔術師も動く。

その身体が人外の魔物へと姿を変えて行く。

動きを止めていた他の面々が、チツチの援護に動き出す。

チツチが封印を解く。

ランディー以外の誰もが何が起こるかなんて分っていない。

アスカも何となく察しはつく。

しかし、目の当たりにした事は一度もない。

面々が魔術師の行くてを阻む。

チツチはアウラの傍に近付くとアウラをやさしく抱きしめた。

「大丈夫だ。アウラ？ 落ち着いてほしいなあ」

チツチはそのまま言葉を続けた。

「封印を解いてくれ、アウラ」

アウラの虚空を彷徨う視線がチツチを捉え、静かに首を振った。

「封印……解かない」

「あれを見るアウラ！ あれはもう化け物だ。倒さないといけない。」

倒さなければならぬ。シュベルクの人たちの命が、生活が壊される前に……アウラなら分るだろ？」

アウラの視線の先にはチツチの碧眼と人外の紅い瞳が映っている。

チツチの微笑みが、こんなにも痛いと思つた事があつただろうか。

「あれはアウルなの……そんな綺麗ごと……チツチが言わないで！チツチだつて化け物じゃない！」

自分が口にした言葉でアウラは自我を取り戻し、チツチの視線から逃げるように俯いた。

「そうだ。俺も化け物だつたなあ」

チツチの何時もの間の抜けた声がアウラの耳に届く。

「チツチ！ ごめ」

アウラの言葉を最後まで聞いている余裕はなかった。チツチの言葉がアウラの言葉に重なる。

「俺は……あれを倒す。あれはアウラが描いた魔方陣から直接創り出された魔物じゃない……たぶん。だからアウラは、その娘と逃げる。封印は解かなくていい。俺の持てる力を全て出し尽くしてでもあれを倒す……自力で封印は解いたりしないから、そんな顔をするな」

「あ、あのね！ チツチ……」

アウラは立ち上がったチツチに声を掛けようとしたが、チツチは既に化け物と化したアウルに向かい駆け出していた。

「ばか……最後まで話を聞けつて……何時も言うのはチツチの方じゃない……ばかあ　！」

俯いたままのアウラの紫水晶の瞳から溜まる事無く地面を濡らした。

戦いは激化していた。

異形の魔人との戦闘で消耗している事が大きいが、リヴァのお陰でなんとか戦えている状態。

「なんてやつだ！ 身体を切っても破壊しても時間が経つと再生しやがる。まるでお前みたいだ……シオン」

レイグの息が上がっている。

「俺は、あんなにタフじゃねえー！ 確かに人より傷の回復早いけどな……あれ程じゃねえよ」

シオンも息を切らしている。

「まったくだ。山羊飼い！ さつさと封印解いて来い！」

ランディーが息を弾ませている。

「お前は、まだまだ元気そうだな……チツチ」

アスカもまだ幼生のリヴァの消耗も激しい。

「うん。そうでもないんだけどなあ……封印を解く事をアウラが拒否しているからなあ……まあ、なんとかしてくる」

態勢を整える為、距離を取っていた一団からチツチは、双剣を構え化け物と化したアウルに突撃をかけようとした。

その時。

「ちよつ と待ったあ！ ですう」

アイナが、チツチの前に両手を広げ立ち塞がった。

「その首の魔法陣が封印の印になってるんですうかあ？」

「そうだけど……これを解けるのは、アウラともう一人しかない。ばかにすんなあ ですう。その陣アイナにも解りますう」

「方法もなのかあ？」

アイナは顔を赤らめシオンの顔を、ちらりと見やって頷いた。

To Be Continued

く 選択 く 第四部 第七話（後書き）

最後まで読んで頂き誠にありがとうございました。

次回もお楽しみに！

く 選択 く 第四部 第八話

第八話

それぞれの選択 後編

異形の魔物と化したアウルの大きさは斬れば斬る程、身体を破壊すればする程に、増殖し巨大さを増している。

始めの頃は、成長を終えた象程の大きさだった。しかし、今は全長二百六十三フィール程、南の国が有する海軍の巡洋帆船程の大きさまで巨大化していた。

「毒舌金髪娘。封印を解いてくれ」

チツチは静かに決意を言葉に変えた。

「アウラの気持ちを噛み殺すように……」。

チツチの決意の言葉にアイナは、こくりと頷いた。

「これから封印解放の詠唱を教える。方法は知っているて言ったなあ、詠唱は？」

チツチが口にする前にアイナが封印解放の詠唱を言葉に変え唱え始める。

「アンスズansuz・パースperth・ナウシズnauthiz・オシラothila・フェイfe
ヒューhu・ティワズteiwaz・ソウエイルsowelu・ウルズuruz」

（秘め事を受け取りなさい。束縛を放ち所有者の元に導き完全なる力を）

「ですう。よく出来た魔術ですう。本来、魔術は精霊魔法を人間にでも使えるようにと開発、改良されて来たものですう。でも、そんな力が誰にでも使える程、世の中そんなに甘くはないですう」

「ふむ、性悪毒舌金髪娘はなんで解るんだ？ 六芒の複雑な紋章が？ アウラはその点、魔術の解読に関して天才的だから……はっ！ あの時アウラが言っていたような……なんだっけ、そう『なぜだか解る。紋章が教えてくれているみたい』だって言っていたなあ」
「私は契約を結んでいる精霊たちに聞いたですう。精霊たちの囁く声を聞いたのですうよ」

アイナは、静かに瞼を下ろした。

チツチの唇がアイナの唇に近付いていく。

「ちよっ！ おまつ！ 何すんだあああああ！」

シオンが大声を上げた。

「チユ」

チツチはシオンを、ちらりとも見ず微笑む表情とは対照的にぶっきらぼうに答えた。

「させない！」

アウラの声が張りつめた戦場の空気を揺らした。

チツチの鋭い眼光がアウラに向けられる。

「何をだ？ 口付けか、それとも……」

「後半……チツチが言うはずの言葉です」

アウラも紫の鋭い視線でチツチを見返した。

「こら！ シオン余所見している暇はないぞ！」

レイグが声を張り上げた。

「んな！ ……事言われても……ほっとけねえ」

「すまんね。シオンくん。今は必要なんでね。きみの力も彼女の力も……そして山羊飼いの秘めた真の力もね」

「ちっ……面白くねえ」

ランディーの言葉にシオンが舌打ちを打った。

「おい！ なにをちんたら話している奴に突破される」

アス力が怒鳴った時。異形の魔物と化したシオンらの脇を擦り抜け、アウルがチツチの前に立ちはだかった。

「しまった！ アイナ ……！」

シオンの声がアイナに届く。

異形に眼をやった際、アイナの右眼を隠していた白金髪が、ふわりと浮きあがった。

「アイナさん……その眼」

アイナの左目の緑色の瞳と右眼の赤い瞳のオッドアイ。

「アウラちゃんには、まだ知られたくなかったです……隠しておくつもりはなかったですが……ごめんです」

悲しみの微笑みを浮かべ、アウラに返し言葉を続けた。

「でも、今はこの状況をなんとかしないと多くの命が失われるですう！ 私だつてこんな右眼包帯右眼異形の変人人間に、キ、キキキ、キスされるなんて、まっぴらごめんなのですう、シオンに似てますうから、まだ我出来るですうが……」

「アイナさん？ それは言い過ぎです……チツチは確かに覗き魔ですけど、変人ではないです！」

「じゃあ！ アウラちゃんが封印を解けばいいですうのにい」

「そ、それは……出来ません……封印を解いたらチツチはアウルを……」

二人が口論している間に異形と化したアウルが、ぐんぐん近付き三人のまじかに迫った。

その事を確認したチツチが戦闘態勢を整え動き出した時、アウラが華奢なその身をチツチとアウルの間で滑り込ませる。

「させないと言ったでしょ？ チツチ！」

「確かに聞いたけど、白金髪オッドアイ！ アウラを魔法とやらで眠らせてくれないかなあ？ ついでにあの異形の魔物も眠らせてくれたら楽ちゃんだけどなあ」

「たぶん、あの魔物は無理ですう。今のわたしには」

アイナは小さく頷き詠唱を始めた。

「大気に流れる風と水の精霊よ。古の盟約を果たせ。汝、眠りの唄を奏で眠りに誘え」

アイナの魔法詠唱がアウラに向けられ放たれた。

からん

アウラの持つ節くれた杖に括られた鐘の音色が響き渡る。

「私は魔術師。魔法だか何だかは、よく知りませんが根元が同じなら、私に解読、解析、そして解除出来ない術式はありません」

アウラは鐘を揺らし音を奏でて杖を構えアイナを見据えた。

その一瞬の隙を見逃さずチツチはアイナに目配せを送ると、アウラの脇を擦り抜け異形の魔物に向かった。

「はあ！ チツチお願い！ アウルを殺さないでえ！」

一瞬の隙を衝かれチツチの背中に悲痛な叫びを上げるアウラをアイナが組み付き地面に伏せさせその身を抑え込んだ。

「放してえ！ 二人を戦わせないでえ！ お願いアイナちゃんお願いだから！」

チツチは自分の意志で抑え込んでいる循環の破片に呼び掛けた。

「仕方ないなあ、アウラとの約束を破る事になるけど、お前を解放してやる。主導権は俺が持つ。お前には渡さない……絶対に」

チツチの内側で不気味な声が反響し響く。

「主導権を握るだと？ 笑わせる小僧！ 自ら我を呼び出すとは愚かな、私の力が必要になったのか？ あの化け物を消滅する為に。お前の母の完全なる循環は封じられ、戒めを解かねば、その力を十分に発揮出来ないからな。しかし、我は違う。我はお前、お前は我だ」

「開放する」

チツチの身体に変化が現れ始める。

真紅の右眼は闇色へと変わり、漆黒の翼が背に現れる。

臍を中心に漆黒の魔物ドラゴンへと姿を変える。

「完全体の我を支配する？ 笑止」

「俺が自分の意思で、お前を抑え込める時間は少ない。万が一お前に吞まれる事になれば、きっと母さんの循環と、それにアウラが俺を消滅させてくれる」

「そのような事になれば、お前も消滅するのだぞ！ 愚か者め！」
「解ってる……そうならば母さんの処に逝ける。そう、お前とも共倒れだ」

「ふん！ 馬鹿者め来るぞ小僧！ お前と共倒れなど、ごめんこうむる。よいか小僧、人間のお前が完全体の姿を保てられるのは、後僅か時間は然程無い。私の“絶対”^{プレス}を使う良いな？」
「解ってる」

漆黒のドラゴンと化したチツチの喉元に光沢を放つ漆黒の物質が急速に収束する。

「なんだ？ あいつは……奴も異形の魔物だったのか？」
ランディーを除く、シオンを始めとした面々は突然現れた野生竜に似て非なるドラゴンの姿を皿のように見開いて見ていた。

黒き雷を帯びた細かい漆黒の粒子を、ドラゴンは巨大な顎の中でその密度を極限まで高めている。

ドラゴンの顎が異形の魔物を捉え喉元に収束した漆黒の閃光を放った。

異形の魔物と化したアウルの断末魔を上げ消滅していく。

「アウル！」

アウラの叫びと異形の魔物の断末魔が混じり空気を震撼させた。

「あの黒い物質は……^{ダイクマター}反物質？ だと！ あんなものを生成できるのか！ 生身の人間が……いや、生物が……自然の摂理を超えている……いや、壊しているのか」

シオンが呆け呟いた。

「アウル！」

アウラの悲しみの悲鳴が何度も何度も辺りに響き渡っていた。

「小僧！ 何故？ 加減した」

「さあ？」

「ふん！ お前は母の循鱗を使う度に成長しておる。我は本来の循鱗の混沌やみの部分。自力で我を呼び出してから、僅かの間に強くなつたな小僧、我には最早お前を取り込む事が出来ぬかも知れぬ……だが小僧！ お前の甘さが何れ仇となる。その時、弱つたお前を取り込む機会となるだろう、心しておけ、我も今は何も出来ぬ“絶対”フレレスを使つたからな。何れ、また会おう小僧……」

「なるだけ……普通に封印を解いて母さんの循鱗で使いたいなあ……母さんの循鱗を戦いの道具にはしたくないど……」

チツチの眼前には魔術師アウルの姿が横たわっている。

チツチは腰に戻してあつた双剣に手を掛け鉈のような刃を陽の下に晒した。

魔術師に向かい歩を一步踏み出した時、その脇を旋毛の辺りでありボンに結われた桃色の髪を揺らしアウラが擦り抜け、異形の魔物の姿から魔術師の姿に戻り地面に横たわる弟、アウルの傍に駆け寄つた。

「アウル……アウル」

アウラの呼び掛けにアウルの身体が僅かに動いた。

弱々しく虫の息だが生きている。

「アウル……よかつた。今から治癒して貰うからね。アイナちゃんお願いアウルを助けて」

アウラの悲願を耳にしたアイナが悲しげな表情を浮かべ無言で俯いた。

「どいてくれないかなあ？ アウラ」

チツチの問いにアウラは、大きく首を横に振り、地面に横たっているアウルを背に両手を広げ立ちはだかた。

チツチの傍に異形の魔物と闘っていた者たちも集まった。

魔術師の身体に僅かに残っている異形の魔物は再生を始めている。「アウラ、退いてくれないかね？ でないとアウラも一緒に斬らね

ばならんのでね」

ランディーがアウラに微笑み掛け諭す。

アウラは無言で首を振る。

シオンとレイグは、隙を衝き魔術師を討つ為、じりじりと両翼に開き期を窺がっている。

「アウラ？ その魔術師を我らは捉えたいのだ。アウラの組み上げた魔術で、その魔術師が異形の魔物をその身に取り込んだ、或いは取り込まれたなら、その子は最早人ではない」

「そう言うならチツチだつて　！　……はっ！」

アウラは、ゆっくりとチツチの瞳を見つめ視線を合わせた。

チツチの左眼は碧眼を瞼だ覆い細く弓のように反らしている。何時ものチツチの笑顔がそこにあつた。

その微笑みから視線を反らせた。ゆっくり俯きながら……。

その瞬間をシオンとレイグは見逃さなかつた。

その距離約三十フィール。

レイグがシオンに、ハンドシグナルを送りタイミングとその距離の目測を確認する。

(距離、約十メートル、行くぞ)

シオンとレイグが、魔術師との距離を瞬時に詰める。

両者の二本の大剣が魔術師の身体へと振り下ろした。

一本は鳩尾の指二本分程上心臓のあたり一本は首。

どんな生物でもその二カ所は急所。

二人の行動に気付いたアウラだったが、魔術を使うにもその身で弟を庇う事も間に合わない。

「やめてえ　！」

アウラは悲痛な叫びを上げるしか出来なかつた。

キィィィン、剣戟音が二重に響き渡る。

「……チツチ？」

二人の行動を察知したチツチが、魔術師の身体を跨ぎ二人の剣を受け止めた。

「なんで？ 斬れねえだと、なんだよ？ それは……」

シオンが『斬る』と心から思い願うなら例え、大陸でも見えない強みに張られた魔法結界でも斬れない物はない。

「なぜ……邪魔をする？」

魔術師を庇うチツチにレイグが問うた。

「さあ？ 身体が勝手に動いたんだよなあ」

カチカチと交わる刃が発する音の中、とぼけた声でチツチが答えた。

T O B e C o n t i n u e d

く 選択 く 第四部 第八話（後書き）

最後まで読んで頂き誠にありがとうございました。

次回もお楽しみに！

く 選択 く 第四部 第九話

第九話

決断。そして訣別

「不味い！ 離れるシオン。剣を折られる」

レイグがチツチの持つ双剣の形を見て叫んだ。

シオンもレイグの言葉を聞きチツチの持つ歪な形の大型ナイフを見て咄嗟に剣を引いた。

「なんだ……ソードブレイカー？ なのか？」

「ああ、形は似ているが、背についている刃の溝が聊か細かく浅いが、ソードブレイカーに近い形状をしている注意しておくに越した事はない」

「俺のフィノメノンには折れねえよ」

「なら、任せていいか？」

「冗談でしょ？ あいつの元氣ぶり……分かるだろ？」

「こっちは消耗し切っている……攪乱して隙を衝くぞ、シオン」

「ああ、俺がその役、引き受けてやるよ」

刃が交わる剣戟が響き渡りアウラと魔術師の傍で空気を震撼させている。

剣戟は暫く続き魔術師から離れ三人が距離を取った。

「毒舌白金娘！ アウラと魔術師を頼んでいいかあ？」

「……」

アイナは暫く迷っている様子で俯いたまま何も答えない。

「アイナ！ こいつの言う事なんて聞くな！ こいつも異形の魔物だ」

シオンの怒鳴る声にアイナが顔を上げ答えた。

「……分つたですう」

アイナは、ゆっくりと歩き出しアウラと再生を始めていはいる。

しかし、まだ地面に横たわり動く事が出来ない魔術師の傍に近付いた。

「アイナ？ お前……何をしようとしているんだ」

シオンの言葉を無視し白金髪の毛をふわりと宙に踊らせアイナがアウルの側面にしゃがんだ。

「この子を治癒するですう。正確には魔物に侵食され、再生を始めている部分を調べますう。何らかの禁術で合成させられているかも知れんですう。もし、そうなら精霊の力を最大限借りる事が出来れば術を解けるかも知れんですう」

「私も手伝います。術式解読は得意ですから」

アウラはそう言うたとアウルを挟む形で、アイナの正面にしゃがみ込む。

「でも、命の保証はできんですう」

その言葉を聞き唾を呑み込んだ。しかし、覚悟を決めた様子でアウラはしっかりと頷いて答えた。

「危険過ぎる！ 何時、そいつが動けるようになるか分らないんだぞ！」

シオンの制止を聞かず、アイナは魔術師の身体に侵食している部分を見つめ精神を研ぎ澄ました。

「やめろ！ アイナ！」

シオンの怒声にも似た叫び声が高高く響いた。

瞑想に入ったアイナには、シオンの叫びは最早、届いていない。

詠唱の冒頭が、シオンの鼓膜を揺らした。

「ばかやるうが……」

「四の理、光と闇からなる六芒、それぞれの頂点に座する偉大なる一妖精王（obron）よ。我は訴える。汝ら、古に交わされし血の契約に基づき、汝らの偉大なる力の欠片を我に貸し与えよ」

アウルの全身を金、黒、赤、青、緑、無色に近い白銀の光が包み

込む。

やがて、その光がアウルの身体数か所を彷徨うように周り浮遊している。

その部位に魔方陣が浮かび上がり、その術式を白日の下に晒した。

「これは……」

桃色と白金髪の美少女、二人が絶句した。

現れた魔法陣は難解と言う程複雑ではない。しかし、その魔方陣は幾重にも重ねられ強力な魔術となっていた。

一つ一つを解読する事はアウラにとって容易いなものだ。

問題なのは知恵の輪のように魔方陣が複雑に組み合わせられた複合術式であった事。

その一つ一つの術式を解く順番を間違えれば術は解けないどころか何が発動するか予想も付かない。

解読の得意なアウラをもってしても短時間に解除する事は不可能だった。

この場にソルシエルが、いたとしても結果は同じと思われた。処変われば術式も微妙に異なる。

このままでは異形の魔物が再生を終える方が早い可能性の方が高い。

決断を迫られる。時間は、そう残されていない。

「山羊飼い。どいてもらおうか。二人のお嬢さん方も」

ランディーが、静かに口を開いた。シオンとレイグは剣を構え、無手の技を得意とするアスカは、腰を低く落とした。

「いやだ、と言ったら？」

「我ら全員でお前を討つ」

「それは……できない。何故って聞かれたらこう答える。異形の魔物は俺が殺る。だけどアウラたちが、二人が頑張ってる。その間は邪魔をさせない」

チツチは細く反らしていた左眼の碧眼を見開いた。碧眼と真紅の瞳から放たれる眼光炯炯が四人に向けられた。四人とリヴァを相手にチツチは対立する。

「リヴァ！」

アスカの命にリヴァがチツチに襲い掛かる。

チツチを螺旋状に締め上げようとチツチの身体に纏わり着こうと足下から、するりと這い上がるうとしている。

リヴァの動きを察知し、チツチは地表を離れ、軽業師のように後ろ側に回転し空を切る。

両側からシオンとレイグが着地点を予測し剣を振り抜く。

空を切るチツチは身体を捻りながら、身体を伸身宙返りの形に変え、自分の重心をずらし着地点を延ばした。

着地と同時に双剣で二人の剣戟を受け止める。

ランディーの剣から放たれた鉄の乙女戦士がチツチに勢い良く群がった。

しかし、その攻撃はチツチに難なくかわされ互いに激突し同士討ちとなる。

双方消耗激しく、必殺を持たない者同士の戦いは凄惨を増していく。

鋭い口ばしと爪を持たない鳩たちの争いのように。

チツチは次第に数の上で有利なランディーたちに追い込まれていく。その上、アウラの弟の魔術師を庇いながらの戦いだ。

シオンとレイグ、アスカとランディーがチツチを囲んだ。

その時、アイナの声が響き渡った。

「間に合わんですう！」

その声と同時に反応したチツチとシオンは、アウラとアイナを抱え魔術師から距離を取った。

アウルの身体は再び、次第に異形の魔物へと姿を変えていく。

「アウラ、封印を解いてくれ、あいつは当分出せない」

「だれに言ってるんです？ それにシオンもシオンですよ！」

白金髪を揺らしたオッドアイの少女の頬が膨れている。

「で、お前は何をしてるんです？」

「お前を抱えてるなあ？ アウラを抱えたつもりだったのに、何故お前を抱えてるのかなあ？」

「ちょうどお姫様だっこの形。」

「で、お前の片手が触れているものはなんですよ？」

「オレンジパイ？ 良かった……アウラの控え目な胸が更に萎んだのかと思った」

「きiiiiiiii！ なんですと！ オ、オレンジサイズとは失敬にも程があるですううう！」

猫が毛を逆立て威嚇する様よろしく、眩い白金髪ブラチネゴールドを逆立て捲し立てる。

「なんて言うか……揉めている暇もアウラを説得している暇もなさそうだ」

チツチはシオンの腕から地面に下ろされたアウラの方を見た。

「封印を解けると言っていたよなあ、オレンジパイ」

「アイナに封印を解けと言っただすうかあ」

「そうだ。時間がない」

アイナは、ほんの一瞬考えて答えた。

「一つだけ聞いてもいいのでしたら解いてやらん事もないですよ」

「何を？ 答えられない事もあるが……物は試し言ってみてくれるかあ」

「ゴルア　！ おまつ！ 何時までアイナを抱いてんだ！」

離れた場所からシオンの怒声が飛ぶ。

シオンの方を気にしながらもアイナは、そのまま口を開いた。

「間抜け右眼包帯……もしかして『アカデメイア森』に住んでいた事があるですかあ？」

「さあ？ アカデメイア森と呼ばれてはたか、どうかは分らない。」

西から広がる巨大な森から続く極北に物心つくまで母さんと住んでいた」

「そうですか……その真紅の右眼はその時から？」

「違う母さんはドラゴンだったんだ。生まれた訳じゃない拾われて、その森で育った。この眼は母さんの力を初めて解き放った時の代償だけど、右眼がさっきの奴を呼び出す媒介となってるのかも知れない。それと免疫にも」

アイナは数舜考えた後、言葉を紡いだ。

「この騒ぎが落ち着いた後、そう遠くない時間の内にアイナと『アカデミアの森』に行ってくれと約束するなら封印を解いてやるですう」

「分った約束する」

チツチはそう言うとすぐさまアイナの唇を奪った。

「むぐう……」

チツチの左首筋の六芒陣の紋章の光が輝きを増す。

「お前！ 絶対何時かぶん殴ってやるからなあ！」

シオンの声が再び轟く。

「ansuz・perth・nauthiz・othilla・fe
ヒュー ティワズ ソウエイル ウルズ オンラ フェイ
hu・teiwaz・sowelu・uruz」

（秘め事を受け取りなさい。束縛を放ち所有者の元に導き完全なる力を）

「ごめんですう……シオン」

アイナは、古語の詠唱を唱え小さな声で「浮気じゃないですよ？ 仕方なくですう」と呟き首筋の紋章に口づけた。

チツチはアイナをゆっくりと地面に下ろすと左眼の碧眼を細くし笑みを作って見せた。

チツチの身体は、北の神殿の時のように七色に輝くドラゴンに姿を変えていない。

「やっぱり、母さんの循環は心地がいいなあ」
チツチが呟いた。

魔術師アウルが、ぼろ布となった黒いローブを揺らし、ふらりと立ち上がる。

「てめえ　！　アイナから離れろ！」

シオンが怒声を張り上げた瞬間。

アウラはその隙を衝きアウルの方に駆け出した。

「シオン！　何をやっている」

レイグの声がシオンに届く。

「はっ！　しまった」

アウラは細くやわらかい桃色の髪を宙に泳がせ駆け寄るとアウル
身体を抱きしめた。

「アウル！」

「ねえさ、ん……来ちゃ

「アウル」

「ねえさん……助け……て」

「アウルうう」

アウラは弟を愛おしそうに抱きしめ、何度も何度も繰り返し名を
呼んだ。

その時、アウルの足下に魔方陣が現れた。

「ねえ……さん、離れ、て」

「いやあ、離さない」

魔法陣は光を放ち出す。

「不味いな」

レイグが苦い顔をして呟いた。

「いかん！　アウラ離れるんだ」

ランディーが声を張り上げた。

「いかなですう！ 次空間魔法の陣ですう！ このままだとアウラちゃんも一緒に何処かに飛ばされるですう」

「アウラ」

チツチはアウラの下に向かった。

その背中に七色の翼を陽の光に煌々と輝かせ。

「アウラ！」

「ごめんね？ チツチ……約束。……守れないね」

アウラの紫水晶の瞳から一筋の涙が零れ落ちた。

「アウラ！」

チツチの張り上げた声が天空に響いた。

「チツチ……行ってくるね。でも」

アウルと共に輝きを増していく魔法陣の中に、アウラの姿は消えていった。

魔法陣の輝きが最高潮を迎えた時、無数の触手が近づくチツチの身体を貫いた。

血飛沫を吹上チツチは、地面に叩き付けられる。

「右眼包帯！」

アイナの絶叫が空気を震わせた。

魔法陣の光が収まった時、そこには誰もいなかった。

「ア、ウ……ラ」

「すぐ治癒を！ はっ！ ごめんですう……もう、魔力を使い果たしてたですう」

申し訳なさそうに謝るアイナにチツチが答える。

「大……丈夫、かあさん 循鱗を開放しているから、すぐに傷は癒え……あれ？ 循鱗の力が足りない」

身体を貫かれた傷口は癒えていくが再生が遅い。

「本当なら超再生力と呼ぶに相応しい傷口が再生のに……うぐう！」

「酷い傷……しゃべるなですう！」

その回復力はアイナの知るシオンの回復力とは違う、回復力の速

さ超再生を失つてはいたが、癒えてゆく傷の早さにアイナは驚いた。「これでも遅いのですう？」

「あの時……触手に貫かれた時、循鱗大半を持っていかれたみたいだ」

チツチは、ふらりと一度立ち上がったが、崩れるようにアイナの方に向い倒れ込んだ。

「まったく！ おばかですう！ そのまま寝てればよかったですうのにい！」

チツチの白銀にブル・マールの映える髪は、陽の光を透かすと青く幻想的に見える。

髪に固まりかけた黒いと流れ出している血の赤が付着し汚れていた。

アイナは倒れ掛るチツチの身体をやさしく支えた。

To Be Continued

く 選択 く 第四部 第九話（後書き）

最後まで読んで頂き誠にありがとうございました。

次回もお楽しみに！

く 選択 く 第四部 第十話（最終話）

第十話 （最終話）

それぞれの旅立ち

意識を失いもたれ掛かるチツチの首筋にある六芒の紋章が、その力が失われて行くかのように輝きを失った。

チツチの全身の重みがアイナに覆い被さる。

チツチを他に傍にいる者たちで、ゆつくりと地面に寝かせた。

軍医を連れて来るようランディーが指示を出した。

ナーンに邀撃に向かった軍の他にも死者、負傷者の数がランディーの下に報告されてくる。この戦いによる死者二百八十三名、重軽傷問わず怪我を負った軍の兵士たちや騎士たちの数は五百二十一名にも及んび、甚大な被害を被った。

ランディーの下に続々と入る報告を聞いたアイナは、チツチを軍の騎士たちに任せ傍を離れようとした。

その時、女性の声で何事かの言葉がアイナに届く。

耳からではなく、直接頭の中なのか心の中なのかは分からないが確かに、しっかりと聞こえた。

「私の坊やをお願い。戻して欲しいのじゃがなあ……坊やを人の姿に」

チツチの背中には虹色に輝くドラゴンの翼が生えている。

「それに私の坊やが、もし私の一部であった悪しき循環に取り込まれそうになった時、助けてやってほしいのじゃが……頼まれてくれるかのう？」

『よ』

「えっ！」

アイナは女性の言葉に口を、ぱくぱくさせながら驚いたが、こくりと小さく頷いた。

「封印の事は精霊どもに聞いておるのう？ 私の坊やを宜しくのう……私自身の循環鱗は、きゃつらに大半を奪われてしまった。奴の力を抑えてやる手助けが出来んようになってしまったわ」

「……奴とは、あの漆黒のドラゴンのことですか？」

「そうじゃ……坊やの封印を戻し人間の医者に診せてくれのう」

「わ、わかったですう」

「私の坊や、生きて……人間として長き時を生きるより、短くとも意義のある時を生きてくれのう」

アイナに聞こえていた声が闇の中に消えていく鈴の音のように途絶えた。

アイナは解放した封印を戻す再封印の言霊を述べた。

「パース perth・ウルズ uruz・ベルカナ berkana」

(秘め事よ。力を戻しなさい)

地面に寝かせたチツチにアイナは、小ぶりの薄い唇をチツチのそれにゆっくり近付ける。

「おい！ アイナ！ なにを……あつ！」

アイナの様子に気付いたシオンの大声が戦場跡の荒野に響き天を突き抜けた。

後日。

真っ白でやわらかな感触と絹のような肌触りを全身に感じる。

「おれたち、パイスキ！ マンゴウだね　　！　あれ？」

チツチはベッドの並ぶ部屋で目覚めた。

「な　　に……おばかな事を言つてやがるですう……」

目を覚ましたチツチのベッド脇の椅子に翡翠色の左眼がきらきらよく輝く、金色の眩しい少女が座っている。

その向こうに少女より幾分くすんだブロンドの騎士がチツチに声を掛けた。

「山羊飼い。これからどうするんだね？ アウラを追うのかな？ きみの執った異形の魔物に対する行為、今後のきみ自身に大きく影響を及ぼすぞ」

ランディーが難しい顔をしてチツチに問うた。

「いや、俺は一度『アカデメイア森』の森に入る。毒舌娘と約束したからなあ、それにアウラの情報を探りながらの旅になる」

「他はどうするつもりなのだね？ アウラの事はついで事のようにするつもりなのかね」

「学園か？ なら夏期休暇だろ？ それとも姿無き不可視の影の活動かなあ？ アウラと俺は特別な絆で結ばれてるからなあ。直に探し出してみせる」

チツチの細められた左の碧眼が、研ぎ澄まされたすぐ後の刃物のように鋭い青い眼光を放っている。

「山羊飼い。お前の事だ……なんとかするんだろうがね」

「まあ、そう言う事かなあ」

チツチは一度言葉を切り表情を緩め言葉を続けた。

「もし、あの魔術師の言う事が本当なら、アウラは両親にも会えるなあ……まあ、俺も母さんも取り戻さないとならないから、遠くない時間の内にアウラも取り戻しに行く……それに異形の魔物の事も責任は取る」

「誰が毒舌ですう？ 私の名はアイナ……デュラン・ミラ・カストロス。右眼包帯……あなたの名は？」

「俺の名は」

チツチが本当の名を名乗ろうとした時、アスカが言葉を被せた。

「チツチ、アウラの両親も弟と変わらんかも知れんぞ」

「かもな」

「チツチですうかあ……あ、案外、か、かわいい名前ですう」

アイナの頬がほんのり紅色に染め俯いた。

「俺たちはラナ・ラウルに戻り報告と今後の対策を練る」

レイグがそう言うのと厭れ顔でシオンがぼやいた。

「対策を練るのと政で国内外情勢をなんとかするのは王政府じゃねえか……で、アイナはどうすんだ……やっぱり、行くのか？ アカデメイア森に」

「ランスの事が気になりますうですし、そこに行けば私たちの出生の秘密が分るかも知れんですうから……」

アイナは赤らんだ頬をのまま俯いていたが、シオンの言葉で眉間を狭め寂しげな表情に変わり翡翠色の瞳と真紅の瞳を潤ませシオンの顔を見上げた。

「……勝手にしろ！ でも……忘れるなよ！ お前を守るのは俺だ……気を付けて行ってこい。お前とランスが帰って来る場所は俺が守っておいてやる」

「あ、ありがとうございます……シオン？ 早く記憶戻すですう。きやつ！」

アイナは寂しさと心配顔でシオンが自分の顔を見つめていたが、不意にシオンの両腕に細い肩を愛おしそうに抱きしめられ身体ごと引き寄せられた。

シオンの言葉を聞いたアイナは、シオンからは見えない腰の位置に細い両手の指を握り軽く後ろに引くと、胸中で『よし』と呟いた。暫しの間、頬が重なる程近くにあるシオンの頬からは人肌の温もりを二人の頬と頬の狭い隙間の空気を伝わり確かめ合った。

「気を付けてな……アカデメイア森は得体が知れない場所だと聞くからな」

シオンがアイナを壊れ物を扱うように抱きしめている。

「心配ない。夏季休暇ないで必ず一度戻る約束だ。それに俺が一緒だからなあ、アイナだっけ？ かは循環の封印を解ける。封印を解けば俺は何モノにも負けない。例えその力の大半を奪われていてもだ」

チツチは何時ものように碧眼を細めて微笑んだ。

「お前ええ！ アイナにちよつかい出したら、ぶった斬ってやるからな！ 俺のフィノメノンに斬れねえモノはねえ」

「チツチの双剣、斬れなかつたくせにですう」

アイナがやれやれといった呆れ顔で目を細め口を鴨の口ばしのようにして呟いた。

「大丈夫。俺は眼も鼻も耳も、そして何より勘がいい。心配する事はない。性悪金色髪娘を誰よりも安全に護ってやれる」

「てめえ！ いったい何を根拠に！ ……無事に帰って来い。そんな時、一度勝負しようぜ！ お前は強い。わくわくする程にな！ 約束だ」

シオンがチツチに手を差し出した。チツチはその手を握る。

シオンの銀色の髪と頬、それに二の腕が、ふるふる小刻みに震え真一文字唇を結んで歯ぎしりを立て合う。

チツチは何時ものように左眼の碧眼を弓のように反らせ笑みを浮かべているが、白銀にブルーマールの映える髪の毛は小刻みに震えている。

勿論、二の腕も……。

血管が破裂すると思う程に浮き上がっている。

「はあ やれやれですう……野郎どもは、みんな滑稽ですう」

アイナは、かわいらしい吐息のような声で溜息を吐き呆れた顔押しした。

しかし、そんな二人を見て兄弟喧嘩を見ているようにも感じランスが脳裏に浮かんだ。

三日後。

チツチの傷も癒え、旅支度に慣れたチツチが用意した荷物を陸上の地面に置いて（うかぶ）ある船に積み込みを終えた。

砲撃を受け痛んでいたグローリー号は収穫祭に来ていた鍊金技術科のエリシャが修理と改装をしておいてくれたようだ。

チツチの隣には、何時もと髪色けいろの違う、美少女が膝丈赤みの強い桜色のワンピースに革で拵えた丈夫な編みあげブーツ、ワンピースに合わせた同じ色の丸い形に翡翠色のリボンが付いた広いつば付きの麦わら帽子のいでたちの少女が、既にグローリー号の船首に立って出発の時を待っていた。

チツチが近付いた時、一瞬強く吹いた風が少女の帽子を舞い上げ浚おうとした。

少女の白金髪の方が、さらさら風に揺すられ暴れている。

少女は暴れる髪と帽子とスカートとを慌てて抑える。

「ひらひら派手スケ紐パン、痛でえ」

ゴキユと鈍い音が響いた。

「見やがったですうかぁ！」

「痛い……、見えたんだ。見たんじゃない。それに今は見えない顔に拳がめり込んでる」

その時、少女に抑えられていた帽子が、ふわりと浮き上がり野を走る風に浚われた。

「あっ！ アイナの帽子！」

チツチは素早く風を読み飛ばされた帽子を難なく捕らえてアイナに被せた。

「顎」

「あご？」

「そう、顎上げようなあ、うんって、はい！ うん」

「うんですう……」

チツチはアイナの顎の下で帽子に付けられていた顎紐を括ってやった。

ついでに紐に繋がれた収縮素材を目一杯紐ごとしたに伸ばし不意に手を離した。

「何故出発しないのですう？ 船の準備がまだなのですかぁ？」

「よし出来た」

パチン、乾いた音が響く。

「痛いですう……やってくれますねえ　！」

「準備万端だ。それに　」

チツチの声にアイナが言葉を被せる。

「準備が出来たら、とつとと出発するですう！」

「出航準備は出来たが風待ちだ。今の風では陸を走り出すには弱過ぎる。それに今回の改装で付け加えた新装備もあるけど、それにも時間が掛かる。その装備は　」

「そ　んなもの！　待たんでいいですう！」

「大気に満ちる風の精霊よ。汝、我との盟約を果たせ。この船に順風を与えよ」

「おいおいおい！　マジでか！」

チツチは慌てて展帆準備に入り忙しそうに、シュベルクを訪れていたエリシャとグローリー号を造った船大工たちに、修理、改修された操船装置を操作し始める。

アイナの魔法詠唱が終えると、力強い風がゆるりと流れ出す。展帆されたグローリー号、改めエグジスタンスⅡシエルシエ号は、徐々に船足を上げていく。

「総帆展帆」

チツチの声の後、バフと帆が風を孕む音が響く。

アイナの金色髪が風にたなびかせ、右ぎ手の人差し指を北西の方向に腕を思いつきり振り突き出した。

「しゅっつぱあつ！　ですう」

アイナは、はつらつとした声で旅の始まりを告げる。

「エグジスタンスⅡシエルシエ号出航する。進路、アカデメイアの森」

チツチが新たな進路を示し最適帆に合わせた。

それぞれの想い、それぞれの今、それぞれの夢、今やるべき事の為。

新たに加わる歯車は運命の歯車を加速させ動き始めた。

運命と宿命の出逢いをした少女と少年は成術を今だ持たないまま
非情にも齒車は回り続ける。

からんちユ 魔術師の鐘 第一章 終幕。

原作：雛仲 まひる

Special Thanks

作画：RION（HPのイラスト置き場で公開させて頂いています）

からんちゆ 魔術師の鐘 第一章 END

く 選択 く 第四部 第十話（最終話）（後書き）

最後まで読んで頂き誠にありがとうございました。

次回、エピソード前編、後編をお楽しみに！

エピローグ 君去りし後に 前編

エピローグ

君去りし後に 前編

戦いは終わりを告げアウラが守りたかった街は、再びフランクが爵位を賜り一帯の領地と共に領主となつて治める事となった。

爵位を授けたのは収穫祭に訪れていたイリオン王国の王ではなく、その実弟であつた。

王はゴーレム群によるシュベルク襲撃の際に側近の近衛騎士隊により早々と王宮に戻つたと思われた。

シュベルクの街に訪れていた王の実弟が現れフランクに言った。

その男は光輝く鎧を身に着け、その胸元には獅子の紋章が胸元に描かれている。

見まごつ事無きイリオン王家の紋章。

「こたび、貴殿の娘が見事、過酷なレースを制し賊どもの野望を砕いたと聞いている。しかしながら領地を治めるには爵位が必要。貴殿は既に爵位を息子に譲つておるな」

「はい。その通りでございます。元帥閣下」

フランクは片膝を着き頭を下げたまま仰々しく答えた。

「聞くところによると貴殿は既にシュベルク一帯の買収に成功し賊に流れるはずだった土地をその手に納めたとか」

「はい。元帥閣下」

「そう怖い顔をするな。貴殿の娘、確か養女だったか？ 命懸けのレースを制し賊の目的は解らんが目論見を阻止し収穫まじかであった燃え盛る麦畑の大火を魔術を持ってして消し去り、勇敢にも先日

の戦闘にも助力し賊どもを退ける功績叙勲に値する。それで娘は？」
男は口元を緩めた。

「アウラ、いえ我が娘は先日 of 戦禍の中、行方が分かりませぬ。閣下どうか娘……アウラの搜索を」

事情は知っている。

アウラが異形の魔物と化した弟と共に光の中へと消え去った事も……。

疑われている。

フランクにそう思わせる程、王の実弟は情報を掴んでいる。

アウラを引き渡せと言い出すのではないか？ 動揺を悟られまいとフランクは何時ものように好々爺を装いやわらかい口調で嘆願した。

「娘は行方知れずか。それは悲しい事よ。あの争いの犠牲者が貴殿の娘とは……なんと言う悲劇。イリオン軍の総力を上げてもう一度、戦場跡を搜索しよう。専属の搜索隊も設け痕跡を追わせよう」

「勿体ないお言葉痛み入ります」

「英雄には、それ相応の対応をせねばなるまい。しかし……見つけた娘が物言わぬ時は許せよ」

鎧の男はそう言つて軽く頭を下げた。

男の周りの騎士や従者らがざわめく。

仮にもイリオン軍元帥であり第二の王位継承権を持つ男が一介の老人に軽くとはいえ、頭を下げたのだ。

そのざわめきに周囲で膝を着き頭を垂れていた者たちの中には気づかれぬようにその男を盗み見る者もいた。

「ふむ？ その英雄が不在となれば勲章を与える訳にもいかぬな、代わりと言つては何だが貴殿に伯爵位を与える。この一帯をフランク領としシュベルクを中心に貴殿が納めよ。元々貴殿の領地であったのだらう。いくらばかりか領地が増えたようだがな、略式で済まぬが授与式を執り行う」

男がそう言つと着き従っている従者らが準備に入った。

略式の授与式が滞りなく終わり、フランクは自ら譲った伯爵位を再び得る事となり領地を治める者となった。

「時にフランク伯爵よ。貴殿の娘が見つかった際には是非とも我がイリオン軍の魔術師部隊に入隊させたいのだが？」

「アウラを戦いの道具になさるおつもりか？ 閣下」

頭を下げ好々爺を貫いていたフランクの頭が前を向き眼を細め男に向けた。

「女子を戦場に出すつもりはない。しかし魔術には、まだ何かしら隠された部分も多くてな。その解析、解読に尽力を注いで貰いたいのだよ」

男は薄い笑みを浮かべフランクの視線と合わせた。

「何処までご存じで？」

「そう睨むな。初代一音無き静寂の死を謳う騎士団元隊長、フランク・バストーネ」

フランクの眼光が増してゆく。

そこに好々爺フランクの面影はない。

「禁術。それもあのグランソルシエールが残した禁術書が欲しいのだよ。それを扱える者もな」

男は唇の両端を不敵な笑みと共に釣り上げた。

フランク邸の広大な敷地の庭先で金槌が金物を木槌が木材を叩く音に丸太を引く鋸のリズミカルな音が辺りの空気を揺らしている。

蒼穹の空まで届いているように、その音から雲たちも逃げ出したと思うほど、空は何処までも青い。

放牧レーズ終盤に砲撃を受けた船体が庭先に鎮座している。

その周りには偉丈夫達に交じり上着に白いブラウスとインナー、水色サマーセーター、首筋には黄色いリボン。学園の制服に身を包んだ栗毛、琥珀色の瞳の少女がいる。

他にも数人の上から下まで繋がった白い衣装の生徒たちが数人。

船体に向かう少年の白銀にブルーマールの映える髪を緩やかな風が髪の毛を揺らし陽の光が透けた白銀が美しい蒼穹の青を透かして見える。

右眼には乱雑に巻かれた包帯がなんだか痛々しい。

「痛々しいね」

くりくりの琥珀色の瞳が潤ませ、チツチの顔をまじまじと見つめていた。

「エリシヤはもう見慣れてるんじゃないかなあ？ 右眼の包帯」

何時ものように間の抜けた声でチツチが答えた。

「ちがうよお、右のほっぺと左眼の上に出来た、たんこぶだよお」

「あっ！ こつちの事が」

「どうしたの？ この前の魔人との戦いに巻き込まれてたの？ 非難の時、チツチとアウラちゃんの姿が見えなかったから……心配で心配で……わかった！ その傷！ アウラちゃんにいけない事しようとして殴られたんでしょ？ チツチって天然でエツチいから……アウラちゃんは？ そっか！ アウラちゃんから逃げて来たんだから、一緒にいる訳ないか。あはあ」

物悲しげな微笑みを浮かべ、エリシヤがチツチの腫れ上がった頬に手をやった。

「……」

「寂しそうだね？ アウラちゃんは？」

「アウラは、ここにはいないかなあ」

チツチは静かにエリシヤから視線を外した。

「なんだか分からないけど……この前の戦いに出てたんでしょ？何かあったんだねアウラちゃんに……それでこんなにも寂しそうなんだ。うん？ じゃあ、このたんこぶは？ いったい……チツチ？ これこの前の怪我？」

「寂しいのかなあ？ そうでもないような」

「もしかして病棟抜け出して来たの？」

「うん！　うるさくて仕方ない奴がいるから抜け出して来た」
「ダメだよお！　まだ寝てなきゃ……チツチなんだかボロボロだよ
お」

「もうちよつと前までは、ボロボロじゃなかったんだけど……」

「顔じゃないよお　、心だよお　！　あつ！　顔もだけどお」

「もうすぐ顔の方がボロボロになった原因がここに来るかなあ？」

チツチがフランク邸の表門を指差した。

何やら門番と言い争う女の子の声が聞こえてくる。

「だれ？　はあつ！　いけないんだあチツチ！　アウラちゃんがい

なくなつたからつて、もう違う子にちよつかい出してるんだあ！」

「何ていうかなあ？　違うけど……変な妄想を広げないでほしいかなあ？」

チツチは痛々しい苦笑を浮かべた。

「ちよつと！　困ります。お嬢さん！　ここはフランク様のお屋敷

でお嬢さんの言う右眼包帯と言う者はおりません」

門番が長槍を重ね固く門の前を閉め、金色髪の少女と口論している様子が見える。

言い争っている少女がチツチに気付き、指さし何やら喚き散らしている。

「あつ！　右眼包帯！　そこになおりやがれえ！　ですう！」

アイナが犬歯を剥き出しに地団駄を踏んで無理やり重ねられた長槍を押しつけようとしているが、二人の男の門番は伊達じゃない。

細いアイナの肢体を押し戻す。

伝令役を兼ねた他の門番の内の一人がチツチに駆け寄り近づいて尋ねた。

「チツチ様　！　お知り合いですか？」

「まあ一応、なつたばかりだけど」

「お通してもよろしいのでしょうか？」

「俺に聞かれてもなあ」

「おのれえ！　ここを通しやがれですう！」

アイナは三步程、後退りして門番から距離を取り、翡翠色の瞳を閉じ精神を統一しているように見えた。

「仕方ないなあ入れてやった方がいいと思うぞ……そろそろ」

「チツチ様が、そう仰られるならお通ししますが」

「だから俺に聞かれてもなあ、俺の屋敷じゃない」

「おい！ お嬢さんをお通ししろ！ チツチ様のお知り合いだそうだ！」

駆け寄ってきた門番が大声を張り上げアイナの突進を阻止している門番に伝えた。

「て！ 人の話聞いてたのかなあ？ まあ、いいかこれ以上あいつを無視してると……」

アイナが精神統一を終えると眼を見開いた。

「破壊を司る火の精霊よ 汝、古の盟約を果たせ 我は訴える我に仇なすものを焼き払え」

小ぶりの唇から魔法の言霊が迸る。

言霊の詠唱が終わると門番たちの背後に凄まじい炎の柱が立ち上り、巻き起こった上昇気流が地面の砂を蒼穹の空へと舞い上げた。

「ちよつと遅かったかなあ」

チツチは、やれやれと肩を落とした。

「きやあ！ 何あれ！ 某国の秘密兵器なの？ チツチ！」

巻き起こる炎が作り出した上昇気流に学園の制服を着ていたエリシヤの短めのチェックのスカートが捲り上がる。

エリシヤは、突如目の前に立ち上った巨大な炎に琥珀色の瞳を奪われ好奇と恐怖でスカートの裾を抑えるのも忘れ、チツチにしがみ付いていた。

「うん？ 八十？」

「えっ！ なんですかあ？」

「アウラは、見栄張って数字割り増してたなあ」

「なんですかあ？ その謎の数字は」

「胸」

「むね？ が……どうかしたのお？」

「サイズ」

「そうなんだあ……！ って何で分かるんだよあ ！ スケベ！

エッチ！」

「クマさん柄パンツ」

「だから、何でわかんだよあ ！ て聞いてるんだよあ？」

「超絶空間把握能力かなあ？ パンツはさっき見えたから」

「ふ ん！ そんな能力があるんだあ」

「感心されてもなあ？ それより来るぞ」

二人の何処か噛み合わない会話の間に炎の柱はチツチ目掛けて襲い掛かった。

蒼穹の空の下地面に敷布を広げ、大きなバスケットが二つ並んでいる。

片方のバスケットから陶器のこじやれたティーセットを取り出し敷布の上に並べ終わると何事かと集まってきたフランク邸の従者に声を掛けた。

「ちよいとそこのメイドさん！ 湯を用意してくれませんか？ ですう」

アイナが、一人のメイド服を着た女性を指差した。

「わ、わたし？ ですか」

指差されたのは二十代半ばの女性。トリシヤだった。

「いかにも！ 紅茶を淹れ慣れた顔付をしている貴方を見込んで頼んでいるのですう」

「はあ！ はあ……」

トリシヤが予期せぬ指名を受け何気なく返事する。

「早く用意するですう！ 湯は冷まさないように！ リーフの開きが良くないですから」

「はい！ 直ぐにお持ちします」

トリシヤは踵を返すと屋敷の方へと駆け出していった。

「ま ったくう！ 初めから屋敷内に入れてくれればいいですの
に」

アイナは澄ました顔で不満の声を上げた。

「う ん。あれはやり過ぎだと思っぞ？」

「精霊魔法の事ですか？ 滅多に使わんです。この国は魔法後進

国。精霊魔法に気付く者はいないです」

「精霊魔法ね」

「知ってるですか？」

「母さんは精霊魔法を使えたからなあ」

「母様？ そう言えば母さんの循環がどこのどの言ったんです

ねえ？ 母様はもしかして

「ドラゴンだ」

アイナの言葉にチツチが言葉を重ねる。

T o B e C o n t i n u e d

エピローグ 君去りし後に 前編(後書き)

最後まで読んで頂き誠にありがとうございました。

次回もお楽しみに！

エピローグ 君去りし後に 後編

エピローグ

君去りし後に 後編

碧眼の瞳は何かを察したように眼光炯炯を放っている。

「それに言おうとした亜種族の血を色濃く引いたのはお前の方だろ？」

「……」

「で、何しに来たんだ？ お前？」

チツチがとぼけた声で尋ねた。

「それはですうねえ！ シオン以上の回復力を持ちながら入院が長引いていた右眼包帯を……その……お見舞いに」

「その原因を作ったのは誰だ！」

「だ っ て！ 寝ぼけた右眼包帯がアイナの『ちち』を、むぎゅ

と驚掴みにしたですう！ そしてなんと言っただすうか？」

「ごめん！ 背中かと思っただすうとお！」

アイナは自分で言っただ屈辱の言葉に怒りが蘇る。

「お湯お持ちしました」

トリシャがポットを抱えて二人の傍に立っていた。

「あの、……なんと言うか……不憫な事ですね？」

トリシャが何食わぬ顔で、ぼつりと呟いた。

「キィィィ！ アイナの美乳を不憫とは聞き捨てならんですう！

この年増！」

「と、年増ですって！ 貴方は『美乳』ではなく『微乳』と書いて

『貧乳』と読むのですよ」

「何時からそう呼ぶようになったんだあ？」

チツチを挟み、アイナとトリシャの視線が激しく交じり合う。

女の見栄と意地が火花を散らした。

出航前日。

「これ」

チツチに一人の少女が声を掛けた。

エリシヤが、チツチに分厚い辞書程もある一冊の本を手渡した。

一冊の本を互いに掴んだまま無言の時間が流れている。

その間にアイナは守護者ギルド、ローゼアルヴァルから送って貰った自分の荷物を三回程、タラップを昇り降りしている。

「これ？ なにかなあ？」

「……取扱書だよお！ かさばる羊皮紙を取り纏めて本に仕立ててあげたんだよお？ わざわざ」

「なにの？」

「あれだよお」

栗毛の少女はチツチのこめかみをかすめる角度で右手の人差し指を差しした。

「ありがとなあ、エリシヤ。グローリー号の修理と改修大変だったよ？」

「……」

少女は首を横にゆつくりと振る。

船の大幅改修に尽力を尽くした張本人は錬金技術科のエリシヤと船を中破を聞き付け、わざわざ北の方面から駆け付けてくれたグローリー号を一晩で作り上げたあの船大工たちだ。

「まったく！ びっくりさ俺たちが駆け付けた時には、もうその嬢ちゃんたちが船をバラしていて話と違う船の壊れっぷりに驚いたぞ。そりゃもう墓の原型が無くなってたからよ」

船大工の男がそう言えばしほしの髪の毛を掻いた。

「船も別物だし改名しねえとな！ 小僧」

「エグジスタンス＝シエルシエ号（存在を探す）だ」

チツチの碧眼は、大改装された船を視野に映しながら遠くの空を

見つめた。

その碧眼は、この何処までも繋がっている空の下、何処かにいるだろうアウラを見つめている様に。

「あの桃色髪の綺麗な紫の眼をした嬢ちゃんはどうした？ 姿を見ないが……さては喧嘩でもしたかあ？ しかし金髪の別嬪。大人しそうに見えた桃色髪の嬢ちゃんに愛想つかされるわなあ」

「……別嬪だなんて、オヤジ！ まったく正直者ですう」
タラップを降りて来たアイナが頬に両手を当てて赤らむ顔を押しえた。

「いよいよ出航だな。気をつけて行ってこい。船に何かあった時は、俺たちがどんな事をしてでも駆けつけてやる」

我が子を嫁に出す父親のような顔で船大工の棟梁が涙ながらにチツチを抱きしめた。

いろいろな意味で航海（後悔）中？

「気持ちわるいですう、シオン」

雲行きが悪い青空のような顔色のアイナが呟く。

グロリー号改め、エグジスタンスIIシエルシェ号に新たに設けられた小さな船室の狭い寝台ボンクに横たわるアイナの姿があった。

元気はつらつ出航した後、見た事もない装置や設備にはしゃいでいたアイナだったのだが……。

陸を疾駆する船の上での事。繋がって回転する履帯を不思議そうに見つめて「芋虫のようで気持ちわるいですう！」等と毒づいていたアイナだったが、進路上にある大きな湖に入り陸ではなかった現象が起る。

つまり船が風の抵抗を受けて傾斜を持つ。

初めの内は風を受け傾斜に、きゃっきゃとはしゃいでいたアイナだったが風が強まり湖面が荒れ出すと途端に船に酔ったようだ。

アイナの横たわっている船室の扉が開かれチツチが顔を覗かせた。
「スカツツル丸窓閉めてくれるかなあ、こんな時になんだけど」
「こんなに弱っている女の子を見て新鮮な外の空気を吸うなど言う
ですか！」

「もう直進路を変える船の傾斜が変わるから閉めてくれないと困る
んだけどなあ、この船は全高がないから傾斜が変わると丸窓から浸
水して下手をすると沈んでしまう事もある。この風、何だか妙な気
配がする、嵐が来るかも知れないから近くに見つけた港に入る」
チツチが困った顔を作り出して見せた。

感情に乏しいチツチのぎこちない表情がアイナを苛立たせる。

「シオンならこんな時、うつぶ……」

アイナは慌てて口を両手で押さえ揺れる船内を立ち上がろうとし
た。

「きやつ！……」

慌てて立ち上がったアイナの姿勢は崩れ狭い船室の中、ボンクの
角へと倒れ込むが、覚悟した衝撃はアイナに訪れる事はなかった。

アイナと柱のその狭い隙間にチツチが素早く体を滑り込ませ、ア
イナと柱の激突は免れた。

「ばかだなあ、無理に立ち上がるから大人しく寝てろ。適当な大き
さの木桶を持つてくるから」

「右眼包帯？ 血が」

ブルーマールの映える白銀の頭部からこめかみを伝い床へと鮮血
が流れ落ちる。

「どうって事はない。大丈夫か？ 金色毒舌」

「ア、アイナですう！ 早く名前くらい覚えやがれですう。ほ、包
帯右眼……それより傷……！ そっか！ あれだけの回復力を持つ
てるですうからそれくらい、ど って事ないですうねえ！」

「平気だ！ と言いたいが、あれは循鱗の力を解放しているか循鱗
の力を自分の意思で制御して恩恵を受けている時にしか、ああはな
らない。普段はなんら普通の人間となんら変わらないかなあ」

碧眼が弓のようにそれ自然な微笑みを作り出して見せている。

「それよりお前は大丈夫か？ 気持ち悪いんだろ？」

アイナは、自分の頬に赤みが差している事に気づく。

「わ、わわ、わすれてたですう」

「待ってる、木桶持ってくる。少しの我慢だ直ぐに港に到着してやる」

チツチは頬笑みを崩さない。

その微笑みに痛々しく鮮血が流れ落ちてチツチの立つ床を濁った赤色に染めていく。

チツチがアイナを寝台に座らせ、背を向ける。

「き、木桶はいらんですう！ …… それより薬箱を持って来るですう！ …… うつぶ」

「それと木桶も持ってくる」

チツチは、そう言って船室を後にした。

小さな港を持つ湖沿いの船着き場に入港し投錨させた。

風が強まる中、タラップを降りるチツチとアイナ。

街の宿場をチツチが港の者たちに尋ねている。

尋ねるチツチとアイナを見て聞かれた港の男は何やら、にやけた顔をしていた。

アイナは愛想笑いをして返した。

チツチとアイナは宿場が並ぶと聞いていた街の場所に到着する。

普通の宿場と違い、装飾多寡の宿の風貌はまるで歓楽街のようにも見える。

宿の中へと入ったり出たりする人々は、若い者同士からよい年をした紳士の連れ合いや如何にもといった男が遊廓の女性を伴い入っていく。

「なんだか出入りの激しい宿場ですうねえ……」

アイナが見た事もない宿場の雰囲気にも首を捻った。

チツチは宿場の外に張り出された宿代を見ている。

アイナも張り出された宿代を見て目を丸くした。

王都オースティンの高級宿のような装飾の外見からは想像も出来ない程の安価であった。

兎に角、疲れた体を休めたい。

チツチは、何食わぬ顔をしていたがアイナは首を捻りながら宿の中へと入って行った。

「……………」

妙な空気が流れてる。

薄暗く色とりどりの明かりの部屋。

四角くない丸いふかふかのベッド。

風呂場の壁は寝室から見える大きなガラス張り、これ程のガラスいっただいと思いつつ、ふかふかのベッドは心地よい。

壁の装飾も煌びやかで、その中にはアイナの苦手なアビーの宿りそうな小人象も飾られている。

「風呂、先に入って来てもいいぞ」

チツチの碧眼は弓のように反れて下がる事を知らないようだ。

少し考えた後、アイナが答えた。

「解せん事があるですが……その前に怪我の手当てと包帯を取り換えるですう」

アイナは、手荷物の中から薬箱を取り出し、チツチの頭部に巻かれた血の滲んだ包帯を取り換え始めた。

「慣れてるなあ……て、そこは怪我してないんだけどなあ」

「だまれえ！ ですう！」

かくして目出度く顔面包帯男と化したチツチが出来上がったのである。

ベッドの上。

アイナがど真ん中に陣取りふかふかのベッドを独占している。

チツチと言えば、部屋の中に置かれた二つのソファを合わせてベ

ツドと化した寢床に身体を横たえていた。

小人象が無性に気になってなかなか寝付けずにいた、アイナの嫌な予感が動き出した。

アビイーである。

アイナは怖くて眠れない。

ふかふかの掛け布団を引きずって自前のボロ毛布を掛けて寝ているチツチの傍まで近づく。

「なんだ？ 小人象が五月蠅いと思えば」

チツチが眠そうな顔でアイナを見た。

「ち、違うですう！ アイナは眠ろうと……」

「あつ！ 怖いのか？ アビイー」

「なっ！ そんな事……あるですけど」

小声で言つてそそくさとチツチの即席ソファベッドに掛け布団を被せ潜り込んだ。

「あ、アイナは平気のへえですうけど、包帯右眼が、そのお……怖いといけないですからアイナと一緒に寝てやるのですう」

アイナは頬を引きつらせながらも余裕の表情を作り出して見せる。

「それは助かる。実は俺、夜になると踊りだしたり、悪戯する妖精が宿るアビイーが苦手なんだ。小さい時から……うるさくて眠れないからなあ」

チツチの意外な言葉にアイナの表情が崩れそうになる。

同じ思いを持つ者同士。

それは安堵感が生み出した微笑み。

「し、しゃねえですうねえ！ アイナが添い寝してやるですう！ 昼間の借りもある事ですうし」

「ありがとなあ、むにゅむにゅ、アイナ・デュラン・ミラ・カスト口スだっけ？」

寝ぼけたチツチが名前を呼んだ。

しかも初めて呼ばれるフルネームだった。

何処となくアイナは嬉しく思った。

「あつ！ 添い寝はいいけど朝、刺さってたらごめん」

「へえ？ 何が？」

「なんでもない。万が一そうなっていた時、それは事故だから」

「なんだか……よく分からんですうが、今、なんだか嬉しいですうから許すですう！ 有り難く思いやがれですう！」

「……」

アイナの耳に寝息が聞こえる。

「まったく！ アイナが添い寝してやると言っただとたん、もう寝てやがるですう」

アイナもチツチが隣にいる事の安堵感から眠気に襲われ夢の中へと權をこぎ始める。

「おやすみ、ですう。チツチ」

アイナは名前だと思い込んでいるチツチのあだ名を口にして眠りに就いた。

からんちゆ 魔術師の鐘 第一章 エピローグ The E

nd

エピローグ 君去りし後に 後編(後書き)

最後まで読んで頂き誠にありがとうございました。

第二章

からんちゆ 魔術師の鐘 古き魔術の森 でお会いしましう。

次回もお楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8921f/>

からんちゅ 魔術師の鐘 第一章 ~ 遥かなる想い ~

2011年8月15日03時29分発行